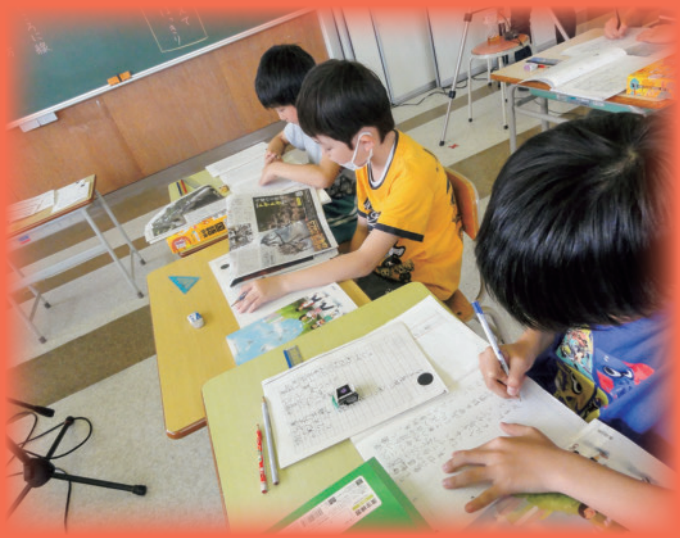
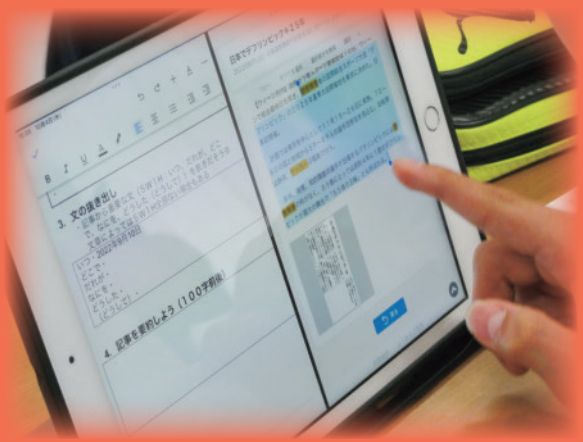
教育に新聞を

2023年度 実践報告書





NIE
Newspaper in Education

北海道NIE推進協議会編

2023NIE

実践報告書

「生きる力」を育むために

○主体的・対話的で深い学び

○体験的な活動

○言語能力の育成

○地域・家庭との連携

北海道ＮＩＥ推進協議会編

２０２３年度「北海道 NIE 実践報告書」の発刊に寄せて

北海道 NIE 推進協議会
会　長　菊　池　安　吉
（日本 NIE 学会　会員）

ＮＩＥ実践報告書「第２７集」を刊行することになりました。

今年度の実践校３５校の先生方が、全道各地において地域や学校の立地条件、児童・生徒・学生の実態などを考慮し、創意工夫したＮＩＥの実践の成果と課題がまとめられています。報告書には、２０２０年、小学校から順次実施された学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえて、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた NIE の取組が多数掲載されています。今次の指導要領では、学校で身につけるべき力を「実社会でも通用する力（資質・能力）」とし、従来の知識・理解、思考力・判断力・表現力に加えて、学びに向かう力・人間性を学力の３要素としました。学力観も転換期を迎え、答えのない問いに対し、自ら課題を設定し、探求し、解決策を提示する「探求活動」が重視されています。積極性や好奇心が大事です。予測不能な時代を生き抜くために、創造性や協調性、挑戦する力、失敗をおそれない態度など、人間ならではの能力も近年身につけるべき能力の一つと考えられています。

今回の実践報告の中には、複数の実践校が学校司書や図書事務、司書教諭との連携・協力の大切さに触れています。学校図書館は、「読書」だけではなく、「学習」や「情報」のセンターとしての役割を持ちます。情報の一つとして、特に「新聞」は学習指導要領において教材として活用することが位置づけられています。図書館に複数紙を配備し、現実社会の諸課題を多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を育てることが大切です。しかし、北海道に多い小規模校では、司書教諭もおらず、図書館担当も学級や教科を担当しており、日常的に図書館を軸とした NIE 実践に取り組むのが難しい実態も見え隠れします。児童生徒に育てたい力を明確にし、学年や学校全体を巻き込んで実践を進めるエネルギーに期待します。学校経営計画の中に位置づけたり、別海町のように、月に一度の「新聞の日」を設定したりして町内の児童生徒全員が新聞に触れ、学びの土台づくりとしている取組もあります。全校上げての継続的な取組が学力向上に結びつき、学校全体で実践することの効果と有用性は言うまでもありません。さらに、小・中学校のつながりや家庭・地域との連携を意識して取り組んだり、児童生徒会の委員会活動と連動したりすることも大切です。特別支援学級や特別支援学校・高等支援学校での実践も増えてきました。

２０２３年夏に愛媛県松山市で開催された NIE 全国大会のテーマは、「ICT でひらく NIE 新時代」。国の GIGA スクール構想で１人１台端末が配備され、学習活動の一層の充実が期待されています。デジタル教材も多彩に広がる中で新聞と ICT の特性を生かした実践をどのように展開していくかが提案されました。今後は、紙媒体とデジタルの活用をどのように進めるか、ChatGPT に代表される対話型生成 AI（人工知能）をどのように活用していくか、偽情報の拡散をどうやって見抜く力を身につけるか、課題はたくさんありますが、実践の成果と課題を全道で共有しながら一歩ずつ前に進めていきたいと考えます。速報性があり、記事の鮮度は高いが玉石混淆のネット記事のみに振り回されることなく、メディア・リテラシーを身につけさせ、批判的な思考を育て、新聞の持つ信頼性や一覧性のよさ、新聞の魅力を再確認したいと思います。新聞を開いたときの思いがけない記事との出会いは、フィルターバブルのネット記事検索では遭遇できません。ＮＩＥの裾野を広げ、「ＮＩＥの種蒔き」に継続的に取り組んでいきます。

最後に「実践報告書」の発刊に当たったＮＩＥ事務局をはじめ、ＮＩＥ実践校の先生方、新聞関係者の皆さんに大変お世話になりましたことを報告しお礼申し上げます。

目　　次

巻頭言　2023年度「北海道NIE実践報告書」の発刊に寄せて …… 3
北海道NIE推進協議会　会長　菊池　安吉（日本NIE学会会員）

小学校

●「新聞に関心をもつために」 …… 8
札幌市立百合が原小学校（新規校）　坂口　明加理

●「新聞を活用したMNI教育の実践」 …… 12
田中学園立命館慶祥小学校（新規校）　山形　昇平

●「NIEで学びの土台となる資質・能力を育む」 …… 16
別海町立野付小学校（新規校）　荒井　咲子、宮向　伸子

●「児童の身近なところに新聞を」 …… 20
札幌市立藤野小学校（新規校）　立野　弘高

●「より身近なLGBTQ＋について考える」 …… 24
札幌市立緑丘小学校（継続校2年目）　長谷川　美雪

●「新聞を活用した分かる・できる・楽しい学習の展開」 …… 28
札幌市立明園小学校（継続校2年目）　檜　　克博

●「少しずつ新聞を身近な存在へ」 …… 32
旭川市立永山小学校（継続校2年目）　牧野　広太、中島　　環

●「新聞を通してつくるつながり
～自分の思いをもち、主体的に課題に取り組むための新聞の活用」 …… 36
日高町立厚賀小学校（継続校2年目）　大平　真紀

●「新聞を読み、要約する活動を通して、子どもたちの書く力を高める」 …… 40
帯広市立愛国小学校（継続校2年目）　平岡　あゆみ、大石　秀雄

●「新聞を活用したメディアリテラシーの育成」 …… 44
芦別市立上芦別小学校（継続校3年目）
中西　亜美、大林　幸子、寺川　三奈

●「NIEを学校で根付かせる」 …… 48
岩見沢市立中央小学校（継続校5年目）　冨樫　いずみ

●「効果的な活用を目指して」 …… 52
夕張市立ゆうばり小学校（継続校6年目）　佐藤　優子

●「新聞を活用した実践～自ら手に取る姿～」 …… 56
登別市立富岸小学校（推進協議会枠）　赤木　俊也

中 学 校

●「学校祭での新聞切り抜きコンテストの実践」…… 60
札幌市立澄川中学校（新規校）　白瀬　功美

●「生徒の主体的な学びにつながる新聞活用」…… 64
札幌市立屯田北中学校（新規校）　福井　剛史

●「情報活用能力を育成するNIEを目指して」…… 68
旭川市立永山中学校（新規校）　鏡　　拓也

●「伝わる表現を目指して」…… 72
札幌市立真栄中学校（継続校2年目）　遠藤　翔太

●「学校図書館から広がるNIE
～生徒の学びとメディアをつなぐ学校司書が支援するNIE活動～」…… 76
札幌市立栄町中学校（継続校2年目）　児玉　優子

●「深い思考をファシリテートする新聞活用」…… 80
標津町立標津中学校（継続校2年目）　外川　篤司

●「教育課程に位置付けたNIEの実践を通して
～コンピテンシーベースに基づいたNIEのカリキュラム開発～」…… 84
別海町立上西春別中学校（継続校2年目）　早瀬　香織

●「新聞を活用した実践～総合的な学習の時間・国語科での実践～」…… 90
幕別町立忠類中学校（継続校2年目）　千葉　優子

●「ICTを活用した『かべ新聞』『スクラップ』の制作」…… 94
芽室町立芽室西中学校（継続校2年目）　掛水　成幸

●「情報収集力の獲得から、情報編集力、
そして情報発進力に広げる新聞活用の実践」…… 98
浦幌町立上浦幌中学校（継続校3年目）　中村　宏喜

●「情報を読み取り、自ら考え、表現する力を培う」…… 102
小樽市立北陵中学校（継続校7年目）　窪田　達大

●「情報文を読み、考えたことを書いてみる」…… 106
札幌市立宮の森中学校（推進協議会枠）　松尾　暁子

義務教育学校

●「小中一貫校（義務教育学校）における新聞活用～全校で新聞に親しみ、
社会を知り、社会に参画しようとする子どもたちに～」…… 110
札幌市立義務教育学校福移学園（継続校2年目）
福本　勇太

●「義務教育学校2年目のNIE活動」…… 114
富良野市立樹海学校（継続校5年目）　齋藤　文玲

高等学校

●「進路指導を絡めた新聞活用授業」…… 118
北海道釧路東高等学校（継続校3年目）　山本　憲一

●「新聞を読む、活かす（3年目の取組）」…… 122
北海道富良野高等学校（継続校3年目）
北村　智裕、小森　猛、渡辺　勇嗣

●「新聞を活用した学びの実践～朝のSHRでの
新聞記事の活用と高大連携探究活動における取組み～」…… 126
北海道科学大学高等学校（継続校4年目）　山下　卓

●「『日常的・継続的』な新聞活用の取組の実践」…… 130
北海道札幌手稲高等学校（継続校5年目）
嶋崎　俊樹、櫻井　智行、倉部　英利子

●「新聞記事を利用した授業づくり」…… 134
星槎国際高等学校帯広学習センター（継続校5年目）
高橋　知行

●「①時事問題と漢字を結びつける　②新聞記事を要約の文章として活用
③身近な科学の事象に関する」…… 138
札幌新陽高等学校（継続校6年目）
櫻庭　彩寧、間島　誠司、大野　壮啓、宮田　華奈

支援学校

●「聴覚特別支援学校における新聞を活用した授業実践」…… 144
北海道旭川聾学校（推進協議会枠）　脇渕　昭平、大田原　義幸

●「新聞を生かし様々な学力に結びつける実践」…… 148
北海道函館高等支援学校（継続校2年目）　山本　正彦

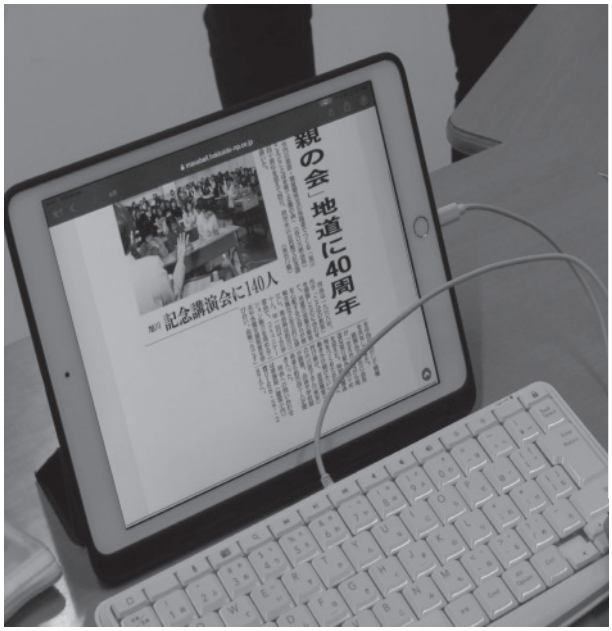
編集後記

北海道NIE推進協議会　NIEコーディネーター　上村　尚生 …… 152

2023

NIE実践報告

NIE
Newspaper in Education



２０２３年度　NIE 実践報告

新聞に関心をもつために

札幌市立百合が原小学校　教諭　坂口　明加理

１．はじめに

本校は、札幌市北区に位置する自然豊かな百合が原公園に近い中規模の学校である。今年度は、どの子にとっても学ぶことが楽しく、挨拶と笑顔のあふれる「あったか百合が原」を重点に教育活動を進めている。

２.児童の様子

明るく素直な児童が多く、意欲的に取り組むことができる。一方で、学習に対して苦手意識をもっている児童も多い。特に読書に対しては、学校生活アンケートで「読書が好きである。」という質問に「あまりそう思わない」「そう思わない」と答えたのは 23.6％と、活字を読むことに抵抗がある児童も多い。また、本校は、小学校区と中学校区が同一のため、ほぼ変わらぬ人間関係で９年間過ごすことになる。だからこそ、新聞を通して社会に目を向け、様々な「ひと・もの・こと」への関心をもち、広い視野で物事を捉える力を育みたい。

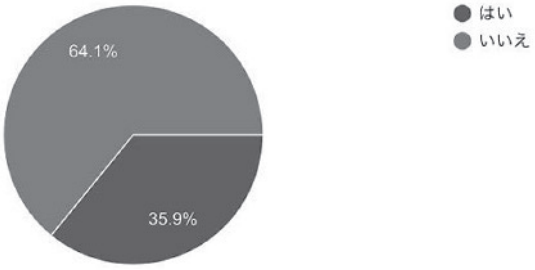
３．実践の内容

実践を行うにあたり、学級の児童に Google form を用いて新聞に関するアンケートを行った。(39 人が回答)

設問１：家で新聞をとっていますか。

（とっている：20 件　とっていない：19 件）

設問２：新聞は好きですか。



（はい：14 件　いいえ：25 件）

設問３：(設問２に対し) その理由は何ですか。

・文章が長いから。読むのが面倒だから。
・文字が小さくて多いから。
・全く読んだことがないから。
・スポーツの野球を見るのが楽しみだから。
・好きな時間に読めるから。
・天気や番組表が書いてあるので便利だから。
・4 コマ漫画が面白いから。

設問４：新聞といえばどんなことをイメージしますか。

・ニュースがたくさん書いてある。
・昔の人、お爺さんが読んでいる。
・文字や文章がびっしりと書いてある。
・むずかしい。
・雑巾の代わり。

アンケートの結果から、半数近くの家庭で新聞をとっておらず、新聞を読む機会がないことがわかった。また、デジタル化が進む現代において新聞は子どもたちにとって敬遠されている。自分から文章を読むということに抵抗があるように感じる。そこで、子どもたちがまずは新聞に関心をもつことや、私たちの暮らしに必要なメディアであることを実感できるように以下の実践を行った。

① 朝の学習時間に新聞を読む

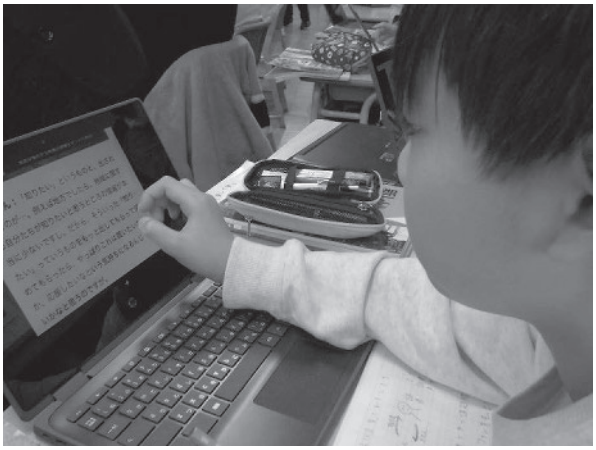
まずは、学級全員が新聞に触れる機会を確保するために、朝の学習時間「ゆりっ子タイム」を活用して北海道新聞 NIE のワークシートに取り組んだ。５分間で新聞記事を読み、記事から書き抜いたり自分の考えを書いたりし、答え合わせをする。全く新聞を読んだことのない児童もいたため、まずは小学校低学年向けの短い記事から読むことで、少しずつ新聞を読むことに慣れていった。

北海道新聞
2023 年
６月２日

② まな bell の活用

５年生国語科「新聞を読もう」の学習で北海道新聞社の小中高校生向け総合デジタル教材まな bell を活用した。まな bell は、今年度より札幌市の児童の一人一台端末に搭載された。約 35 年分の北海道新聞記事を収録した記事データベース検索の他、毎日の朝刊１面や児童生徒向けに厳選したおすすめニュースが読め、新聞作りや、作文入力などの様々な機能がある。

今回は、全道版と地方版の記事の内容の違いを捉えるために、記事データベース検索を活用した。自分の端末で新聞を読むことができるので、記事を自分でズームしたり、ペンで書き込みができる記事に線を引いたりしていた。紙面よりもデジタルで新聞を読む方が１つの記事の内容に集中して読むことができていた。



③ ５年生社会科「情報産業とわたしたちのくらし」で新聞を教材化

初めに、「天気予報の情報を手に入れるにはどのメディアを使うとよいか？」という問いからメディアの種類と特徴について考えていった。子どもたちは新聞があまり便利でないメディアだと感じていた。次に、メディアの歴史について学習した。新聞が約 150 年も前からあることに驚いていた。そして、実際に北海道新聞の朝刊１日分を配付しどんな種類の情報が毎日私たちのもとに届いているのか調査した。「文字がびっしり書いてあるページは株だ。」「テレビだけでなく映画やラジオの情報もあるんだ。」「競馬の情報が載っている。」「脳トレもあるよ。」など、新聞をじっくり読むことで様々な気付きがあった。そこから、「これだけたくさんの情報を毎日どのようにわたしたちに届け続けているのだろう。」という問いが生まれた。

そこで、北海道新聞社みらい教育推進室福元さんをゲストティーチャーにお招きし、新聞ができるまでの過程や記者の苦労・やりがいについて教えていただいた。新聞社で働く人の思いが込められていることを知ったことで、「新聞を大切にしたい。」と関心をもつ子もいた。さらに、新聞記事に記者の名が書かれている意味を教材化した。「もし情報が嘘だったら、取材した記者の名が書かれていると誰が書いたのか特定できて安心できる。」「新聞を作る人は、読者に信頼してもらえるよう工夫している。」など、正確な情報を伝えるために取材され、新聞の情報が私たちのもとに届いていることを理解していた。単元の学習の最後に、西日本新聞「あなたの特命取材班」という取り組みを教材化した。

西日本新聞
2019年
4月13日

先生、この髪形だめですか

校則違反、基準に疑問

ツーブロック「高校生らしくない」

「なぜ、阪本さんは読者の疑問を取材して記事にしているのだろう。」という問いに対し、子どもたちは、
「自分の悩みや知りたいことが解決してもらえるかもしれないと思うと信頼できる。」
「他にも同じ悩みをもっている人がいたらその人も助かる。」
「他の新聞にはない記事で読んでもらえる。」
など読者の疑問を取材し、記事にすることで読者と繋がり、新聞が世の中を変えていく力があることを読者に実感してもらえると子どもたちは具体的に考えていた。

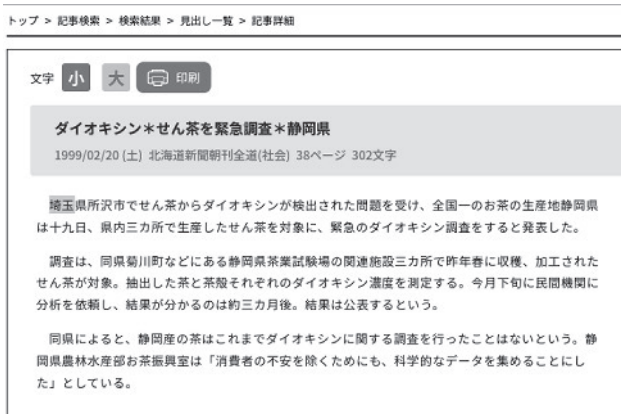
４．成果と課題

（１）成果

①　主体的なまなbellの活用

社会科「情報産業とわたしたちのくらし」の学習の中で不確かな情報が風評被害をもたらすこともあることを教科書の新聞記事を活用し学習した。すると、ある児童が「まなbellで調べたらこの記事見れるかな。」と、一人一台端末を用いてまなbellの記事データベースで検索し、教科書に載っていたものと関連する記事を見つけ読んでいた。自分の関心に合わせて過去の新聞記事を自由に調べたり読んだりすることができ、調べる力や必要な情報を手に入れる力を養うことに効果的だと感じた。

北海道新聞
1999年2月20日


トップ > 記事検索 > 検索結果 > 見出し一覧 > 記事詳細

文字 小 大 印刷

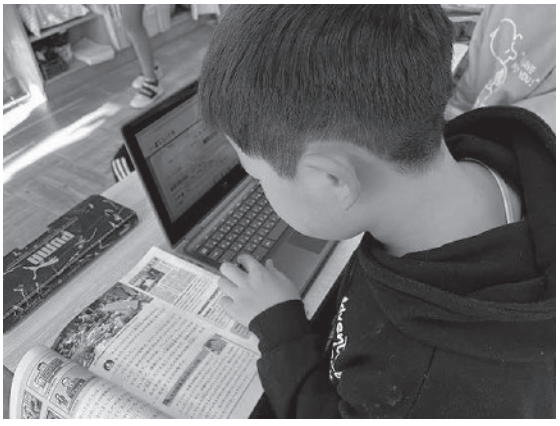
ダイオキシン＊せん茶を緊急調査＊静岡県

1999/02/20 (土) 北海道新聞朝刊全道(社会) 38ページ 302文字

埼玉県所沢市でせん茶からダイオキシンが検出された問題を受け、全国一のお茶の生産地静岡県は十九日、県内三カ所で生産したせん茶を対象に、緊急のダイオキシン調査をすると発表した。

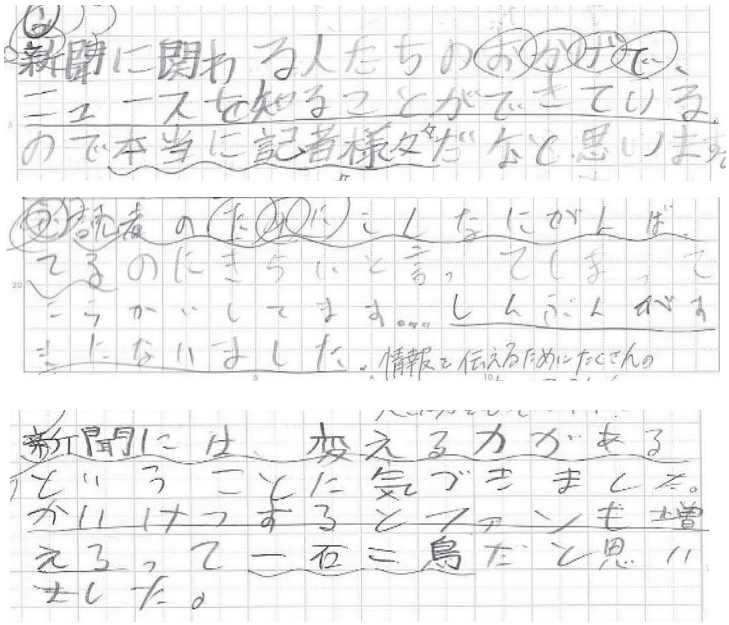
調査は、同県菊川町などにある静岡県茶業試験場の関連施設三カ所で昨年春に収穫、加工されたせん茶が対象。抽出した茶と茶殻それぞれのダイオキシン濃度を測定する。今月下旬に民間機関に分析を依頼し、結果が分かるのは約三カ月後。結果は公表するという。

同県によると、静岡産の茶はこれまでダイオキシンに関する調査を行ったことはないという。静岡県農林水産部お茶振興室は「消費者の不安を除くためにも、科学的なデータを集めることにした」としている。



② 新聞への関心の高まり

社会科「情報産業とわたしたちのくらし」で、単元の学習の最後に、本実践を行う前に行った前述のアンケート結果を子どもたちに提示した。すると、子どもたちは「たった1枚の紙の中にこんなに情報が入っているってすごい。」「記者の努力が詰まっているから大切にしたい。」「家では新聞を取っていないけど読んでみたくなった。」など、学習を行う前よりも新聞に興味をもち、新聞社で働く人の思いに寄り添って考えたり自分の生活とつなげて考えたりしていた。本実践を通して、子どもたちの新聞に対する関心の変容が見られた。



（２）課題

① 新聞記事に対して自分の考えをもつ

今年度の実践に取り組む中で、新聞を読み自分の考えをもつことや自分の生活とのつながりを考えることに対して苦手意識のある子どもたちの姿も見られた。学校という場だからこそ、他者と対話することを通して一つの新聞記事からも様々な考えができることを実感し、自分の考えを広げてほしい。そのためには、まず自分の考えをもつことが大切であると考える。苦手意識をもつ子どもたちは、「何を書いたらいいかわからない。」「思いつかない。」など、自分の考えに自信がない。新聞記事に対し自分の立場を決めるなど少しずつ自信をもてるような考えの交流の在り方を工夫していきたい。

② 新聞への関心の継続

今回の実践では、国語と社会の学習を軸に新聞を扱ったが、子どもたち自身の中に「新聞を読んでみようかな。」という思いは薄いように感じる。特に、文字を読むことに抵抗のある子どもたちにとっては自ら新聞を手にすることは考えにくい。だからこそ、意図的に学習の中で新聞を読んだり、新聞で調べたりする活動を継続して取り入れていく必要がある。

５．おわりに

新聞は社会のことを知ることができるだけでなく、自分の生活と社会とをつなげて考えることのできる一つの手段である。いつでも、どこでも、誰でもすぐに多くの情報を手に入れられる今、子どもたちにとって新聞はあまりなじみのないものだが、わたしたちの生活に欠かせないメディアの１つだ。今回の実践を支えていただいた北海道新聞社の福元さん、中井さんに「新聞は全部読まなくていい。自分の興味のある所だけ読むとよい。」ということを教えていただいた。自分に必要な情報は何かを考えて読む。まさに、これからの情報化社会を生きていく子どもたちに育みたい情報活用の力ともいえる。今回の実践で新聞がわたしたちの生活を支えているメディアの１つだという意識がより高まった。今後、その新聞を通して子どもたちが自ら社会と関わろうとする姿を目指し実践を重ねていきたい。

２０２３年度　NIE 実践報告

新聞を活用したＭＮＩ教育の実践

田中学園立命館慶祥小学校　教諭　山形　昇平

１．はじめに

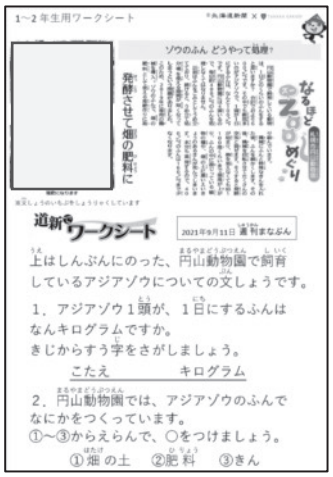
本校は、195 万人の人口を擁する札幌市の豊平区にある児童数 222 名、開校２年目の私立小学校である。校地内に緑あふれる森を有する、豊かな自然環境が大きな魅力の学校でもある。また、こりっつ認定こども園と同一校地内にあり、豊かな交流が可能な環境にある。本校児童は、札幌市全域はもとより、千歳市等市外から通学している。そのためほとんどの子が自宅から学校までの送り迎えをする「Door to Door」や、バスなどの公共交通機関を利用して通学している。

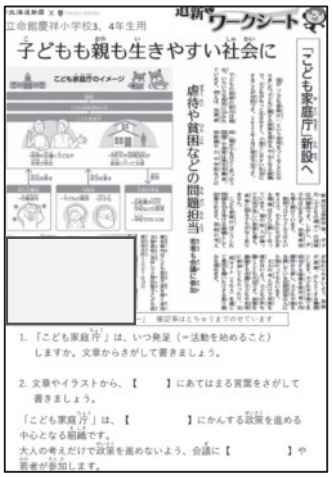
また本校は、北海道新聞社と連携し、ＭＮＩ教育を推進している。ＭＮＩ（Master of News & Information ）教育は ICT の先を行く、より深く広い、温もりのある学びを目指し、インターネットだけではなく人、紙もメディアとし、進んで社会参加する子どもを育てることを目的とした教科横断的な学習である。この中で子どもたちは、自らを表現するためにメディアを使う。インターネットなどの情報技術はもちろん、関わる人も、書籍や新聞などの紙も、知識を深め人と交わる時間を豊かにし、社会に向けて自らを表現するための大切なメディアとして学びに活用している。その取組の一つとして、新聞記事を読む活動がある。どの学年も週に１回、北海道新聞が選定した記事を活用したワークシートに取り組んでいる。

２．児童の実態

本学級の児童は、４年生からＭＮＩ教育を学んできている。昨年は新聞作成アプリケーション「ことまど」を活用して研修旅行の報告などをしている。また、総合的な学習「ＬＩＮＫ学習」の中で、ゴミ問題等の社会的課題に取り組んできたこともあり、身の回りにある問題について関心をもっている子が多い。

また、５年生の社会科の学習や毎週のワークシートの取組を通じて、新聞記事やデジタルコンテンツの「どうしんまなｂell」から数多く学んでいる。





３．指導案

第５学年　国語科指導案

日　時　11 月 2 日（木）

児　童　田中学園立命館慶祥小学校 5 年 2 組

男子 9 名　女子 13 名　計 22 名

授業者　山形昇平

⑴　単元名「調べる時に使おう　統計資料の読み方」

⑵　単元と新聞の関わり

本単元は、情報に関する学習である。情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を学ぶことをねらいとし、グラフや表を使い学んでいく。また、グラフは同じ内容でも、単位や目盛りによって印象が大きく変わるので、数値をしっかりと確かめることの大切さを学ぶ。また表では、同じ内容でも調べた時期や対象によって結果が異なることを学ぶ。新聞記事内のグラフや表「宅配便取扱個数の変化」「全道と主産地のメロン栽培面積」「一戸建て住宅の室温、全国 52 都市冬のアイスクリームシャーベットの支出金額ランキング」などを活用して学習を進めた。それぞれの資料を通じて、分かる事実や、考えられることを話し合っていった。

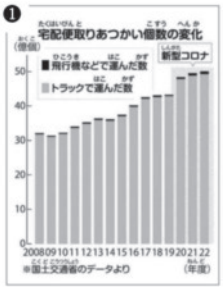
記事は、「2023 年 9 月 9 日付道新こども新聞まなぶん」「2023 年 8 月 28 日北海道新聞」「2023 年 8 月 26 日北海道新聞」「2023 年 9 月 2 日北海道新聞」を使用した。

⑶　本時の学習展開

おもな学習活動

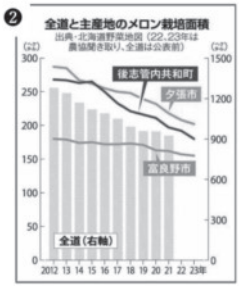
資料から分かる「事実」と「考えられること」を区別して捉え
自分の考えをまとめよう。

❶



事実は「個数が増えている」「感染が広がった時期に増えた」「飛行機よりトラックが多い」。考えられる事は「コロナの影響でスーパーに行かずネットで買う人が増えたのではないか」。

❷



事実は「メロンで有名な夕張市で栽培面積は減少している。「全道的に栽培面積は減っている」

❸

二つの資料 の それぞれの事実を考えてみよう。二つの資料の組み合わせから「考えられること」を話し合った。考えられることは「北海道は冬の室温が高いこと（事実）だから札幌では冬にアイスクリームを買う人が多いのではないか」

「事実」と「考えられること」を区別して捉え
自分の考えをまとめることができた。

第５学年　社会科指導案

日　時　12月15日（金）

児　童　田中学園立命館慶祥小学校５年２組
男子９名　女子13名　計22名

授業者　山形昇平

⑴　単元名「情報化した社会と産業の発展」

⑵　単元と新聞の関わり

本単元は、我が国の産業と情報との関わりについての学習である。ここでは放送、新聞などの産業に関する内容と情報や情報通信技術を活用する産業を学習する。放送や新聞などの産業に関する内容については、例えば、新聞記者が情報を集め発信するまでの工夫や努力などに着目する。

本時は北海道新聞を活用し、新聞記者の記事づくりに臨む思いを紐解いていく学習である。まず、全国紙と地方紙、地方紙の全道面と地方面などの違いを考えることから始め、知床で起きた観光船の事故に焦点を当て新聞の使命や新聞記者の記事づくりにおける思いに迫っていく。

記事は、「2023年10月31日毎日新聞」「2023年10月31日北海道新聞」「2022年４月２５日北海道新聞」を使用した。

⑶　本時の学習展開

おもな学習活動

全国紙と地方紙、地方紙の全道面と地方面の違いを考えながら
新聞社の使命について考えてみよう

日本に住んでいる人ならだれでも感じる、世界的に見て大事な話題を頭の記事にしているのだと思う。

全国紙の１面トップ記事、道新が違う場所にのせているのはなぜ？

熊の話題は北海道の住民にとって気になる話題だ。北海道の人にとって大事な話題を頭の記事にしているのだろう。

社会面と第２社会面の見開き

重要な内容は、社会面全体を使って情報を提供する。

地方面では地元ががんばっていることや、地元の人が困っていることを伝えている。

その土地に住んでいる人と共に考えながら
地域の役に立つ情報を伝え、地域を元気にしていくのが新聞の使命だ

４．成果と課題

国語「調べる時に使おう　統計資料の読み方」について

資料となるグラフや表から分かる「事実」と「考えられること」を区別して捉え、自分の考えをまとめることができていた。グループでグラフについて考えたり、自分の考えを交流したりする際には、意欲的に意見交流する子が多くみられた。それは新聞記事がメロンやアイスクリームなど身近な話題を取り上げていたからだと考える。また、北海道の地名や、北海道ならではのことが題材になっていたことも子どもたちの意欲喚起につながったのではないかと考えている。

一方で、グラフは同じ内容でも、単位や目盛りによって印象が大きく変わるので、数値をしっかりと確かめることの大切さについては、本時の中であまり話題に上がらなかった。今後はここで学んだことを生かし、グラフでは単位や目盛りがグラフを読む側の印象を大きく変えること、また表では同じ内容でも調べた時期や対象によって結果が異なることを表現活動に取り組ませていきたいと考えている。

社会科「情報化した社会と産業の発展」について

本単元は、我が国の産業と情報との関わりについての学習であり、放送、新聞などの産業に関する内容と情報や情報通信技術を活用する産業を学習する。本校は北海道新聞と連携しＭＮＩ教育を推進しているので、教科書を通しての学びよりもさらに深く内容を理解できたと考えている。また本時の学習の数日前には、北海道新聞社の見学をした。北海道新聞の歴史を調べたり、新聞記者に直接インタビューをしたりすることで、より一層情報産業の一つである新聞について深く理解するとともに、さらに知りたいという気持ちを持つことができたと考えている。この学習をするまでは、新聞の使命は「事実をより早く正確に伝えること」だけだと捉えている子が多かった。しかし全国紙と地方紙、全道面と地方面を比較することで、新聞は事実の提供にとどまらない、地方の人々を元気づける役割があることに気づくことができた。

この学習で学習をまとめる活動を行わなかったことが課題であろう。まとめとして、自分たちで読んでもらう人を定め、その人に向けて情報を発信する新聞づくりの活動をしてくことができればより一層の力の高まりに貢献できたと考えている。

５．おわりに

本校は、ICT の先を行くより深く広い、温もりのある学びを目指しＭＮＩ教育を推進してきた。この中で子どもたちは、自らを表現するためにメディアを使ってきた。新聞づくりを通じて、社会に向けて自分を発信する力を身に着けてきた。また、毎週行っている記事を使ったワークシートでは、記事を読む読解力と、まな bell を活用して検索する力を身に着けてきた。加えてＭＮＩの理念を生かし、国語や社会の学習を中心として全校で教育活動を推進してきた。本稿ではその一端を紹介した。今後も全スタッフでＭＮＩ教育の更なる研究を進め、全国にその成果を発信していきたいと考えている。

２０２３年度NIE実践報告

ＮＩＥで学びの土台となる資質・能力を育む

別海町立野付小学校　教諭　荒井　咲子　図書事務　宮向　伸子

１．はじめに

本校は道東の漁業と酪農地帯にある児童数７１名の小規模校である。地域には、幼稚園、小学校、中学校があり、読書やＮＩＥを推進する学びの土台作りと、地域の教育資源を生かして学びを深めるふるさとキャリア教育「野付学」を軸にして、幼小中一貫「野付型教育」の充実をＣＳ（学校運営協議会委員）と共に進めている。

本校児童は各種調査結果の分析より、複数条件に基づいて説明する記述式問題の正答率が低い傾向があり、問題を捉え解決する思考を言語化する力に課題がある。学校課題の解決のためにも、学びの土台となる資質・能力を高めるＮＩＥの取組は有効と考える。興味・関心や視点、問題意識をもちながら新聞を読み、語彙力を高め、新聞を活用して書く活動、交流する場面を日課表に位置付け、意図的、組織的、継続的に取り組んでいる。

２．実践の概要

（１）新聞と出会う「朝新聞」

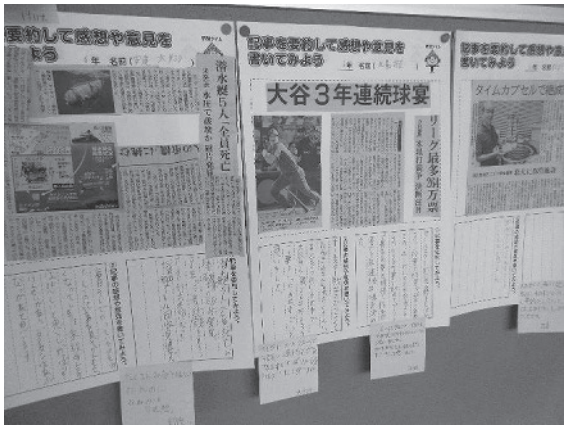
児童一人一人に『北海道新聞』と『道新こども新聞まなぶん』が配付される『別海町新聞の日』を「朝新聞」として日課表に位置付け、全児童が新聞に出会い新聞を読む機会を設定した。

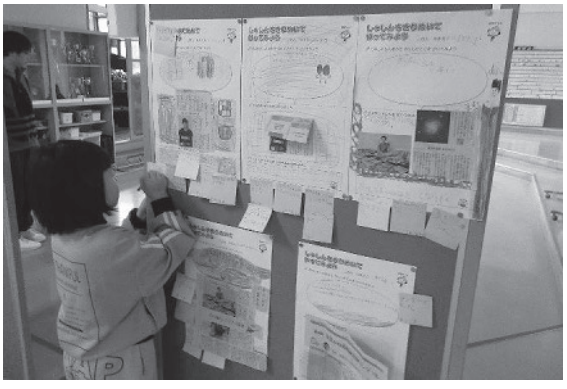
見出しや写真に着目し興味関心のある記事やお気に入りのシリーズなど、こだわりや個性を発揮しながらどんどん新聞を読むことを通して、児童は社会の情報や新しい知識、自分の好きや楽しいことにも出会っている。

（２）新聞ワークシートで交流

年間を通じて、全校で新聞ワークシートに取り組み、交流活動に生かしている。ワークシートは発達段階や学習内容に合ったものを選び、読んでわかったこと、考えたこと、見出し、要約などを書いて、廊下に掲示し交流している。コモンスペースに掲示し、付箋紙を貼って全校児童が交流する機会も設定している。「同じ記事を読ん

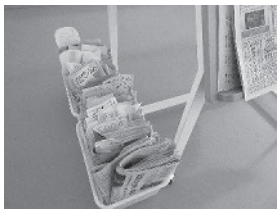
だよ」「ぼくもこんちゅうが好きだよ」「知らなかった！びっくりした！」など思いや関心が広がり、廊下やコモンスペースは共感が生まれ学びが深まる交流スポットになっている。

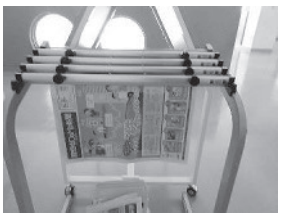




（３）新聞コーナーで興味関心 UP!

図書室前のスペースを活用し、複数の新聞を読み比べ、生活と関連がある記事を読むことができるようにしている。担当者がカードやクイズなどで新聞への興味関心が高まるように工夫をしている。





（４）「まわし読み新聞」で交流

中学校体育館を会場に学校区の「まわし読み新聞」を実施した。活動の主催は、野付校区学校運営協議会の学びの土台づくり部会。中学３年生が進行とファシリテーターを担当し、小学５年生と中学、に野付学校区 CS メンバーが加わり、総勢６１人が９つのグループに分かれて新聞記事を切り抜いて壁新聞を作成し交流した。

活動のねらいは下記の４つである。

【活動のねらい】
⑴ 興味をもった新聞記事を選び、切りとった記事について子ども（小学生・中学生）と大人のグループで語り合い壁新聞にする活動を通して、情報リテラシー及び「思考力・表現力・判断力」を高める。
⑵中学生の姿（関わり方）から、「中１ギャップ」の軽減を図り、目指す姿を体験できる合同活動を行う一貫教育の活動とする。
⑶野付学校区学校運営協議会メンバーが児童生徒の活動に加わることで、地域と学校の相互理解を深め、地域との協働体制を構築する。
⑷中学３年生がリーダー性を発揮する機会とする。

大きく分けて４つの活動を展開した。

① 読んで切りぬく

② グループで説明する

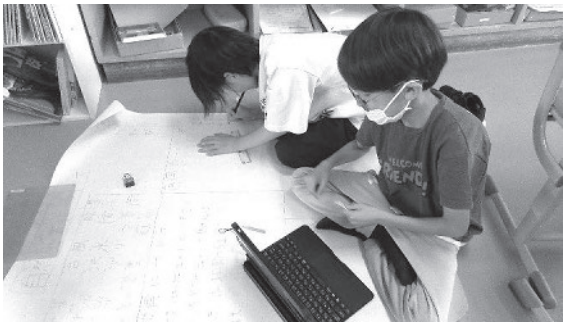
③ 模造紙に貼る

④ 他のグループに説明する

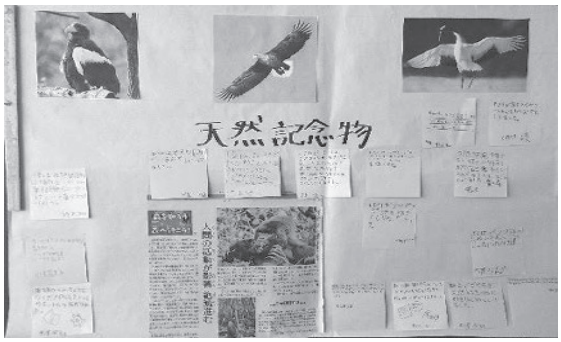
はじめはちょっと緊張気味の小学生だったが、中学生のリードやＣＳの方の声かけで、次第に話が弾み笑顔がこぼれていた。見出しに着目すると読みやすい、気になる記事が同じ人がいた、一人で読むよりみんなで読むとおもしろいなど、活動を通して発見したことがいっぱいあった。事後の感想には、「とても楽しかったです。中学生との交流は少し緊張しましたが、小さなことも気にかけてくれて、またやりたいと思いました。今度他の人ともやってみたいと思いました。」「中学生は集中できていてすごいと思いました。」「小学生、中学生、大人と幅広く交流できてとても良かったです。」など、新聞交流を通して出会った楽しさや次につながる思いが表現されていた。

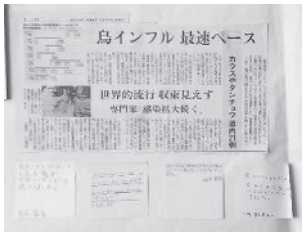
（５）各教科のねらいを達成するために新聞素材を活用

「いっしょに読もう新聞コンクール」の取組や壁新聞作り、新聞を活用した情報活用等、新聞素材を活用して各教科で身に付ける資質能力を高める授業に取り組んだ。

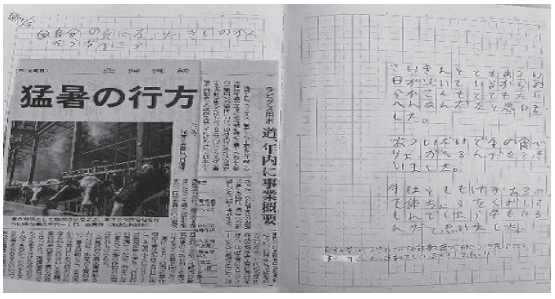


記事を通して友だちに自分の考えを伝え、記事や身近な人との対話を通して自分の考えを形成していく姿が見られた。見出しの付け方や情報の伝え方は、自分が探究した学習内容を発信する際にモデルとなり、表現力を高める学びに生かされていた。





新聞記事を活用し総合的な学習「野付学」を展開



新聞記事を家庭学習（自学）に活用

３．成果と課題

成果としては、日課表を工夫し年間を通じて新聞を読む時間を設定したことで、限られた時間に多くの情報を読み、見出しや写真などを手掛かりにして興味のある情報を選んで読む力や、視点をもって記事を選んで読む力が高まった。ワークシートを活用し、新聞を読んで知ったこと、思ったこと、考えたことを文章で書く取組を継続したことで、限られた時間で思いや考えを書く力が身に付いてきた。作成したワークシートで交流する活動を通して、共感したり、考えを広げたり深めたりする姿が見られた。語彙力や表現力の高まりは見取りが難しいが、多読、速読、熟読が場面によって必要となるＮＩＥの取組を通して高まっていると感じている。

ＣＳ主催の「まわし読み新聞」の取組では、中学生や地域の大人と新聞を通して交流する楽しさや、中学生のリーダーシップや新聞記事のまとめ方、説明の仕方に接し、なりたい自分の姿に出会っていた。小中一貫で教育目標を掲げる当地区の教育を実現する上でも、ＮＩＥは有効であると感じた。

授業での活用については課題がある。各教科のねらいを明確に捉え、単元を見通して効果的に活用する計画が必要である。次年度は教科書が改訂されるため教育課程が再編されることをチャンスととらえ、新聞素材の活用を図っていきたい。

４．おわりに

別海町が推進している子供一人一冊の新聞配付が、実践を支え様々な可能性を実感できる要因になっている。「こども新聞」はルビがあることで低学年も読みやすく、それぞれ好きなコーナーもあるようで、読みっぷりがかっこいい。この環境要因を強みとし、実践を積み重ね、新聞をもとにした学びを深めていきたい。

２０２３年度　NIE 実践報告

児童の身近なところに新聞を

札幌市立藤野小学校　教諭　立野　弘高

１　はじめに

本校は北海道札幌市南区に位置する、全校児童 243 名の中規模校である。「自ら学び、自ら考え、学ぶ意欲にあふれる子の育成」を重点目標に教育活動を進めている。また、今年度は「自ら課題をもち、学び続ける子」を研究テーマとして、子ども主体の授業に向けた授業研究や授業改善を全教職員で進めている。

２　児童（生徒）の様子

近年、本校の学力面で課題の一つとなっていることに「子どもの読書への意欲」がある。学校図書館が整備され、保護者による本の読み聞かせなども行われているものの、なかなか読書習慣の醸成につながっていないという実態がある。これには読書のみに関わらず、活字に対する苦手意識をもっている子が多いということが原因として考えられる。そこで、今年度 NIE 教育実践指定校として取組をスタートするにあたり、新聞を子どもの身近なところに置き、いつでも読むことができる状態にすることで、新聞に親しみ、また活字にも親しみ、読書習慣の醸成にも繋げていけるのではないかと考えた。

３　実践の内容

①学級文庫に新聞コーナーを設置

本校では火・木の週に２回、１０分間の朝読書の時間が設定されている。図書館で借りた本の他に自分で持ってきた本や、学級文庫の本を読む時間となっている。そこで、学級文庫横に新聞コーナーを設置し、いつでも児童が手に取れるようにした。とは言え、なかなか自分から新聞を手に取る児童は最初少なかった。

②新聞記事を紹介しよう

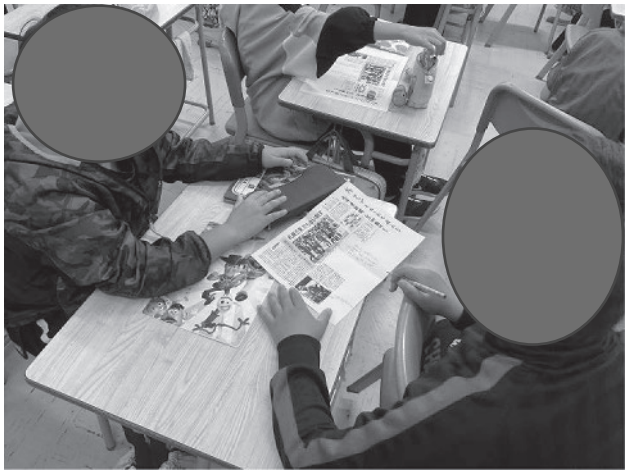
国語の時間を使い、新聞を読んで気になった記事や面白いと思ったコーナーなどを紹介する取組を行った。最初に子ども新聞などを例に、どこにどんなことが書いてあるかを紹介し、それに対する感想などを交流した。家庭で新聞を取っていない子も多く、新聞をあまり読んだことがない子、どのように読めばよいか分からない子も多かった。そこで、新聞をじっくり読む時間を取り、いくつか気になった記事を切り抜き、ノートに貼り付けて感想などを書いていった。

授業の後半で記事やその感想を紹介し合うことで、同じニュースでも新聞によって使っている写真や記事の書かれ方が違うこと、

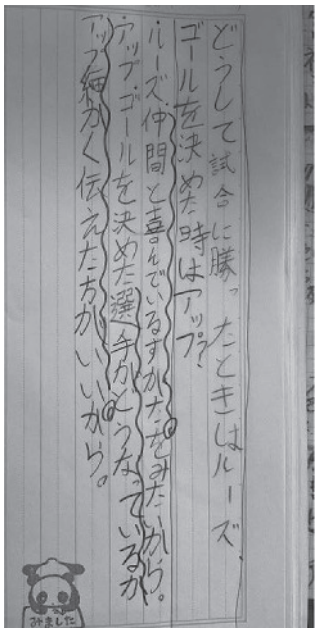
また同じ記事であっても読む人によって気になることや受け取り方が異なることなどに気付く子がいた。

③国語「アップとルーズで伝える」
（４年光村図書）での活用

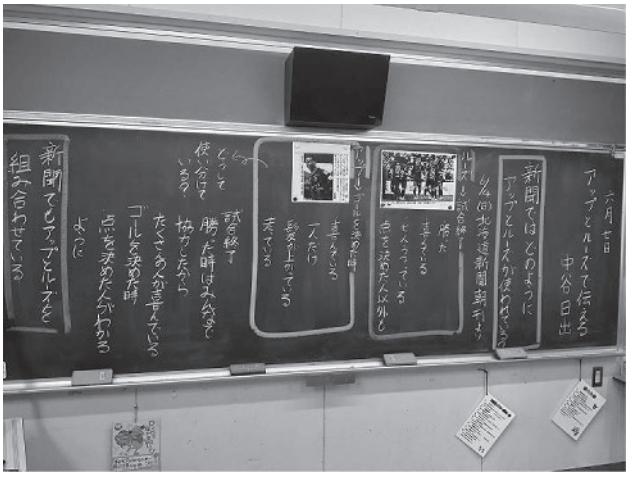
本教材はテレビでのサッカーの試合を例に、「アップ（ある部分を細かく伝える）」と「ルーズ（広い範囲の様子を伝える）」を対比させながら、目的に応じて使い分けることの有効性について書かれている。



教材文の中で、新聞でも紙面の広さに合わせて、「アップ」と「ルーズ」を使い分けていることが紹介されている。そこで、新聞記事で「アップ」と「ルーズ」の写真が使われているものを紹介し、どのような意図で使い分けられているかをノートに書いて交流した。



新聞記事を読むことで、教科書を読んで学習した「アップ」と「ルーズ」が実際に新聞でも使われていることが分かり、またその意図について考えることで、新聞の制作側が何をどのようにして伝えようとしているのかという意図についても気付くことができた。この後、他の記事においても「アップ」や「ルーズ」の写真の使い分けを探そうとする子も出てきた。



④国語「新聞を作ろう」（４年光村図書）
総合的な学習「野菜を育てよう」での活用

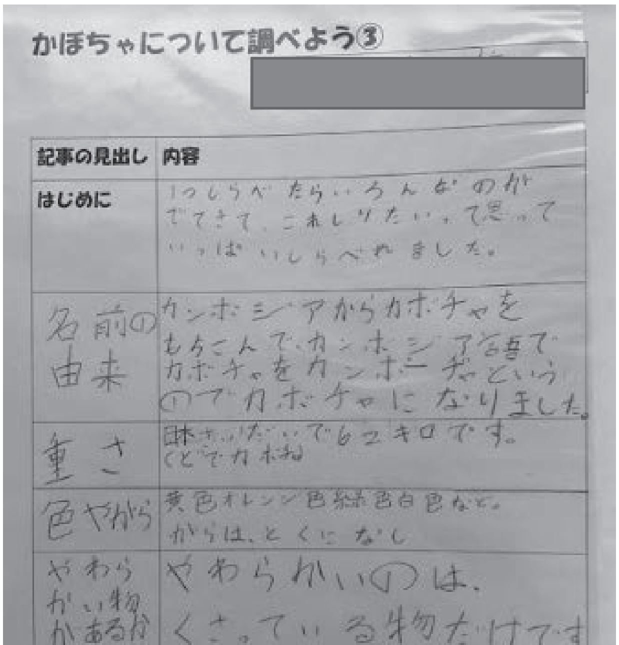
新聞が子どもにとって身近になってきたところで、新聞作りに取り組んだ。教科書では、グループでの新聞作りが示されているが、今回は個人の技能をより高めてほしいという思いから、個人での新聞作りとした。まず、単元前半では、実際の新聞を例に新聞には「新聞名」「発行者」「見出し」「記事」「写真や図」などが見やすく配置されていることを

札幌５発 打ち合い制す
「絶対取れる」田中駿貪欲G

北海道新聞
2023 年
6 月 2 日

紹介した。題材については、総合的な学習において、北方自然教育園でかぼちゃの苗植えをした時期であったので、かぼちゃについて調べたことを新聞にまとめていくことにした。

最初、「見出し」と「記事」の関係を掴めていない子も多く、見出しがそのまま記事のようになってしまう子がいた。そこで、ワークシートを活用し、調べて分かったことをまずは分類して見出しで分けていき、それを記事によって詳しく説明していくようにした。その後、記事をどこに配置するかという割り付けを考えてワークシートに書き、新聞用紙にまとめていった。

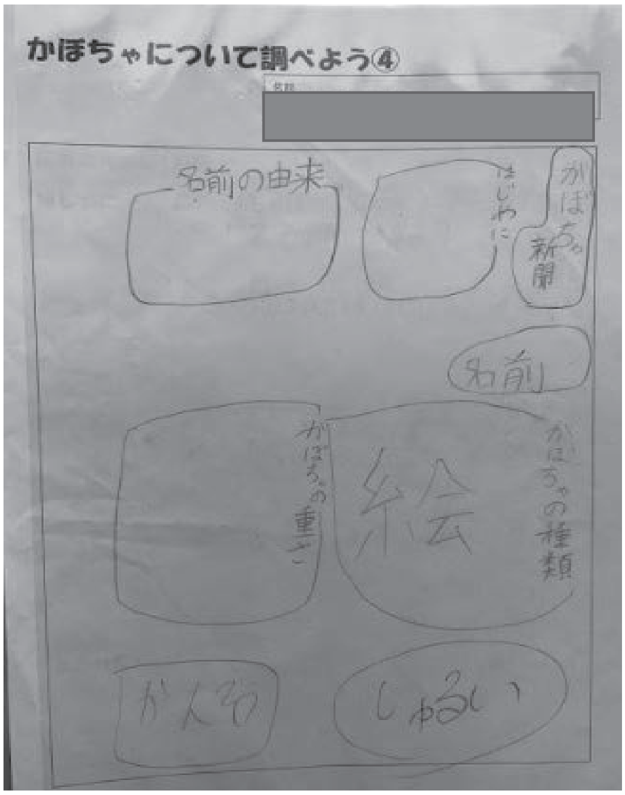


かぼちゃについて調べよう③

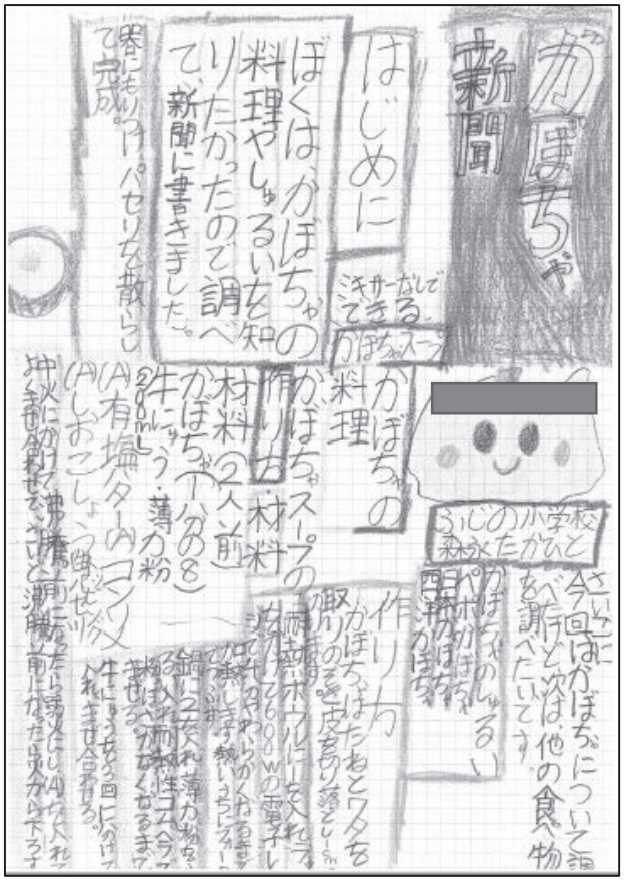
[redacted]

記事の見出し	内容
はじめに	1つしらべたらいろんなのがでてきて、これしりたいって思っていっぱいしらべれました。
名前の由来	カンボジアからカボチャをもちこんで、カンボジア名音でカボチャをカンボーチャというのでカボチャになりました。
重さ	日本さいだいで6□キロです。
色やから	黄色オレンジ色緑色白色など。からは、とくになし
やわらかい物かあるか	やわらかいのは、くさっている物だけです。
おわりに	いろんなことかあったけとほほほぼわけたので うれしくなりました。

これまで国語の学習で新聞を扱ってきたこともあり、調べてきたことを分かりやすく伝えるために、紙面をどのように構成すればよいか、絵や図などをどのように活用すればよいか、子どもたちもよく分かっており、スムーズに取り組むことができた。完成した新

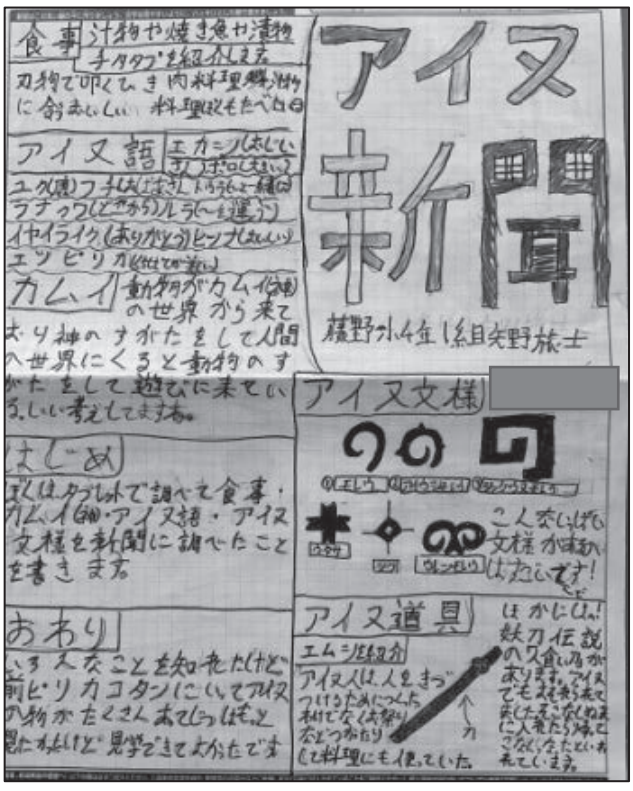


聞にも子どもたちは満足していた。中でも、あまり書くことが得意ではない子どもにとって、紙面を文字で埋めるのは大変な作業であるが、今回のように見出しごとに記事を分けて書き、割り付けを考えてから記事を配置していくという方法はそれほど難しさを感じることなく取り組むことができた。また、今回は初めての取組ということでＡ４サイズの用紙に書いていったことも取り組みやすい要因の一つであった。一度、新聞作りに取り組むことで新聞作りに慣れたこともあり、その後、社会科「アイヌ民族の昔のくらしと今につながる文化」の学習の中で、サッポロピリカコタンに見学に行った際のまとめの新聞も同様の方法で作成した。今回は「北海道新聞小学生新聞グランプリ」の用紙を使って作っていった。前回よりも広い紙面であったが、そこまで抵抗感なく取り組む子どもが多かった。また２回目ということもあり、記事の内容や割り付け、見出しと記事のバランスなど新聞の完成度も上がったと感じられた。



（上）１回目に取り組んだ「かぼちゃ新聞」

（下）２回目に取り組んだ「アイヌ新聞」



４　成果と課題

（１）成果

①新聞に親しむ

子どもがいつでも手に取れるところに新聞を置いておくことで、最初はなかなか手に取る子は少なかったものの、授業などでの活用により少しずつ読む子が出てきた。

②新聞作りの継続

新聞を授業で読むことで、新聞作りにおいても「見出し」や「割り付け」をイメージすることができた。また、１回目ではなかなかうまく書けなかった子も回数を重ねていくことでスムーズに書けるようになり、継続して取り組む重要性を感じた。

（２）課題

①子どもたちが主体的に記事を選択する

多くの新聞は大人向けに書かれており、子どもたちが自分の目的に合わせて記事を選択し、読むということはなかなか難しい。今回は教師によって授業に合う記事を意図的に選択し子どもに紹介することが多かった。少しずつ記事選択を子どもに委ねられるようになると、その他の新聞を活用した学習活動にも広がっていくと考えられる。

②新聞を読んで内容を理解する力

活字の苦手な子にとって新聞を読んで内容を理解することは難しく、新聞からも離れてしまいがちである。子ども新聞などを有効に活用しながら新聞に親しめる環境を作っていくことが求められる。

５　おわりに

家庭で新聞を取っている子が少なく、新聞が子どもにとって馴染みが薄くなっている。新聞がいつでも手に取れる環境を作り、積極的に授業で活用していくことで、少しでも新聞を子どもにとって身近なものにしていけるよう、実践を継続していきたい。

２０２３年度　NIE 実践報告

より身近なＬＧＢＴＱ＋について考える

札幌市立緑丘小学校　教諭　長谷川　美雪

１．はじめに

本校は、27 学級 児童数約 900 名で、中央区の中でも大規模校と呼ばれる学校である。「心が動く学校～あこがれとありがとうでつながるみどりっ子」を重点に教育活動を進めている。日常の授業研究を推進するにあたり、研究主題を「学びに自分の意志をもつ子」、研究の重点を「自己決定力の連続」とし、子どもが自分自身の行動を決めるときによりよい行動を選択できるように研究を進めている。

今回は来年度中学生になる６年生で実践を行う。中学校ではより多くの出会いがあり、人間関係を築いていく。多様な考えをもった人たちとどう関わっていくか考える機会にしたいと思った。また本校の研究の重点である「自己決定の連続」に関わっても自分が人との関わり方を決める上で多様な性の在り方について考えることは必要不可欠である。来年度の教科書にも多様性についての教材が扱われる。それに先立って、新聞に掲載されている身近な出来事から性の在り方について考えていく。

２．実践の内容

目標：LGBTQ＋について知り、多様な性の在り方について考えることができる。

LGBTQ+とは、セクシュアルマイノリティ（性的少数者）を代表するレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、クエスチョニングの５つの頭文字を取った言葉に、「+（プラスアルファ）」を付けた通称。

LGBT 理解増進法（正式名称：性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律）が 2023 年 6 月 23 日に公布・施行されている。それと同時期に行われた小樽プライドを扱っている。

単元構成

１時間目

LGBTQ＋について、またその人の悩みについて知る。（NHKforschool）

２時間目

小樽プライドパレードに参加している人の思いについて知り、自分は多様な社会とどう関わっていくか考える。（二つの新聞記事）

小樽プライドパレードについて

PRIDE とは、「セクシュアル・マイノリティ（性的少数者）のパレード」を指すものとして、広く国際的に認知されています。欧米諸国をはじめ世界の主要な都市では、この「プライド」と称されるセクシュアル・マイノリ

ティのパレードイベントが恒例行事として、毎年開催されています。中には、ニューヨークやサンパウロといった、100万～300万人の動員を記録する巨大な規模のものもあります。(TOKYO RAINBOW PRIDE HPより参照)

このようなパレードは、性的少数者を含むすべての人が「自分らしく」生きるために行っている。日本でも多数の都道府県でプライドパレードが行われており、今回は小樽で開催されたプライドパレード「小樽プライド」を取り上げて授業を行った。

このような活動の成果か、小樽市では令和６年１月からパートナーシップ制(人生のパートナーとして歩む性的マイノリティを公的に承認することにより、生活上の困りごとの軽減や当事者方々の暮らしやすい環境づくりにつなげることを目的とした制度)が導入された

LGBTQ+について知ること、そして自分たちがこれから出会うであろう人々とどう関わっていくかを考える学習にしたいと考えた。

「LGBTQ+」理解さらに

来年の市パートナー制導入に期待

25日・小樽プライド 街中歩き訴え

同性愛者やトランスジェンダーら性的少数者「LGBTQ＋（プラス）」への差別解消を訴え、多様性を認め合う社会の実現を目指すパレード「小樽プライド」が25日、小樽市中心部で開かれる。正午すぎにサンモール一番街（稲穂1）を出発し、約1時間半かけてJR小樽駅前の中央通りや小樽堺町通り商店街を歩く。

チラシやパンフレットを手に参加を呼び掛ける小樽プライド委員会のメンバー

小樽プライドは多様性を象徴する「レインボーフラッグ」を持って街中を歩くパレードで、2020年に第1回を開催。性的マイノリティーの権利を世界各地で訴える「プライド月間」と呼ばれる6月に開催しており、昨年は道内外から100人以上が参加した。主催する小樽プライド委員会は市民を対象とした勉強会「LGBTQカフェ」や、当事者の交流会も開いている。

市は性的少数者らのカップルを婚姻相当と公的に認める「パートナーシップ制度」を来年1月に導入すると表明した。パレード創始者で共同代表の高橋祐一さん(64)は「小樽の制度が同性婚制定にも続いてほしい」と期待する。主催する小樽プライド委員会も「活動が成果につながった」とする。

性的少数者への「LGBT理解増進法案」が16日にも参院本会議で可決、成立する見込みだ。当事者団体からは、多数派への配慮が盛り込まれた「全ての国民が安心して生活できるよう留意する」などの規定が理解の促進を阻んでしまうという懸念の声もある。ただ、共同代表の金沢奈々さん(44)は「いろいろな人が考える機会ができたことは良かったのでは」と受け止める。

今年のパレードは200～300人の参加が目標。金沢さんは「LGBTQであることを隠している人を勇気づけ、誰もが暮らしやすい社会を目指したい」と意気込んでいる。

（矢野伶奈）

北海道新聞　2023年6月16日

多様性 認め合おう

小樽 200人、パレードで訴え

同性愛者やトランスジェンダーら性的少数者「LGBTQ＋（プラス）」の権利や、差別解消を訴えるパレード「小樽プライド」が25日、小樽で開かれた。参加者は市内中心部を約1時間歩き、多様性を認め合う社会の実現を呼び掛けた。

2020年に第1回を開催し、今年で4回目。今回は昨年の2倍となる約200人が市内外から集まり、サンモール一番街（稲穂1）を出発。多様な性を象徴する旗「レインボーフラッグ」を振りながら、都通り商店街や堺町通り商店街を歩いた。

開会式では、主催する小樽プライド委員会の共同代表の金沢奈々さん（44）が「自分らしく生きたいと決意した人を、決意したいと思う人を、正面から真剣に見つめてほしい」と訴えた。

小樽市の迫俊哉市長は「国民の理解を広げるためには私たち地方自治体の職員や、地方のみなさんが取り組むことが大事」とした上で、市は同性愛者らのカップルを婚姻相当と公的に認める「パートナーシップ制度」の導入を来年1月に目指していると強調した。

初参加した在札幌米国総領事館のマーク・ウェベルス首席領事は「みんなで歩む一歩は、平等な権利や個人の自由な生き方を実現するための一歩だ」とあいさつした。

（矢野伶奈）

レインボーフラッグを振り、性的少数者の権利を訴える「小樽プライド」の参加者ら

北海道新聞　2023年6月26日

子ども活動	教師の関わり
○パレードのイメージ ディズニーランドで観たことある。 パレードって楽しいよね。 ○「小樽プライド」の写真を見る。 プライドってどういう意味だろう。 小樽で行われているんだね。 虹色はLGBTQ+の象徴だったよね。 **どんな思いで小樽パレードを主催したり参加したりしているのだろう。**	○子どものパレードのイメージと、実際にパレードを楽しんでやっているわけではないという思いの違いから、「どんな思いでパレードを行っているか。」という問いがもてるようにする。
○２つの新聞記事を読んで考える。 「LGBTQ+」理解さらに 来年の市パートナー制導入に期待 多様性認め合おう 願い LGBTQ+を多くの人に知ってもらう機会にしている。 ４回もやっているということは、思いが強いのでは。 多様性を認め合う社会の実現に向けて行っている。 地域の人が取り組むことで、地域の意識を変えたい。 ○１月から小樽市でパートナシップ制度が始まることを知る。 行動したことで市のルールを変えたんだね。 このような取り組みが多様性を認める社会をつくっていくと思う。 ○自分とは違う考えをもった人とどのように関わっていくか考える。 認め合えるように相手を理解して関わりたい。 差別しないで、みんなと同じように接したい。	○記事の一部を隠し(主催者の思いが書いてある部分)自分たちで考えさせる。 ○日本ではパートナーシップ制などの取組がどれくらい行われているかを提示する。社会の動きが変わってきていること、世界と比べるとまだまだ進んでいないことを伝え、これから自分ができることについて考えさせる。

３．子どもの振り返り

自分たちも多様性を認めていきたいしそういう人もいるからちゃんと理解をしたい。
誰もが暮らしやすくなるって難しいことなんだなって思った。
世の中も少し認めてきてくれているからみらいはもっと暮らしやすくなる社会を作って欲しい。

「LGBTQ＋」で悩んでいる人は大変だなと思いました。世の中には、沢山の人がいるなとも思いました。私達は、「LGBTQ＋」のことを認めて、まだ「LGBTQ＋」を知らない人たちにも教えてあげたいです。認めてもらえるように、パレードをしていることにもびっくりしました。好きなように生きていいし、何を着てもいいと思いました。このことを忘れないのが大事だなと思いました。

185個の市町村があるのに７個しかLGBTQ＋について理解されないことを知って少しビックリしました。LGBTQ＋の人たちは周りに偏見や差別を受けて、パレードを起こして伝えているのに伝わっていないからです。

僕はこれからLGBTQ＋の人たちの理解が大切だと思いました。

４．成果と課題

（１）成果

①LGBTQ+について知ることができた

クラスのおよそ８割の子どもが「LGBTQ+」という言葉を知らなかった。まずは知識として世の中には多様な性があること、また性の多様性を認めてもらうために悩んだり、行動したりしている人がいることを子どもたちが知ることができたことが成果である。

②自分ごととして捉える身近な記事

子どもたちが修学旅行でいった小樽のパレードを題材にすることで、より身近な出来事として捉えることができたのではないかと思う。また、ネットのニュースでは大きい事件や世界的なことが取り上げられることが多く、地域的なことは北海道新聞などの地方紙で知ることが多い。地方紙ならではの良さを生かすことができたと思う。

（２）課題

〇扱う内容の難しさ

今回は小学校６年生で実践を行ったが、内容がデリケートだったり、理解しにくかったりすることがある。女性が女性を好きになること、体は男性なのに心は女性であることが理解できない子もいる。性の多様性を利用した犯罪もあるため、子どもによっては、LGBTQ+について批判的な考えをもつことがあることも視野にいれておかなければならない。その子の考えを批判するのではなく、認めた上で「プライドパレード」などの活動をしている人もいることを知ることが大切である。道徳の教材として扱ったが、答えがない教材であるため、子どもによって考え方が偏ったり、浅かったりした。批判的な考えの扱い方も吟味していかなければならないと思った。

５．おわりに

教科書は改訂されるまでに時間がかかり、時事的な内容が遅れていることがある。今の社会に合わせた学習をするのに新聞は適している。今回のLGBTQ+もそうだが、世の中の出来事を知ること、その出来事について自分の考えをもつことはとても大切なことである。新聞をつかった学習は継続していきたいと思った。

２０２３年度　NIE 実践報告

新聞を活用した分かる･できる･楽しい学習の展開

札幌市立明園小学校　教諭　檜　克博

１．はじめに

本校は、札幌市東区に位置する中規模の学校である。今年度は「たくましい子の育成」に重点を置き、あたたかな人間関係を基盤とした教育活動を通して、知・徳・体の調和のとれた力の育成に向けた教育活動を行っている。そのために、「分かる」「できる」を目指す授業づくりの向上に全教職員で取組を進めている。

以上の教育活動を推し進める手段として、新聞活用の有効性を探った。本校は NIE 実践の継続校２年目である。昨年から継続して、次の２点を重点に教育活動を行った。１つ目は新聞に親しみながら子どもたちが主体的に学ぶ姿を目指すこと。２つ目は、新聞を活用することで、必要感をもって学び合う姿を醸成することである。

以上の２点を通して、子どもたちにとって、新聞活用が「分かる・できる・楽しい」学習の展開に寄与する学びになっているかを検証していく。

２.児童（生徒）の様子

本校の児童は素直で明朗な子が多く、のびのびと学校生活を送っており、仲間と協力し、集団行動やきまりを遵守する姿勢もみられる。一方で、子ども自身が「意見を自分と比べて聞く」「詳しく話す」ことが身に付いた実感をもてるようにしていくことが課題になっている。（明園小学校ホームページ　令和５年度「学ぶ力」育成プログラム参照）

そこで、授業に新聞を活用することが、課題を解決する一助になると考えた。本学級の児童は新聞を読む機会がある子は２割と少なく、新聞に初めて触れる子も多い。国語の学習で新聞の特徴や読み方を学習しているが、実際には新聞を継続的に読んだことがない子が多く、親しむ機会が必要であった。

新聞を授業に活用することで、学びに対して関心が広がる姿や意欲的に学び合う姿を期待している。

３．実践の内容

昨年の実践から記事を扱う際に配慮すべきこととして、以下の２点が実践を通して確認することができた。

・発達段階に則した記事活用の在り方
・学ぶ必然性が伴う記事活用の在り方

今年度も上記の２点を大切にしつつ、本校児童の課題である部分（意見を比べて聞く・詳しく話す）の改善に向けて以下の取組を重視していきたい。

・受信と発信の双方向のやり取りがある記事活用の在り方

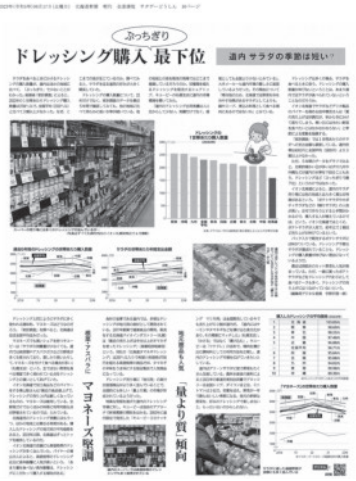
実践内容は以下の３点である。

実践１　考えの形成を目的とした、家庭学習での新聞活用

学年で毎週金曜日にタブレット型パソコンを持ち帰り、1 週間の振り返りや家庭学習などを行っている。その際に、子どもたちが興味をもちそうな新聞記事をデジタルで掲

示し、感想をアンケートアプリに書き込むようにしている。

例えば、「ドレッシング購入　最下位」という内容である。意外性と子どもたちの生活にも接点があり、率直な感想が見えた。


ぶっちぎり
ドレッシング購入 最下位
道内 サラダの季節は短い？
マヨネーズ堅調
「量より質」傾向

北海道新聞
2023 年 6 月 17 日

＜子どもたちの感想＞
- 私は結構ドレッシングを買っていたから、最下位はすごくびっくりしました。
- 母に聞いたところ、サラダにかけるのはドレッシングの方が多いので、他の家ではマヨネーズの方が多いのかなぁと思った。
- 圧倒的に少ないことを初めて知りました。この新聞を読んで、知らないことが沢山あることが分かったので、他のことも知りたいと思いました。
- 北海道では売れない分、廃棄してしまうということだから、とても食品ロスに関係していると思いました。

上記から分かることは、以下のような様々な学びが生まれ、かつその内容は幅広いということである。

- 新しいことを知る
- 実生活との比較
- 簡単な調査（保護者に聞くなど）
- 今後の展望
- 様々な学習との関連した思考

調査後に共有することで、どのような観点で記事を読むのかを理解し、友達と交流する際の見方や考え方を広げる面白さを知ってもらうことができた。このようなことを無理なく積み重ねていった。

実践２　受信と発信を目的とした新聞活用

国語「新聞を読もう」の学習では、実際の新聞紙を使い様々な記事を読んでもらった。紙面を読んでもらった意図は次の５点を理解するためである。

- 新聞には何が書いてあるか内容の大体を把握すること。
- 興味のもった記事を選び取ること。
- 話題によって紙面の大きさが変わるということ。
- 見出しに注目して読み、新聞記事にはどんな内容があるのかを知ること。
- 知りもしないし考えもしない偶然の出会いがあるということ。

[redacted]
「大谷７勝＆２７、２８号」
大谷選手は、本当にすごいと思いました。
７勝をできるチームは、あまりないと思ったからです。
大谷７勝＆27、28号
10K 2発 (30年ぶり
北海道新聞２０２３年６月２７日.jpg
クラスのコメント６件
[redacted] 2023/07/06
たまにテレビで見るけれど、すごく活躍していて本当にすごいと思いました。
[redacted] 07/06
30号ホームラン すごいですね
[redacted] 07/07
これからも活躍してほしいですね。
[redacted] 07/07
さすが大谷選手ですね。これからも頑張って欲しいです。
[redacted] 07/08
頑張って欲しいですね。
[redacted] 07/09
さすがですね。2030年には大谷のホームランボールの価値無くなりそうですね。(笑)
これからもこの調子で頑張って欲しいですね。もしかしたら、未来では大谷選手が100号目のホームランを打っているかもしれないです。(笑)
[redacted] クラスのコメントを追加...

子どもたちが使った
Google クラスルーム

北海道新聞
2023 年 6 月 27 日

実際の紙面を読むと、読みたい記事の比較と選択が常になされる。デジタルだと上記の５点が難しいので、今回は学習のねらいに沿って、紙面を利用した。

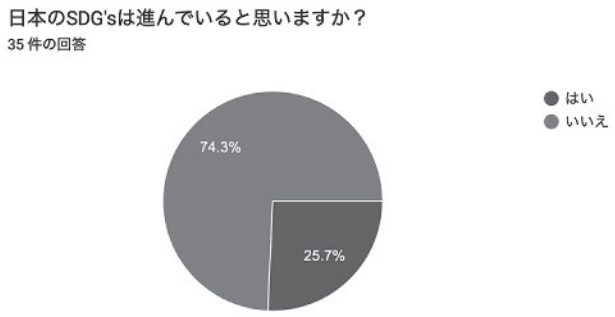
子どもたちは紙面を読んで、感想と共に紙面の写真をGoogleクラスルームに投稿した。投稿された中で、興味をもった新聞記事を選び、コメントを書き込んだ。デジタルの回し読み新聞のようなものである。

この学習では、子どもたちが選んだのは一つの記事であるが、友達の選んだ記事を読むことで、多読につながり、様々な種類の記事に触れる機会となった。互いの発見や反応を楽しんで交流する姿が見られ、受信と発信のやり取りを経験する良い場となった。特にICTの活用によって、いつでもコメントの追加が可能なことと、他の記事も閲覧できたことで、多様な交流を生むことができた。

実践３　立場を決め、根拠とする新聞活用

国語「あなたは、どう考える」の学習では、自分の立場を明らかにする学習活動を行なった。子どもたちは総合的な学習の時間でSDGsのことを学んでいたので、SDGsに関わりのある内容で、自分がどのように考えるかを問う授業を行なった。

まず初めに、「日本のSDGsの取組は進んでいるか」子どもたちに問うてみた。



この時点ではわずか４分の１の子どもたちしか進んでいると考えていなかった。ここではあくまで印象であり、総合的な学習の時間で、日本の取組の課題を学んでいることに引っ張られた様子も見られた。

次に、道内でもEVの普及が広がりつつある事例を以下の記事を使って紹介した。

2023年(令和5年)09月02日(土曜日)　北海道新聞　朝刊　全道版　経済　9ページ

軽ＥＶ 道内普及の兆し

保有台数600台 前年の４倍

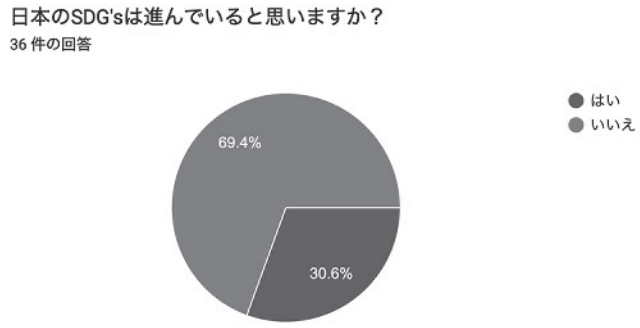
街乗り需要強く／補助金も追い風

北海道新聞

2023年９月２日

(c) 北海道新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。

この記事を読んで話し合った後、先程と同様に日本のSDGsは進んでいるかについて再度アンケートをとった。



記事を読んだ後も微増に留まり、あまり変化はなかった。教師が範読をして内容を認識したが、判断を変えうるには至らなかったこ

とが分かる。

最後に、充電装置拡充事業の記事を子どもたちに提示した。

北海道新聞
2023/10/31 朝刊

賃貸住宅にＥＶ充電器

仲介大手ビッグが設置へ

30年までに5千基目標

賃貸仲介道内大手のビッグ（札幌）は、自社で管理する賃貸住宅への電気自動車（EV）向け充電スタンドの設置を始める。東京のスタートアップ企業と提携し、2030年までに5千基の設置を目指す。物件オーナーが設置などにかかるコストを負担しない仕組みで、普及が遅れている道内のEVインフラを整備するとともに、競争が激しい賃貸住宅市場での物件の差異化を図る。

物件の差異化図る

ビッグは10月、EV充電インフラ事業を手がけるテラモーターズ（東京）と業務提携契約を締結した。ビッグは管理物件の所有者らにテラ社の充電器の設置サービスを紹介。テラ社は初期費用や維持管理費を負担し、賃貸住宅の駐車場に充電器を無料で設置する。テラ社はEVを充電した入居者から充電料金を専用アプリ経由で受け取り、電気代など経費の一部を物件所有者に払い戻す。

ビッグは道内で賃貸住宅約2万3千戸を管理。自社所有する札幌市内の賃貸マンション2棟に、近く充電器2基を設置するのを皮切りに、今後7年で設置台数を5千基まで拡大する目標を掲げる。住宅売買価格の上昇に伴い、足元では賃貸住宅の着工が増加傾向となっており、同社はEV充電器設置で賃貸住宅の付加価値を高め、入居者募集にもつなげたい考えだ。

北海道運輸局によると、道内のEV保有台数は3月現在で2671台。道内の全車両保有台数に占める割合は0・1%で、全国の0・3%を下回る。充電器の設置が進んでいないことも普及が進まない要因とみられている。

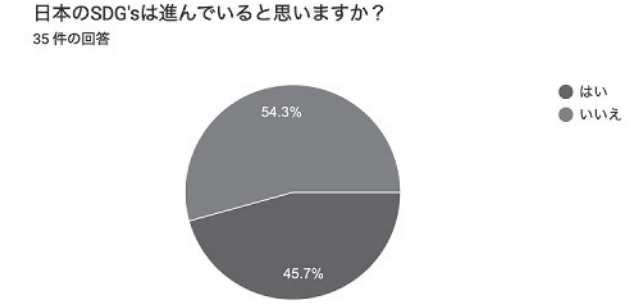
政府は2035年までにすべての新車販売をハイブリッド車を含む電動車にする目標を掲げており、充電器などインフラ整備が急務となっている。ビッグの担当者は「賃貸住宅のオーナーが充電器を設置しやすいサービスを提供することで、地域の脱炭素化に貢献できれば」と話している。（高橋拓二）

ビッグとテラモーターズが賃貸住宅に設置する充電器（テラモーターズ提供）

北海道新聞　2023 年 10 月 31 日

読んだ後に電動化を推進する資料２つと主要国一人当たりの年間電力消費量や国別電力消費量の割合のグラフ（北海道新聞 2023 年 2 月 7 日）と対比させながら、日本は SDGs が進んでいるのかについて議論をさせた。以下、児童の反応である。

＜日本は SDGs が進んでいる＞
・車だけではなく充電器も増えている。
・風力発電も 20 年間で急激に増えている。
・2023 年から EV の所有者が増えている。
＜日本は SDGs が進んでいない＞
・一人当たりの電力消費量が２番目に多い。
・国別では４番目に多い。たくさん消費。
・風力発電量は世界 19 位で低すぎる。



議論後に３回目のアンケートをとった。そうすると、約半分の子が「進んでいる」と考えた。２回目と違うのは、議論を経てからアンケートを取ったということである。賛否両論を踏まえ、考え直した子が少なからずいたということになる。

４．成果と課題

（１）成果

本校の児童の課題を解決するために、受信と発信の双方向のやり取りがある授業を目指し、記事活用の在り方を探ることができた。

① ICT の活用により、手軽に記事の保存や考えの記録をすることができた。
② 読後の交流が、思考の深まりになった。
③ 対立する記事を扱うことで、迷いや揺れを生むことができた。

上記の３点のように、子どもの考えを「見える化」し「共有化」することで、対話への「意欲化」を図ることができた。自分なりの答えになる根拠を、実生活との接点から記事を通して見出すことができた。

（２）課題

考えの形成をすること、受信と発信をすること、根拠となる内容を見付け立場を決めること。これらは、子どもたちの思考力や表現力を身に付ける上で、欠かせないと考え、教育活動を行った。新聞活用の意図を明確にして行わなければ、ただ記事の内容を知ることで終わってしまう。今後どのような活用の仕方が可能なのか、考えていく必要がある。

５．おわりに

昨年に続き、本校の実践を新聞に掲載していただいた。子どもたちが真剣に学ぶ様子を丁寧に取材していただいた北海道新聞社麻植記者に重ねてお礼を申し上げたい。

２０２３年度　ＮＩＥ実践報告

少しずつ　新聞を身近な存在へ

旭川市立永山小学校　教　諭　牧野　広太
学校司書　中島　　環

１．はじめに

本校は今年度で開校１２６年となる，歴史ある学校である。

前年度よりＮＩＥ実践校に指定され，子ども達が新聞を身近なものとして感じられるような取組を進めてはきたものの，実際には学級内での活用がほとんどのものとなっている。

そんな中でも，できる範囲で学年内の取組として「まわしよみ新聞」をつくってみたり，他学年から「新聞ありますか？」と聞かれたりする機会が増えたことを考えると，少しは「学校には新聞がある」という状態が一般化されてきたような気はする。

できそうなことを，こつこつと継続する。そんな感覚で，２年目を過ごしてきた。

２.児童の様子

本校の児童数は５６０名（Ｒ６．１．１現在）であり，市内で２番目の規模だが，年々減少してきている。

昨年度，全児童に聞いた結果では，新聞を購読している家庭は，およそ３０％だった。今年度もそう大きく変わる数字ではないと思うが，決して多い数字ではないだろう。担当する５年生の学級でも，購読率は２８％であった。また，市内のほぼ全家庭と近郊の町（約１７万部）には，週２回フリーペーパーがポスティングされており，これと一般的な新聞の違いを理解していない児童も多い。

本校には，所謂「フリースペース」と言われる場所が存在せず，教室と廊下と体育館のみといった校舎である。今後，児童数の減少に伴い，そのようなスペースが少しでも確保できるとよいのだが，その見通しはない。本来であれば，そのような場所に新聞コーナーを設置できれば，もう少し身近なものとして新聞を手に取ることもできるのかもしれない。そのため，今年度も図書室の一角を貸していただき，簡素なＮＩＥコーナーを設けている。学校司書が非常に協力的で，いろいろとアイディアを出し，常に新聞に触れられるよう工夫を凝らした場を提供していただいていることが本当にありがたい。

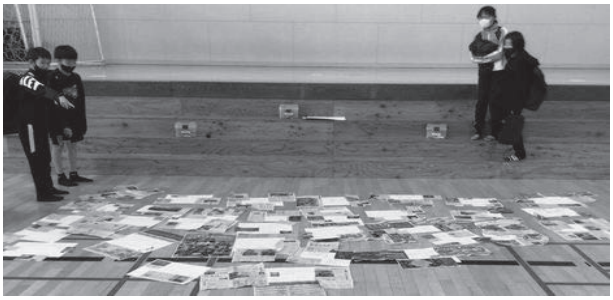
基本的には，活字に弱く，文字の量に比例して興味も薄れていく傾向があるのは，本校に限らず多くの学校で見られる光景ではないだろうか。文字や数字よりもイラストや写真といった直感的に判断できる情報ばかりに目が行き，そこで終わってしまうことがもったいない。クリックしなくてもすぐそこに詳細な情報が待っている新聞のよさを，より多くの子が感じられるためには，とにかく触れることが何よりも大切だと思う。

メディアリテラシーを高めるためにも，特に高学年には新聞が必須だと，年々強く感じるようになってきた。

３．実践の内容

①　まわしよみ新聞

今年度は，新年度開始２週目に，体育館を舞台に学年全体で取り組むところからスタートしてみた。所狭しと一度に１００人以上が新聞を広げ，紙面をコミュニケーションツールとして盛り上がる様子は，なかなかの迫力があった。本来の「まわしよみ新聞」の目的に沿った活動だったのではないかと思う。普段手にすることのない新聞を，初めてじっくりと読んだ子も非常に多かった。



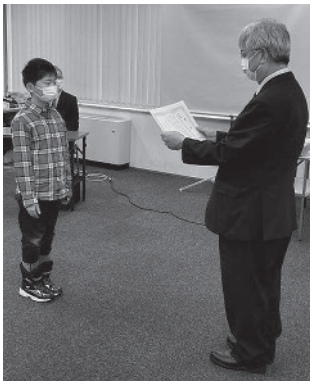
その後は，自分の学級において，よくある１分間スピーチと同じような感覚で，毎日帰りの会で班毎（３～４名）に発表している。継続性を第一に考え，無理なく楽しみながらやることが大切だと考えている。

取組の意図は次のようなものである。

〈１〉広く社会に目を向けてほしい。
〈２〉タイムリーな活字に触れてほしい。
〈３〉情報を選び詳しく読む力を付けてほしい。
〈４〉文章を要約する力を付けてほしい。
〈５〉集団の前で声を出す経験を積んでほしい。
〈６〉集中して話を聞く力を付けてほしい。

過去何年にもわたり同じように取り組んでいるが，今年度はこの活動を通して感じられる成長が特に大きく，担任と子ども達の間で上記の意図がすべて共有されているように思う。そのためか，発表する側も聞く側も楽しく，そして日常の授業と結びつくことで，確かな学びにも繋がっていると感じることが多い。

学級での取組が，「第１３回道北小中学生新聞スクラップコンクール」において【学級賞】という形で表彰されました。



今後，更なるレベルアップに向けた進化の可能性を感じているので，次年度に向け模索してみたい。

② 学校図書館での取組

新聞は本校の児童にとって難易度が高い。理由としては，文章がぎっしりつまっていること，難しい漢字がたくさん出てくることなどが考えられる。特に読書が好きではない子どもにとっては，文字数に抵抗を感じるようだ。新聞を広げておくと「字がいっぱいで読む気がしない」と言う子もいる。また，新聞を購読している家庭も少なくなっており（図工などで利用したくても，家庭からは集められないとも聞く），育つ環境に新聞がなければ，関心をもてないのは仕方がないのかもしれない。

そこで，まずは新聞を読んでもらう（見てもらう）きっかけをつくりたいと考えた。

視覚的にわかりやすい新聞広告から，話題をとりあげてみた。ＡＣの広告は世相を反映したテーマで，思考を促す問いかけが短い文で書かれている。それをさらにおもしろそうだと感じてもらうため，簡単な質問形式に置き換え，自分の回答を選び，シールを貼るようにしてみた。すると，新聞の前に立ち止まる時間が長くなり，自分が考えたことを選び確認することができたようだった。子どもたちが貼ったシールの位置は，広告が意図する結果になっていた。

次に，男女の役割が家庭でも社会でも固定化していることに気付いてほしいという願いから，北海道新聞の記事も利用してみた。『料理ができないとダメですか』という中学２年生男子の質問へ回答した記事である。男の子も料理ができた方がよいと考える母親と，男は料理なんかできなくても困らないから，大きなことをしろという父親の考えに対し，「料理は面倒だが，できるようにならないとだめか？」という質問への回答が記事となっている。男女平等に触れ，具体的に分かりやすく回答されていたので，高学年には十分読める内容であった。数人の子どもは，シールを貼り終えた後，周囲の新聞記事などにも目を通していた。単純だが，シールを用いただけでも効果が得られたと感じている。

新聞は社会への関心を高め，自分事として考えることに繋がると思っている。スマホを好む子どもたちは，好きなもの，好きなこと以外の情報になかなか関心をもてない。スマホは，使用とともにその人に合わせて情報が選ばれ集まってくる。いろいろなジャンルや物事を検索しなければ，偏った情報にとらわれてしまう懸念がある。

ペーパーレスの時代と言われるが，新聞＝ニュースペーパーはまだまだ身近なものであってほしい。そのためには，ただ読むことを勧めるのではなく，新聞と子どもを繋げる手立てが必要だと考えている。

また，新聞を通して地域の話題にも目を向けさせたい。『北の縄文世界と国宝』が北海道博物館で開催され，夏休み中に足を運んだ子もいた。新聞でも数回にわたりシリーズで紹介されていたので，それを切り抜いて展示してみたところ，写真や地図は眺めていても，記事を読む子は少なかった。やはり，記事の切り抜きだけでは，興味関心をもってもらうのは難しいと感じた。

文章に慣れている子どもは，吹き出しに書かれている文字や，短いコメントなどは読んでくれる。すらすら文章が読めない子どもは，数行の文章でも読もうとはしない。文章が苦手な子どもは，書かれている言葉の意味が分からないことも多く，内容を理解できない。新聞記事は難しくて読む気にならないと言われてしまうのも納得できる。難しい漢字や言葉を拾い出してみることで，語彙が増え，表現力の幅も広がるという可能性を考え，次回の取組に希望をもって挑戦したいと考えている。

４．成果と課題

実践校２年目となり，活用方法は様々であるものの，学校にはいつでも新聞があるという状況は浸透されてきたように感じる。しかし，学校図書館での取組で触れたように，本校の児童が学びや成長，楽しさの手段として新聞を身近な存在と認識できるまでには，いくつものステップが必要である。

学校には新聞があるという感覚が校内全体に広がってきたことが【成果】であり，その感覚を体験的な成長や喜びに繋げていくための引き出しを増やすことが【課題】であると捉え，次年度の取組を検討していきたい。

５．おわりに

記事にはこのようにあるが，本校ではＮＩＥ実践校としてのプレゼントがなければ，新聞購読はゼロである。

次年度で実践校としての役割は終える予定であるが，必要だと感じた時に，すっと新聞を手に取ることができる環境が整うことをめざし続けつつ，日々楽しんでいきたい。

新聞購読 平均2紙未満

図書館調査で小中校 国目標達せず

全国学校図書館協議会は全国の小中高校を対象にした「学校図書館調査」の結果を公表した。政府が学校図書館への新聞の複数紙配備を進めるにもかかわらず、1紙以上購読する学校の割合は小学校64・4％、中学校69・0％、高校97・2％にとどまった。

調査は今年6月に実施し、591校から回答を得た。

政府は、公立学校の図書館に置く新聞の充実に向け、2022年度からの第6次「学校図書館図書整備等5か年計画」で「児童生徒が主権者として必要な資質・能力を身につける」ため複数紙の配備が必要と明記。小学校2紙、中学校3紙、高校5紙の配備を目標に掲げ、自治体に対し、年に計38億円を地方交付税交付金で財政措置している。

しかし、学校図書館の平均購読紙数は小学校1・1紙、中学校1・5紙、高校3・6紙と、いずれも計画の目標を下回った。同協議会の磯部延之調査部長は「複数紙を比較したり、読み返し理解したりすることは、社会状況を把握する力を育てる」として、複数紙配備の意義を強調する。

2023.12.12 読売新聞

２０２３年度　NIE 実践報告

新聞を通してつくるつながり

～自分の思いをもち、主体的に課題に取り組むための新聞の活用～

日高町立厚賀小学校　教諭　大平　真紀

１．はじめに

本校は、全校児童４９名の小規模校である。複式学級が２学級に増え、児童の減少は進んでいるが、その分学年に関わらず広く交流している様子が伺える。校舎は海や漁港に近い立地にあり、周囲には牧場も多い土地柄で軽種馬産業も盛んな地域である。

昨年度は、総合的な学習の時間のカリキュラム改善の一環として「探究的な学び」の場をつくることを課題とする自校研修の取り組みと連携して、情報活用能力や自分の考えを明確にする力、主体的に課題に向き合う態度の育成に、新聞を使った取り組みが役立つのではないかと考え、ＮＩＥ教育に向き合ってきた。実践指定校２年目の本年は、１年目の課題でもあった、環境整備や国語の授業実践を全校的な取り組みとすることを目標に取り組んできた。

２.児童（生徒）の様子

本校は、町内の図書館からバスで本を運び、学校で借りる「移動図書」を楽しみにしている児童も多く、読書に意欲的に取り組んでいる様子も伺える。一方、児童や対応できる教員数の少なさもあって図書室の開館日が限られていることや図書室の冊数自体が少ないこともあり、興味のない児童においては全く読書をしないことも課題であった。ＮＩＥの取り組みとして、ただ新聞を見えるところに置くだけでない、興味を引くことのできる工夫や取り組みが必要であった。

３．実践の内容

児童が主体的に表現活動に取り組める環境をつくるには、

・目的意識をもてる活動の工夫。

・自分の思いを表現する取り組みに肯定的な感情をもてるような工夫。

の２つの視点が必要であると考え、「つながり」を大切に取り組みを進めてきた。対象を「学級の友達」→「学校全体」→「地域」→「社会」と広げながら、自分の思いを伝える意味を認識し、伝え合う喜びを実感できることが主体的な取り組みにつながることを期待した。

①新聞に親しめる環境整備

昨年度から、校内の人通りの多い場所に新聞コーナー、新聞収納コーナーを設置し、日常的に新聞に触れられる環境を整備した。

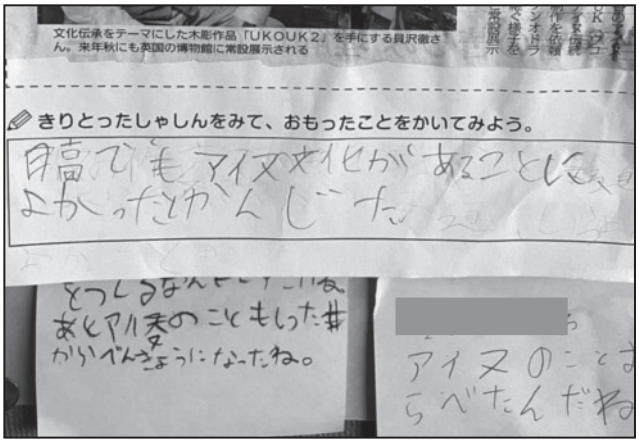
地元の情報が書かれた記事や興味をもってほしい記事を赤く線で囲み、児童が注目しやすいように工夫した。

また、掲示を終えた新聞は、地方紙（地域のことが分かる新聞）、全国紙、小学生新聞に分けて新聞コーナーの近くに収納し、活用しやすくした。

②朝学習や国語科での新聞の活用

（児童⇔学級の児童とのつながり）

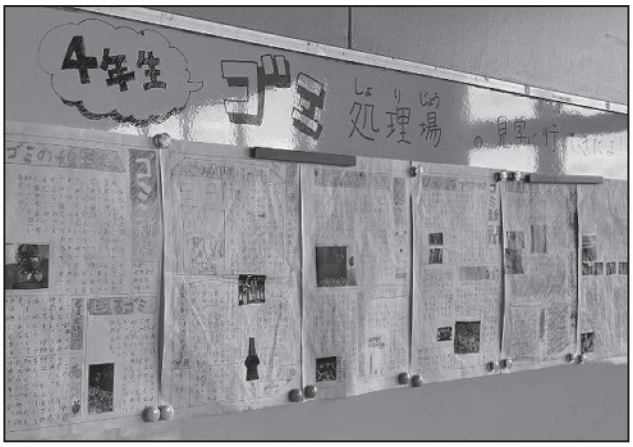
２年生以上の学級で、新聞を活用した学習に取り組んだ。２、３年生は、新聞から気になる写真を切り抜いて、自分の感想を添えた。作成したプリントは、友達に見せること、友達は紹介された記事や感想にコメントをすることを活動のゴールとした。自分の気になることについて理由をつけて説明したり、相手に伝わるような表現を考えたりすることにつながり、感想を共有することで自分との感じ方の違いにも着目することができた。



↑初めて取り組んだ３年生のプリント

③新聞掲示コーナーの設置

（児童⇔学校全体とのつながり）



作成した新聞を全校の児童で見合えるように新聞掲示コーナーを設置し、下学年が次学年へ見通しをもったり、児童が学習内容を伝えたりする場とした。

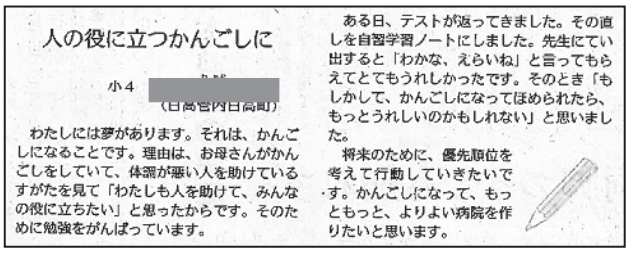
④いっしょに読もう！新聞コンクール ぶんぶん time へ挑戦

（児童⇔社会とのつながり）

３、４年生は、１年間の学習の集大成として、北海道新聞の『ぶんぶん time』に意見文を応募している。説明分の書き方をもとに、順序立て、具体例を踏まえて書くことができるようになった。文章を書くことに苦手意識をもっていた児童も、自分達の考えが学校外の人々に認められる経験により、「伝えたい」という気持ちが大きくなり、家庭学習で意見文を書いてくる児童も出てきた。

４年生は、ＮＩＥの『いっしょに読もう！新聞コンクール』にも挑戦した。自分の考えを整理して表現することはもちろん、保護者や友達の考えと自分の考えを比較したり、統合したりしながら整理していく過程に難しさを感じながらも、活動に取り組んでいた。保護者の協力もあって、取り組み後も家庭でニュースや新聞に興味をもってまとめたり、家族で話し合ったりする児童もいた。

学級では取り組み以降、ニュース係や新聞係など、情報を集めて発信する係を作りたいという要望が表れ、発表者も聞く側も係活動の時間を楽しみにしていた。


人の役に立つかんごしに

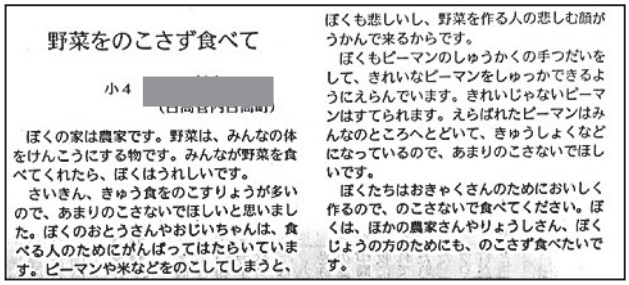
小４ [redacted]（日高管内日高町）

わたしには夢があります。それは、かんごしになることです。理由は、お母さんがかんごしをしていて、体調が悪い人を助けているすがたを見て「わたしも人を助けて、みんなの役に立ちたい」と思ったからです。そのために勉強をがんばっています。

ある日、テストが返ってきました。その直しを自習学習ノートにしました。先生にてい出すると「わかな、えらいね」と言ってもらえてとてもうれしかったです。そのとき「もしかして、かんごしになってほめられたら、もっとうれしいのかもしれない」と思いました。

将来のために、優先順位を考えて行動していきたいです。かんごしになって、もっともっと、よりよい病院を作りたいと思います。

北海道新聞 ぶんぶん time 2023 年 8 月 23 日


野菜をのこさず食べて

小４ [redacted]（日高管内日高町）

ぼくの家は農家です。野菜は、みんなの体をけんこうにする物です。みんなが野菜を食べてくれたら、ぼくはうれしいです。

さいきん、きゅう食をのこすりょうが多いので、あまりのこさないでほしいと思いました。ぼくのおとうさんやおじいちゃんは、食べる人のためにがんばってはたらいています。ピーマンや米などをのこしてしまうと、ぼくも悲しいし、野菜を作る人の悲しむ顔がうかんで来るからです。

ぼくもピーマンのしゅうかくの手つだいをして、きれいなピーマンをしゅっかできるようにえらんでいます。きれいじゃないピーマンはすてられます。えらばれたピーマンはみんなのところへとどいて、きゅうしょくなどになっているので、あまりのこさないでほしいです。

ぼくたちはおきゃくさんのためにおいしく作るので、のこさないで食べてください。ぼくは、ほかの農家さんやりょうしさん、ぼくじょうの方のためにも、のこさず食べたいです。

北海道新聞 ぶんぶん time 2023 年 8 月 30 日

⑤総合的な学習の時間での情報活用

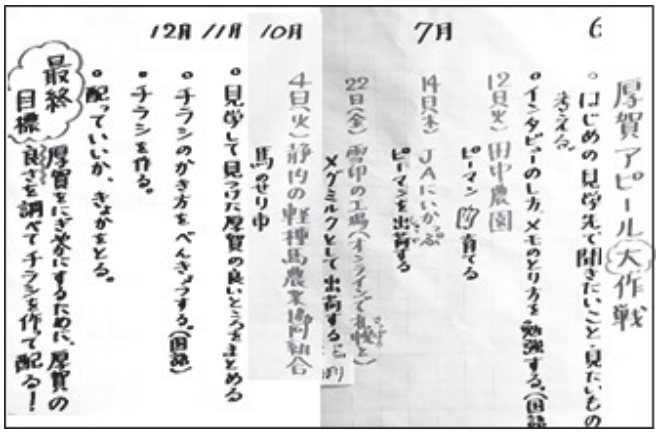
（児童⇔地域とのつながり）

３年生の総合的な学習の時間の中で、地域の良さを調べ、アピールするチラシを作成している。作成したチラシは、地元の新聞販売所を通して地域の家庭に配られる。子どもたちは地域の人々に厚賀の良さを再認識してもらうこと、さらにそれを周りに伝えてもらうことを目標に活動に取り組んでいる。

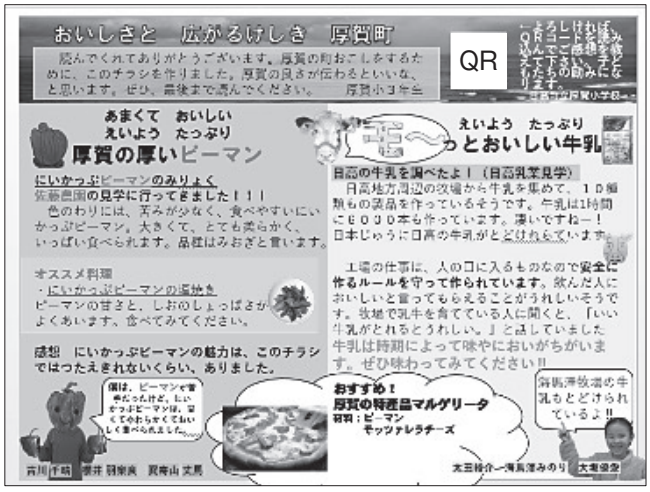
チラシを作成する上で、新聞を活用して学んだ情報の伝え方を生かして、キャッチフレーズを工夫したり、写真やイラストの配置を考えたりしながら取り組むことができた。

チラシにはＱＲコードを貼り付けており、地域の方々から子どもたちへ励ましのコメントをもらうことができるようにしている。昨年度もたくさんの地域の方にご協力いただくことができた。

また、昨年いただいたコメントから、今年度のチラシで改善したいことや続けて載せた方が良い情報を精選して作成している。



↑子どもたちと作成した総合の年間計画



↑作成途中の地域をアピールするチラシ

○3年生の総合的な学習の時間の中で、新聞を活用した活動の例	
めあて	児童の活動
どんな情報を集めたらよいか考えよう。	国語科と関連させて、新聞記事を参考に読み手に正確に分かりやすく伝えるためには、どんな情報(5W1H等)が必要か考える。
取材の仕方を知ろう。	どのようにインタビューをしたらよいか、どんな写真が必要か等について考える。
集めた情報から、必要な情報を選ぼう。	見学して分かったことや集めた情報と共に、昨年度のチラシと地域の方のコメントも見直し、どんな情報があると良いか考える。
キャッチフレーズの作り方を考えよう。	商品のパッケージや新聞広告に書かれているキャッチフレーズを参考に、地域の良さを伝えられる言葉を考える。

昨年度、同様の活動に取り組んだ４年生の中には、情報を集め、精選し、配置を考える経験を生かし、北海道新聞の『小学生新聞グランプリ』に挑戦する児童もいた。過去の新聞から、改善点を見つけたり、受賞作品を参考によりよい新聞を分析したりしていた。

近所の方に頼まれて代理で感想をお伝えします。「大自然かけまわれるよ」を読んで小学 3 年生が作った作品とはとても思えませんでした。本当に素晴らしいものだと思いました。頑張ったんだろうとつくづく思いました。子供達と先生に感謝します。これからの皆さんの活躍が今からとても楽しみです。本当にありがとう。とのことでした。

他にも清畠の酪農関係の方から、チラシみましたよ。良くできていて感心しました。子供達頑張っているので私も頑張ろうという気になりました。というメッセージをいただきました。

地元の人も厚賀の良さを再確認できて皆さんの頑張りが伝わったのではないでしょうか。自分の住んでいるところのここがすごいって言えるのは素晴らしいことだと思います。きっと皆さん素敵な大人になって厚賀をより盛り上げてくれるのではないでしょうか。私も影ながら応援したいと思います。制作がんばりましたね！お疲れさまでした。

↑昨年度にいただいた地域の方からの励ましのコメントの一例

児童にとって学校外の人に認められる経験は非常に大きな影響を与えたように思う。活動の目的意識が明確になり、自ら学びたい内容を定めて活動に取り組もうとする意欲をもち、チラシを作成することができた。また、発信した情報を受け取った方からもコメントをいただけたことは、児童の自己有用感や自信といった肯定的な感情へとつながっていた。

内容や文章表現としては拙い部分も多かったが、人口の少ない地域だからこそできる地域の方々のあたたかさのおかげで実行することのできた活動であった。本年度は、チラシ作成に関わる学年が増える予定である。

４．成果と課題

（１）成果

①校内体制の変化

実践指定校１年目は、個々の教員がそれぞれの考えでＮＩＥの実践に携わっていた。昨年度の課題として、「学校として」取り組むために、本年度は校務分掌の中にＮＩＥの担当が盛り込まれることになり、研修部が主体となって情報を発信することができた。

②児童の変化

昨年度は一つの学年、本年度は二つの学年へと学校外へ発信する活動に取り組む学年を増やした。児童同士でコメントし合う活動に取り組む中で、もともとあった文章で表現することへの抵抗感が薄れ、学校外への発信によって、自身の表現に自信をもつことのできた児童が多かったように思う。

（２）課題

自分の考えをもち、表現することに主体的に取り組めているかという点においては、活動がすぐに結果に結びつくものでもない。簡単な取り組みを６年間を通して積み上げていく必要があるが、全校的な取り組みとしていくには、活動内容の精選や時間と人員の確保、取り組みやすさの工夫等の点で、改善していかなければならない。

５．おわりに

児童数が減少し、学級内での交流が限られてくる中で、子どもたちの「知りたい」「伝えたい」という思いを引き出せる範囲が狭まっているように感じていた。学校外の地域の人々との直接的、間接的関わりによる子どもへの影響を、この取り組みを通して肌で感じることができた。この学校だからこそできる、学級、学校、地域、社会とのつながりを見つけて活動が続けられることを期待している。

２０２３年度　ＮＩＥ実践報告

新聞を読み、要約する活動を通して、子どもたちの書く力を高める。

帯広市立愛国小学校　教諭　平岡　あゆみ、大石　秀雄

1.　はじめに

本校は、明治 37 年に開校し、今年で開校１２０周年を迎えた。かつて広尾線で「愛の国から幸福へ」のキャッチフレーズとともにブームを巻き起こした愛国駅がある農村地帯の小規模校で、全校児童数 25 名である。

近年、情報の中から重要な本質の部分を素早く掴み、まとめる、文章を要約する力が求められている。そこで、国語の授業だけではなく継続的な取組で、子ども達の要約の力を付けるために、朝学習で新聞を活用して子ども達の書く力を高めることができるように取り組むようにした。

以下に、本校の NIE 実践指定校２年目の実践内容を紹介する。

２．実践の内容

（１）新聞スクラップの取り組み　～１・２年生の実践～

①児童の実態

本校１・２年生児童は、１年生２名、２年生３名の合計５名の複式学級である。昨年、２年生は単式学級だったが、今年度は１年生が加わり、複式学級なので、何か困ったり解らないことがあったりしたら、先輩として後輩に優しく教えようとしている。

新聞スクラップに１学期から取り組みたかったが、複式学級ということもあり、１ 年生は、新聞スクラップに取り組むことにした。

②自分で興味のある記事を選ぶ。

まず、小学生新聞（子ども新聞）の中から、自分の興味のある記事を選んで読むことにした。１・２年生の児童が興味をもつのは、一番目につく写真であった。

朝日小学生新聞　２０２３年５月２２日

③記事を読んで、大事なところに線を引く。

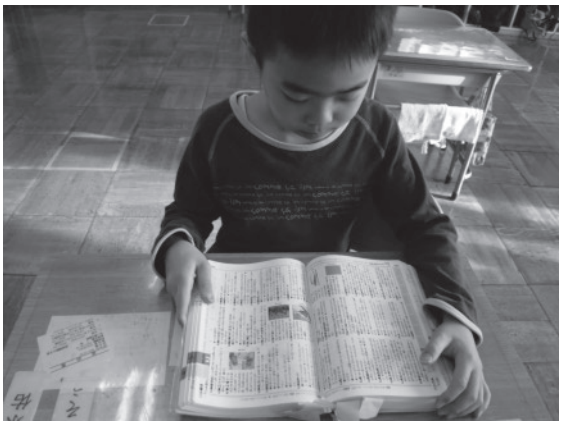
小学生新聞の良いところは、漢字に読み仮名がふってあることである。１・２年生でも、自分の力で読むことができた。

また、自分で大事だと思うところに、蛍光ペンでサイドラインを引くことができた。

慣れてくると、普通の新聞でも、読んでサイドラインを引くことができた。

④わからない言葉がでてきたときは、調べるチャンス！

新聞を読んでいくと、いくつも自分の知らない言葉が出てくる。知らない言葉が出てくる度に、友達や先生に聞いたり、辞書で調べたり、クロームブックで調べたりと、学びが広がっていった。



⑤記事を要約する。

自分の読んだ記事を、「いつ・どこで・だれと・だれが・どうした」と、まとめた。最初は、どこに書いてあるのだろうと探していたが、慣れてくると、低学年でもポイントを見つけて書いていた。

⑥自分の感想を書く。

記事を読んで、自分のわかったことや思ったことを書くようにした。児童は、記事から「日本犬は色々な種類がいるんだ。」「月に行けるようになるかもしれない。」など感想を書いていた。

⑦題名を書く。

自分の調べた記事の要約に、題名を付けた。

最初は、どう書いたらいいか迷っていたが、慣れてきたら要約の中から言葉を見つけて書くことができるようになった。

⑧「知らないことを知るって、楽しい！」

児童が感想を書くとき、「こんなことがわかったよ。」「新聞って、色々なことがわかるんだね。」「知らなかったことが、たくさんあったよ。」と、目を輝かせて話していた。

児童の興味が、最初は写真に向いていたが、記事を読んで、知識を得て、色々なことがわかる経験をすることで、どんどん面白くなっていき文章に興味が向いていった。新聞スクラップは、要約の力を付けるだけではなく、子ども達の世界の視野を広げるのにとても役立った。

（２）新聞を使った要約力の育成と新聞スクラップ～５・６年生の実践～

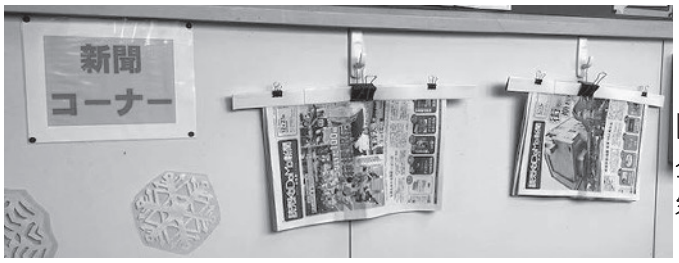
今年の高学年の新聞を使った研究は2つのアプローチで深めてきた。

１．新聞を使った要約力の育成

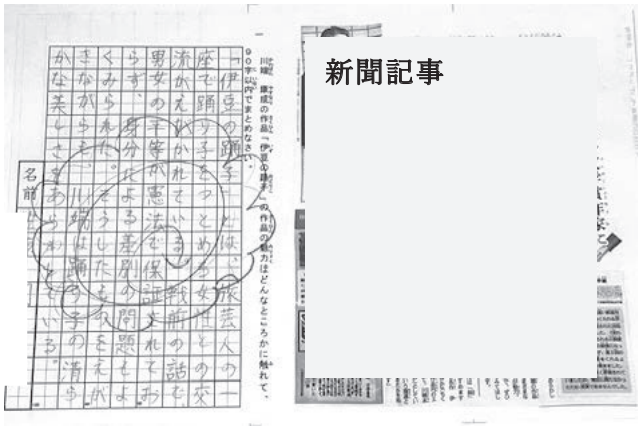
こちらの取組は昨年に続き、2 年目の取組である。担当する学年が新年度で変更があったが、第５学年は昨年に引き続き、担任をもつことができたので、児童の変容を紹介していこうと思う。

①要約する問題作成の基本

１、最近の新聞記事を活用する。
２、児童に目を向けてほしい、記事を使用する。
３、写真だけではなく、なるべく資料や表が入っているものを活用する。
４、要約文はだいたい 90 字程度でまとめさせる。
５、設問には、新聞記事からキーワードとなる記事が 2 か所程度からなるように設定する。
６、朝学習の 15 分間で終わらせる。



以上の点を踏まえた上で問題作成をしてきた。2 年目の第 5 学年は、慣れたもので、決められた字数内で要約する力はついてきた。しかし傾向として、問われている部分 1 か所を選ぶことが多かった。これは、2 か所から選ぶと、指定された 90 字以内の要約ができなかったことも考えられるが、児童の実態を踏まえると問われている内容を完全に理解できていなく、書けなかったというのが実態のように思える。



第 6 学年の児童は今年度初めてということもあり、最初は 90 字以内に要約してまとめることができず、字数を超えて要約してくることが多かったが、問われている内容をしっかり理解していたため、指定された字数内でおさめることができなかったようである。

以上のことから 2 学年を比べて見られたことは、設問の内容をしっかりと理解する力が要約力の差に表れたということである。

また 15 分間という限られた時間内で、設問の内容を理解し、該当する記事の場所を、全体を読み進めながら目星を付け、設問の内容に合わせて決められた字数内に要約するという作業だが、これには回数をこなしていくことで、スピードアップが見られた。

②まとめ

新聞を使った要約力の育成は、限られた時間内で指定された部分を見つけ出し、そこを聞かれている内容に沿って要約する力を育成する上で、有効であり活用しやすかった。また読み進める記事も、児童が興味をもたない内容に触れるいい機会でもあり、その後、関連するニュースを調べる様子も見られた。よって新聞を使った要約力の育成には大きな効果があったと感じている。

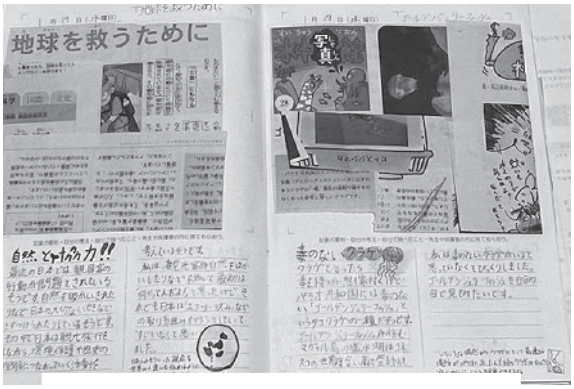
２．新聞スクラップの取組

今年は上述の「新聞を使った要約文」と「新聞スクラップ」の取組を半々ぐらいの比率で行ってきた。新聞スクラップは、学校の図書室で掲示が終わった新聞を活用している。

新聞スクラップの取組は

１、1 週間分の小学生新聞を用意する。
２、その中から児童は気になる記事の新聞を選ぶ。
３、関連記事を切り抜き、書かれている内容を読む
４、ノートに貼り、要約した文や感想を書く。

以上のように行ってきた。これを最初に行ったときに児童から出てきた言葉が「えー、新聞スクラップ。やだなぁ」だった。でも、朝学習の時間に要約文と同じようにやってきたので、児童にはやらなければいけないという気持ちで取り組んでいたと思う。そんな最初の頃の新聞スクラップを見ていくと、自分が興味ある記事が中心にスクラップされていた。また興味ある新聞が手に取れなかった時に、「ない」「やりたくない」と言っていたように思える。



北海道小学生新聞１０月２３日

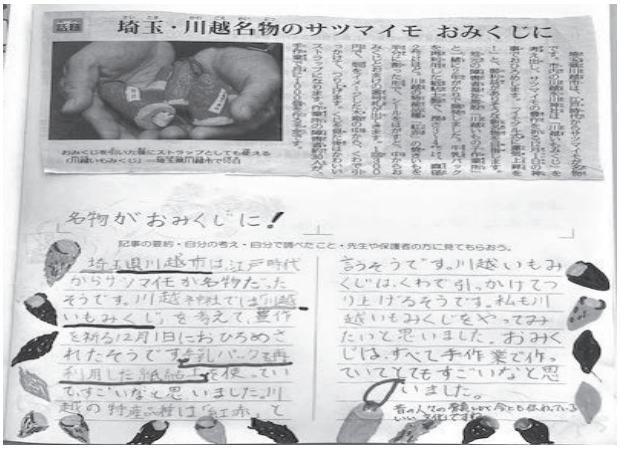
北海道新聞「まなぶん」６月１１日

北海道小学生新聞１０月２３日

しかし２学期ころぐらいから、新聞スクラップのやり方に慣れてくると、最近、テレビで話題や聞いたことのあるニュースをスクラップする児童が出てきた。これは知っている内容を読み深める意味でもよい効果が出てきたと感じていた。また 2 学期途中から、

・選んだ記事の「見出し」をつけること。
・効果的にノートに残すために、クーピーや色ペンを使用してもよい。

北海道小学生新聞



北海道小学生新聞１１月１８日

とすると、「新聞スクラップ、楽しい」「やりたい」「冬休み中もやってきていいか」という声が児童から出てきた。毎週水曜日の朝学習１回の取組では足りないという反応だった。児童に理由を聞くと、

・新聞スクラップをしているとおもしろいから。
・自分が知らない情報を知れたこと。
・書いたあとに絵を描いたり、まとめたりする作業が楽しい。

という理由からだった。児童の自主性を伸ばし取り組んでいくと、上記のような思いが育まれることがわかった。

以上が今年１年取り組んだ実績である。

２０２３年度　NIE 実践報告

新聞を活用したメディアリテラシーの育成

芦別市立上芦別小学校　教諭　中西　亜美、大林　幸子、寺川　三奈

１．はじめに

本校は，昭和 61 年に旧上芦別小学校と東芦別小学校が統合し，芦別市立上芦別小学校として開校した。全校児童数は 66 名で，校下を流れる空知川と国道 38 号線の間に位置し、自然豊かな地域にある学校である。

継続校として 3 年目の実践に取り組んできた。今年度 3 年生担任と言うことで新聞に親しむことから始めることとなった。家庭で新聞を購読していない児童が多く，自費で小学生新聞を購読し，活用することとした。

２．児童の様子

3 年生 14 名のうち，1 名は特別支援学級の児童であったため，13 名での取り組みを始めた。始めて新聞を手に取ったときは，小学生新聞でなかったこともあり，漢字が読めない，どこから読み始めたら良いか，意味がわからないなど，多くの壁が見えてきた。そこで，小学生新聞を中心に与えたところ，徐々に興味を持ち始め，廊下に掲示してある新聞にも目を向けるようになった。

３．実践報告

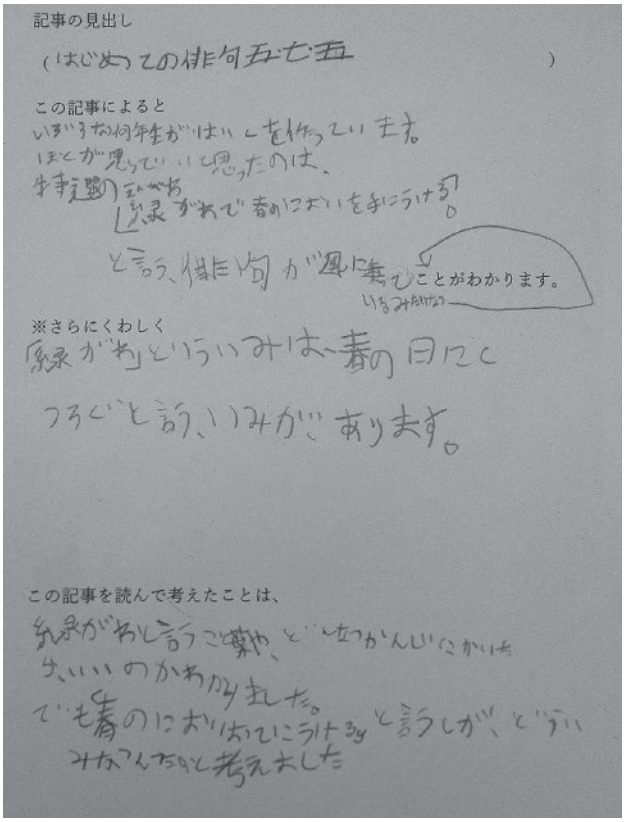
（１）新聞を身近にする取り組み

新聞を読む習慣がない児童がほとんどであったため，今年もまずは新聞を目にする機会を増やすことから始めた。様々な授業での取り組みを新聞社の方に取材していただき，記事となったものを掲示した。

いつでも新聞を見ることができるよう，廊下の長机に新聞を並べておく取り組みも行った。

（２）朝の活動を利用して

次に取り組んだのは，週に一度，朝学習の時間に新聞を読み，わかったことや考えたことをワークシートに書き込み，発表する活動である。



ワークシートは自作し，「記事の見出し」「記事を読んでわかったこと」「記事を読んで考えたこと」を書くようにしました。あまり難しいことは言わず，読んでみんなに伝えたいと思ったことに線を引き，ワークシートに書き込めるようにしました。最初は戸惑っていた子どもたちも，1 年の夏休み明け頃には，すらすら書けるようになってきました。

（３）授業での新聞活用

３年生の国語科にある『「発見ノート」を作ろう』という単元で新聞を取り扱うことにした。日常生活での発見だけでなく，新聞記事から新しい発見をすることで，視野を広げてほしいという思いと，見出しの工夫について気がついてほしいという願いから，授業作りに取り組んだ。

この活動は，本来自分の中で発見をノートに書き留めていく活動であり，他者意識の必要ない教材であった。しかし，公開授業を行う際，課題を「読み手のことを考えて，伝えたいことをはっきりさせた発見ノートを書こう」としてしまったため，趣旨がぼやけてしまった。

また，6 月という早い時期だったこともあり，まだ新聞を読むことに慣れていない状況であった。そのため，新聞を読むことに多くの時間を割かれてしまったこと，大事なことを見つけることが難しかったことで書く時間が十分に確保できなくなってしまった。個人の活動が中心になってしまったが，ペア学習などを取り入れ，短時間で書きたいことを明確にできると良かった。

書き方の例として，児童の発見ノートを提示したが，「大事なことを示すためにも先生が作成したものが良かった」という反省もいただいた。ねらいを達成するために必要な資料について，選択する力を磨くことが自分の課題であるとわかった。

今回の経験を通して，たくさんの貴重なご意見をいただくことができ，多くのことを学ぶことができた。今後の自分の取り組みに生かしていきたい。

（４）学校としての取り組み

今年度も１階ホールに新聞を掲示している。図書担当の教員が，毎朝子どもたちに読んでもらいたいページを開いて設置している。本校児童が取り上げられた際には，メッセージもそえて目立つ工夫もしていた。また，校長室の前にも各 NIE の取り組みについて書かれた新聞記事や本校児童，卒業生が取り上げられた記事を掲示するなど，管理職の協力も得ながら，新聞を教育に取り入れる活動を行うことができた。

玄関前→

校長室前↓

３．おわりに

今年度は，公開授業をさせていただくこともでき，3 年間のまとめという気持ちで取り組んだ学びの大きい１年間となった。

メディアリテラシーの育成というテーマで取り組んできたが，新聞を定期的に読んでいることで， 3 年生でも，社会に目が向くようになったことは事実であると感じた。気がつけば日々のニュースに目や耳を向け，話題にするようになったからである。

情報社会で生き抜くためにも，必要な力であると実感している。

国語科学習指導案

2023年6月14日

第3学年1組 14名　指導者 中西 亜美

1. 単元名（題材名）「発見ノート」を作ろう

2. 教材観

本教材は、生活の中で発見したこと、不思議に思ったことを書きためていき、書く活動に生かしたり身のまわりを観察したりする目を育てたりすることをねらいとしている。また、観察したことを項目立てて書くことや内容を短い言葉で表す「見出し」をつけるよさを味わわせたい。学習後も定期的に活動を続けていき、日常の中から新しいことを発見する力や疑問を解決する力を身につけていきたい。

今回は終末に新聞を扱って、発見ノートを作る活動を取り入れた。学校と家の間を行き来するだけの生活を送っている児童やゲームやSNSだけで社会の動きを知らずに過ごしている児童もいる。その中で、社会に目を向けたり真偽を出しかめたりする機会を作れたらと思い、新聞を取り入れることとした。これからの情報社会を生きていく上で必要な情報の受信者・発信者としてのメディアリテラシーを養っていきたい。

3. 児童観

日頃から取り組んでいる日記や振り返りをノートに書く活動で、考えを整理して長文を書ける児童は5名ほどである。勉強のこと＝学校のことという意識が強く、日常生活と学習を結びつけるのが難しい児童が多い。与えられた課題には取り組むが自発的に学ぶ児童は少ない。そのため、興味関心の幅が狭く、何かを見て「なぜだろう？」と不思議に思うほど気にとめないことが多いようである。また、発見したことも知った時点で「過去のもの」となり、発見ととらえられない児童が数名いる。あるものの名前を知っているだけで、そのものをわかっている気になっており、「〇〇じゃない？」とあいまいなままで情報を処理し、誰かに聞いたり調べたりせずに流してしまう状況である。

4. 指導観

本教材では「見出し」をつけるよさも味わわせるため、新聞を紹介して見出しの工夫を話し合った。子どもたちがつける「見出し」は「〇〇のこと」や「〇〇のひみつ」などがほとんどであり、工夫の仕方を知ることが大切であると考えた。ただ何が書いてあるかわかれば良いのではなく、読む人に興味を持ってもらえるような工夫をする大切さを伝えていきたい。

また、新聞を使うことで視野や興味の幅を広げたいと考えた。新聞には普段意識を向けていないものも多くのっている。知らないことがたくさんのっている新聞は発見の宝庫である。より詳しく知りたいと感じられる記事を出会えるよう様々な記事を用意しておく。また、文字を読んだり書いたりすることが難しい児童もいるため、ノートの書き方について丁寧に指導していきたい。本やインターネットでの調べ学習については、今後の継続した活動の中で重きをおき、今回は早く終わった児童にのみ取り組ませる。

5. 指導計画

時	学習活動	評価規準
1	「発見ノート」の書き方を理解する。身のまわりで発見したことを「発見ノート」に書く。	知・技（1）ア，態
2	書いたノートを読み合い、話し合う。新聞から「見出し」の工夫を見つける。	思・判・表Bア，態
3	新聞から発見したことや不思議に思ったことを見つけ、「発見ノート」を書く。	思・判・表Bア，態

授業プランシート	3　年 1　組	6　月 14　日 5　限（ 12 ： 50 ～ 13 ： 35 ）

《教科:　国語　》　単元名　【　「発見ノート」をつくろう　】　教P　32

（　3　／　3　）　⇦(本時/単元の総時数)　　授業者：　中西　亜美

1．本時のねらい

相手や目的を意識して書くことを選び、伝えたいことを明確にする。

（評価場面・方法）※評価場面や方法等
新聞記事へのメモ
ノートの記述
発言

2．まとめ、振り返り、めあて

（まとめ）※何を学んだか
読み手を意識して、伝えたいことをはっきりさせた発見ノートを書くことができた。

正対

（めあて）※まとめに正対し、子どもの視点に立っためあて
読み手のことを考えて、伝えたいことをはっきりさせた発見ノートを書こう。

（振り返り）※本時のねらいや単元の流れ等から、子どもたちから「引き出したい振り返り」
・興味を持ってもらえるように、見出しを工夫できた。
・伝えたいことをはっきりさせて書く方法がわかった。
・わかりやすい発見ノートを書くことができた。
・読む人のことを考えて新聞記事から大事なことを選ぶことができた。

3．時間配分と本時の展開　※学習の流れや工夫点、留意点などを記入

12：50　前時の振り返りと本時の見通し
課題の確認
13：00　書くことを選ぶ（事前に選んだ新聞を配布）
・記事を読み、友達に伝えたいことを決める。
・伝えたいことが書いてあるところに線を引く。

記事を選び直す児童のため、新聞を多めに用意しておく。

13：15　発見ノートを書く
・いつ、どこで→全員で確認
・発見したこと
・思ったこと、考えたこと
※調べてわかったこと

使えそうな資料をあらかじめ用意しておく。

13：35　振り返り
・見出しをつける

4．板書レイアウト等

6／14.　P.
（か）読み手のことを考えて、伝えたいことをはっきりさせた発見ノートを書こう。
伝えたいこと
発見ノートの書き方
・見出し
・いつ（六月十四日）
・どこで（学校の朝日小学生新聞）
・発見したこと
・思ったこと、考えたこと
・調べてわかったこと
発見ノート
←ここから書き始める

5．授業者から

記事の内容に付け加えて自分の考え（感想）を書けているか、見出しを工夫しているかを見てほしいです。

2023 年度　NIE 実践報告

NIE を学校で根付かせる

岩見沢市立中央小学校　教諭　冨樫　いずみ

１　全校で取組を行うために

今年度、岩見沢市立中央小学校は NIE 実践指定校５年目となった。今年度も中央小では、３５２名の全校児童に対する NIE の取組を全教職員総意のもと進めている。

初年度実践校になるにあたり、特に重視したのが『全校での取組とする』ことであった。担当者は前任校から NIE の取組を通じて、NIE が子ども達に与える変容を実感してきた。しかしこれまで NIE と関わることがなかった先生方にとっては、教育課程外の余分なこととして捉えられかねないと考えた。授業時数確保や働き方改革の観点からも、この取組が先生方の負担や指導内容の圧迫となることは本意ではない。

そこで提案にあたり『学力向上』というキーワードを掲げて、先生方への理解を求めることとした。実際、複数の学年において、教科書教材として新聞記事の比べ読みや、新聞を作る表現活動が掲載されている。全国学力学習状況調査や北海道チャレンジテストでも、新聞記事や新聞の資料を扱った問題が出題されている。

昨今の家庭の状況からも、新聞に身近に接している子どもは減っている。一覧性や記事の信頼性、非連続テキストとの照合や論理的文章構造等多くの利点を持つ新聞を通じて、児童の学力を向上させる共通認識

を持つことで、他の先生方の同意や協力を得ることができ、全校体制でスタートを切った。

まずは、目の前の子ども達の実態に応じて、各教職員がやりやすい場面から取組を始めた。各先生方の創意工夫により、家庭学習での切り抜き、コラム書き写し、新聞作成等を共有し、試行錯誤しながらも取組を進めた。

その後も年度に１枚以上の個人作成した新聞を２月の一ヶ月間、一斉に掲示して鑑賞し合う『校内新聞展示会』を開催し、外部の方にも見ていただくなど NIE を学校だけでなく地域に発信する活動を行った。

今年度は担当者が担当分掌（研修部）から外れたこともあり、校内での NIE 担当者を研修部の先生に担ってもらった。このことにより、一層学校に根付いた特色ある活動としての NIE の存在が確かなものとなった。

NIE 実践校となってから、標準学力検査（NRT）や全国学力・学習状況調査の国語学力のポイントが多少の上下はあるもののど

の学年も年々上昇している。この結果から、全校をあげての NIE の取組が学力向上の一助となっていることを改めて教職員が実感している。

学校全体で NIE 実践を行える学校は、実践校の中でも数少ない。教育効果の高いNIEを学校全体として取り組むことで、より多くの子ども達を変容させることは、他校で個人的に実践をされている先生方の望みでもあると考える。本校は幸運にも、教職員が価値を実感して全校で取り組む体制が整い、新聞展示会をはじめ定着した活動が軌道に乗っている。

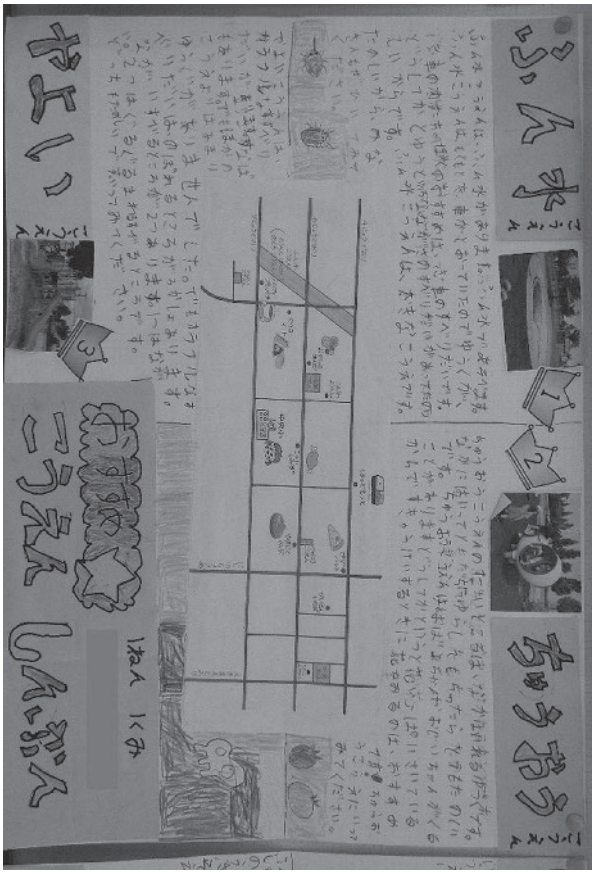
全校で取り組むため、全教職員に理解を得るために重要なポイントは、以下の２点と捉える。

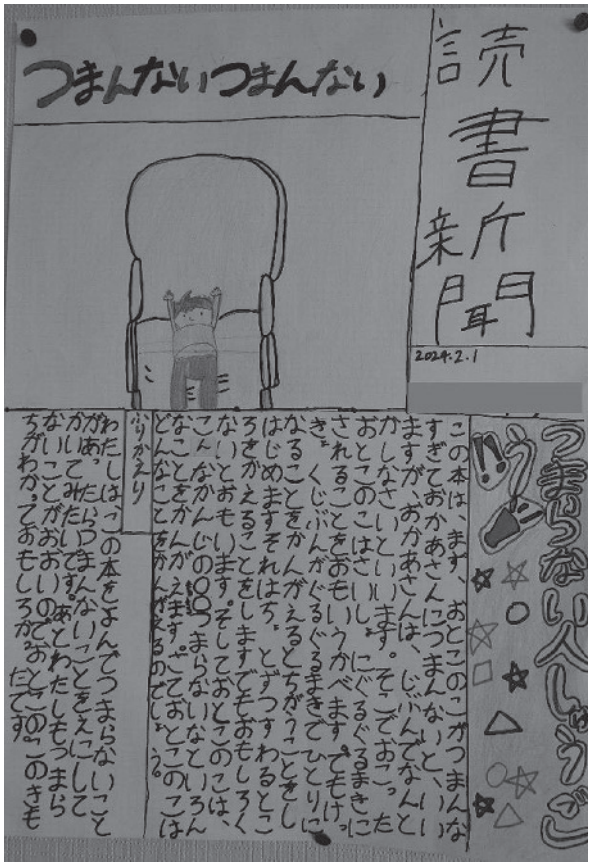
１　教育課程に位置付ける
　～『学力向上』という共通目標を持ち現在の指導事項とのリンクを明確にする
２　校務分掌に位置付ける
　～個の取組から学校の取組へ、年数をかけて学校の文化に定着させる

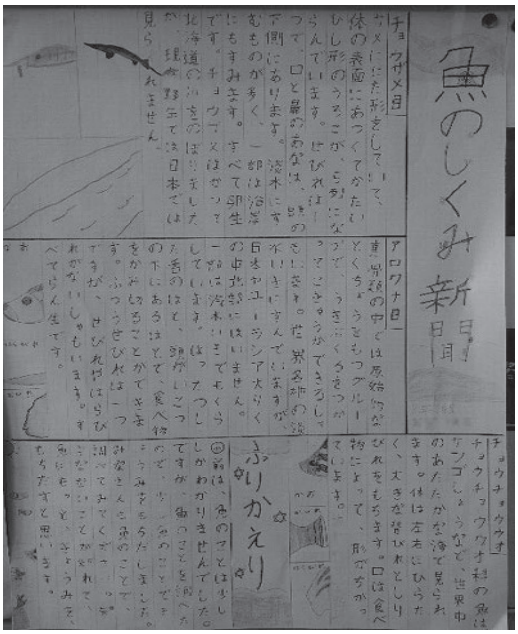
学校全体で、NIE の効果を実感できる取組を継続して行うこと、その取組の経過や現状を発信することが他校の取組においても何らかのヒントとなると捉え、岩見沢市立中央小学校としての NIE への貢献にもなると考えている。

２　校内新聞展示会

今年度も２月の一ヶ月間で『校内新聞展示会』を行う。原稿を書いている現時点では地域の方に選考をいただく賞が決まっていないが、どのような内容で各学年が取り組んでいるのか、写真で紹介をしたい。







３　各学年の取組と教職員の意識

以下は、昨年度も行った各学年の国語担当者が、今年度の取組と NIE の効果について記述したものである。どの学年の担当者も効果を実感していること、NIE の継続が本校児童にとって有意義であると捉えていることが再確認できた。

＜１年＞

取組内容	効果
おすすめの公園新聞作り（生活科）	初めて新聞らしいものを作り、満足そうだった。

＜２年＞

取組内容	効果
おもちゃ紹介新聞作り（生活科） 新聞を読み親しむ(国語)	読んでもらえるような見出しの工夫、文字の大きさなど考えることができた。 教室に道新こども新聞を掲示することで、なに

	げなく読むことができる。今後はイラストや川柳などを投書したい。

＜３年＞

取組内容	効果
新聞作り（国語・総合・見学旅行）	新聞の作り方（見出し・割り付け等）を学び、実際に作ることで理解を深めた。

＜４年＞

取組内容	効果
・国語「新聞をつくろう」 ・総合「わたしたちにできること」（アイヌ文化新聞づくり）	・「割り付け」「トップ記事」の実際の工夫を見たり、見比べたりすることを通して、より伝わりやすい記事がなにかを考える機会となった。

＜５年＞

取組内容	効果
・国語「新聞を読もう」 ・国語「言葉と事実」 ・国語「ミニディベート」 ・総合「学びまとめ新聞作り」 ・社会「情報を生かす産業」	・新聞自体に触れる機会が減ってしまった児童たちにとって、生きた教材となった。 ・「事例と解説をもとに、言葉と事実の関係を考える」「考えを広げ深めるために立場を決めて話し合う」「工夫された表現を見つける」等の学習で活用し、理解を深めることができた。

＜６年＞

取組内容	効果
・歴史新聞作り（国語・社会） ・エスコンフィールド北海道新聞作り（総合・社会） ・説得力のある文章を書こう 「社説」（国語） ・運動会作文、ぶんぶんタイムへの投稿（国語） ・炭鉄港はがき新聞作り（総合） ・ジョン万次郎はがき新聞作り（総合） ・時事に関する新聞記事紹介（社会・国語・特活） ・回し読み新聞（国語） ・天声こども語書き写し・道新ワークシートの活用（国語の週末課題）	・新聞にまとめる発表形式に、年間を通じて取り組んだ。繰り返すことで「誰に読んでもらうか（目的意識）」「事実と意見を分けて書く（記事と社説）」「わかりやすく相手に伝えること（表現方法）」などについて、多くの子が身につけることが出来た。 ・教科・特活問わず新聞記事の紹介や共有をしてきた。時事問題に関する話題を子ども達が自ら話すことが多くなった。インターネット上の情報よりも、正確で速いという新聞の特性を理解し、メディアセンターにある新聞に目を通す子もいた。 ・新聞を身近に感じるよう、回し読み新聞や投稿などを行った。また、国語の基礎学力向上を図るため、週末の課題として「天声こども語」の書き写しと「道新ワークシート」を活用した。

今後もNIEの新たな可能性を模索し、全教職員の創意工夫と効果の共有をしながら学校全体で日々実践を重ねていきたい。

２０２３年度　NIE 実践報告

効果的な活用を目指して

夕張市立ゆうばり小学校　教諭　佐藤　優子

１．はじめに

本校は、１０学級、児童数１４３名の市内唯一の小学校である。

夕張市は炭鉱の町として栄え、最盛期の人口は１１万超であったが、炭鉱が閉山してからは人口減が進み、伴って児童数が減少したことにより、平成２３年、市内に６校あった小学校が１つに統合された。

夕張市は大きく「本町、富野、清水沢、沼ノ沢・真谷地、紅葉山・滝の上、南部」の６地域に分けることができる。それぞれの地域で特色ある取組が行われている中で、子どもたちは育っている。

２．児童の様子

明るく純朴で素直な児童が多く、行事などの取組は熱心に行うことができる。指示されたことには忠実に取り組むことができるが、自ら進んで活動することが少ない。そのため、学校教育目標には「進んで学習に取り組む子ども」をキーワードとして取り組んでいる。

新聞を購読している家庭は少ないが、実践校として新聞を提供していただくことにより、児童が新聞に触れることができている。

提供していただいた新聞は、児童玄関前ホールの新聞閲覧コーナーでいつでも読めるようになっている。また、職員室前の掲示板に、学校長が夕張市やゆうばり小学校の児童に関する新聞記事を掲示するなど、新聞を身近に感じられる取組が継続されている。

新聞閲覧コーナー

「発見！ゆうばり News」掲示板

３．実践の内容

年度初めに、係から本校の今までのＮＩＥ実践や、実践例を紹介したりするなど、今年度も様々な教科や場面で新聞を活用できるよう取り組んできた。

①はがき新聞の実践（３年生）

３年生は、見学や校外学習などのまとめをＡ５サイズの新聞形式の原稿用紙に書く活動に取り組んできた。

取組の前に、学校にある実際の新聞を読んで、新聞にはどのようなものが載っているのか発表する活動を行った。マンガや広告、写真、グラフ、気になる記事など興味をもって見つけていた。その中で、題字や見出しについても知った。

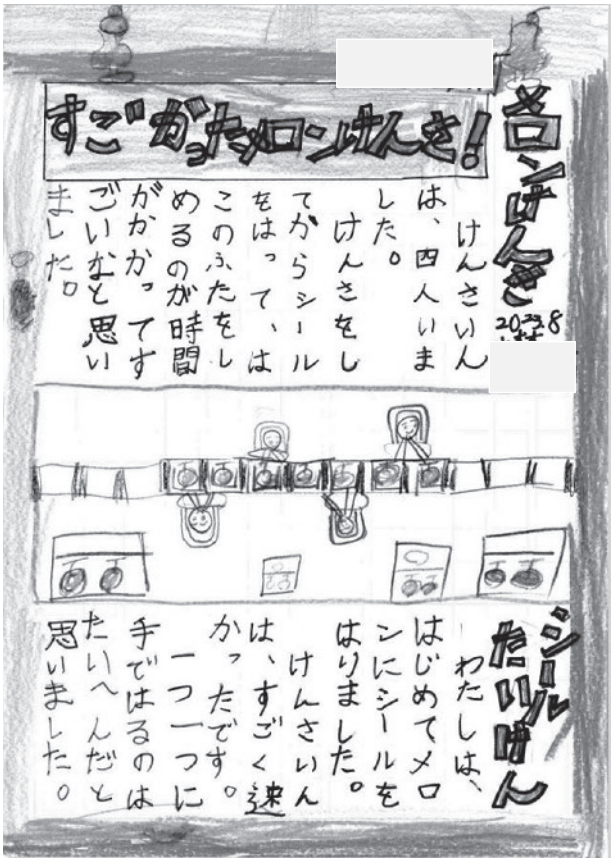
新聞作りでは、学習の中で一番印象に残ったことを選び、見出しを工夫し、伝えたいことを短くまとめて書くことに取り組んできた。

小さいサイズなので、児童にとって取り組みやすさがあり、制作にも時間がかからず、イラストを入れたり、文字の飾りや着色を工夫したりすることもでき、書くことに苦手意識のある児童も楽しく取り組んでいる様子だった。

総合的な学習の時間に、夕張メロンについて学習したときには、教えてくれた農協青年部のみなさんに読んでもらうために新聞を書いた。お世話になった方々に楽しく読んでもらうために、みんな意欲的に取り組んでいた。

出来上がった新聞を読み合い、感想を交流する時間も設けた。「見出しがおもしろくて、読んでみたくなった。」「イラストがわかりやすくていい。」「文字のデザインや色がきれい。」など、友達の作品の良いところを見つけていた。

見出しを考えたり、限られた字数で書いたりすることで、まとめる力がついた。また、見出しや記事、イラストを自分なりに配置する活動を通して、表現力も向上したように感じている。



②総合的な学習の時間での実践（４年生）

４年生は、「校舎周辺の草花観察」、「枝打ち体験」、「川の学習」などの夕張の自然に関する体験学習に取り組んだ。

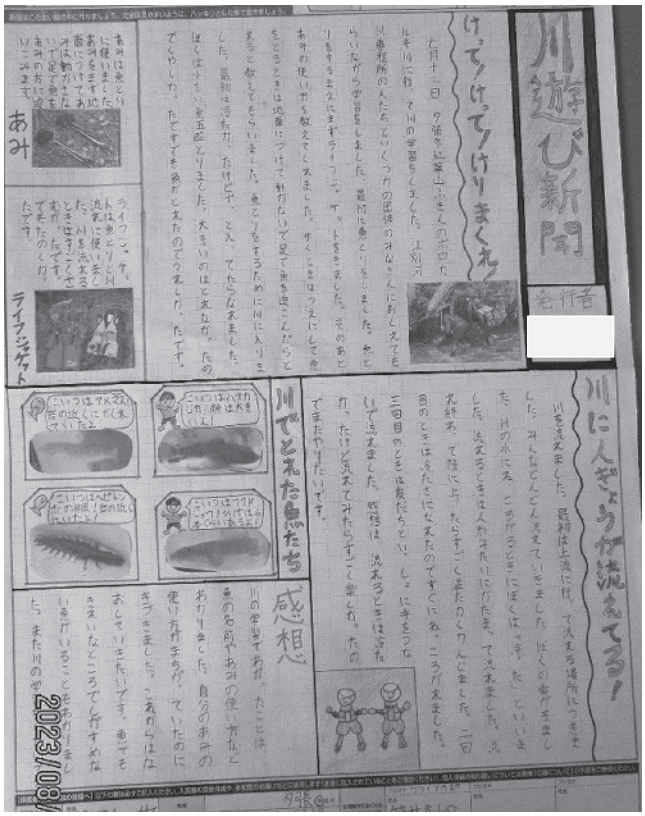
「校舎周辺の草花観察」は、草花の移り変わりによる四季の変化を感じてほしいという願いから、草花が入れ替わる度に、時間を見つけて行っている。ナズナやイヌノフグリ、タチツボノスミレの他、校舎前にたくさん咲いているオオバナノエンレイソウなども観察した。オオバナノエンレイソウについては、ある新聞に「北海道の在来種」として記事が載っていたので、その記事を子どもたちに紹介した。

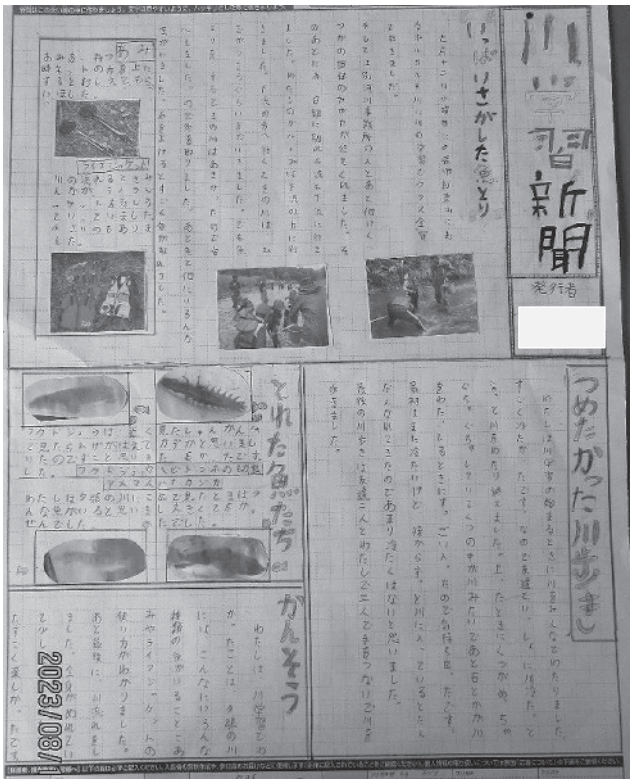
体験活動の後、国語科「新聞を作ろう」の学習とも連携させ、学習のまとめの新聞作りに取り組んだ。

今回は、それを「どうしん小学生新聞グランプリ」に応募することを目標とすることで、子どもたちへの意欲付けとなった。

国語科で、新聞の「構成」、「見出し」、「記事」などを学習した後、学校にある様々な新聞を見せた。本物を見ることで、読みやすい構成や、読みたくなる見出しの工夫の大切さを実感することができた。

これまで学習したことがまとめてある「総合ファイル」から、自分が新聞で紹介したいことを選ばせた。また、記事に合わせて写真も用意した。その後、どこにどの記事を置くか、構成や、興味を引く見出しを考えさせた後、新聞作りに取り組ませた。





４．成果と課題

児童は、読んだり書いたりする活動に親しむ機会を多く持つことができ、表現の楽しさも感じながら学習を進めることができた。

他の学年でも、新聞の写真や見出しを使った学習や、調べ学習などの取組があった。

また、今年度途中から、「どうしん　まなbell」が利用できるようになった。調べるときのツールが増え、高学年では、総合的な学習の時間や社会科の授業で使用する場面があった。今年度の実践内容について全体で交流し、効果的な活用を模索していきたい。

朝読書の時間にまなぶんデジタルを読む３年生

５．おわりに

本校の新聞閲覧コーナーや、記事掲示の取組は長年継続されており、児童が新聞を身近に感じる環境になっている。

これからも今まで積み重ねられてきた実践を全体で共有し、児童が新聞に触れる機会を大切にして、児童の実態に応じた取組を考えていきたい。

２０２３年度　NIE実践報告

新聞を活用した実践～自ら手に取る姿～

登別市立富岸小学校　教諭　赤木　俊也

１．はじめに

本校は、これまでＮＩＥ教育を進めてきた過去がある。しかし、実践を長くされてきた先生方が異動され、取組の具体を知る方法は過去の資料のみだった。児童が自ら新聞を手に取るようになるために、どのように活用していけばよいのかを模索しながら取り組んできた。

２．児童の様子

私が受け持つ学級では、初めは新聞に対して興味をあまり示していなかった。また、新聞の記事から感じたことや考えたことなどを文章でまとめることにも多少の抵抗感があったようだ。しかし、取組を続けている中で、新聞を自ら手に取る姿が見られ、一定の効果が見られるようになってきた。

３．実践の内容

①　新聞コーナーの設置

本校では、３階の高学年の教室前の廊下に新聞コーナーを設けている。テレビでも大々的に報道されているニュース記事があれば、開いて置き、児童が通りすがりに見れるようにしている。足を止めて手に取る児童が見られた。

②　朝学習の取組

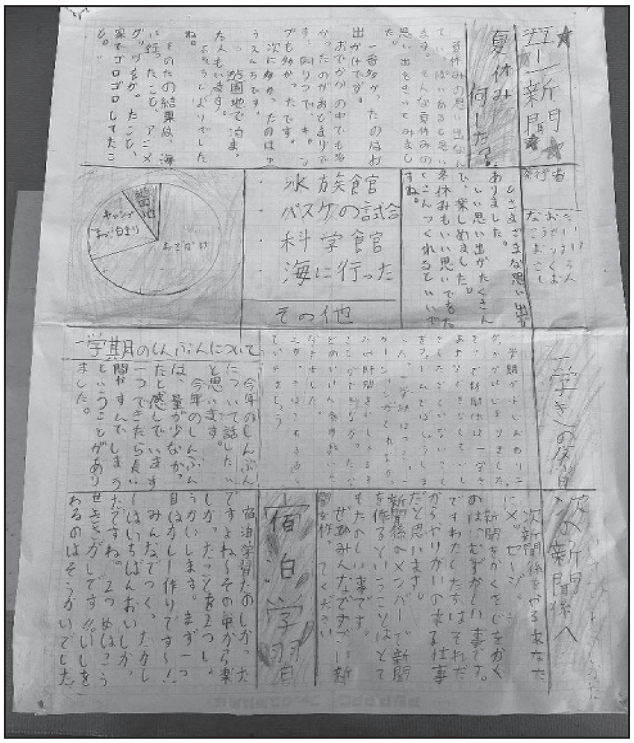
私が受け持つ学級では、朝学習の時間を活用して、新聞記事から自分の考えを文章にまとめる取組を行っている。「事実」、「意見と根拠」、「提案」を専用の用紙に記述していき、教室の後ろに掲示している。自分の考えを明確にもつことができるようになってきた。

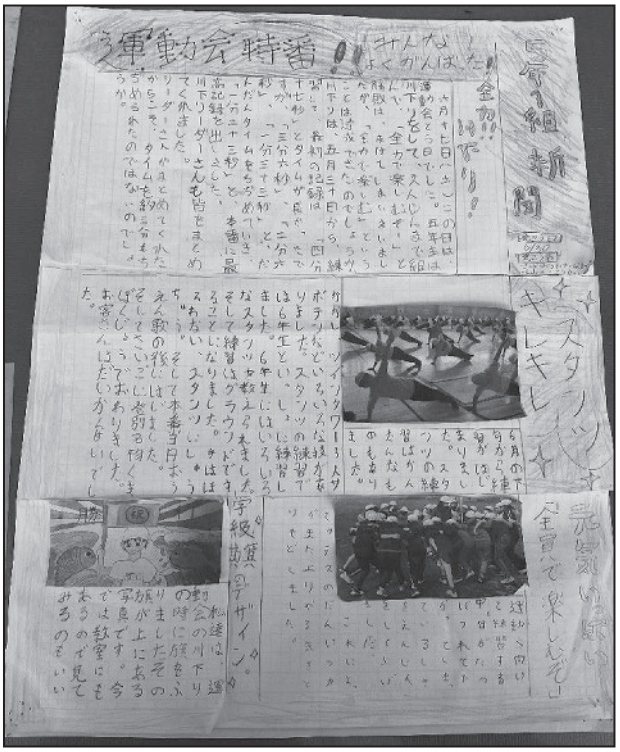
③ニュースの紹介

朝の会を活用して、日直が今日のニュースを発表している。これは、新聞やテレビ、スマホなど、どこからでも情報を集めてもよいというルールにしている。目的は、「世の中の出来事に興味をもつ」ことである。興味をもつことは自ら新聞を手に取って読むことに繋がると私は考え、２学期の初めから毎日行ってきている。みんなが知らないようなニュースを紹介してくれる児童も居る中で、一定の効果があったと実感している。

④学級新聞

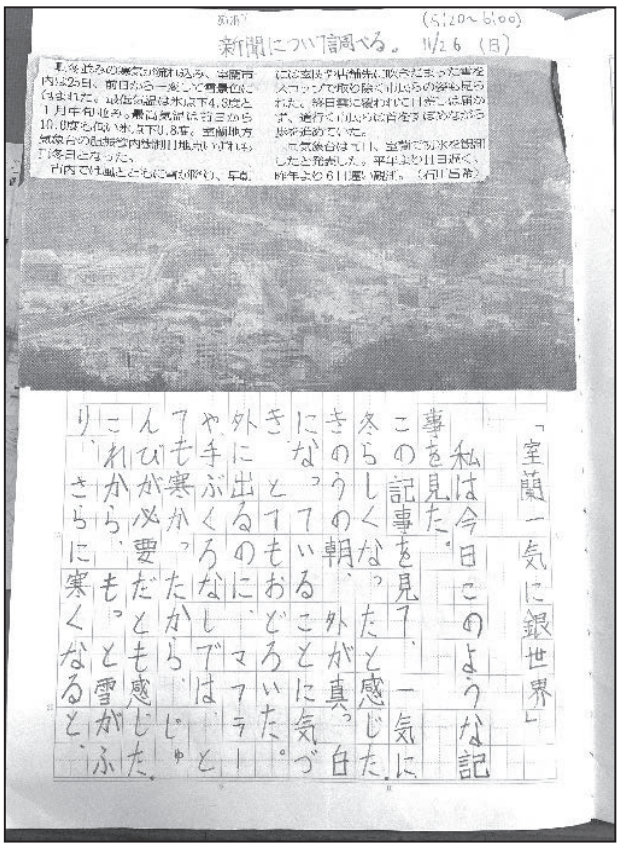
私の学級では、月に１度のペースで、「○○新聞」を作成してきた。初めの頃は作成グループを固定していたが、途中からメンバーをその都度募集して取り組んできた。内容としては、主に学級や学校行事を紹介する新聞を作ってきた。年度内には、学級全員が一度は作成する経験をしておくというルールにした。





⑤家庭学習での取組

今年度、実践を続ける中で、児童の家庭学習の取り組み方が変化してきた。児童は実に様々な学習をしてくるが、新聞記事から自分の考えをまとめる取組が家庭でも行われるようになったのだ。これは、実践が生んだ効果であると実感した。



４．成果と課題

（１）成果

学級内の取組として、朝学習の文づくりや朝の会でのニュース紹介、休み時間での学級新聞づくりを通して、ニュースに触れる機会を増やしたことにより、「世の中の出来事に興味をもつ」という目的は達成したと言えるだろう。また、家庭学習でも新聞を活用する児童も増えたことから、「自ら新聞を手に取る姿」も見られるようになった。３階廊下に新聞を置くことで、他学年も新聞を手に取る様子が見られたことは成果と言えるだろう。

（２）課題

上記で述べたように他学年も手に取るようになったことは一定の効果があったが、高学年に焦点を当て取り組んでいたので、下の学年が新聞に触れる機会はあまり無かったように感じる。また、朝の会でのニュース紹介では、見忘れてしまった子が居たことも取組の工夫が必要だと感じた。学級新聞の取組においては、「終わらせる」ことが目的となってしまっている様子も見受けられた。「何となく」で終わらせて遊びに出かける児童が居たことは今後の取組の課題と言えるだろう。

５．終わりに

今年度、ＮＩＥ教育の実践をしてみて、「情報を読み取る力」や「情報を整理する力」、「社会に目を向ける力」、「批判的思考のもち方」など、子どもたちの成長を感じることができた。何より児童から「やってよかった」という声が上がったことは、とても嬉しく感じた。私自身、今後の教育活動に活かしていけるような手ごたえを感じ、貴重な経験となった。

２０２３年度　NIE 実践報告

学校祭での新聞切り抜きコンテストの実践

札幌市立澄川中学校　教諭　白瀬　功美

１．はじめに

本校は、２０２２年度より学校祭での取組を大幅に変更し、学級で様々な部門に分かれ取り組むスタイルとなりました。3 学年とも同じ内容の部門に分かれ、学年が上がるにつれ、自分達で進んで活動できる力も備わっていき、作品も年々より良いものになっていく成果も期待し、この取組で２年目を迎えました。

昨年度は、NIE の申し込みが間に合わず、校内にあった新聞等で行なっていましたが、今年度は学年毎に同じ時期、異なる新聞社のものを題材として行いました。そして、参考とさせて頂いたのは、北海道新聞社で長年行われている新聞切り抜きコンテストです。より良いものは北海道新聞社にお送りさせて頂くことも考えておりましたが、１人で１枚に取り組んだものということで、本校の活動とは異なったため、お送りできませんでした。しかしながら、長期休みを利用して、個人的に取り組む生徒が自主的に出てくれればとの思いも踏まえ、行なってまいりました。

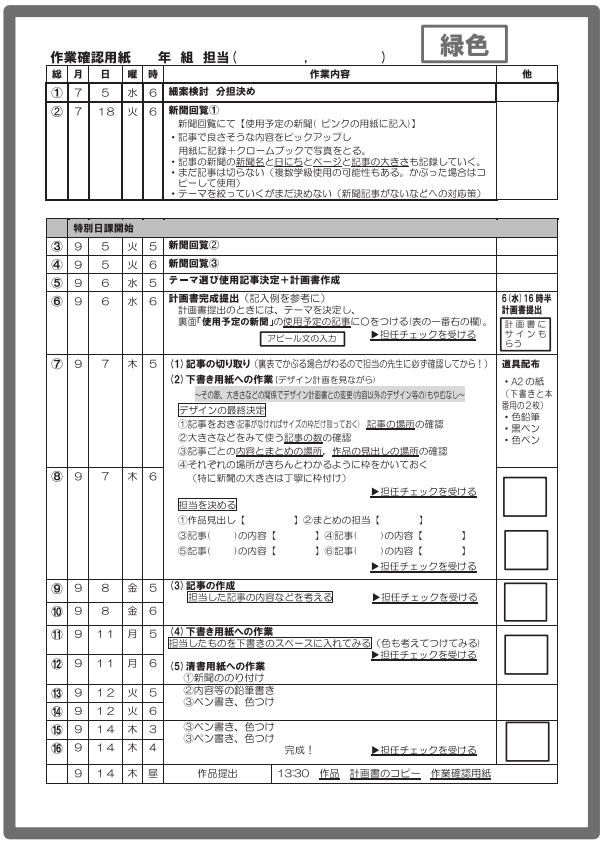
２.生徒の様子

本校は１学年６学級、2 学年５学級、3 学年４学級、特別支援学級で構成されています。部活動も多く、加入生徒の割合も高く、活発に活動を行なっています。近年、クロームブックの導入もあり、生徒会、学級、委員会活動、授業等で活用しています。自分達で考え、取り組ませる場面を、総合等の特別活動の時間で取り入れ、自分で考え取り組む生徒の育成を図ることを積極的に行なっています。学校祭でも、そのような活動が意欲的に行われています。新聞切り抜きコンテストは特別支援学級を除く、全ての学級で行われました。

３．実践の内容

(1)次のような計画で

学年毎に１～２名の教師が担当となり、進行具合を担任の先生と連絡を取りながら進めていきました。総合の時間を計１６時間使用して完成します。１年生はやはり時間がかかり、放課後の活動もしましたが、３年生は放課後活動せずに完成に至りました。



緑色

作業確認用紙　　年　組　担当（　　，　　）

総	月	日	曜	時	作業内容	他
①	7	5	水	6	**締案検討　分担決め**	
②	7	18	火	6	**新聞回覧①** 新聞回覧にて【使用予定の新聞（ピンクの用紙に記入）】 ・記事で良さそうな内容をピックアップし 用紙に記録＋クロームブックで写真をとる。 ・記事の新聞の紙面名と日にちとページと記事の大きさも記録していく。 ・まだ記事は切らない（複数学級使用の可能性もある。かぶった場合はコピーして使用） ・テーマを絞っていくがまだ決めない（新聞記事がないなどへの対応策）	

	特別日課開始					
③	9	5	火	5	**新聞回覧②**	
④	9	5	火	6	**新聞回覧③**	
⑤	9	6	水	5	**テーマ選び使用記事決定＋計画書作成**	
⑥	9	6	水	6	**計画書完成提出**（記入例を参考に） 計画書提出のときには、テーマを決定し、 裏面「**使用予定の新聞**」の使用予定の記事に○をつける（表の一番右の欄）。 アピール文の入力　▶担任チェックを受ける	6(水)16 時半 計画書提出 計画書にサインもらう
⑦	9	7	木	5	**(1)記事の切り取り**（裏表でかぶる場合があるので担当の先生に必ず確認してから！） **(2)下書き用紙への作業**（デザイン計画を見ながら） ～その際、大きさなどの関係でデザイン計画書との変更(内容以外のデザイン等の)もやむなし～ デザインの最終決定 ①記事をおき(記事がなければサイズのみだけ言っておく)　記事の場所の確認 ②大きさなどをみて使う記事の数の確認 ③記事ごとの内容とまとめの場所、作品の見出しの場所の確認 ④それぞれの場所がきちんとわかるように枠をかいておく （特に新聞の大きさは丁寧に枠付け） ▶担任チェックを受ける	**道具配布** ・A2 の紙 （下書きと本番用の2枚） ・色鉛筆 ・黒ペン ・色ペン
⑧	9	7	木	6	担当を決める ①作品見出し【　　】②まとめの担当【　　】 ③記事(　　)の内容【　　】④記事(　　)の内容【　　】 ⑤記事(　　)の内容【　　】⑥記事(　　)の内容【　　】 ▶担任チェックを受ける	□
⑨	9	8	金	5	**(3)記事の作成** 担当した記事の内容などを考える　▶担任チェックを受ける	□
⑩	9	8	金	6		
⑪	9	11	月	5	**(4)下書き用紙への作業** 担当したものを下書きのスペースに入れてみる（色も考えてつけてみる） ▶担任チェックを受ける	□
⑫	9	11	月	6	**(5)清書用紙への作業** ①新聞ののり付け	
⑬	9	12	火	5	②内容等の鉛筆書き ③ペン書き、色つけ	
⑭	9	12	火	6		
⑮	9	14	木	3	③ペン書き、色つけ	
⑯	9	14	木	4	③ペン書き、色つけ 完成！　▶担任チェックを受ける	□
	9	14	木	昼	作品提出	13:30　作品　計画書のコピー　作業確認用紙

(2)テーマ決定、作業開始

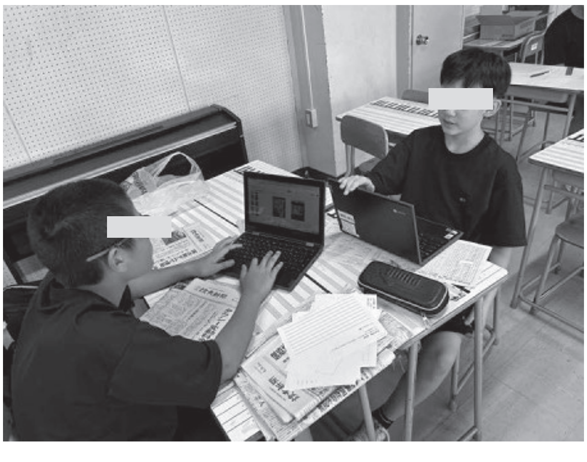
取り上げる新聞の記事は、特に指定せず、興味を持った記事をとにかくピックアップしました。その中から、コンテストに載せられるだけの記事が揃うものを選び、テーマを決めてコンテストの作品の制作を始めていきました。切り抜きをどのように扱うか、そして、それを見やすいように提示するにはどのような工夫や配置が必要か。また、興味関心を引くための言葉の選び方、その記事に対して考えたこと、伝えたいこと、それらを計画をもとに活動をスタートしました。２人１組で１枚の作品を作ります。

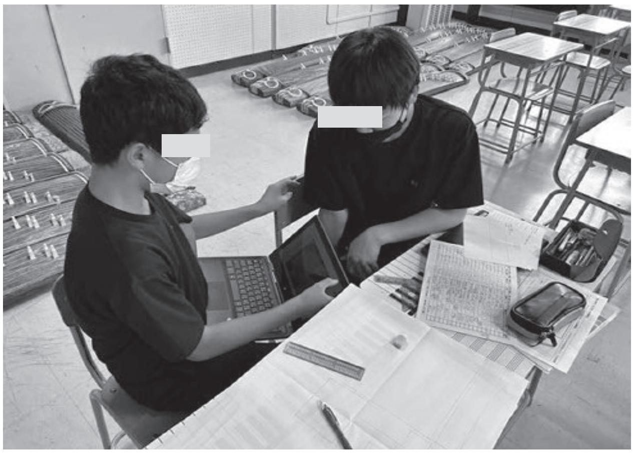
新聞回覧にて【使用予定の新聞（ピンクの用紙に記入）】
- 記事で良さそうな内容をピックアップし用紙に記録＋クロームブックで写真をとる。
- 記事の新聞の新聞名と日にちとページと記事の大きさも記録していく。
- まだ記事は切らない（複数学級使用の可能性もある。かぶった場合はコピーして使用）
- テーマを絞っていくがまだ決めない（新聞記事がないなどへの対応策）

使用予定の新聞（他クラスと重なった場合、新聞をコピーするので記入、切り取りはしないこと！）※クロームブックで写真もとっておくこと

	○をつける	段ボール番号	新聞の日にち	ページ数	記事タイトル	記事の大きさ [illegible]	決定記事に○
1	朝刊・夕刊	A B C D E F	/　（　）				
2	朝刊・夕刊	A B C D E F	/　（　）				
3	朝刊・夕刊	A B C D E F	/　（　）				
4	朝刊・夕刊	A B C D E F	/　（　）				
5	朝刊・夕刊	A B C D E F	/　（　）				
6	朝刊・夕刊	A B C D E F	/　（　）				
7	朝刊・夕刊	A B C D E F	/　（　）				
8	朝刊・夕刊	A B C D E F	/　（　）				
9	朝刊・夕刊	A B C D E F	/　（　）				
10	朝刊・夕刊	A B C D E F	/　（　）				
11	朝刊・夕刊	A B C D E F	/　（　）				
12	朝刊・夕刊	A B C D E F	/　（　）				
13	朝刊・夕刊	A B C D E F	/　（　）				
14	朝刊・夕刊	A B C D E F	/　（　）				
15	朝刊・夕刊	A B C D E F	/　（　）				
16	朝刊・夕刊	A B C D E F	/　（　）				
17	朝刊・夕刊	A B C D E F	/　（　）				
18	朝刊・夕刊	A B C D E F	/　（　）				

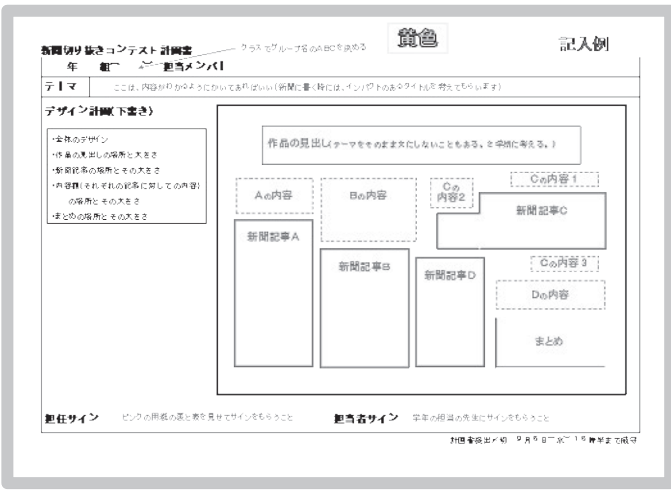
9／6にはテーマを決め、使う記事に○（一番右の欄）をつけて提出　！





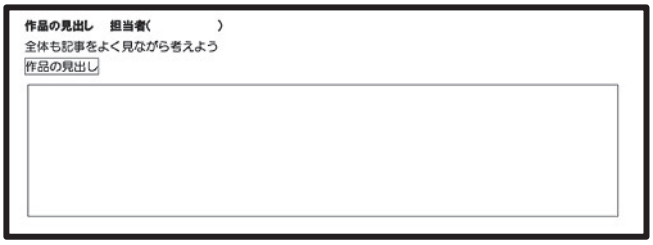
(3)テーマは？

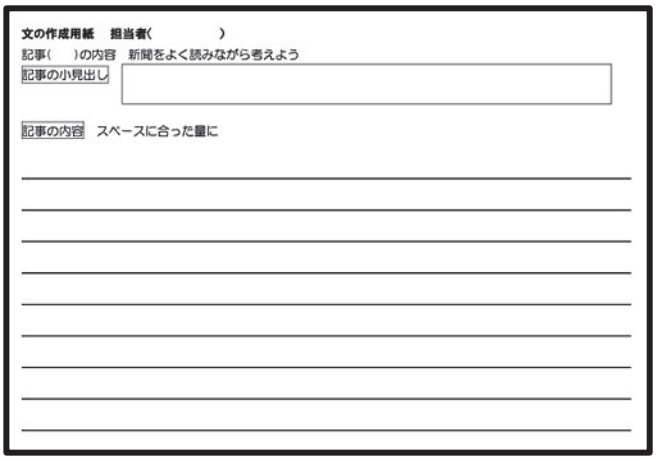
テーマは、ＬＧＢＴ、政治、スポーツ、社会問題に関するもの様々です。学年が上がるにつれ、色の使い方、内容の深まり、視点が変わってきます。


新聞切り抜きコンテスト計画書　クラスでグループ名のABCを決める　黄色　記入例
年　組　担当メンバー
テーマ　ここは、内容がわかるようにかいてあればいい（新聞に書く時には、インパクトのあるタイトルを考えてもらいます）
デザイン計画（下書き）
・全体のデザイン
・作品の見出しの場所と大きさ
・新聞記事の場所とその大きさ
・内容欄（それぞれの記事に対しての内容）の場所とその大きさ
・まとめの場所とその大きさ
作品の見出し（テーマをそのまま文にしないこともある。と学年に考える。）
Aの内容
Bの内容
Cの内容2
Cの内容1
新聞記事C
新聞記事A
新聞記事B
新聞記事D
Cの内容3
Dの内容
まとめ
担任サイン　ピンクの用紙の裏と表を見せてサインをもらうこと
担当者サイン　学年の担当の先生にサインをもらうこと

原稿や見出しの下書き行い、教員の点検を受け、より良い内容にしていきます。

下記の用紙は下書きに使用したものです。


作品の見出し　担当者(　　)
全体も記事をよく見ながら考えよう
作品の見出し


文の作成用紙　担当者(　　)
記事(　)の内容　新聞をよく読みながら考えよう
記事の小見出し
記事の内容　スペースに合った量に

3年生の優秀作品1

3年生の優秀作品2

(4)表彰と当日の様子

この部門の担当は、1年生は、各学級2人で1枚作成、2、3年生は6人で3枚作成し、学級毎で教員の担当が審査をし、金賞銀賞を選びます。学級毎の審査の他、特に優れた作品はＭＶＰとして選びます。その様子は学校祭の閉祭式で発表されました。

(5)審査基準

選んだ記事について
1テーマにそっているか

学級担当者の文章について
1適切な文章でわかりやすいか
2自分の考えをきちんと述べているか

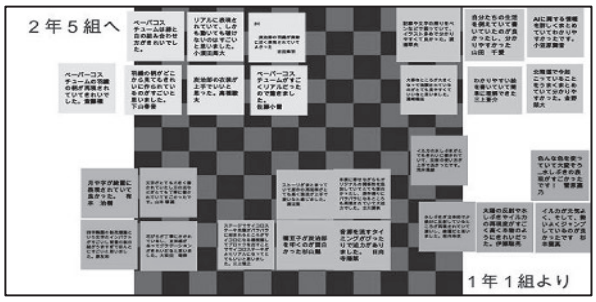
デザインについて
1全体的な色合いや工夫
2字が丁寧に書かれているか
3見出し等の工夫

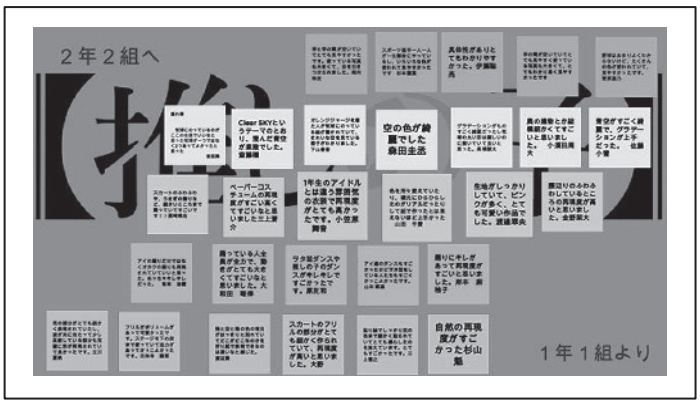
まとめについて
1テーマを選んだ理由やまとめの意見が書かれていて、見出しにつながる内容になっているか

教員の審査とは別に、各学級の作品の感想を一人一人がメモをしています。

当日の１人ひとりのメモをクロームブックの jam　board に学級で手分けして入力し、各学級の部門それぞれに送ります。

それぞれの部門に向けて学級から送られたものは、廊下の掲示板に載せて閲覧します。





４．成果と課題

（１）成果と課題

学校祭でのこの部門の担当生徒は、生徒数が少ない１年生では学級で２人、多い２、３年生では６人と大人数の取組ではないにも関わらず、昨年度取り組んだ生徒はもう一度同じ部門を希望し、より良い作品を作ろうと意欲を持って参加し、大変有意義な活動となっています。普段新聞を目にすることが少ない生徒も、題材選びの段階から多くの記事に目を触れることになり、また、それと同時に関心の広がりも見られるようになります。また、テーマを選んだ後は、それに対する自分の考えをまとめ、それも記事にしていきます。何を伝えたいか、そのためにはどんな工夫が必要か、この総合の取組で大きな力を養うことができていると感じます。作文とは違い、社会の内容に触れ、それに対する自分の考えをまとめる機会は大変貴重なものであると感じます。これがより深められるよう、また、文章表現の力をつけるためにも、学校の図書館との連携も今後考えていくことが必要であると思います。

５．おわりに

生徒達に、新聞との関わりを持たせていただき、感謝申し上げます。この学校祭のみならず、本校には職員室前に年間通して新聞を展示することもできました。ありがとうございました。

２０２３年度　NIE 実践報告

生徒の主体的な学びにつながる新聞活用

札幌市立屯田北中学校　教諭　福井　剛史

１．はじめに

本校は、北海道札幌市の北区屯田に位置しており、全校生徒７００名を超える大規模校である。ＮＩＥ実践指定校となるのは初めてであるが、学校図書館司書教諭が中心となり、伝統的に新聞記事と関連した図書の紹介が行われてきた。

実践指定校１年目である今年度は、３学年国語科での授業実践を中心に活動を行った。

２.児童（生徒）の様子

出された課題にはまじめに取り組もうとする素直で元気な生徒が多く、のびのびとした学校生活を送っている。各家庭の新聞購読率の低さから日常的に新聞を読んでいる生徒の割合は高くはないもの、朝読書で活字に親しんでいる効果もあり、新聞記事を読むことに抵抗感のある生徒は少ない。

また、Chromebook を活用した授業も浸透しており、インターネットを活用した調べ学習や Google スライドでのプレゼン資料作成についても抵抗なく活動することができる。課題は新聞が身近な存在ではない生徒が多く、情報収集の選択肢に入らない点である。

３．実践の内容

（１）「スピーチで社会に思いを届ける」

①取り組み

３学年国語「説得力のある構成を考えよう～スピーチで社会に思いを届ける～」では、単元目標として次の二つが掲げられている。

・根拠となる情報の信頼性を確かめる。
・社会生活の中から話題を決め、相手を説得できるように、話の構成を工夫する。

この単元目標を達成するために、「新聞記事を活用して社会生活の中から話題を決めてスピーチをする活動」を設定した。

授業を行った１学期時点では「まな bell」を使用できなかったため、北海道新聞デジタル、毎日新聞、朝日新聞の３紙を使用した。

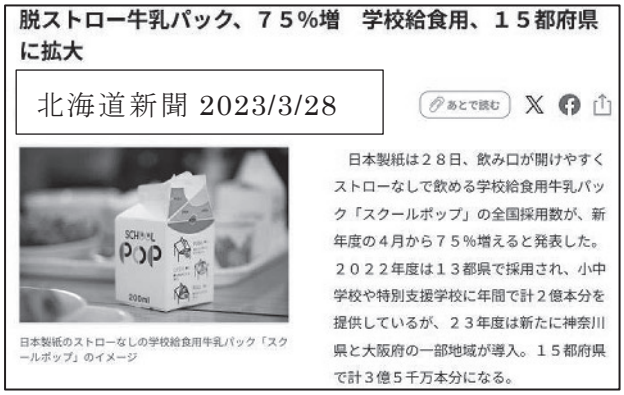
②単元の流れと各授業の目標

１.「過去の発表作品の評価活動を通して、自分の単元目標を明確化する。」

単元の導入として、過去のスピーチ発表動画を視聴して、単元を通して目指す姿の明確化をした。

２.「新聞記事を活用して、社会生活の中からスピーチテーマを決める。」

新聞紙の用意ができた３紙と北海道新聞デジタルを使用して、スピーチテーマとなる記事探しを行った。



脱ストロー牛乳パック、７５％増　学校給食用、１５都府県に拡大

北海道新聞 2023/3/28

あとで読む

日本製紙は２８日、飲み口が開けやすくストローなしで飲める学校給食用牛乳パック「スクールポップ」の全国採用数が、新年度の４月から７５％増えると発表した。２０２２年度は１３都県で採用され、小中学校や特別支援学校に年間で計２億本分を提供しているが、２３年度は新たに神奈川県と大阪府の一部地域が導入。１５都府県で計３億５千万本分になる。

日本製紙のストローなしの学校給食用牛乳パック「スクールポップ」のイメージ

３.「情報の信頼性を意識して、テーマに沿った情報を収集・整理する。」

新聞記事から決定したスピーチテーマに対する情報を収集・整理するなかで、根拠と主張の明確化を進めた。新聞記事のスクラップについては、Google スライドを使用した。

４.「構成を工夫して、社会に思いを届けるスピーチの原稿を書く。」

スピーチ発表に向けた原稿作り。スピーチ発表がメインであるため、原稿作りについては原稿用紙への手書きでも Chromebook 上に打ち込んでも良いものとした。

５.「スピーチで社会に思いを届ける」

学級生徒の前でスピーチ発表を行った。

③成果

日常的に新聞を読まない生徒にとって、「スピーチに必要な情報収集」といえばネット検索であり、ニュースを見るのもインターネットである。そうした生徒たちが、新聞紙を実際にめくりながら興味のある記事を探す経験は貴重なものであった。なかには、授業終了後も新聞を読んで、気になった記事のその後を追跡するなど、新聞の面白さを感じることができたようである。

また、北海道新聞デジタルでの記事検索や各紙一月分程度の新聞紙を用意したことで、事件・事故がその後どうなったかを追跡する楽しさに気が付いた生徒も見られた。

④課題

本校３学年は７クラス、２６３人が在籍しており、複数の学級で国語が実施されることも多く、新聞紙不足をまねいた。結果、北海道新聞デジタルを活用する生徒が増えてしまい、これまでのネット検索による調べ学習との差異が小さくなってしまった。

（２）「報道文を比較して読もう」

①取り組み

３学年国語「報道文を比較して読もう」では、東京五輪ボランティアについて報道した２紙の記事を比較し、気が付いたことや自分の考えを書く活動をする単元である。２紙の見出しは五輪ボランティアに肯定的・否定的の両面から報道したものである。

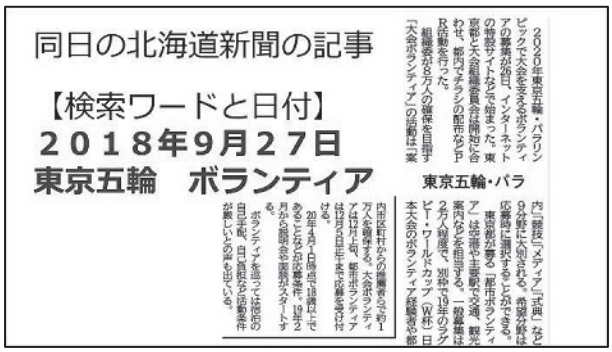
記事Ａ「東京２０２０へまず１００万人募集」
記事Ｂ「五輪ボランティア議論尽きぬ中募集スタート」

今回は「まな Bell」を活用して、教科書掲載の東京五輪ボランティアに関する報道が、その後どう変化したのか、「時間経過による新聞報道の比較」という視点で実践を行った。

②単元の流れと各授業の目標

１.「まな Bell の使い方と記事検索方法」

検索の練習として、教科書に掲載された記事と同日の、北海道新聞による東京五輪ボランティアの記事探しを行った。

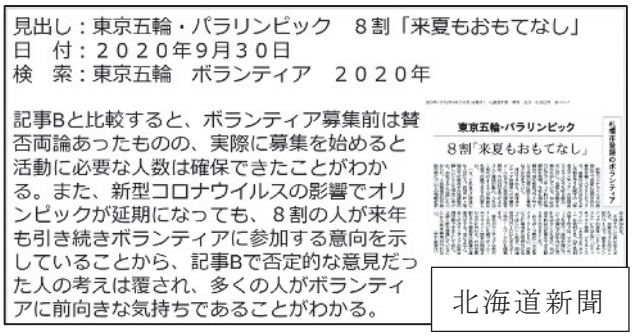


２.「東京五輪ボランティアのその後を追跡」

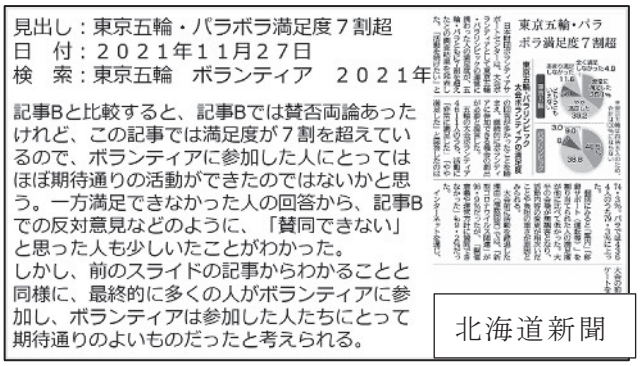
東京五輪ボランティアは「その後どうなったのか」また「周囲の評価はどうだったのか」をまな Bell の記事検索を使って調べ、２０１８年９月２７日の記事と比較してわかったことを、Google スライドを使って書く活動を行った。

なお、記事の選定は新聞紙に掲載された際の紙面の切抜画像である、「切抜イメージ」があるものに限定した。

次のスライド画像は、生徒が実際に切抜イメージのある記事と教科書の記事Ｂ「五輪ボランティア議論尽きぬ中募集スタート」とを比較したものである。



生徒によっては、複数の年度にまたがって追跡・比較をするなど学びを深めた。



③成果と課題

同時に１００人までアクセス可能な「まなBell」を使用したことにより、新聞紙不足が解消されてスムーズに活動を進めることができた。時間が余った生徒は自分の誕生日の新聞記事を閲覧するなど、新聞記事検索の楽しさを知ることができたようである。

（３）「おすすめニュース」で面接対策

「まなBell」では、当日の北海道新聞の一面記事やおすすめニュースの紹介がある。普段新聞を読まない生徒でも、最新ニュースに触れられるので、高校入試の面接対策に役立つと考え、積極的に活用するよう働きかけた。

（４）学校図書館の取り組み

本校の学校図書館では、数年前から独自にＮＩＥの取り組みを継続して行っており、学校図書館司書が中心となって新しい情報を常に更新し、新聞の面白さを伝えている。

①掲示物「特集記事」「記事の比較」

新聞記事をただ掲示するのではなく、写真のように大谷選手の関連記事を特集として掲示することで読み手の興味を引く工夫がなされている。普段新聞を読まない生徒でも、大谷選手の記事なら思わず立ち止まるようである。

２枚目の写真は新聞記事の比較である。能登地震関連記事を、地方紙の北海道新聞と全国紙の読売新聞両紙で掲示している。記事の比較については、国語科でも授業実践を行っている部分である。

②図書館での特集「新聞記事と関連図書」

図書館前の廊下には、新聞記事に関連した図書が並べられている。新聞記事から興味をもった本に手を伸ばす生徒はもちろんだが、自分が読んだ本と関連のある新聞記事にたどり着き、知識の幅を広げるきっかけとなることも考えられる。

学校図書館ニュースと新聞記事と関連図書も展示されている。あらゆる情報と書籍とが関連付けられているので、思わず手に取りたくなる。

４．成果と課題

（１）成果

授業実践を通して感じたのは、「まな Bell」の利便性の高さである。これまでは、生徒数分の新聞紙が必要であったが、「まな Bell」があれば生徒が自分の端末でアクセス可能である。さらに、授業以外でも新聞記事を読むことができるのは大きなメリットである。これは新聞に触れる機会の少なかった生徒たちが、ニュースに対して自分の考えや感情を豊かにして新聞と向き合うきっかけとなったと考えられる。そして、何よりも「主体的に学習に取り組む態度」の育成に向けては、いかに教材を工夫して生徒の興味関心を引き出すかが重要である。この点に関し、新聞の教材的価値が高いのは間違いない。

（２）課題

新聞を教育に活用することの効果は大きく、生徒の主体性を育むことは間違いないが、教科の実践だけにとどめてしまうと、どうしても継続した取り組みにならない。本校では、学校図書館司書が積極的に取り組みを行ってくれているが、連携に向けた働きかけをすることはできなかった。今回の実践発表に向けて取り組み紹介の許可を得たことをきっかけに、連携を図っていきたい。

なお、「まな Bell」を活用するうえでの注意点は利用時間の制限があること。平日の午前８時から午後７時までとなっており、教材研究や授業準備の際は注意が必要である。

５．おわりに

効果的な新聞活用をより確かなものにするためには、学校として継続的に取り組んでいく必要がある。今後は、学校図書館や各学級担任との連携など、NIE を学校の活動とする道を探っていきたい。

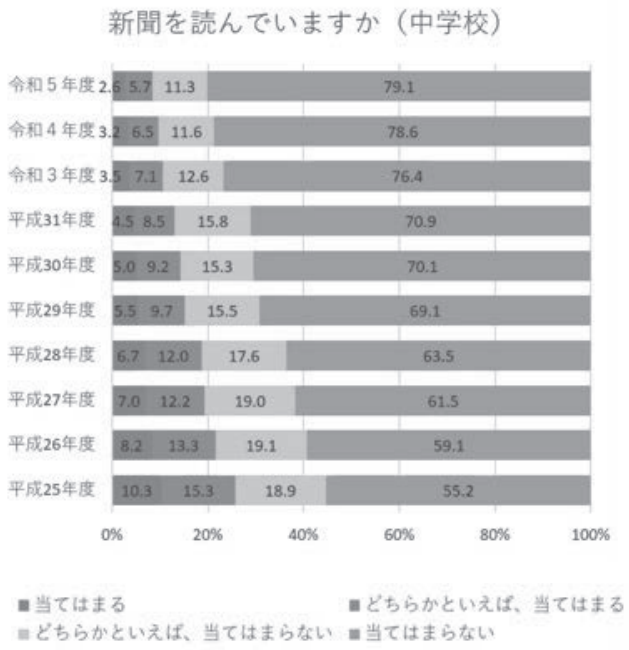
２０２３年度　NIE 実践報告

情報活用能力を育成するＮＩＥを目指して

旭川市立永山中学校　教諭　鏡　拓也

１．本校生徒と新聞との距離感

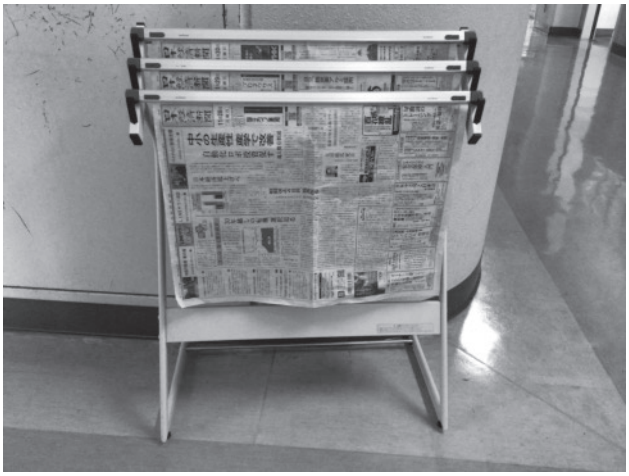
旭川市立永山中学校は、今年度から実践指定校の仲間入りをさせていただき、日常の学校教育の中に、NIE を展開する機会を増やしている最中である。年度当初、NIE を今後の教育課程に位置付けていくにあたり、まず、生徒が「新聞」をどのように捉えているのかを確認する必要があった。



全国学力学習状況調査生徒質問紙

このように、新聞との距離感が近い生徒の割合は年々減少傾向（令和５年度は８．３％）にあり、どんな形にせよ、新聞にふれる機会を増やしていくことが肝要であろうと考えた。

本校においても、新聞を定期購読している家庭は多くない。実践校として指定していただいたおかげで、新聞にふれる機会が徐々に増えてきている。



各階に設置した新聞コーナー

また、図書館司書と協力して、特に北海道や旭川に関わる「地元」を取材した新聞記事を図書館前廊下に掲示している。後述するが、本校の総合的な学習の時間は、旭川という「マチ」を多角的に考えたり、自分の興味のある分野を探究したりする活動を行っている。旭川のインフラから、旭川の各方面で働く人々、旭川の市政まで、３年間で系統立てて学習を展開しており、その資料としての役割も果たしている。

自分のレポート作成に参照する場合もあり、繰り返し確認しに来る生徒もいるようだ。中学生に読んでほしい記事も一緒に掲示してくれており、協力して NIE を展開していく準備が整いつつある。

図書館前新聞掲示コーナー

ある生徒がこう言う、「iPad があるのだから、知りたいことはインターネットで検索した方が早い」と。では、端末にあって新聞にないもの、端末になくて新聞にあるものとは何だろうか。NIE について考えていく中で、この問に明確に答えることができなければ、生徒と新聞との溝は、なかなか埋まらないように感じた。

NIE を展開して１年目。まだまだ、実践を積み重ね、試行錯誤していく過程ではあるが、前述の問に対する私の答えとしては、「自分を取り巻く社会に関わるトピックにふれる機会の保証」である。

現行の学習指導要領について議論する上でのキーワードとして、「将来の予測が難しい社会」が挙げられる。このような社会になっていくからこそ、様々な情報を主体的に捉えながら、何が重要なのかを自分なりに考え、そこから見出した情報を活用して、他者と協働していく能力が求められる。

様々なトピックに触れ、自分から捉えた情報を用いて他者に働きかけ、そこから新たな価値を見出すこと、これこそが新聞にふれなければ身につかない能力であり、端末と新聞それぞれが共存していくための大切な要素になるのではないだろうか。

２．本校の実践について

「どうしん　まなbell」のホーム画面

本校が仲間入りさせていただくタイミングに合わせて、記事データベース「まなｂｅｌｌ」を導入させていただいた。このデータベースには、北海道新聞の記事が蓄積されており、本校では、主に総合的な学習における資料として活用している。また、「まなbell」は、2023 年 11 月に小中高生向けの総合デジタル教材「どうしん　まなbell」としてリニューアルされた。

従来の機能に加え、毎日の主要なニュースがわかる「今日の朝刊１面」や、週３回配信される「おすすめニュース」などの機能が追加され、生徒がより様々なトピックに触れるとができるようになった。

NIE を展開していく上で最も活用できる記事は、やはり「地域面」であろう。生徒にとって、「旭川」に関係した記事は興味があり、読み進めたくなる。もっと関連記事を読みたいと思った時に、すぐに調べられる利便性がよい。今後も、ICT を活用した探究活動を支える教材として期待される。

まだまだ、NIE を展開していくための試行錯誤をしている最中ではあるが、年間を通した取組の中で、根付きつつある学習活動を次に紹介していく。

①　朝の NIE タイム

朝の NIE タイムの様子

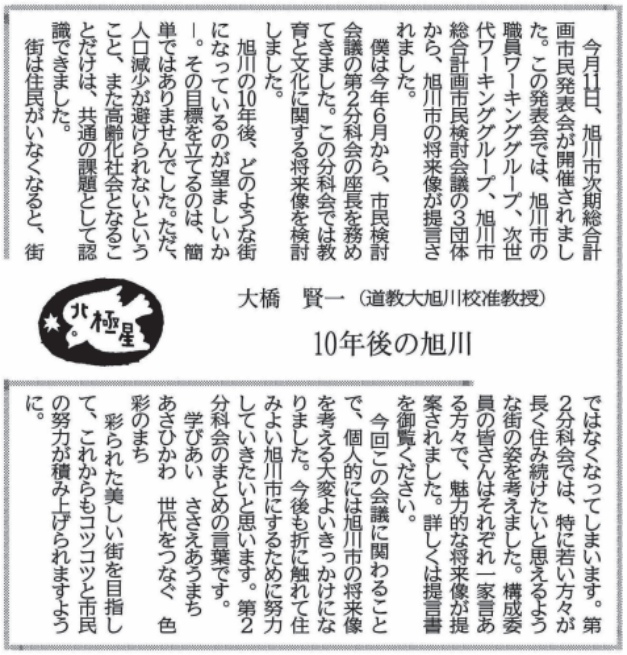
本校では、登校後の１０分間を朝の学習時間として、読書やタイピングの練習など、日替わりで様々な活動を行っている。

その中の一つ、毎週金曜日は「朝の NIE タイム」と題して、北海道新聞社のワークシートに取り組んでいる。前述した通り、新聞記事の魅力は、一つの紙面に様々なトピックがあることである。時間が限られているので、毎回１枚のワークシートしか取り組むことができないが、年間を通して考えてみると、かなりのトピックにふれることができる。

特に、旭川に関わる記事については、より主体的に読もうとする意欲を感じる。自分を取り巻く社会の出来事を、自分事として捉えることができない生徒も散見されるが、「地元」に関わる記事には興味がある。身近な事象に、自分なりの意見や感想をもつことにより、思考力や判断力は、徐々に磨かれていく。

新聞に親しむ機会を保証でき、さらに意図のあるワークシートに取り組むことで、各種能力も向上していくと、一石二鳥の取組である。担任の先生方からは、特に文章の要点を捉える能力が向上しているとご好評いただき、本校生徒の課題である読解力の指導にも一役買っている。

②　総合的な学習の時間の資料として



今月11日、旭川市次期総合計画市民発表会が開催されました。この発表会では、旭川市の職員ワーキンググループ、次世代ワーキンググループ、旭川市総合計画市民検討会議の3団体から、旭川市の将来像が提言されました。

僕は今年6月から、市民検討会議の第2分科会の座長を務めてきました。この分科会では教育と文化に関する将来像を検討しました。

旭川の10年後、どのような街になっているのが望ましいか―。その目標を立てるのは、簡単ではありませんでした。ただ、人口減少が避けられないということ、また高齢化社会となることだけは、共通の課題として認識できました。

街は住民がいなくなると、街ではなくなってしまいます。第2分科会では、特に若い方々が長く住み続けたいと思えるような街の姿を考えました。構成委員の皆さんはそれぞれ一家言ある方々で、魅力的な将来像が提案されました。詳しくは提言書を御覧ください。

今回この会議に関わることで、個人的には旭川市の将来像を考える大変よいきっかけになりました。今後も折に触れて住みよい旭川市にするために努力していきたいと思います。第2分科会のまとめの言葉です。

学びあい　ささえあうまち
あさひかわ　世代をつなぐ　色彩のまち

彩られた美しい街を目指して、これからもコツコツと市民の努力が積み上げられますように。

大橋　賢一（道教大旭川校准教授）

北極星

10年後の旭川

北海道新聞夕刊（2014 年 11 月 19 日）

本校の総合的な学習の時間は、旭川という「マチ」を多角的に考えたり、自分の興味のある分野を探究したりする活動を行っている。特に３年次では、「１０年後の旭川の市政」について考える学習している。

旭川市の広報広聴課の取組に「未来創造ポスト」というものがある。このポストには「アイデアポスト」と「改善ポスト」の２種類があり、特に前者は、市政やまちづくりに対する提案を自由に投稿できるものとなっている。

本校の生徒は総合的な学習の時間を通して、２年次までに、市内のインフラや未来を拓く人材の育成について探究活動を行うことに　なっている。３年次では、これまでの知識の蓄積を活用して、「医療・福祉・観光・教育・治安」など、授業者が示したいくつかの分野から、最も興味があるものを選び、その分野に関わる自分の提案を「アイデアポスト」に投稿することを課題としている。

そもそも、斬新なアイデアを旭川市は求め

ているので、これまでの各分野におけるアイデアを遡る必要がある。そのために「どうしん　まなbell」を活用させ、自分の提案をまとめる上で参考になる記事をスクラップさせた。また、同じ分野を選んだ生徒同士でスクラップした記事を交流させ、多角的に提案を考えるように促した。

次の記事は、旭川市政施行１００年を記念したイベントの概要を報じたものである。

きょう、あす 旭川100フェス

荻野目洋子さんやDA PUMP出演

メインステージの日程（16日）

午後0時5分	開会宣言
10分	オドリバ
30分	ファイターズガール
50分	AKB48 Team8
午後1時45分	プラチナボーイズ
午後2時15分	w-inds.
55分	MAX
午後3時35分	荻野目洋子
午後4時15分	DA PUMP
午後5時30分	ディスコナイト
午後6時15分	花火

※敬称略

北海道新聞朝刊（2022年10月15日）

秋の「食べマルシェ」や冬の「雪まつり」など既存の大きなイベント以外にも、人を集めるイベントをしたいという提案を考えた生徒が、北海道や旭川の各種イベントの関連記事を主体的に読み込み、旭川のスイーツに特化したイベントの企画を提案していた。将来はパティシエを目指しており、そういう魅力的なイベントに溢れる「マチ」に帰ってきたいという志を周囲に発表していた。

さらに、「地域面」を読み進めていく中で、買い物公園の集客力の衰退による空き地化や駐車場の増加を問題視した記事にふれた生徒が、次の記事のような、広場や空き地の有効活用に関連した記事を積極的に読み込み、自分のアイデアの参考にしていた。

旭川駅前広場 活性化へカフェ

促進会議 冬の催しも計画

北海道新聞朝刊（2017年8月2日）

授業者の願いとして、３年間の探究活動を通して、自分の「マチ」の魅力を再発見し、ゆくゆくは地元で力を発揮してほしいという思いがある。系統立てて丁寧に学習をしていくと、３年次には自立した学習者として、「マチ」の将来像を主体的に考えることができるようになる。今回の取組では、130以上の提案を広報広聴課に投稿できた。自分の提案を実現できる旭川人として、こつこつとその努力を積み上げていってほしいものである。

３．おわりに

本校の２年生を対象（１５４名）にしたアンケートでは、新聞を定期購読している家庭は１０％に満たない。ただ、「新聞掲示コーナー」や「今日の朝刊１面」によって、翌日の新聞を楽しみに待ってくれている生徒が増えている。また、総合的な学習の時間を通して、記事データベースの活用の仕方も向上し、自分の意見に過去の記事を参照する生徒も増えてきた。

今後は、全学年において新聞記事を自分の意図通りに活用できる情報活用能力の育成を目指して、NIEを展開していきたい。

２０２３年度　NIE 実践報告

伝わる表現を目指して

札幌市立真栄中学校　教諭　遠藤　翔太

１．はじめに

２年前に NIE 全国大会で授業をさせていただいたことから始まり、実践は今年度で３年目である。昨年度の実践では、「三角ロジック」と新聞記事を比較して読むことで、読解力の向上をねらう取り組みを中心に行った。

課題として、三角ロジックの難易度が高いと感じる生徒が一定数いることがあげられた。したがって、①生徒が自分でロジックを使用できるように、難易度の設定をより細かくしていくこと。②投書など、意見文のような形式の記事を多く取り扱うことで、論理の展開への理解が深まると考えた。

また、私が新聞記事を選んで配布していることから、やや内容の偏りがあることも課題として考えられた。

２.児童（生徒）の様子

本校の生徒は、国語に対する学習意欲が高く、難しい学習課題に対しても楽しみながら取り組むことができる。一方で、読解力や記述に対する力はまだ努力を要する段階である。そのため、授業では学習課題と多く向き合うことができるように意識して設定している。

また、家庭での新聞購読率が高くない現状がある。新聞が生徒から遠い存在となっていることが原因となり、新聞が単なる事実のみが記載された文章、としてしか生徒が捉えられていないことが課題となっている。

３．実践の内容

①　授業での継続的な取組

過去２年間の実践では、新聞を読む機会を多く設けることが、生徒の力を伸ばす方法である、と考えた。そのため、週一回授業中に新聞記事を読み比べることを年間通して取り組み続けた。

今年度は、過去の取り組みを継続しながらただ読むだけではなく、「根拠」により注目して、三角ロジックを含めた論理の展開について考えることを中心に据えた。そのうえで、「ぶんぶん time」に三角ロジックを用いて自分の意見を明確にした文章を投稿することを行った。

②　３年間の国語学習のまとめとした取組

三角ロジックを使う際の難易度を適度にすることを考え、３年間の既習事項を用いた学習を設定した。題材は、小学生に向けた文章で、中学生になる前に「小学生のうちにしておくとよいこと」とした。文章の内容はもちろんのこと、構成や形式、文体、表現について一切指定することをせず、生徒自身が伝わる方法として何が最良なのかを考え表現することをねらいとした。

また、教師側での記事の偏り解消、多くの新聞記事を扱いたいことから「まな bell」を使用した。多くの記事を比較して読めるだけでなく、自分にとって有用な新聞記事を探し、根拠として引用することができるため、有用性が高いと考えた。

自分に必要な情報を複数の記事を読みながら求めることで、表面的に読んでいては適当な根拠となるものは探せない。したがって、似たような記事を比較しながら生徒が深く読み進めて理解することをねらいとした。

４．成果と課題

（１）成果

大きな成果としてあげられることは、①三角ロジックをより良い形で使用できたこと。②様々な内容の記事を比較して読むことができたこと。③記事の根拠について深く読みとれたこと。があげられる。

① 三角ロジックの最適な使用

昨年度の課題である、「三角ロジックの難しさ」への対処として、文章の内容を生徒自身が伝えたいこと、に設定することとした。今までのように三角ロジックを使って文章を書く、のではなく、「自分の伝えたいことを伝えるためにロジックを使う」ことでより平易になったように思う。

また、多くの記事を読むことで論理の展開について考える機会が多かったことも、ロジックの理解につながったと考える。

② 「まな bell」の有用性

昨年度までも比較して読むことの効果を実感していたが、自分が求めている情報を得るために比較して読むことは、より効果が得られるように思う。理由として、根拠に対しての読み取りが深くなること、自分の文章に適した論拠（理由）であるのか、に注視するためである。

また、今までは多くて３つの記事を比較することに留まっていたが、「まな bell」を使うことで少なくとも８～１０以上の記事を比較して読むことができた。これだけの数を比較すると、より良い根拠にたどり着けるだけでなく、多くの記事と自分の文章の内容を比較しながら文章の推敲も同時にできるため、表現がより良いものになった。

（２）課題

３年間の継続は大きな成果をもたらした。今年度の取り組みでは、生徒自身が伝えたいことを設定することで、表現力や読解力の伸長、興味関心を伸ばせることもわかった。そのため、①より自分の考えを表現する機会を設けること。があげられる。また、「まな bell」は優れたツールであることも実感できたが、②生徒が新聞で使われている言葉で検索できない場面があり、記事が見つからない。という課題もあった。

①はぶんぶん time を年一回ではなく、学期ごとに取り組ませることで、表現の機会が確保できる。②に関しては、基礎的な語彙力の向上や、和語と漢語の知識が求められるが、教科書教材では限界があるため、「まな bell」を継続して使用し、多くの記事に触れることで自ずと語彙力が伸びると考える。

５．おわりに

今年度の実践を経て、生徒はこの三年間で新聞教材を通して着実に読解力、表現力を伸ばしていると実感した。また、「まな bell」を活用することで、できることの幅がさらに広がったように思う。次年度も継続して取り組み、効果的な活用方法について深めていきたい。

【単元の目標（単元構成)】

・情報の信頼性の確かめ方を理解し使うことができる。　　（２）イ　（知識・技能）
・「書くこと」において，文章の種類を選択し，多様な読み手を説得できるように論理の展開などを考えて，文章の構成を工夫することができる。B（１）イ　（思考・判断・表現）
・言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を通して自己を向上させ、我が国の言語文化に関わり、思いや考えを伝えあおうとしている。　　（主体的に学習に取り組む態度）

【説明的文章における年間指導計画】

1　「作られた物語を超えて」
①根拠と意見を段落ごとに区別する。
②具体と抽象の表現を捉える。
③多段階式三角ロジックの構成を捉える。
④論説文を参考にしながら意見文を書く。

2　「人工知能との未来」
①論拠の段落と事実的主張を捉える。
②論説文の文章構成と、論理の展開（類似の事例）を考える。
③三角ロジックで根拠、論拠、結論を捉える。

3　「人間と人工知能と創造性」
①論拠の段落と事実的主張を捉える。
②「人工知能との未来」と論理の展開を比較する。
③三角ロジックで「人工知能との未来」を比較し、論拠と根拠の違いによる表現について考える。
④AI について書かれた新聞記事を３つ比較して読み、chatGPT を教科で効果的に使用できる場面についての論文を書く。

4　「誰かの代わりに」
①具体的表現と抽象的表現を捉える。
②論理の展開を捉える。
③解説文の文章構成と論理の展開を捉える。

5　「小学生のうちにやったほうがいいこと」
①より良い中学校生活のために、小学生でしておいたほうが良いことを考える。
②文章の構成や表現など、伝わる方法について考える。
③考えに基づいて文章を書く。
④「まな bell」を使用して、文章の根拠を明確にし、論理の展開などを考えて文章を推敲する。
⑤推敲した内容をもとに、文章を完成する。

【本時の目標】

①本時の目標

・情報の信頼性の確かめ方を理解することができる。　　（２）イ　（知識・技能）

・「書くこと」において，文章の種類を選択し，多様な読み手を説得できるように論理の展開などを考えて，文章の構成を工夫することができる

B（１）イ（思考・判断・表現）

・新聞記事からふさわしい根拠について粘り強く考え，学習の見通しをもって考えたことを文章にまとめようとしている 。

（主体的に学習に取り組む態度）

【指導計画】

②本時の展開（４/５時間目）

・前時までに書いた自分の文章の根拠について考える。

・「まな bell」を使用し、新聞記事を比較して読むことで自分の文章の根拠が明確になるよう、適切に引用する。

・４人１組の学習形態で自分が見つけた記事や検索ワードの交流をする。

・交流した意見を参考にしながら，さらに記事を比較して読み、よりよい根拠を探す。

・論理の展開について考えながら、文章の修正をする。

③評価について

・情報の信頼性の確かめ方を理解している。

（知識・技能）

・多様な読み手を説得できるように論理の展開などを考えて，文章の構成を工夫している。（思考・判断・表現）

・自分の文章にふさわしい根拠を探し、論理の展開に役立てようとしている（主体的に学習に取り組む態度）

２０２３年度　NIE 実践報告

学校図書館から広がるＮＩＥ

～生徒の学びとメディアをつなぐ学校司書が支援する NIE 活動～

札幌市立栄町中学校　学校司書　児玉　優子

１．はじめに

本校は、札幌市東区に位置する生徒数 535 名、学級数 20 学級（通常級 14、特別支援級 6）の中学校である。NIE 実践指定校 2 年目となり、昨年度同様、学校図書館を中心に NIE 活動を行っている。

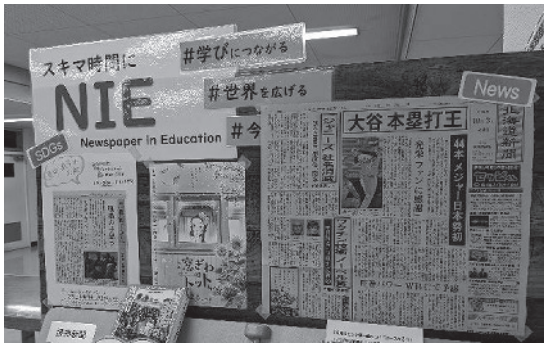
実践代表者は週 15 時間勤務の会計年度任用職員の学校司書であるが、司書教諭をはじめ各教科や特別支援級の教諭の協力のもと、今年度は授業や各種活動の中で新聞を活用した取り組みを広げることができた。

２．実践の内容

（１）新聞を身近に読める環境整備

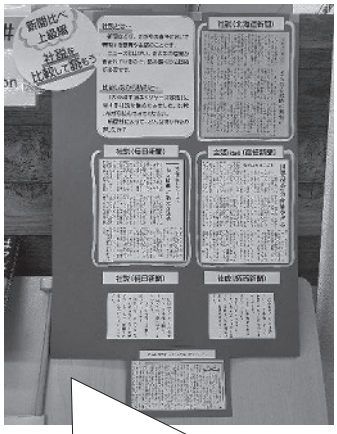
①スキマ時間に NIE

今年度も、生徒や教職員の目に留まりやすい 2 階職員室前ホールと 3 階の学校図書館前掲示板の 2 か所に「スキマ時間に NIE」コーナーを設置し、休み時間や放課後のわずかな時間でも新聞に触れることができるよう整備した。注目記事をピックアップして掲示することで新聞本紙に誘導し、併せて関連図書等を展示することで記事への理解を深め、興味関心を広げることにつなげた。



②9 月～12 月限定「新聞読み放題月間」

新聞が複数紙届く 9 月～12 月を「新聞読み放題月間」とし、「新聞は比べるとおもしろい！」を実施した。毎日の 1 面比べのほか、同じテーマで書かれたコラムや社説を比較して読めるよう掲示し、さらに新聞の見方や比較のポイントを示すことで、生徒の理解をサポートした。



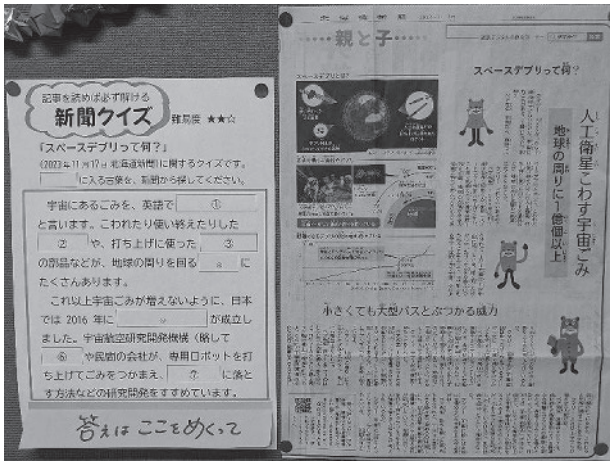
新聞比べ上級編「社説を比較して読もう」
テーマは、「大谷翔平選手のドジャーズ移籍」。
北海道新聞、毎日新聞、産経新聞の社説と、日本経済新聞のコラム（いずれも 2023 年 12 月 12 日）を掲示。朝日新聞と読売新聞は別日でも社説での取り扱いがないことを記し、新聞社による報道の違いを示した。

（２）新聞を読んで読解力アップ

「記事を読めば必ず解ける！新聞クイズ」

新聞記事をしっかり読ませるために、学校図書館前の掲示板に「読めば必ず解ける！新聞クイズ」を週替わりで提供した。一問一答、三択、穴埋めなどさまざまな形式で問題を作成し、記事と一緒に掲示した。休み時間や放課後に、答えさがしのゲーム感覚で友人と問題を解き合っている姿がよく見られた。

北海道新聞　2023 年 8 月 24 日



北海道新聞　2023 年 11 月 17 日

（３）教科・授業での活用

①新聞レポート／国語科（全学年）

生徒の読解力向上を図るため、毎月全学年で新聞コラムを視写・要約する課題「新聞レポート」に取り組んだ。学年に応じた内容となるよう、使用するコラムの選択には学校司書も協力している。

回を重ねるごとに、課題に取り組む生徒の要約の精度が上がってきているのを見取ることができた。

【使用コラムの一例】

○1 年生「ゾウの赤ちゃん」

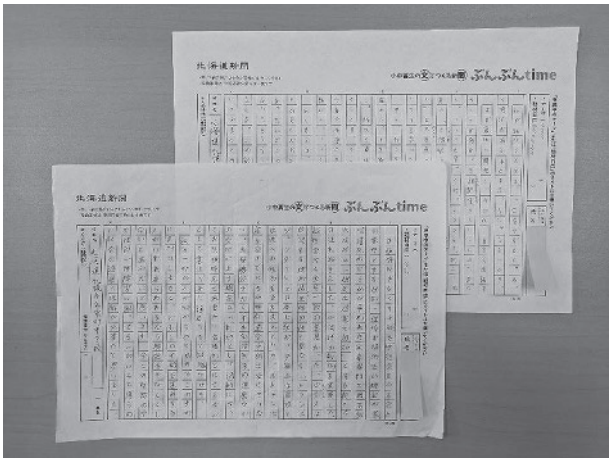
（北海道新聞 卓上四季　2023 年 8 月 22 日）

○3 年生「便利とは何だろう？」

（朝日新聞　天声人語　2023 年 9 月 24 日）

②新聞記事でスピーチ／国語科（全学年）

昨年度に引き続き、国語科のスピーチ単元で新聞記事を活用した。学校図書館で保管している最近の新聞から興味をもった記事を選び、要約、それに対する意見を作文にまとめ発表した。今年度は全学年で取り組み、作文を北海道新聞「ぶんぶん time」に応募した。



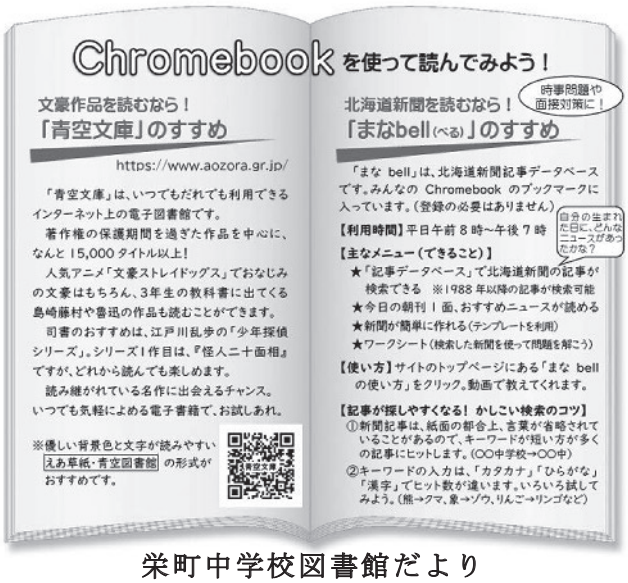
③報道文を比較して読もう／国語科（3 年）

報道記事を読み比べ、情報の伝え方によって相手に与える印象が変化することを知り、日常生活での情報への触れ方を考えることをねらいとして、3 年生国語科で実施した。使用する記事については、授業者と内容や文字量、比較・評価のしやすさを共有し、最近の話題から生徒が意欲的に取り組める記事をいくつかピックアップした。実際に使用したのは「米国版はやぶさ帰還」の記事（2023 年 9 月 25 日付）で、生徒は北海道新聞、読売新聞、朝日新聞の各記事を読み、見出しや内容、伝え方の比較を行った。

④新聞記事で言葉調べ／特別支援級（国語）

特別支援級では、国語科の授業として、新聞記事にルビがふってあり読み解きやすい『北海道小学生新聞』を活用して、「好きな漢字、気になった漢字を調べよう！」「しらない単語を書いてみよう」のワークに取り組んだ。

新聞は学校図書館で保管していた昨年のバックナンバーで、情報は古いが教材として使用するには十分である。さまざまな言葉や漢字に出会うきっかけになったほか、国語辞典を使って調べる学習にもつながった。



栄町中学校図書館だより
（2023年12月13日号）より抜粋

⑤新聞ワークシート／特別支援級（国語）

学校図書館で登録している「読売ワークシート通信」を特別支援級に提供した。学習の進度に合わせて定期的に活用している。ワークシートから関連した話題に発展することも多く、自ら発表したり、他者の意見を聞いたりする機会になった。

【使用ワークシートの一例】

2023年11月1日配信　読売新聞ワークシート通信
「辰」カラフルに愛らしく

自分や周りの人の干支について話したり、干支に出てくる動物を調べたりする学習につながった。

（4）「どうしん まな bell」の活用

①全校生徒への広報

2学期から導入された北海道新聞記事データベース「どうしん まな bell」について、学校図書館だよりで全校生徒に伝えた。利用方法のほか、記事検索のコツを簡潔にまとめ、生徒の利用を促した。

②図書局活動での活用

新たに追加された新聞制作機能を活用して、冬休み長期貸出イベント情報を掲載した「町中図書局新聞」を図書局員で作成し、各学級に掲示した。

新聞名をはじめ見出しと記事の入力やデザインの選択が画面上でわかりやすく、生徒から「とても簡単に作業ができた」「新聞作りはおもしろい」という感想があがった一方、「見出しの文字数が決まっているので、言葉選びが難しかった」という声も聞かれた。

実際の新聞を見て、紙面構成を確認しながら作業を進めた。

（５）古新聞の活用

学校図書館での新聞保存期間について、特に定めはないが、本校では、学習に役立つ記事をファイリングしたのち、司書室で１年間保存している。廃棄する前の活用についても考えたい。

①チームワークの向上に「新聞タワー対決」

「新聞タワー対決」は、どのグループが新聞紙で一番高いタワーを作れるかを競うゲームで、チームワークやコミュニケーション力を養うことができると言われている。2 学年の学年集会で行われた「新聞タワー対決」で、学校図書館に保存していた１年前の新聞（廃棄予定）を活用することができた。

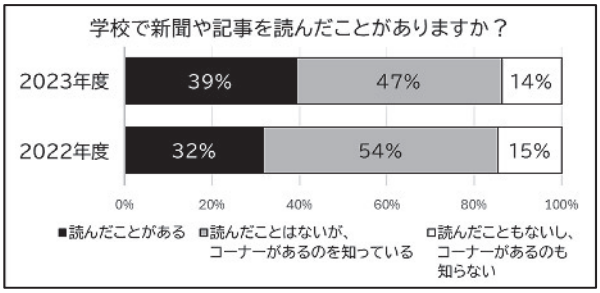
②エコバッグ・災害グッズ工作

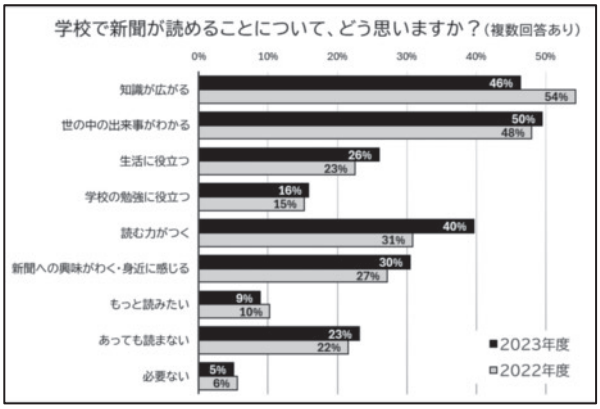
廃棄予定の新聞の中から、きれいな広告や写真など見栄えのする紙面を選んでエコバッグを作成し、図書館内で作り方の本と共に展示した。また、緊急時に知っていると役に立つ新聞紙スリッパや紙皿も作成し、現物展示として防災に関する本と共に展示した。

これらの新聞工作は、希望者を募ってワークショップを開催したいと考えていたが、今年度は計画できず断念した。

【参考資料】
『まさこおばちゃんの新聞エコバッグの作り方』
坂上政子／著　小学館

３．成果と課題





校内「読書と図書館についてのアンケート」
◆回答数：2022 年度 302 名　2023 年度 315 名

アンケート集計を見ると、「学校で新聞や記事を読んだことがある」と回答した生徒が今年度は 4 割近くおり、また、学校で新聞が読めることについて「読む力がつく」と感じている生徒が昨年度より大きく増えた。回答者が同じではないので一概に比較はできないが、新聞コーナーが定着し、「読めば必ず解ける！新聞クイズ」をはじめ掲示やコメントの工夫、そして毎月の新聞レポートなど学習場面での活用の成果だと考えてよいだろう。

さらに、今年度は教科や各種活動で新聞活用の場が広がり、生徒の学びにも新聞という新たなアイテムが加わった。確実な情報を入手する手段としてはもちろん、限られた字数で書かれる整った文章にふれる機会からの学びの蓄積を注視していきたい。

最後に、NIE 活動において、新聞の収集整理から提供、教諭への活用事例紹介など、地道な取り組みではあるが、学校図書館が担う役割は大きい。今後も学校図書館と連携した NIE 活動が展開されることを期待している。

２０２３年度 NIE 実践報告

深い思考をファシリテートする新聞活用

標津町立標津中学校　教諭　外川　篤司

１．はじめに

「日本で最も美しい村」連合に加盟する人口約 5,000 人の標津町。ポー川史跡自然公園は、国指定史跡「伊茶仁カリカリウス遺跡」と国指定天然記念物「標津湿原」からなる総面積 630ｈａの広大な保護区域であり、歴史文化のストーリー「鮭の聖地の物語～根室海峡１万年の道程～」は 2020 年に文化庁主催の日本遺産に認定されている。

町内には、認定こども園２園・小学校２校・中学校２校、高等学校１校の教育施設がある。標津中学校は、現在５学級(特別支援２学級を含む)で生徒数は 74 人である。

町の教育に対する理解は深く、今年度は、多様な性に対応するために、標準服を詰襟・セーラーからブレザー型へ変更。標準服購入費に相当する額を入学祝金として支給した。また「グローカル人材」の育成を目指して修学旅行の行先を長野県・東京都に変更し、旅行費用の一部を補助。昨年度からは、「個別最適な学び」を促進するためにＡＩ教材を導入するなど、未来を担う子どもたちと教育現場への支援が手厚い。

標津町の新聞購読数は全世帯の約 50%。標津中学校の生徒で、新聞を購読している家庭は約 30%。全国学力学習調査質問紙においては、新聞をほとんど、全く読まない生徒の割合は下記の通りである。

年度	標津中	全国平均
３年度	91.3%	76.7%
４年度	87.5%	79.0%
５年度	**68.2%**	**79.4%**

★新聞を「ほとんど、全く読まない」中３の割合

実践指定１年目の 2022 年度は、生徒たちが自ら進んで新聞を読んでしまう(**読まさる**)**環境づくり**に取り組んだ。

２年目となる 2023 年度は、各教科の単元や１単位時間の「ねらい」に近づくために、深い思考を促す(ファシリテートする)ツールとして新聞を活用した。その一部を記すとともに「新聞好き」を自認する本校３年生へのインタビュー内容を紹介する。

２．実践の概要

(1) 新聞データベースを活用した授業

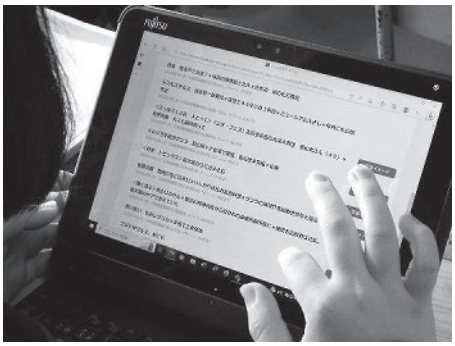
① 単元名

１学年理科　新しい科学１（東京書籍）
単元４「大地の変化」
第３章「地層から読み取る大地の変化」

② どうしん記事データベース「まなbell」で化石に関する記事を検索する

「まなbell」は１アカウントで同時に 100 端末が接続可能であり、調べたいキーワードを入力するだけで、過去 35 年分の記事を閲覧することができる。道内や身近な地域の記事が多く、生徒たちが「自分事」として主体的に考えることに有効である。

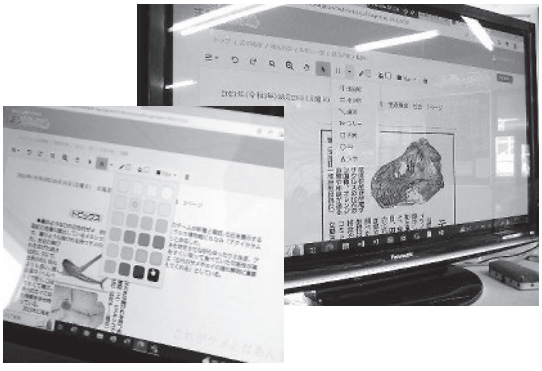
③ 興味を持った記事を各自１つ選ぶ



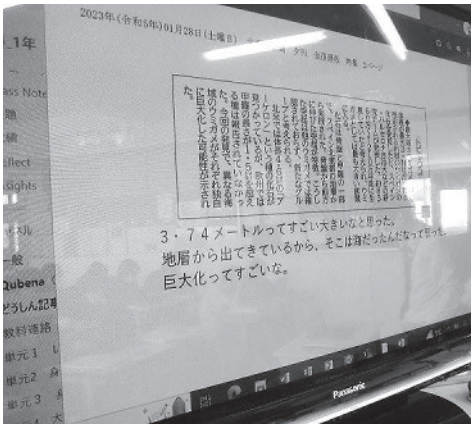
新聞記事の優れている点の１つが「見出し文」のわかりやすさである。検索結果一覧には、それぞれの記事の「見出し」が表示されており、生徒たちにとっては興味関心に合った記事を選びやすい。

本単元において生徒たちが選んだ「化石」に関する記事は、国際的な出来事から根室管内のことまで多種多様であり、興味関心の幅の広さと「個性」がうかがえた。

④ 「手書き機能」を使って、記事に自分の考えや感想を書き込む

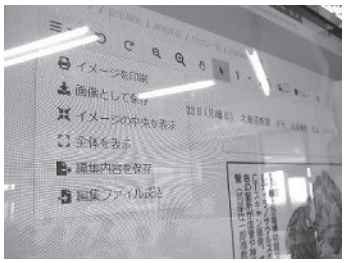


「まな bell」には簡単・便利な手書き機能があり、考えたこと・感じたことを書きこんだり、タッチペンで手書き風のコメントを入れたりすることもできる。また、強調したい部分にマーカーで色を付けることもできるため、新聞記事を素材にして自分の考えを主張する「オリジナル作品」に仕上げることが可能である。



⑤ 「作品」を画像として保存し、クラウド上にアップして共有する。

「オリジナル作品」は「まな bell」の機能を使って画像として保存できる。



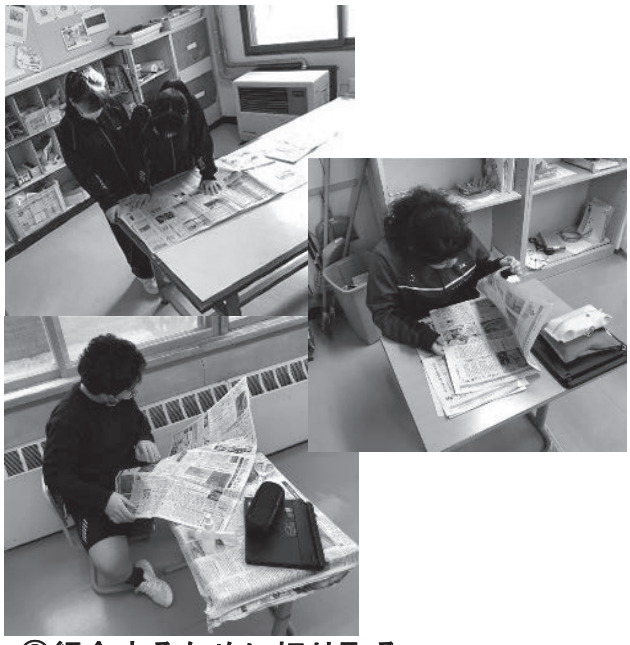
その画像をクラウド(Microsoft　Teams)に投稿することで、友達の作品を生徒全員が閲覧することが可能である。

一人一台端末＋新聞データベースで「個別最適な学び」と「協働的な学び」のハイブリッドが可能となり、深い思考をファシリテートできると考えている。

(2) 特別支援学級における新聞を活用した取り組み①

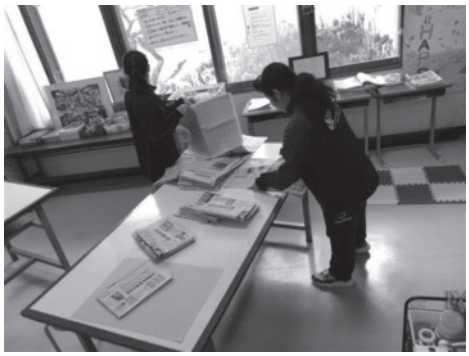
①まわし読み新聞

「興味・関心」から記事を選ぶ。見出しからじっくり読む。(集中力) 読める文字から探す。



②紹介するために切り取る

「作業」が入ることで動きが入り、「ワクワク」して取り組む。



③選んだ記事を紹介

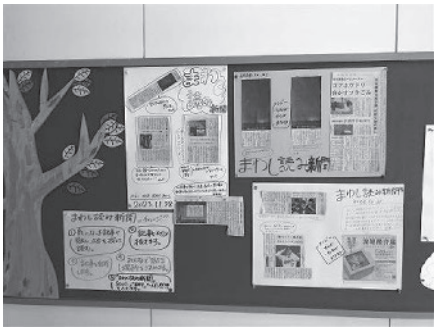
丁度よい緊張感の中、選んだ理由など「自分の考え」を整理しながら取り組める。

④貼る

「貼る」という活動も動きがあり、どこに貼るかなどの「レイアウト」を仲間と考えることで自然に交流が生まれる。

⑤感想

選んだ記事について、感想を伝え合うことで、さらにお互いを深く知ることができる。



(３) 特別支援学級における新聞を活用した取り組み②

①新聞ワークシートの活用

生活単元学習や個別学習の導入において、学習の内容に合った新聞ワークシートを利用して問題解決のきっかけとした。低学年向けの内容を取り扱うことが多いが、記事を「読む」、内容を「把握する」、自分の考えを「アウトプット」するといった活動を個に合わせて学ぶことが可能である。「自分の考え」を仲間と交流することで、励ましや驚きなど生徒の心をくすぐる１つの活動となっている。

３．成果と課題

地域や日本、世界の未来を創る人材になれるよう、より多くの子どもたちが、正確性・網羅性に優れた新聞に触れ、親しみを感じてほしい。今後の NIE の方向性を探るために、本校入学後に新聞を日常的に読むようになり「新聞好き」を自認する 3 学年在籍の島田蒼太さん(15)へ取材を行った。

(1) 新聞を週に何日くらい読んでいますか。

平日は学校で毎日読んでいる。家では購読していないので、週末は祖父母の家で読む。

(2) 新聞を読むようになったきっかけは。

中学校入学後に、廊下に新聞架けとベンチが設置してあり、社会科の学習内容に興味があったことから、国内・海外のニュースを読むようになった。2 年生からは新聞閲覧台が設置されたり、新聞の種類が増えたりして読む機会が多くなった。

(3) ネット記事と新聞記事の違いは?

ネットは最新のニュースが瞬時にアップされ、動画や音声でも報道してくれるのでわかりやすい。新聞は記事の内容が様々で、読んでいると他の記事も目に飛び込んでくる。それまであまり興味がなかった(自ら検索しようと思わないような)内容の中にも、役に立つ情報が多くあることを気づかせてくれるのが新聞。また、地方版などで身近な情報がたくさん得られるのも新聞の良さである。

(4) テレビでもニュースを観ますか。

テレビでもニュースを観るが、時間が決められているし、くわしく知りたくても次から次へと流れていってしまうので、じっくりと考えることが出来ない。その点、新聞はいくらでも見返す、読み直すこともできて、さらに詳しく調べたければネットで検索して補うこともできる。

(5) どうしたら、多くの中学生が新聞を読むようになると思いますか。

学校では毎日「朝読書」を行っているが、曜日を決めて「朝新聞」にするとよいと思う。今は新聞をコピーして配るしかないのかもしれないが、別海町のように時々新聞が生徒全員に配られると、それぞれの興味に合わせて「朝新聞」が出来るようになる。役に立つ、おもしろいと感じるきっかけがあれば、もっと多くの人が新聞を読むようになるのではないか。

(6) 最後に、新聞の良さや魅力はどんなところですか。

記者さんによって書き方に個性がある。書く人の「思い」や「大切にしていること」が文には表れるのがおもしろい。僕は社会科の学習に興味があるので、全国各地の出来事や世界で起こっていることを知ることができる新聞が大好きである。

２０２３年度　NIE 実践報告

教育課程に位置付けたＮＩＥの実践を通して

～コンピテンシーベースに基づいた NIE のカリキュラム開発～

別海町立上西春別中学校　主幹教諭　早瀬　香織

１．はじめに

本校は、今年度実践指定校として２年目の認定を受け、全校で NIE 活動に取り組んできた。昨年度は北海道新聞社による出前授業を活用しながら実践を重ねたまわし読み新聞の活動において、本校で身に付けさせたい資質・能力の育成をめざすことができることを実感することができたことが成果であった。

一方で、教育課程への位置づけが課題として残り、本校でめざす資質・能力や、学習の基盤となる「情報活用能力」の育成を目指したカリキュラム開発の必要性を感じていた。

その課題解決へ向けて昨年度末より検討を始めたところから、２年目の実践がスタートした。例年同様に NIE 環境の整備にも取り組んだが、本実践報告では主に教育課程に位置づけた NIE 活動の実践を紹介する。

２.実践の内容

全国学力・学習状況調査等の各種調査結果から、学習の基盤となる資質・能力の育成が数年にわたる本校の課題であると考えられる。この課題の解決へ向けて、令和２年度には「問題発見・解決能力」の育成をめざして、各教科等で身に付けた力が総合的な学習の時間において活用されるよう、単元一覧表を用いて資質・能力のつながりを整理し、授業改善を行った。また、令和３年度は国語科を中心としながら全ての教科等における言語活動の充実を図り、「言語活用能力」の育成を目指した。今年度は、「情報活用能力」の育成と、教育課程への位置づけが課題であった NIE 活動とを関連付け、総合的な学習の

別海町で推進する「ふるさとキャリア教育」に取り組むにあたり、総合的な学習の時間を核としたカリキュラムマネジメントの必要性を感じていた。そこで、昨年度末に総合的な学習の時間の見直しを行い、「ふるさと学習」と「キャリア学習」を軸として全体計画を整備した。本単元はその学びの下支えとなる情報活用能力の育成を目指したものである。

（１）単元の概要

総合的な学習の時間の目標
探求的な見方・考え方を働かせ、自分の生活と地域や社会の人・もの・こととの関わりについて横断的・総合的な学習を行うことを通して、目的や根拠を明確にしながら課題を解決し、自己の生き方を考えていくことができるようにするために、以下の資質・能力を育成する。 （１）自分の生活と地域や社会の人・もの・ことに関わる探求的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に着けられるようにするとともに、地域の特徴や良さに気づき、問題解決に向けて取り組む人々の努力や工夫により支えられていること気づく。 （２）自分の生活と地域や社会の人・もの・ことの中から問いを見いだし、その解決へ向けて仮説を立てたり、調査して得た情報を基に考えたりする力を身に着けるとともに、考えたことを、根拠を明らかにしてまとめ、表現する力を身に付ける。 （３）自分の生活と地域や社会の人・もの・ことに関わる探求的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、地域に対する愛着を深め、持続可能な社会を実現するための行動の仕方を考え、自ら社会に参画しようとする態度を育成する。

探究課題	情報化の進展とそれに伴う日常生活や消費行動の変化（情報）
学習事項	目的に応じた責任ある情報の選択と発信
単元名	特集〇〇新聞！
単元の目標	特集新聞の作成を行うことを通して、情報の収集や選択・活用・発信の方法や自分達の生活と地域や社会が情報を通して相互につながっていることを理解するとともに、目的に応じた効果的な伝え方について考え、日常生活における情報の選択や発信の仕方について考え行動できるようにする。
観点別評価規準	
知識・技能	①新聞の役割や特徴を踏まえて、目的に合った情報の収集や活用の方法について理解して、適切にできる。 ②新聞や新聞の作成を通して、自分達の生活と地域や社会との関連に気づき、責任ある情報の選択や発信の必要性について理解している。
思考・判断・表現	①地域住民の希望を叶えるための課題設定し、見通しを持って計画している。 ②目的に合わせて記事や情報を収集している。 ③収集した記事や情報を比較したり、分類したりして、目的に合った記事や紙面の構成について考えている。 ④目的に合わせて記事の書き方や構成を工夫し、特集新聞にまとめている。 ⑤日常生活における情報の選択や発信の仕方について、これからの情報との関わり方について考えたことを表現している。
主体的に学習に取り組む態度	①課題解決へ向けて、新聞の役割や特徴を活かして目的に合わせた特集新聞の作成に取り組もうとしている。 ②課題解決へ向けて、自他の考えを生かしながら協力して取り組もうとしている。 ③情報の選択や発信の仕方について振り返って、自分の生活の中での情報との責任ある関わり方について考えている。
本質的な問い	届けたい情報を届けたい相手に伝えるために大切なことは何だろう。
永続的理解	情報の収集・選択・活用の仕方や用いる媒体・表現の仕方に関する知識・技能を身に付けることで、目的に応じた情報の発信が適切にできるだろう。

今年度は本単元の実施１年目であり、全学年共通の内容で学ぶこととした。

時	学習過程	学習内容
1	課題設定 情報収集	オリエンテーション、課題設定 新聞の価値、特徴、構成や読み方（出前講座）
2	整理分析	新聞の構成調査、記事の書き方（出前講座）
3	整理・分析 まとめ・表現	まわし読み新聞の作成
4	課題設定	信頼される紙面づくり（出前講座）
5		企画会議①
6	情報収集	記事材料集め
7	整理分析	企画会議②
8	まとめ・表現	特集新聞作成①
9		特集新聞作成②
10		特集新聞作成③
11		特集新聞作成④
12		発表・振り返り

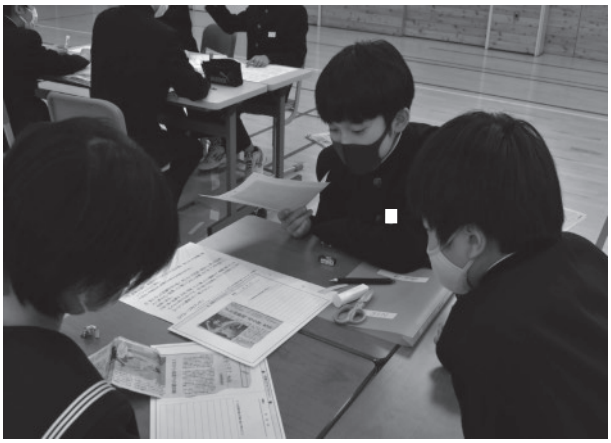
（２）小単元１

第１時は、単元の学習のオリエンテーション及び新聞との出会いの時間とした。別海町では令和２年度より「別海町新聞の日」が設定され、毎月１回全校生徒へ北海道新聞が配布されている。本校でも、NIE タイムと称して新聞に親しむ活動から新聞スクラップ、そして昨年度のまわし読み新聞の活動など、段階を踏みながら実践を継続してきた。例年、年度初めの新聞配布日に合わせて、各学級で新聞の価値や新聞を読むことの意義、NIE タイムの内容等についてオリエンテーションを行っているが、今年度は新聞の構成や読み方の基本を学ぶことを通して、新聞の特徴について知り、NIE の取り組みに向けて意欲を持つことをねらいとして、北海道新聞社の出前講座「新聞　読めばこんなにおもしろい」を活用することとした。

講座では、初めに新聞の構成を学んだ後、新聞全体に目を通して、気になる記事をじっくりと読んだ。

前年度、新聞を読む際に「選んだ記事のポイントとなる部分に線を引いて要点をつかむ。」ことを積み重ねてきた２年生の生徒たちは、自分の選んだ記事に線を引きながら、要点を捉えたり、自分の経験や考えと結び付けたりして読む姿が見られた。

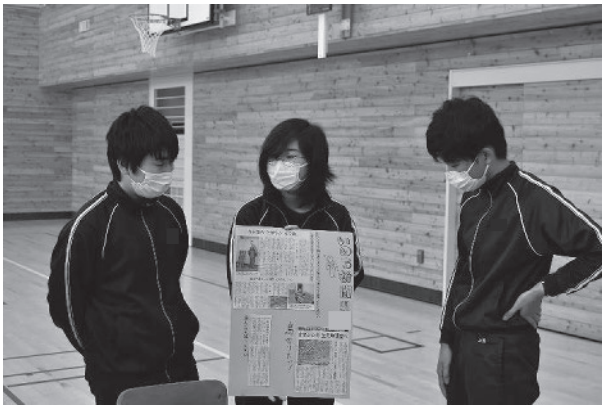
個人でじっくりと新聞を読んだ後は、グループで選んだ記事を紹介し合った。



この講座を通して、生徒は「いろいろな見出しを見て、何がどうなったのかを見出しと最初の一文で分かるので、新聞はすごいなと思った。」「いろいろな記事を読み取れるようになりたい。」と新聞に関心を持つことができた。また、記事を紹介し合う活動でも、「他の人のプレゼンを聞いて、同じ記事でも考え方が違うことが分かって、とても楽しかった。」「その記事の感想を書いて、さらに記事の内容を理解しやすくて、とても楽しく、勉強になった。」「交流することで新たな情報を共有できて良かった。伝えたい内容を一番に話せるように心がけたい。」と、新聞を通して、自分の考えを広げたり、深めたりすることができたようであった。

第２時も、新聞の構成や記事の書き方について体験的に理解することを目的として、北海道新聞社の出前講座「『まわし読み新聞』を楽しもう」を活用した。１年生にとっては初めてのまわし読み新聞である。講師の方から作成の仕方を教えていただくだけでなく、同じ会場で昨年度の経験を生かして取り組んでいる２，３年生の姿や昨年度の作品を参考にしながら、徐々に手順を理解していった。

どの班でも、記事の配置や自分達の新聞の特徴を表すためのタイトルをどうするか、どんなコメントを記入すると良いかなど、各グループで相談し合いながら活動する様子が見られた。



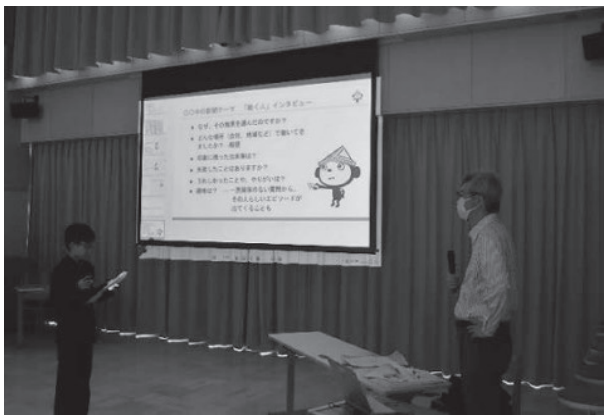
講師である北海道新聞社の方々からは、生徒が複数の記事のつながりを理解して読む様子や、記事と自分の生活を結び付けて読む姿を褒めていただいた。

出前講座後に行った第３時は、各学級でまわし読み新聞に取り組んだ。どの学級でも、協働的にまわし読み新聞の作成に取り組み、自分の考えや思いを表現する姿が見られた。

（２）小単元２

第４時からは信頼される紙面づくりについて学び、実際に新聞を作成する。これまでは読者の視点で新聞を捉えてきたが、今後は新聞記者の視点を持って捉えることができるよう、北海道新聞社の出前講座「新聞記者の仕事」を活用することとした。これまでの２回の出前講座も含めて、本単元の学習のねらいに合わせて、講座の内容について要望をさせていただいた。この講座についても、「情報の選択や発信の必要性について理解し、自分の生活の中で情報との責任ある関わり方について考える」ことをねらいとして学習活動を検討した。現役の記者さんから学ぶこの出前講座は、生徒自身が新聞を作成する際に、必要な情報を収集・選択し、責任ある発信ができるようにするために①取材の仕方②記事の書き方の２つの内容で実施することとした。

まずは、取材をする前の準備やインタビューの仕方を学び、実際にインタビューを体験した。



体験は代表生徒としたが、他の生徒も同じように取材メモを取りながら聞いた。

情報を聞き出すことや、正確に記録することは非常に難しい作業であった。インタビュー後は取材メモを互いに交流したが、「聞き取れなかった」「全然

メモできなかった・・・」と感想を漏らす生徒が大半であった。その様子を見た講師から、あらかじめ、記事に必要な情報を整理しておくことの大切さを教えていただいた。

続いて、その情報を基に読み手を意識した記事を書くための方法や、見出しの書き方を学んだ。その後取材メモを基にして見出しづくりに挑戦したが、生徒たちは、記事の内容を端的に表現することや、読み手に関心を持たせるための表現の工夫に苦労していた。

講座後の生徒の振り返りは次の通りである。

「読者に読んでもらうための見出しをどう書くかの工夫や、５W1H で新聞は書かれていて、取材する時はどのように深く聞くかなど、新聞を作るうえで大事なことが今回の授業で分かった。」

「新聞の記事の内容に合った見出しや、一番大切なことを全面に書き出すことで、読者にどのような情報を得て欲しいかを考えて、記事を書くことが大切だと思った。」

「新聞が情報入手の手段としてとても信頼されている理由が分かった。」「新聞を作るために必要なのは、５W1H と分かった。実際に５W1H の順番で記事を見てみたら、確かにこの方が内容がわかりやすいと思った。」

この時間を通して、記者の目線で新聞を捉えることができたようであった。

第５時以降は、各学級で新聞作成に取り組む。作成にあたっては、デジタル新聞を作成できるクラウド型アプリ「ことまどアプリ」を使用する。総合的な学習の時間における他の単元でのまとめ・表現の方法として新聞を作成したり、生徒個人がテーマを持って新聞を作成したりするなど学級の裁量で活動を進めた。

別海町新聞の日に配布される北海道新聞は、２カ月に１回程度学級ごとにまわし読み新聞で活用する他、新聞を読んで気になる記事をスクラップする活動も行っており、その記事を活用した新聞作成に取り組んだ学級もあった。この学級は他にも、道新記事データベース「まな bell」を活用して新聞作成を進めた。

４．成果と課題

（１）成果

①　新聞とキャリア教育

まわし読み新聞の活動では、好きなことに関する記事を選び、他者に何とか伝えようと熱く語る生徒の姿があった。そのような姿から、新聞を読んで自分がどんなことに関心があり、どんな風に感じるのかに気づくことが、自分自身の生き方に関わっていったり、他者と交流することもまた自己理解につながるのではないかと感じている。新聞を読むことは、自分を発見することでもあるのではないだろうか。まさにこれはキャリア教育における自己理解につながるものと考える。

本単元の学習とは別の時間ではあるが、今年度は２度、保護者と一緒にまわし読み新聞の活動に取り組んだ。生徒は自分達だけで取り組む活動と比べ、多様な視点にふれることができ、新鮮味や楽しさを感じたようである。参加した保護者もまた、新聞に関心を持つきっかけとなったり、同じ記事を選んでも考え方が違うことの面白さに気づいたりしたと感想を述べていた。キャリア教育における基礎的・汎用的能力の育成において、まわし読み新聞の活動も効果的であると考える。

新聞の中に見つけた遠く離れた国や地域の記事と、自分の住むふるさととを比較したり、関連付けたりして考えることや、グローバルな視点を持ってふるさとを見つめ直すことは、別海町が推進

する「ふるさとキャリア教育」につながるものである。

「新聞には世界が広がっている。」昨年度の生徒の言葉であるが、生徒の学びの姿が、「ふるさとキャリア教育」における新聞の価値を教えてくれた。

② 教育課程への位置づけ

総合的な学習の時間の単元として、新聞を教材とした探究的な学習を構想してNIE活動を行ったことにより、資質・能力の育成のためのNIE活動という意識を持つことができた。まわし読み新聞やスクラップなどの活動は、ともすればその活動が目的となり、いわゆる「コンテンツ」として捉えがちであろうが、資質・能力の育成のためという「コンピテンシーベース」の考え方に立った活用の大切さを感じている。コンピテンシーから本単元の生徒の学びを見つめると、ねらいは概ね達成されたと判断した。

また、本単元は「情報活用能力」との関連や、国語科の指導事項との関連も図って構想したと共に、総合的な学習の時間の他の単元との関連も図った教科内横断的な位置づけである。併せて、本単元で身に付いた資質・能力が教科等を横断して相互に働くことも期待して構想した。本単元の改善の必要性はあるものの（課題で述べることとする）、授業者がその関連を図りながら、カリキュラムマネジメントを行っていくことで、資質・能力の育成をめざしていくことができるのではないだろうか。

（２）課題

総合的な学習の時間の単元としてNIE活動を実践したが、３か年の系統性を持たせた単元へと改善する必要がある。加えて、令和８年度から小中一貫校となる本校では、小学校との系統性も必要である。現在校内教育課程検討委員会において、見直しを進めているところである。

また、単元のゴールとして設定した新聞作成は果たして資質・能力の育成にあたり、効果的であっただろうか？本単元の目標を新聞作成を通して達成できたかどうかは、検証する必要がある。併せて、新聞作成アプリ使用の際の操作場面での職員の負担も課題として考えられるが、これは北海道新聞社の新機能を利用することで軽減できそうである。

今年度は学級裁量の時間までは、担当が中心となり学習を進めたが、各学年が組織的に本単元を実践する体制を整える必要がある。その際、成果で述べたような、コンピテンシーベースの探究的な学習となることが肝要だと考える。

５．おわりに

本単元の実施にあたり、北海道新聞社の出前講座を３度活用させていただいた。どの講座においても、本単元のねらいに合わせて、講座の内容を柔軟に変更してくださったと共に、何度も打ち合わせをさせていただいたことで、ねらいが達成できたことに感謝申し上げる。

今年度もまた、NIE 活動と本校でめざす資質・能力の育成との関連を十分に感じることができた。新聞の教育的効果を十分に活用しながら、今後は持続可能な取り組みとしてのカリキュラム開発をしていくことが重要である。また、NIE の実践に迷った時には、「何のために」取り組むのかに立ち戻ることが必要である。そこには、「子どもたちにどんな力をつけさせたいか」というめざすコンピテンシーが必ずあるのだから。

２０２３年度　ＮＩＥ実践報告

新聞を活用した実践 ～総合的な学習の時間・国語科での実践～

幕別町立忠類中学校　教諭　千葉　優子

１．はじめに

幕別町では、「ふるさとに誇りをもつ子どもを育む幕別の一貫教育」を目指し、令和元年度より町内の中学校区内にある小学校と中学校を１つの学園として、５つの学園を設置した。

忠類中学校の校区内には忠類小学校が１校のみで、本校を含む“ちゅうるい学園”は、小学校１校、中学校１校型の小中一貫教育を行っている。

忠類中学校では、令和３年度から幕別町教育目標の「郷土を愛し、自ら学び、心豊かに生きる人」の実現に向けて、総合的な学習の時間の目標を「ふるさとのよさを知り、持続可能な忠類の未来に向けた課題を解決し、自己の生き方を考えることができる。」と設定した。また、令和５年度からは学園目標を「新しい　つながり」とし、「地域とともにある学校づくり」を推進してきた。

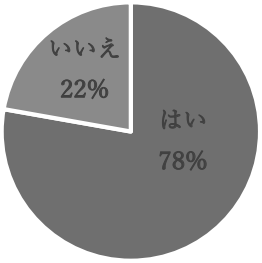
２．生徒の様子

本校は、全校生徒３２名の小規模校である。前述のとおり小学校から同じ顔ぶれで過ごしているため学年の壁がなく、非常にアットホームな雰囲気である。

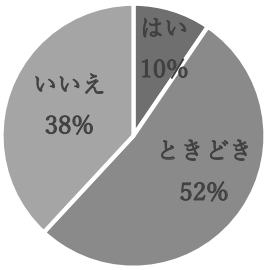
本校では昨年度から主に総合的な学習の時間を中心にNIEの実践に取り組んでいるが、生徒の新聞への興味・関心はどうも薄いように感じた。新聞記事を読ませても、どこからどこまでがその内容なのかわからない生徒もいたほどである。

そこで、全校生徒を対象にいつくかアンケートをとってみた。

Q1. 家で新聞をとっていますか。



Q2. 普段から家で新聞を読みますか。



本校は生徒数が少なく、一概には言えない面もあるが、自宅で新聞をとっている生徒は約８割と高めである。一方、新聞をとっている生徒に普段から新聞を読むか聞いたところ、約６割にとどまった。また、読むと答えた生徒も「テレビ欄のみ」「自分の好きなスポーツ欄のみ」と答えた生徒が多く、決して社会的な事象に目を向けているわけではなかった。

３．実践の内容

（１）私のイチオシ！（お薦めの記事紹介）

期間限定とはいえ、せっかく６紙も新聞がそろっているのに、並べて置いておくだけではもったいない。どうにか興味を高められないものかと考えた苦肉の策が「私のイチオシ！」である。

毎週初めに、６名の生徒に各社の新聞を渡し、その中からみんなに読んでもらいたい記事を枠で囲み、廊下に掲示した。

１週間掲示したら、また翌週には違う生徒にイチオシの記事を選んでもらう。小さな学校なので５週間でだいたい１周できるし、誰がどんな記事を選んだか、ちょっとした話題にもなった。じっくり読み込むところまではいかなくても、“関心を高める”一助になったのではと思っている。

（２）総合的な学習の時間

①　新聞記者による講話

十勝毎日新聞社でＮＩＥコーディネーターとして活躍されている舟越洋二氏をお招きし、「新聞記事のできるまで ～読み解き方を学ぶ～」というテーマでお話をいただいた。

生徒たちはトップ記事の見出しの付け方や読み方のコツ、相手や目的に応じて調べた内容が伝わるよう様々な工夫がなされていることなどを知った。

忠類中学校では３年間の総合的な学習の時間を通して、「ふるさとちゅうるい発展」について考える取り組みを行っているが、自分たちのアイディアを練るために新聞を有効に活用し、学んでいこうとする意欲付けができた。

②　新聞記事のスクラップ

総合的な学習の時間の中で、２年生は「十勝管内の他町村を知り、ちゅうるいと他町村を比較しよう」というテーマで活動している。

授業の板書。新聞を活用する目的が明確にされている。

実際に掲示された新聞

他市町村を知り比較することで、地元ちゅうるいの良さや課題を改めて知ることがねらいである。

十勝管内の各市町村で町おこしとして取り組んでいる記事や町おこしにつながりそうな記事を探し、切り抜く。その記事を帯広市とその周りの東西南北の地域、計５つに分け、５つのブロックごとに新聞記事のスクラップを掲示した。全国紙では身近な情報が得られにくいことから、使用するのは北海道新聞と十勝毎日新聞に限定した。

方面ごとに記事を掲示していく様子

廊下に掲示することで、他学年の興味関心を引くことができる。特に１年生にとっては、次年度取り組むことのおおまかな内容を知ることができると同時に、新聞を読むこと・地域の情報に目を向けることにつながった。また、昨年同様の取り組みを行った３年生は、今年度は他支庁との比較を行っている。主に函館・札幌との比較であるが、ここでも新聞

による情報収集は欠かせないものとなった。

（３）国語科の授業で

「新聞が伝える情報を考える」

３年生の単元である。新聞を構成する情報について整理し、それぞれの効果について考えるとともに、社説を比較して読み、内容の特徴を理解することが目標になっている。

比較自体は教科書の内容で行ったが、導入にあたり実際の新聞の社説を読み、どのような観点からできごとを見ているのか、どのような課題を提示しているのかなどを学習した。

「新聞を読み比べよう

～共通点・相違点を明確に～」

２年生で行った授業である。同じ記事を各新聞社がどのように伝えているかを読み、共通点・相違点を考え、どちらの記事に共感できるかを考えた。五輪の招致から札幌が撤退したことやオスプレイの墜落事故のこと、ＬＩＮＥの情報流出など、そのとき話題になっていた記事を選んだ。

２紙の記事を比較して読むことで、写真や図を入れることの効果、グラフと記事の関連性、また批判的な見方をしているのかそうでないのかなど、様々な気づきがあった。

４．成果と課題

（１）成果

２年間の取り組みの成果として、生徒が新聞に触れる機会が増えたことが挙げられる。この間の取り組みを通して「新聞に対する関心は高まりましたか」という質問に８割の生徒が「はい」と答えていることからも、その成果がうかがえる。

また、生徒からは「読解力を高めるために新聞を活用したい」「ネットの記事は出所が不確かだから普段から新聞を読むようにしたい」などの声が聞かれた。

（２）課題

情報源はインターネットが当たり前になった今、あえて新聞を手にとる生徒はやはり少ない。せっかく高まってきた新聞への関心をどう継続していくかが課題である。

また、一人一台端末と NIE の効果的な活用方法についても今後探究していきたい。

２０２３年度　NIE 実践報告

ICT を活用した『かべ新聞』『スクラップ』の制作

芽室町立芽室西中学校　教諭　掛水　成幸

１．はじめに

本校は、十勝平野西部に位置し、６学級１４７名の生徒が学校生活を送っています。

昨年度に続いてＮＩＥ実践校の指定を受け、授業等での新聞記事の活用や新聞複数紙による閲覧コーナーの充実を継続させることができました。

今回の実践報告では、「ICT を活用した『かべ新聞』『スクラップ』の制作」をテーマに取り組んだ実践について紹介します。

２．実践の内容

①『かべ新聞』の制作（１年総合）

芽室町では郷土学習の一環として総合的な学習の時間で「めむろ未来学」に取り組んでいます。その中で本校一学年は農業について見学や体験学習に例年取り組んできました。今年度、酪農の分野では「チーズ工場の見学」、畑作の分野では「じゃがいも選果場・えだ豆加工場の見学」「長いもの収穫体験」を企業・団体・農家さんの協力を得て行うことができました。こうした「めむろ未来学」の学びを中心に、かべ新聞にまとめる活動を行いました。

これまでのかべ新聞制作は「時間がかかる」「人手が必要で大変」というイメージを強くもっていましたが、今回タブレット端末などのＩＣＴ機器を活用し、生徒の役割分担を明確にすることで「時間」と「人手」を最小限にすることができたと思っています。（最後の仕上げを複数で顔を付け合わせて完成させる場面は昔も今も変わらなかったです。）

△仲間と協力して行う仕上げの作業

△仲間と作った作品には達成感を感じます

制作計画（総合的な学習の時間　全６時間）	
1	レイアウト・記事の内容・題字・分担を決める
2	記事・見出しの作成、写真の選定
3	記事・見出し・題字の作成・印刷、写真の印刷
4	記事・見出し・題字の書き込み、写真の貼付
5	新聞紙面の書き込み＆色塗り、写真の貼付
6	新聞紙面全体、罫線枠線等の仕上げ・完成

使ったもの①（ICT 機器）

○クロームブック：一人一台端末

○ノートＰＣ＆プリンター：ＰＣ室を使用

使ったもの②（以前使っていて教材室に保管）

○トレース机

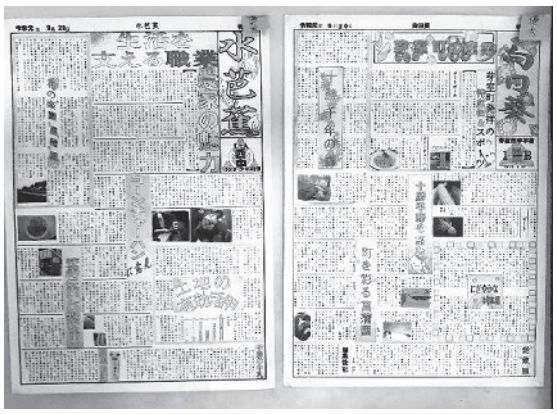
印刷した文字等を写し書きできる。

○多様なペン・色鉛筆

記事や色塗りも分担して作業できる。

○過去の作品

完成品を参考に制作することができる。



△見本に使った過去の作品（R１年度）

かべ新聞制作の手順

1	実際の用紙や過去の作品を使い、レイアウトを決める。
2	記事の分担を決め､タブレット端末(協働作業が可能）で記事の入力。印刷。
3	トレース机を使って文字等を写す。
4	色を付けたり、写真を貼りつける。
5	罫線や枠線などを書いて仕上げる。

②『新聞スクラップ』の制作（1･2年社会）

今回は十勝毎日新聞社デジタルメディア局様の協力を得て、勝毎電子版を利用させていただきました。電子版は、一人一台のタブレット端末を使い、画面上で新聞記事を読むことができます。そこで、生徒一人一人が興味関心をもった記事をスクラップさせたいと考え、冬休みの課題として「新聞スクラップ」に取り組みました。

△勝毎電子版の画面

電子版新聞スクラップ制作の手順

1	電子版紙面を WEB ビューアで開く。
2	紙面から興味関心があるものを選ぶ。
3	画面をコピーし、プレゼンテーションソフトの定型パターンに貼り付ける。
4	新聞社名・新聞に掲載された日付・記事内容･記事を選んだ理由を入力する。
5	記事に色で囲う、記事に関連することを載せるなど、工夫してまとめる。

今回のソフトは、他の生徒が作成したスクラップをタブレット上で確認しあうことができるので、他の生徒の作品を参考に作ることもできました。

タブレット上に提出された作品は、冬休み明けに印刷･帳合いし、冊子にまとめました。

生徒作品をみての驚きと発見

インターネット上で調べたことを新聞記事と合わせて載せるなど ICT 機器を上手に活用してまとめる作品などは新鮮でした。また、タブレット上で文字入力するだけではなく、手書きで文字やイラストを描き込む作品もあり、アナログ的な要素を盛りこむ工夫には驚きました。

クラスごとの冊子を見ると、まとめ方や工夫の仕方にも個性があり、新しい面白味を感じました。個人でまとめた時にはなかった「同じ記事」をまとめたもの（今回であれば大谷翔平選手に関すること、地震・航空機炎上など、同じ記事を多数の生徒が取り上げていた）があり、同じ記事をあつかっても、それぞれの生徒のとらえ方やまとめ方に違い（出来事を多角的にとらえることができる）がありました。その違いを容易に比較できることも新たな発見でした。

３．成果と課題

①『かべ新聞』について

十勝管内ではコロナ等の影響があり、令和元年度を最後に中学生によるかべ新聞コンクールへの出品がありませんでした。今回４年ぶりに出品し入賞することができました。

大変だったこともあったようですが達成感も感じたようで、「来年もやりたい」「来年はこうしたい」といった発言や、今回はかべ新聞制作に関わらなかった生徒からも「来年はやってみたい」「イラストを描いてみたい」といった声も聞くことができました。

今回の新聞制作の経験を活かし、次回は内容的にもさらに高められると思います。特に記事の内容をそのまま見出しになってしまっていることが多く、コンクールの審査では「見出しのつけかた」のアドバイスをいただきました。次年度は今回の経験を活かしながら、外部講師による指導をもらい、よりよい新聞づくりができたらと考えています。

②『新聞スクラップ』について

新聞スクラップに取り組むことで「普段あまり読まない新聞記事をじっくり読むことは大事だと感じた」「地域や世の中のいろいろなことを知ることができて楽しかった」など前向きなコメントが多くみられました。

本校のアンケート調査（資料１）から、生徒自身が「新聞はためになる」と考えている割合は高い（全体の 78%）です。その反面、電子版を利用できる状況であっても新聞（電子版・紙を含む）を読む回数は多くはありません（週１回未満の生徒の割合 81.3%）でした。本校の生徒の様子から、新聞について今は「読めるのに読もうとしない」状態と感じますが、これから先に新聞を「読まない」「読んでも理解できない」状態になってしまわないか心配です。ためになる情報があっても、その情報を知ることができない、情報を知ろうとしないことはとても残念です。ためになる情報を、新聞からより多く取り入れ続けてほしいと思うので、今回新聞スクラップで、新聞記事を読む経験は良かったと考えます。

資料１

【西中アンケート集計結果(中 1･2 年対象)】

１カ月どのくらい新聞を読みましたか？（電子版・紙含む）	
ほぼ毎日	1.3%
週に 3～6 回程度	4.0%
週に 1～2 回程度	13.3%
２週に１回程度	8.0%
１か月に 1～2 回程度	73.3%

電子版を活用した１カ月でしたが課題の取り組み以外で新聞を読んでいないことがわかります。残念ながら週の半数以上読む割合はとても低いです。

新聞はあなたのためになりますか？	
とてもためになる	13.4%
ためになる	64.6%
あまりためにならない	7.3%
全くためにならない	2.4%
どちらともいえない	12.2%

新聞はためになると考える生徒の割合は非常に高いです。「豊富な情報量」「確かな情報」といった新聞の特性を生徒も感じていると思われます。

「電子版」と「紙」どちらがよいですか？	
「電子版」の新聞	32.5%
「紙」の新聞	44.6%
どちらともいえない	22.9%

意外にも「紙」の新聞を選ぶ生徒が多くみられました。タブレットで読む新聞にはまだ慣れていない様子です。

資料２

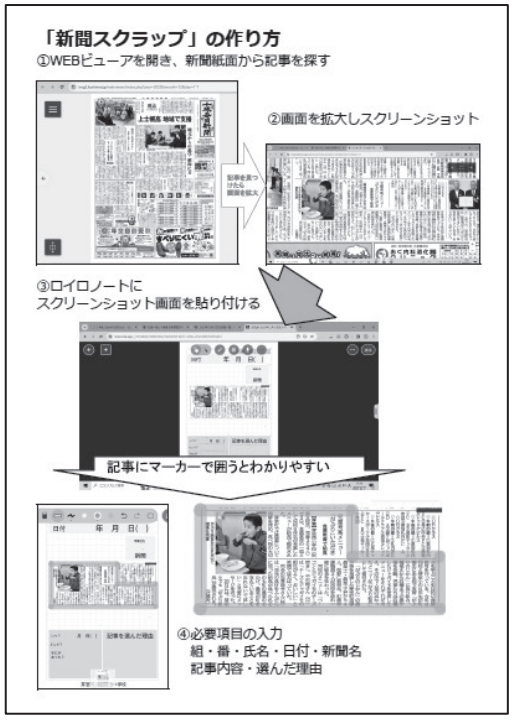
タブレットで取り組む新聞スクラップ

電子版を開く

web ビューアを開く

紙面を選ぶ

紙面から記事を選ぶ



資料３定型パターンと見本

プレゼンテーションソフトを使い、定型パターンを準備しました。生徒はこの定型パターンに記事を貼り付け、記事の内容や選んだ理由を入力しました。

見本も提示しました。説明の時には、記事の貼り方、新聞に掲載された日・新聞社名を入力するほか、記事を色で囲うことや関連することを調べて載せるといった工夫を紹介しました。

資料４工夫がみられる生徒の作品

新聞掲載されたライトアップのハルニレとは別に、同じ木の別の写真と豊頃町の場所を調べて載せています。ＩＣＴ機器を効果的に活用しています。

記事の見出しを効果的に活用しています。空いたところにイラストと自分の考えを手書きで書き込むなど、アナログ的な要素を上手に組み合わせて仕上げています。

２０２３年度 NIE 実践報告

情報収集力の獲得から、情報編集力、そして情報発信力に広げる新聞活用の実践

浦幌町立上浦幌中学校　　中村　宏喜

＊はじめに＊

本校では３年目の新聞提供事業となりました。また、この取組を町教委も後押しして下さり、今年度から通常でも三紙が毎日学校に届くようになり、活用度も広がりました。

「新聞は生きた教材」を合言葉に、様々な実践に挑戦しました。言語活動の活性化を念頭に、教科のみならず横断的な学習としても、多様な新聞活用や新聞づくりを通して、「ものの見方・考え方を広げる」授業づくりに結びつけて実践を試みました。

今年度は、学年の発達段階を考えた国語科を中心とした取組を報告します。

新聞の閲覧と資料としての掲示

今年度は、提供事業とは別に４月から三紙を学校で購入できる運びとなりました。前年度までの地方紙二紙（十勝毎日新聞・北海道新聞）に加え、中央紙（朝日新聞）が毎日配達されることとなりました。

新聞提供事業は体育大会の終わった６月から開始。それまでにも図書室と連動する多目的スペースに学校購入三紙を設置していたので、一年生も毎日目にしており、２・３年生で先にスタートした新聞活用についても、目の当たりにしていました。

２学期には１年生で「新聞広告」を活用した授業を展開する予定だったので、少しずつ新聞広告を中心に中学生が興味を示す紙面を張り出していました。家庭科担当や養護教諭とも連携を取り、食堂（本校では「全校給食」を行っています）に「食育」や「健康」に関する広告を掲示し、新聞への興味関心を高めてみました。

新聞で思考・判断・表現力を育てる ～国語科を中心とした実践より～

１　新聞活用

(1)　新聞記事の発表（全学年）

２年生は昨年度の積み上げもあり、４月より国語の授業の最初の３分を使い、「一面の記事の紹介」と教科担任からの質問に一つ答える形でスタート。

３年生は、１・２年生よりも週時数が１時間減ったため、朝の会の中に「今日のニュース」のコーナーを設け、大きめの付箋に要約されたニュースを発表するという形でスタート。この活動は１年を通して継続し、高校入試の面接試験などでの

社会的事象の質問に大きく役立つこととなりました。

１年生は、新聞提供事業がスタートした６月から２年生と同じ「一面記事の発表」を開始しました。

２学期からは、１・２年生とも自分の発表した記事の内容に「感想」を加えての発表とし、他の生徒が誰か一人、発表を聞いての感想を発表することを加えました。

また、現在３学期からは、題名を必ず発表の中に入れること（１年生）、グラフや資料がある場合はそれも活用すること（２年生）、５Ｗ１Ｈを考えて発表すること（全学年）をプラス。次の自分の番までに記事を選び、下線を引いて発表する生徒も出てきました。これが新聞スクラップにも繋がりました。

以上のように、段階を設け少しずつ発表内容を向上させてみました。

「見出し発表←要約した内容←感想や考え」の順に発表します。

(3) 新聞スクラップ（全学年）

「新聞スクラップ」の取組は、長期休業を活用し実施しました。「読解の力」だけでなく「書く力」や表現力育成に結びつけました。

夏休みには、学年ごとにテーマを提示（1年：浦幌町、２年：十勝、３年：北海道～日本）、その中で小テーマを各自設定しました。

この経験を生かしながら、冬休みは各自でテーマを設定し、課題解決学習としました。（自らの設定課題に沿って、１０以上の記事をチョイス。）

できあがった夏の作品は文化祭などで全て展示。仲間や先輩の作品を見ることで得たり考えたりしたことを、冬の作品に活かす生徒もいました。また、これらの作品は、全十勝スクラップコンクールにも出品され、最優秀賞ほか各学年数名の入賞者が出るなど、管内でも認められる取組となりました。

(2) 広告づくり（1年生）

新聞の活用は、記事だけではありません。写真や広告など、あらゆる部分が活用可能です。

１年生では「広告を作ろう」の授業１ヶ月前から、教室横の多目的室に「新聞広告」を貼り出しました。キャッチコピーなども重視し、できるだけ「全面広告」を使用しました。

これらを参考しにしながら、各自が「設定された会社」のキャッチコピーを考え、ＰＣを活用しながら広告作りに挑戦しました。

今年度は応用編として、『保健室の広告』も作成。養護教諭も掲示とともに、コメントを加えてくれました。

２　新聞形式でのまとめ

(1) はがき新聞（全学年国語）

「書く力」を養うために「はがき新聞」の取組を継続して行いました。「自己紹介」、「合同運動会を終えて」、「文化祭を終えて」などは全学年で取り組みました。

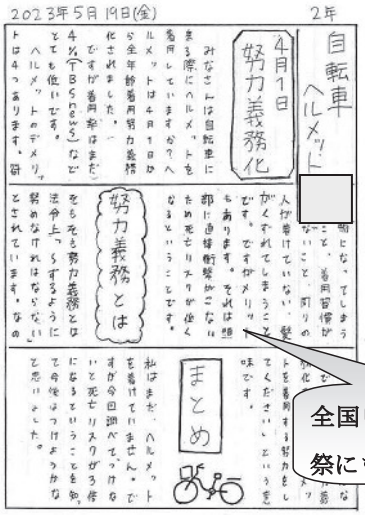
また、「投稿原稿を書こう」（２年生）では、批判的な見方で新聞投稿文を書きました。

作品は文化祭での教科展示のみならず、「全

国中学校総合文化祭」にも北海道を代表して出品され、高い評価をいただきました。

こうした作品は、製作後に各学年の廊下に張り出し、後輩たちが先輩の作品を読み更にレベルを上げていくことになりました。

また､参観日や公民館祭などにも張り出し、保護者や地域の方々にも今の中学生のものの見方や地域を動かそうとする力など、学びの成果過程を見ていただきました。



全国中文連中学校総合文化祭にも全員が出展しました。

(2) 新刊図書紹介新聞づくり（係活動）

学習委員会では「新刊図書新聞」を作成。新刊図書の「帯」やその内容を活かし、壁新聞形式での新刊図書紹介を行いました。各種のまとめを実践してきた２・３年生が先導しながら、１年生も広告作りでの学びも活かした作品となり、図書の貸し出し部数も昨年よりかなり延びることとなりました。

さらに、「新入生説明会」でも製作した壁新聞を活用し、委員会の活動の様子を紹介しました。

(3) 学級新聞づくり

（国語・総合的な学習の横断的な学習）

新聞のレイアウトや見出しの付け方、写真の効果的な活用などを　学びながら、新聞作りに挑戦しました。

国語科の授業で書いた文章を記事に書き換えたり、総合的な学習でのまとめ（１年生は地域探究学習、２年生は職場体験学習、３年生は修学旅行記とふるさと納税への提言など）ともタイアップしたりして、半年間の学びを「学級新聞」という作品でまとめました。

２・３年生ともに十勝大会で二年連続で最優秀賞を受賞。全国大会にも出展です！

(4) 学校新聞づくりへの挑戦

（十勝毎日新聞社ＮＩＥ事業）

十勝毎日新聞社のＮＩＥ事業の一つとして、管内の中高を紹介するコーナーがあります。このコーナーでは各学校の生徒会執行部や新聞局などが紙面作りを行い、新聞社の担当記者がアシストしてくださり、紙面作りを通して大きな学びを経験できます。今年度は本校の２年生を中心とした執行部４名が編集

・レイアウトを担当。トップ記事を任された３年生は、総合の時間に発表した内容を記事に編集し直しました。

十勝毎日　2024.2.8

新聞社での編集作業も終了し、新聞に掲載されることが決定したときに、編集担当の記者さんより次のようなお手紙もいただき、今までの学びの成果が外部からも評価された瞬間となりました。

（前略：中村）　記事についてですが、非常に完成度が高く、驚きました。すべての記事に通じて、地域や学校の特色を生徒のみなさんがよく理解されているのだと分かる内容となっていました。

　このページでは多くの学校が単なる行事の紹介に終始しがちですが、みなさんが郷土愛、浦幌愛を持っており、地域の強みや課題、少人数校だからこその絆などが伝わってきます。

　記事の技術的な面でも、過剰な表現や、修飾語の関係性のわかりにくさなどもなく、編集局校閲部からの指摘も、他校に比べて半分以下で、何度も手直ししたり、見直しが行われていることが見て取れました。今後とも、生徒、先生のみなさんの活躍を祈っております。（後略：中村）

(5) その他

ニュースパーク（横浜）での学び

３年生は修学旅行での学びの一環とした、横浜の「ニュースパーク」を訪れました。

ここでは、新聞の歴史、製作現場などについて学びや、震災時における新聞社の果たしてきた役割などについても資料などを見ながら学ぶことができました。また、自分たちで準備した原稿をパソコンを使って新聞の形に打ち込み紙面を作成。できあがったそれぞれの紙面を使って、良い部分・

「新聞の壁」の前に立つ上浦幌中学校の３年生
＝８月30日、横浜・日本大通の日本新聞博物館で

改善する部分など、より具体的な学びを経験することができました。

＊まとめにかえて＊

情報教育の一環として、情報の「収集力」→「編集力」→「発信力」へとレベルアップしていくために新聞を活用し、「読み取る」・「まとめる」・「書く」実践を行ってきました。３年間続けた３年生は着実に国語の力を伸ばしました。１・２年生も学びに自信を持ち始めています。

新聞の提供に感謝しながら、今後もより多くの教科・教育活動で新聞活用を図りながら、豊かな言語活動の展開を図っていきます。

２０２３年度　ＮＩＥ実践報告

情報を読み取り、自ら考え、表現する力を培う

小樽市立北陵中学校　教諭　窪田　達大

１．はじめに

本校は、「小樽市立北山中学校」「小樽市立末広中学校」の２校が統合し、新設校としてスタートを切ってから７年目を迎えた。教育目標を「小樽の未来をつくる北陵生の育成」と定め、「深く学び、考え、表現できる生徒」「豊かに人とつながり、思いやりのある生徒」「たくましく心身を鍛え、自らを律する生徒」とし、故郷小樽のまちづくりの担い手となる生徒の育成に努めている。

しかし、全国学力・学習状況調査の結果から、本校の生徒は、国語科では「書くこと」「読むこと」の領域が全国平均を下回り、数学科においても理由を説明する問題で無解答率が高いなどの課題が明らかになっている。また「語彙」が不足していたり、言葉を紡ぐ術が未熟だったり、物事の発想の基となる「実体験」に乏しかったりと多くの課題を抱えている。

これらの課題を解決する一つの方法として、教育課程の中に、週に一度のＮＩＥタイムを設定し、「書く活動」「読み取る活動」に取り組み、７年目を迎えた。

２．実践の概要

（１）教育課程への位置づけ

「小樽の未来をつくる北陵生の育成」を目指し、本校生徒の「書くこと」と「読むこと」の領域の課題を解決するために、教育課程の中に「ＮＩＥタイム」を設定し、毎週金曜日に４種類のワークシートに取り組んでいる。

（２）「１２のスキル」とＮＩＥ活動

前年度までは生徒につけさせたいスキルを「３３のスキル」として提示していたが、今年度からは内容が１２項目に精選され、これまでと同様に学年ごとに重点を設け、教育活動全般で取り組んでいる。その中でもＮＩＥ活動と特に関わりの深い項目は次の二つである。

「主体的に学ぶ力を育て、高める」という柱では、３年生の重点として、「人の意見を聞き、自らの考えを深めることができる」ことを挙げている。このスキルを身につけるために、ＮＩＥの活動を通して新聞記事から意見を読み取り、それについて自分自身の考えを持つ練習が大きく役立っていると考えられる。

また、「コミュニケーション能力を向上させ、社会性を高める」という柱では、２年生の重点項目として「様々な人や多様な考えを受け入れ、関わり合うことができる」ことを挙げている。ＮＩＥの活動を通して新聞を読むことで、多様な考えに触れる機会を得ることにつながっている。

目指す生徒像		
深く学び、考え、表現できる生徒	豊かに人とつながり、思いやりのある生徒	たくましく心身を鍛え、自らを律する生徒
目指す生徒像につなぐ生徒の「12 Skill」と育成を目指す資質・能力の３つの柱との関連		
主体的に学ぶ力を育て、高める	コミュニケーション能力を向上させ、社会性を高める	集団としての自治的能力を育て、高める
１年生の重点 SKILL		
S1 立腰ができる　知識及び技能 S2 場面に応じた正しい言葉遣いをすることができる　知識及び技能	S5 自他を大切にし、敬意を払うことができる 思考力・判断力・表現力等	S8 挨拶をし、時間を守り、場をきれいにできる 学びに向かう力、人間性等
２年生の重点 SKILL		
S3 相手意識に立って自分の考えを表現し合うことができる 思考力・判断力・表現力等	S6 様々な人や多様な考えを受け入れ、関わり合うことができる 学びに向かう力、人間性等	S9 先を見通して計画的に行動できる　知識及び技能 S10 何事にも挑戦できる 思考力・判断力・表現力等
３年生の重点 SKILL		
S4 人の意見を「聞き」自らの考えを深める」ことができる 思考力・判断力・表現力等	S7 地域に貢献できる 学びに向かう力、人間性等	S11 マナー・モラルを踏まえ建設的に考えることができる　知識及び技能 S12 自分のキャリア・生き方を考えることができる 学びに向かう力、人間性等

（３）「ＮＩＥタイム」で使用する４種類のワークシートとそのねらい

	ワークシートの種類	ねらい
①	小樽についての記事を読んで考えるワークシート	自分たちのふるさとである小樽について知る。
②	さまざまな記事を読み、情報を読み取るワークシート	幅広い社会の動きに視野を広げ、情報を的確に読み取る力を身につける。
③	新聞のコラムを読んで、文章を書くワークシート	読み取ったことについて自分の意見を持ち、それを的確に表現する力を身につける。
④	長文を読んで、心情を読み取るワークシート	文章から書き手や登場人物等の心情を読み取る力を身につける。

【②のワークシート例】
（北海道新聞 2023 年 6 月 20 日）

このワークシートはhttps://nie.hokkaido-np.co.jp/でダウンロードできます

道新ワークシート

年　組　名前

出生率1.26 過去最低

昨年人口動態 出生数最少77万人

道内1.12 5年連続低下

2023年6月3日(土)朝刊 全道版 1ページ （記事は再編集しています）

① 今回、出生率が過去最低となった理由として考えられることを、記事を参考に書きなさい。

② 出生率を上げるために、国はどのような政策を行うと良いか。あなたの考えを書きなさい。

作問協力・北海道社会科教育研究会　2023. 06. 20　第1119号

【①のワークシート例】
（北海道新聞 2023 年 12 月 29 日）

魅力ある町並みへ挑戦続けて

全7部の連載終了 記者座談会

資料読み解き新事実／市民もっと関心を

NIE×未来学　～小樽の今を知り、小樽の未来を考える～

総合的な学習の時間のゴールは、「どんな小樽にしたいのか」「どうすればよ良い小樽になるのか」など持続可能な小樽にするために、色々な視点から地域創生プランを提案することです。そのためには、小樽の「課題」はもちろんのこと、「強み」は何かを知ることが大切です。まずは、以下の新聞記事を読んで今の小樽の情報を得よう！

北海道新聞 2023 年12月29日

【③のワークシート例】
（朝日中高生新聞 2023 年 11 月 5 日）

NIEタイム ワークシート R6.2.2発行　☆コラムを読もう　年　組　番 氏名

天声人語

初級（４分）中級（３分）上級（２分）

☆わかった事、感じた事をメモしよう。　1分

☆感じた事を表現しよう

担当から ～文章作成に挑戦～ 上級編

たまには素の自分もいい　周りの印象に近づきたい　見かけも素も本物の自分

【④のワークシート例】

（北海道新聞 2023 年 12 月 26 日）

NIE 文学的文章を読み深めよう③

年　組　番　氏名

札幌誕生 <143>

門井　慶喜

箱庭(8)

トミと八重子もこの日ばかりは和人のように小袖をまとい、帯をつけ、羽織を着て来たのだが、トミが興奮して、背のびをしつつ、

「まだかな。まだかな」

とか、

「前のもんが邪魔で、舞台が見えん。もっと中へ入れんか」

とか、しきりと声を張り上げていたら、背後から、

「おい」

声をかけられた。

振り向くと、男子五、六人。

上は十七歳くらいから、下は五、六歳までで、いちばん年ちいしいのが、

「お前ら、アイヌか」

全員、目が敵意にみちている。姉妹が答えないでいると、

「とぼけるな。さっきから話しておったろう。アイヌ語じゃ。その着物どこで盗った」

八重子は、ぼかんとした。

何を言われているのかわからなかった。それでなくても和人のことばは慣れておらず、家のなかで誰かに日常の用を言いつける程度にしか話すことができないし、聞き取ることもむつかしい。

有珠ではアイヌ語のほうが公用語なのである。数秒後にようやく意味がわかると、体温が上昇し、頭のなかが煮え湯になった。

「と、と、盗った？」

と和人のことばで言い返そうとしたが、相手はかまわず、

「有珠から来たのか？　身のほど知らずな。の子ども。帰れ帰れ。ここは大和民族の親神様のましますところじゃ。お前らごとき人間がおったら境内が汚れる」

（出典）二〇二三年　一二月二六日　北海道新聞

【語句の意味】

○和人（わじん）…文献史料による「和人」の初出は定かではないが、江戸時代後期には江戸幕府が当時のアイヌに対する日本人の自称として用いている。

○小袖（こそで）…現在の和服のもととなった、袖口の小さく縫いつまっている衣服。

○羽織（はおり）…小袖の上に重ねて着た上着。洋服で言うカーディガンやジャケットのようなもの。

○有珠（うす）…北海道南西部、内浦湾に面する伊達市（だてし）の旧村域。

○煮え湯（にえゆ）…煮え立った湯。熱湯。

○身のほど知らず…自分の身分や能力などの程度をわきまえないこと。

○ましま…いらっしゃる。

○境内（けいだい）…境界より内側。特に、神社や寺院の仕切りの内側。

解答

――線部「体温が上昇し、頭のなかが煮え湯になった」とありますが、そのような状態になったのは、どんなことを理解し、どのような気持ちになったからですか。六十字程度で書きなさい。

（４）日常的に新聞を目にする環境作り

新聞を取っていない家庭が年々増えていく中、生徒が新聞に触れる機会をなるべく多く持つことができるように、図書室にだけではなく、２階階段前掲示板や３年生教室の横などに、生徒の動線を考えて目に触れやすい位置へ新聞を設置している。

（２階階段前掲示板の新聞コーナー）

（3 年生教室横に設置された新聞コーナー）

また、廊下や教室にも生徒の生活に関わる内容や、関心を持ってほしい内容などの新聞記事の切り抜きを掲示している。

（廊下に掲示された新聞の切り抜き）

（教室の後方に貼られた新聞の切り抜き）

（５）「どうしん記事データベースまなbell」の活用

北海道新聞の「まなbell」では、過去の新聞記事をキーワード検索することができるため、課題に応じた情報収集や、生徒の興味関心に応じた自主的な情報収集活動を行うことができている。

国語科では冬休みの宿題として、タブレット端末を利用して、興味・関心を持った記事について、自分の考えをまとめて作文を書く活動を行った。作文作成や作文提出についても、「まなbell」を利用して幅広い時間に取り組むことができることから、能登半島の地震についての記事を読んで自分の思いをまとめた生徒が、その日のうちに作文を送信してくるといった例も見られた。生徒に示した課題の具体的な内容は次の通りである。

【国語科の冬休み課題内容】

○『まなbell』で新聞記事を読んで、自分の考えをまとめよう。

手順

①『まなbell』を使って、自分が興味・関心を持てる新聞記事を探して読む。

②　①の新聞記事について考えたことを350字以上400字以内で作文を書く。

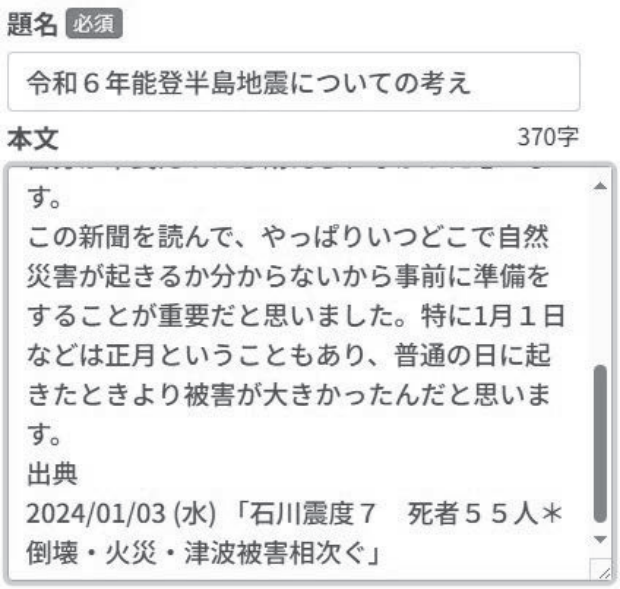
③　②の作文は『まなbell』内の「作文を書く」を利用して作成する。

④作成した作文は「先生に送る」の機能を使って提出する。

注意事項

※作文の最後に、「出典」として、「新聞記事の日付け（年月日）」と「記事の見出し」を書いて下さい。

※作文の中で新聞記事を引用するときは、必ず「」をつけて、自分が書いた部分と区別がつくようにして下さい。



（生徒が「まなbell」で提出した作文）

３．今年度（７年目）の成果

ＮＩＥを通して付けたい力は主に、①インプットする力（速く、正確に読み取る力）、②まとめる力（キーワードを基にイメージする力）、③アウトプットする力（思いを分かりやすく伝える力）の３点である。

①については、年度初めのころは読むだけで時間がかかる生徒たちも、毎週の取組を経ることで、すばやく読めるように成長していく姿が見られる。

②については、文章の内容が自分たちにとって身近ではない話題のとき等は要点を掴みかねている生徒が見られるが、これについても回数を重ねることで内容理解の力が身についていく姿が見られる。

③についても、なかなか自分の思いや考えを持てなかった生徒達も、新聞記事を通して多様な考え方に触れることで、自分なりの根拠を持って考えを書くことができるようになっていく姿が見られる。

いずれについても、単発の取組ですぐに力がつくものではないため、次年度にも複数の取組を継続・発展させることでさらなるレベルアップを図っていきたい。

２０２３年度　NIE 実践報告

情報文を読み、考えたことを書いてみる

札幌市立宮の森中学校　教諭　松尾　暁子

１．はじめに

本校は、札幌市中央区にある全校 10 クラスの小規模校である。周りを山に囲まれ、校地内に川が流れる自然豊かな環境にある。また宮の森地区は、教育施設に恵まれており、円山競技場では「陸上競技大会」、大倉山ジャンプ競技場での社会科「地形学習」、円山動物園での理科「セキツイ動物学習」、本郷新記念札幌彫刻美術館での「美術鑑賞学習」と環境を生かした学びを実践している。そして、地域にお住まいの方の手を借りた「オーロラ学習」「キャリア学習」など、人的特色を生かし、コミュニティースクールとしてのありかたも模索している。

教育目標である「自立・共生・未来志向～自ら立ち、共に生きることを学び、明日を志す生徒」を実践する中で、「ユニット学習」・「異学年交流」も本校ならではの教育形態である。

２.生徒の様子

本校は、穏やかで真面目な生徒が多い。今回、新聞を活用した国語の授業に取り組んだ 2 年生の「学習などについてのアンケート」の結果によると、「自分には良いところがある」と思っている生徒が 79.2％と自己肯定感も高い傾向にある。「1 日の時間の使い方を自分で考え生活している」61.0％「自分で計画を立て学習している」62.3％と過半数ではあるが、残りの生徒に関しては、日常生活を自主的に過ごすことに関する課題が残る。「毎日の朝読書」に取り組み、教科で課している「ビブリオバトル」にも積極的に取り組んでいる。また「読書は好きである」と回答した生徒は 66.2％いるが、日常生活の中で新聞を読むことはほとんどなく、新聞にテレビ欄があることさえ知らない生徒が複数いた。最近の傾向で新聞を取っていない家庭もかなりあり、情報は動画で得る傾向が強い。

全国学力学習状況調査の結果を見ると、どの項目も全国平均を上回っているが、「情報の扱い方に関する事項」では「情報と情報の関係について理解する」ことに課題があるとされ、「原因と結果」「意見と根拠」「具体と抽象」などの基本的な情報と情報との関係を理解し、実際に「話す・聞く・書く・読む」の場面での活用が、国語科の指導目標の一つであると確信した。

３．実践の内容

上記の学力調査の課題を踏まえ、新聞を活用した学習として、以前取り組んだ「まいとぴっくす」を実行することにした。「まいとぴっくす」とは、A３のノートに注目した新聞記事を貼り、簡単な感想を書くというものである。

０，オリエンテーション

まず、学校にあった古新聞朝刊１日分を全員に配り、どのように記事が流れているかというような基本的な新聞の読み方や「見出し」「リード」といった構成に関する用語などを教えた。次に、「まいとっぴっくす」のねらい

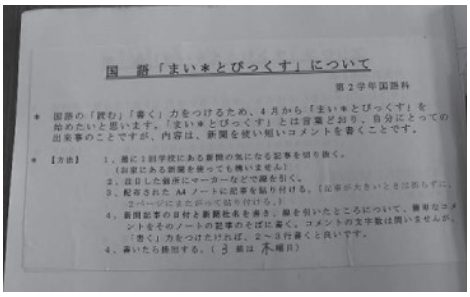
ア、　新聞などの情報文にふれる。

イ、　その情報に対しての自分なりの意見を持つ。

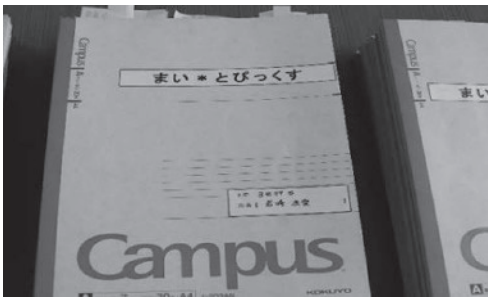
ウ、　その情報を「ユニット」で交流し、他者からの意見や感じ方を共有する。

という３点を伝えた。その後、A３ノートとシールを配り（写真１・２・３）、週に１回決められた曜日に「まいとぴっくす」を提出することと、それまでに新聞を読み、簡単な感想を書いて提出することを伝えた。

（写真１）



（写真２）



（写真３）

また、配られた１日分の新聞の中から目にとまった記事を切り抜き、ノートに貼り付け、意見・感想を３～４行程度書き提出させた。

１，実践１（慣れる）

１学期は、「まいとぴっくす」のねらい「ア・イ」にしぼり、まずは新聞を読んでみることを第一にした。家庭で新聞を取っていない生徒のために、学校で購読している「北海道新聞」を用意し、教室前の廊下に置いた（写真４・５）。家庭に新聞がある人も、隙間時間を利用し廊下の新聞を利用することを勧めた。当初は、１週間図書館に置いた後のものから３ヶ月前の遅れた新聞を利用した。遅れた情報ではあったが、新聞にふれ、あまたある情報の中から個人の関心を引くものを見つけ出すことに重きをおき、教員対生徒との交換ノートのような形で進めた。（その後、新聞の不足が顕著になり、北海道 NIE 研究会に協力をいただいた）

（現在の廊下の様子４）

２，実践２（自分の意見をもつ）

新聞を読み慣れてきたところで、夏休みの課題として、北海道 NIE 研究会の先生が公務支援メッセージに UP してくださっている新聞記事を利用させていただいた。UP　してい

ただいた中から 10 点選び、コピーしたものを冊子にして配布した。生徒はその中から 4 点選び、よく読んだ後、自分の意見を 10 行程度書くこととした。

（写真５）

さらにその中から 1 点選び、原稿用紙 400 字～800 字で簡単な意見文を書くこととした。（写真６・７）

（写真６）

（写真７）

３，実践３（自分の意見を構築するために他者との意見の交流をする）

抵抗なく新聞が読め、自分の意見も書くことができるようになってきたところで、「意見文を書く」ことに取り組んだ。自分の意見を構築するために、マイトピックスのねらい「ウ」の「ユニット」を使った学習に進んだ。（写真８～10）

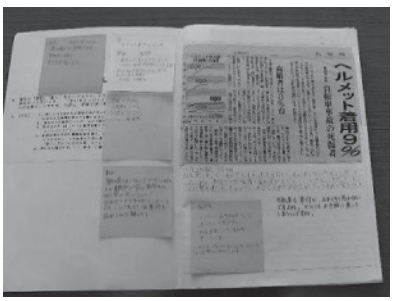
（写真８）

（写真９）

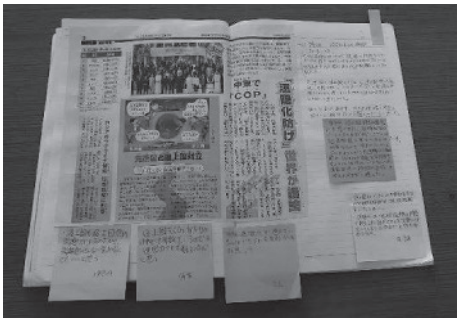
（写真 10）

「ユニット学習」とは、平成 19 年度より本校に導入された学習形態だ。現在も「令和の宮の森型教育」において「目指す生徒の学びの姿」の一つ「相互啓発と相互承認のある学び」を具現化するため、授業中しばしば実行される形態である。学び合いを想定した３～４人のグループを学級担任がつくり、座席を指定する。そのメンバーで意見を交流しながら「相互啓発と相互承認」を促すスタイルである。

お互いに各々の選んだ記事と各々の意見を書いた付箋を読み合い、その後、記事や他者の意見に対し、読んだ感想・意見を付箋に書き、回し読みをする（写真８～10）。中学生であるため、深みを持った意見は少ないが、他者と交流することで「そういう考え方もあるんだな」「こんなこと考えられるなんてすごいな」といった「相互啓発と相互承認のある学び」から、自分の意見を構築する一助とした。



（写真 11）



（写真 12）

４，実践４（意見文を書く）

中学生同士の意見では浅く偏りがちであるため、道新の「まな bell」やその他の検索エンジンを使い、関連の記事や情報を読ませた。その後、付箋に「意見と根拠」「予想できる反論とその反論」を書き込ませ、意見文としての起承転結に列べさせた（書写 11・12）。その後は従来の原稿用紙に書いていく作文指導の流れで進めた。

４．成果と課題

（１）成果

これまで新聞を目にすることはあっても、隅々まで目を通すことがなかった生徒が多いため、新聞（情報文）にふれる良い機会となった。新聞ごとに同日の記事であっても、1 面の取り扱いや主張が違うという「気づき」が、複数の新聞を比べ読みする中で自然に生まれた。また、ある程度の生徒が「感想と意見の違い」（「意見には根拠が必要だ」）ということを認識できるようになった。さらに、比較的多くの生徒が、新聞の文体をお手本にし、整った文章を書くことができるようになりつつある。

（２）課題

４月から 2 年生を対象にこの取り組みを始めたが、3 年生になって継続することは時間のうえで難しい。そのため、単年度の取り組みとなってしまう。この取り組みの成果は、後日の全国学力学習状況調査の結果を待ちたいが、１週間に１度新聞を読んだことが、成果につながったかは正確には検証できない。自主的自発的に新聞に親しむようになってほしかったが、働きかけなければ新聞を読まないという現実も課題なのかもしれない。

おわりに

期限を過ぎていたにもかかわらず、本校の生徒のためにご尽力くださった方々に深く御礼申し上げます。これまで小説や動画以外のものを目にすることがなかった生徒が、積極的に廊下で新聞を立ち読みしたり、休み時間に教室で読んでいたりしました。今回の取り組みが、彼らの生きる力につながっていくことを願っています。

２０２３年度　NIE 実践報告

小中一貫校（義務教育学校）における新聞活用
～全校で新聞に親しみ、社会を知り、社会に参画しようとする子どもたちに～

札幌市立義務教育学校福移学園　教諭　福本　勇太

１．はじめに

本校は、北海道札幌市の東区に位置しており、各学級１学年、全校児童１００名の小規模特認校である。また、今年度から札幌市初の義務教育学校「札幌市立義務教育学校福移学園」として新たなスタートを切った。

２.児童（生徒）の様子

本校は、小中一貫の小規模特認校のため、ほぼ変わらぬメンバーで９年間を過ごすことになる。環境が変わらないため安心して学校生活を送れる一方で、ずっと一緒だからこそ集団をよりよくしていこうという意識や社会に参画しようとする意識を高めていくことが難しい実態があった。また、情報収集＝インターネットという意識が強く、全てインターネットで解決しようとする姿も見られた。そこで、新聞を活用することで社会を知り、社会に目を向け、社会に参画しようとする子どもたちに、また、様々な方法を用いて情報を集め、集めた情報を取捨選択して活用できる子どもたちになってもらいたいという思いから、昨年度より NIE 教育実践指定校として取組をスタートした。昨年度の取組から新聞を日常の中で当たり前のように活用できるようになってきたので、今年度は学級としてではなく、義務教育学校として１～９年生の発達段階に合わせてどのように活用できるのかを探ることにした。

３．実践の内容

（１）日常の中での活用

①　新聞コーナーの設置

まずは、全校の児童生徒に新聞に触れてほしいと思い、廊下に新聞コーナーを設置した。目につくところに設置したことで、前期課程だけではなく後期課程の生徒も新聞を手に取って読む姿が見られるようになってきた。

②　朝の会で紹介した新聞記事を図書室に掲示

昨年度から、新聞を読む機会を学級全員に作るために、日直の当番活動として朝の新聞記事紹介を行っている。今年度は、学級内だけでなく全校の児童生徒にも興味をもってもらうため、学校司書さんと連携し、教室での紹介後は図書室に掲示することにした。図書室に本を読みにきた帰りに新聞記事を読

む子どもたちの姿が見られた。

（２）学習の中での活用

①　４年生国語科「新聞を作ろう」でのオリエンテーション

昨年度は５年生でオリエンテーションを行ったが、もっと早く新聞のことを知っておくことで今まで以上に新聞を活用していけるようになると思い、今年度は４年生の先生と連携し、４年生国語科「新聞を作ろう」と関連させてオリエンテーションを行った。じっくりと新聞を読むことで、なんとなくしか知らなかった新聞について詳しく知ることができ、新聞の特徴を捉えることができた。

②　６年生社会科「わたしたちのくらしと日本国憲法」での３社読み比べ

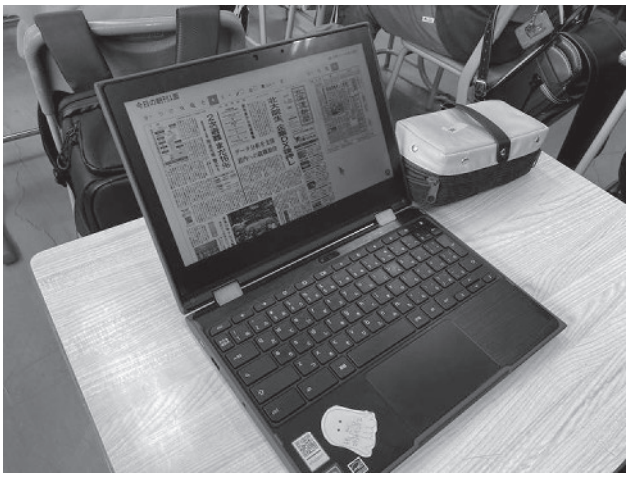
６年生は、昨年度から新聞を活用してきたことで、新聞のよさを実感し、新聞＝信頼できるメディアであると考えるようになった。そこで、新聞３社の憲法記念日の新聞を用意し、読み比べてみた。そうすると、「あれ？どの新聞も憲法のことが一面になっているけど、新聞によって書いていることが違う。」「見出しも全然違うね。」と、新聞によって書き方が異なっていることに気付いた。信頼できるメディアである新聞であっても、新聞社によって書き方や内容が違うことがあることを知り、「やはり複数の方法で情報を集めることが大切だね。」「いくつか読むことでいろいろな見方ができるようになるね。」と、新聞に対する見方が広がった。

北海道新聞　２０２３年５月３日
読売新聞　　２０２３年５月３日
朝日新聞　　２０２３年５月３日

（３）「まな Bell」の活用（６年生の実践）

①　朝の NIE タイムでデジタルに慣れる

週に一度「NIE タイム」というのを朝の１５分間で行っている。この時間では、まな Bell を開き、今日の一面を読んでから自分が「なるほど」と思う記事を見つけて読むようにしている。すぐに使い方を覚え、様々な場面で活用するようになってきた。



② 学習のまとめでデジタル新聞を作成

社会科「世界に歩み出した日本」の学習のまとめとして、まな Bell の新聞作成機能を使ってデジタル新聞を作成した。何度も書き直したり、自分で資料を選んで挿入したりと、手書きの新聞ではできなかった資料の活用の仕方や修正しながら新聞を作るということができるようになり、今まで以上に学習を振り返りながら作ることができた。

４．成果と課題

（１）成果

① 他学年への広がり

６年生を中心に新聞の取組を続け、発信してきたことで、「自分の学年でもやってみたい」と言ってくれる先生が増え、国語、社会、理科、総合などと関連させていくつかの学年で取り組むことができた。また、今年度は２、３、４、５、６年生が「小学生新聞グランプリ」に応募した。前期課程全体の６０％以上が参加し、学校賞をいただくことができた。教員間での情報共有、カリキュラムに位置付けた取組により、新聞の活用が少しずつ学校全体に広がってきたように感じる。

② 他の活動への広がり

新聞の取組は、係活動や家庭学習にも広がった。まな Bell を活用してきたことで、子どもたちから「係活動でもデジタルで学級新聞を作ってみたい。」という声が聞かれるようになり、「新聞係」が係活動の中でまな Bell を活用し始めた。タブレット端末でみんなにアンケートを取ったり、インタビューをしたりして、月に２回程度デジタルの新聞を発行している。新聞が「学級をより楽しく豊かにする」ことに繋がった。

また、家庭学習でもまな Bell を活用し、新聞を読んで要約や感想を書いたり、学習のまとめとしてデジタル新聞を書いたりする子どもたちが出てきた。新聞が「学習をよりよくする」ことに繋がった。

③ 後期課程への広がり

２年間の実践を通して、前期課程の中だけではなく、後期課程にも少しずつ新聞の取組が広がってき

た。朝の時間に新聞を読んだり、部活動に行く前に新聞を読んだりする生徒の姿が見られるようになり、新聞がより身近なものになってきたように感じる。また、新聞を活用した授業をしようとしたとき、後期課程の社会科の先生からいろいろと教えていただき、実践に生かすことができた。児童生徒間だけではなく、教員間でも新聞の活用に関して情報共有することの大切さを感じた。

④　社会に参画しようとする意識の高まり

新聞を通して社会に興味をもち、社会を知り、社会について考える機会が増えたことで、子どもたちの視野は学校から社会全体へと広がり、自ら社会に参画しようとする意識が高まってきた。６年生社会科「札幌市民の願いを実現する政治」では、札幌の除排雪をこれからも持続可能なものにしていくために、市民もできることをしていく必要があるという思いから、札幌市雪対策室の方に来ていただき、自分たちの考えをプレゼンテーションすることができた。

（２）課題

①　各教科における新聞の活用

昨年度よりも学習の中で新聞を活用する場面を増やすことはできたが、新聞を通してどのような資質・能力を育みたいのかを全校で共有するまでには至らなかった。そのため、どの教科のどの場面で活用するとより効果的かというところまでは考えることができず、課題が残った。全校で新聞を活用していくために、新聞を通して育てたい資質・能力を教員間で共有し、それをもとに各教科においてどのように活用していくのかを考えていきたい。

②　義務教育学校としての取組へ

２年間取り組んできたことで、少しずつ新聞を活用する取組が広がってきた。しかし、まだ学校全体の取組にはなっていない。本校は、今年度から「義務教育学校」として新たなスタートを切った。小中一貫校、小規模特認校という学校の特徴を生かし、後期課程（７年生～９年生）も含め、１年生～９年生の全ての学年で取り組んでいけるようにしたい。そのために、まずは新聞を活用することのよさや新聞を通して育てたい資質・能力などを教員間で共有し、１～９年生の発達段階に合わせて、どのように新聞を活用していけそうか考えていきたい。

５．おわりに

２年間の取組を通して、全校で新聞に親しむことができ、新聞が身近なものになってきた。新聞は、単なる情報収集の手段の一つではなく、効果的に活用することで子どもたちの情報活用能力、読解力、社会参画意識を高めることができ、さらには学習や生活そのものをよりよくすることができるツールであることを実感した。これからも、１～９年生が同じ校舎で学校生活を送る義務教育学校だからこそできることに取り組み、子どもたちが新聞を通して様々な力を身に付け、社会を知り、社会について考え、社会に参画しようとする学校を目指し、尽力していきたい。

２０２３年度　NIE 実践報告

義務教育学校２年目のＮＩＥ活動

富良野市立樹海学校　齋藤　文玲

１．はじめに

本校は、富良野市の南東部に位置する、広大な自然林を有する東京大学北海道演習林に隣接する東山地区に開設された義務教育学校である。令和４年４月に「樹海小学校」と「樹海中学校」が統合され義務教育学校として開校した。ＮＩＥ活動においては、旧樹海中学校での実践を基本に５年生から９年生で実施し、今年度は２年目の取組となる。新聞を活用して、情報にじっくり向き合い主体的に読み解く力の向上を目指すこと、また、社会に興味をもち、それをよりよくしていこうとする課題意識や学習意欲を高める活動に努めた。

２.児童・生徒の様子

本校は、前期課程２２名、後期課程１１名、あわせて３３名の小規模校である。義務教育学校であることから１年生から９年生が同じ学び舎で生活をともにし、行事や総合的な学習の時間等では全校児童生徒で活動する機会が多いことが本校の特色でもある。少人数であることで、一人一人の学習活動が充分に確保され、授業での発言や発表する機会が多いため、堂々と発表できる力が身についている。

一方、学習課題として、今年度の全国学力・学習状況調査においての分析結果から以下の２点について、ＮＩＥ活動を通して改善を図りたいと考え実践した。

○「書くこと」に関しては、前期課程・後期課程共に、昨年度に比べて正答率の改善が見られた。
○「読むこと」「情報の扱い方に関する事項」に関しては、特に後期課程において全国・全道の正答率を大きく下回る結果となった。

これらの課題解決に対して、次のような対応策を考えた。

一つ目の「書くこと」に関しては、昨年度からの改善が見られたため、新たな課題として挙げられた「読むこと」と併せて、これまでの取組を継続していくこととした。国語の授業だけではなく、全教科で課題意識をもって取り組み、自らの考えを適切に表現できるよう指導する。さらに、朝学習として取り組んでいる「朝読書」「ＮＩＥ活動」をさらに充実させ、表現力や読解力の育成を進めた。

二つ目の「情報の扱い方に関する事項」に関しては、参考資料となる図書や新聞、またウェブサイトから必要な情報を引用し、より相手に自分の考えが伝わるような文章を作成する力を養う。そのため、各教科や総合的な学習の時間における調べ学習において、自分の考えの根拠を明確にできるよう指導した。さらに、朝学習として取り組んでいる「ＮＩＥ活動」をさらに充実させ、自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くよう指導した。

以上、次年度においてもＮＩＥ活動を継続して取り組むことで、本校児童生徒の学習課題解決に結びつける実践を進めたい。

３．実践の内容

①　取り組む時間と場所を明確に設定する。

【指導案】

１．ねらい　・新聞を読むことを通じて、時事への関心を高めるとともに、情報を取捨選択する力を伸ばし子どもの思考力や読解力を養う。

２．対象学年　・中等部（5～7 年）、高等部（８～９年）

３．活動日時　・毎週火曜日の朝の学習時（８：０５～８：２０）に実施

４．活動内容　・新聞記事から興味ある内容についての感想や意見をまとめる。（隔週Ａ）
ワークシート「朝の新聞」にまとめる。→ｉＰａｄで撮影する。
・前週まとめた「朝の新聞」について発表し、意見を交流する。（隔週Ｂ）
発表時間は 30 秒程度→児童生徒数、発達段階によって変更可。発表後ワークシート掲示。

５．活動のながれ

	児童生徒の活動	教師の活動	備考
隔週Ａ	**①図書室に新聞を取りに行く** ・図書室の新聞棚から新聞の選び教室へ **②興味のある記事を選び、感想や意見をまとめる。** ・ワークシート「朝の新聞」に記入する。 **③発表準備・片付け** ・発表内容を考える。 ・ワークシートと新聞をｉＰａｄで撮影する。 ・新聞を返却する。	①・図書室の新聞棚前が、密集しないよう指導する。 ・一面や、気になる紙面を参考に選ぶよう指導する。 ②・学年の発達段階や、個人の興味に合わせて、記事選びや記入方法についてアドバイスする。 ③・発表原稿などのアドバイスをする。 ・返却時の私語等への指導	①新聞１人１部持っていく。 ②ワークシートの枠内に収まるように記入する。 ③発表練習時間の設定無し。各自で準備する。
隔週Ｂ	**①発表会** ・発表する。→質問に答える。 ・発表を聞く。→質問する。 **②担任の話を聞く。** **③ワークシートを掲示する。**	①発表会 ・質問は、学級の実態に応じて実施する。 ②発表会の講評 ・話し方や取り組み方などもついて評価する。 ③まとめ ・きれいに掲示されているか確認、指導する。	①発表することをねらいとするため、質問は児童生徒の実態に応じて実施 ②担任以外も可能 ③個人用にファイリングできるようにする。

本校では、「学力向上・目標達成に向けたロードマップ」を作成し、学力向上に向けての実施計画を立てている。そこでは、ＮＩＥ活動を学力向上の軸に据え、年間を通して実施している。

取組の推進は本校の組織「学力・体力向上プロジェクト委員会」が担い、児童生徒の現状を踏まえながら、具体的な方策を立てている。毎朝、登校後、朝の会までの１５分間を「朝活動」と位置付け、「学力・体力向上」の基礎となる「朝読書」「朝運動」そして「ＮＩＥ活動」を設定し、活動している。

【学力向上・目標達成に向けたロードマップ】

学力向上・目標達成に向けたロードマップ　【富良野市立樹海学校】

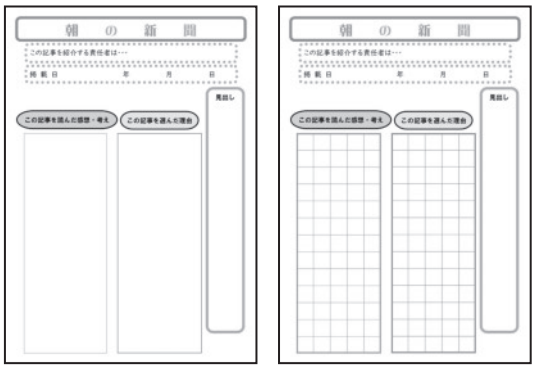
②　新聞の選定

ＮＩＥ活動は、前記の通り毎週火曜日に実施している。取り組む時間に限りがあり、活動を円滑にするために、児童生徒が手に取りやすい図書室前に新聞棚を設置し、新聞を身近に感じる環境を整えた。

新聞会社別に発行日順に並べることで、一面記事の取り上げ方の違いや、時事情報等を一目で比較しやすくし、児童生徒が興味のある新聞を選べるようにした。

③　まとめ作業

ＮＩＥ活動は、新聞記事から興味ある内容についての感想や意見をまとめ、まとめた感想を発表し意見を交換した。本校のＮＩＥ活動は、１年を通して実施するため、継続できるよう無理のない取り組みにすることを目標に掲げている。そのため感想用紙はできる限り簡素なものとし、二種類の感想用紙から選択して記述量を調整できるようにした。



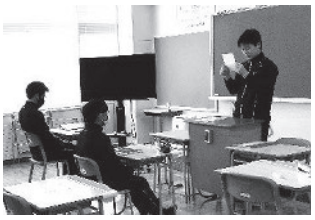
④　発表

発表は、学年の実態に応じて、柔軟に行っている。

読んだ新聞をモニターに映し出すことで、記事の内容を共有しながら発表する学級もあった。

また、本校は小規模校のため、人数の少ない学級では、他学年と合同で実施するなど、多様な意見が交流できるよう工夫して進めている。

発表後は、発表内容についての質問・意見交換を行い、担任の補足を加え、より深い理解・学びにつなげている。



⑤　掲示・記録

発表後は、他の学年のまとめも交流できるよう、廊下に「ＮＩＥコーナー」を設置して掲示している。また、過去の自分の記事を読み返せるように、ファイリングしてまとめ、次年度に引き継げるようにしている。

⑥　朝学習以外での新聞の活用

朝学習での取組だけでなく、国語科の授業や、他教科の調べ学習等でも新聞を活用できるように、資料の整備を行っている。特に本校では、学校司書が精力的に環境整備や指導に関わってくれているため、スムーズな取組を進めることができた。

国語科の授業では、学年に応じた新聞の読み方や、活用の仕方について指導を行った。社説や投書など、必要な情報をピックアップして提供したり、自分たちで新聞を作成する際の資料として、新聞の構成についてまとめたりしたことで、気軽に新聞を活用した授業を進めることができた。

他教科においても、テーマに沿った記事を選ぶアドバイスや、過去の新聞記事をスクラップ資料にまとめ提供するなど、学校司書と連携しながら児童生徒の興味に合わせた新聞の活用をすることができた。

また、地域に根ざした記事を切り取って掲示することにより、児童生徒はより関心をもって新聞を手に取るようになった。学校司書と連携して進めたことで、普段の生活で新聞を読むことがほとんどない児童生徒にも、新聞を身近に感じさせることができた。

４．成果と課題

（１）成果

本校では、昨年度からの継続として、ＮＩＥ活動に取り組んだ。これまでの実践で得られた成果から、今年度は、今までの実践内容を継承しつつ、児童生徒や担任の負担をなくせる工夫を模索した。

①　継続して取り組んだ成果

令和元年度よりＮＩＥ活動に取り組み、本校の研究主題である「自らの考えを表現し、共に深め合い高め合う児童生徒の育成」に大きな成果が得られている。特に、自らの考えを発表する力、意見交換からより理解する力の向上が見られた。また、現在の社会情勢への関心の高まりから、他の学習での相乗効果や進路選択の一助となった。

②　新たな取り組みによる成果

実施回数を週１回に減らした分、記事を画面で共有することで新鮮な気持ちで発表に臨めるようにした。また、朝活動以外の時間にも積極的に新聞を活用し、よりＮＩＥ活動への意欲を喚起することができた。学校司書と連携することで、新聞に対する理解を深め、充実した活動を進めることができた。

（２）課題

新聞を読む時間が限られているため、朝学習の時間だけでは、比較読みをする機会を確保できない。情報を取捨選択、整理し、批評的に読み取る「情報リテラシー」を身につけるためには、国語をはじめとした各教科の指導計画の中で、新聞を活用する場面を位置づける必要がある。

また、学年の実態に開きがあるため、５・６年生のＮＩＥ活動は、学級担任のサポートが必須だった。新聞の読み方、漢字の読み、語句の意味など記事の内容を理解するのが困難なため、段階に応じた丁寧な指導や、小学生新聞の活用など個に応じた記事の選定が必要だった。

５．おわりに

本校のＮＩＥ活動も、２年目（旧樹海中学校からの取組も含め５年目）となった。この活動を通して、児童生徒は大きな成長を遂げた。社会の出来事への関心、気になった出来事をさらに詳しく調べるなど「主体的に学習に取り組む意欲と学習習慣の確立」が見られた。今後は、今までの「継続できるよう無理のない取り組み」から発展的な活動を計画する必要がある。現在、朝の１５分間だけで実施している活動を、各教科の中で計画的に取り入れ、より深く探究できる機会を設定する必要がある。今後も、９年間を見通したＮＩＥ活動を検証し、さらなる児童生徒の成長を促していきたいと考えている。

２０２３年度　NIE 実践報告

進路指導を絡めた新聞活用授業

北海道釧路東高等学校　教諭　山本　憲一

１．はじめに

本報告は、単元の目標である「話題や題材に応じて情報を収集し、自分の考えをまとめる」を達成するために、新聞を活用した授業に進路指導の中の面接指導をリンクさせたものである。生徒は、1 年次より総合的な探究の時間における「地域探究学習」を行っており、2 年次の見学旅行では、新聞を活用して行った「地域ＰＲ」を実践し、このことは前年度の NIE 実践報告で報告した。(「新聞記事を活用した地域探究学習の取組)

本報告は、今回の実践を説明するとともに、本校生徒が新聞活用授業によってどのように変容したかについても考察する。

２. 今回の新聞活用授業について

今回の取組は、夏休み前の学校祭準備期間を始期（６月下旬）として行った。就職希望の生徒は出願した後、早い場合には、10 月には就職試験がスタートすることを念頭に置いた。進学希望の生徒も、多くは面接試験が課されており、その重要性は就職希望の生徒と同様に認識されていたと思われる。

生徒には、来る面接試験に向け、自分の専門や得意分野の知識を新聞によりストックし、自分の考えを構築することで面接が有利に展開することを説き、モチベーションを持たせた。

【単元とスケジュール等】

国語表現（三学年選択　27 名）

単元名：話題や題材に応じて情報を収集し、自分の考えをまとめる。

①オリエンテーション（１時間）

②新聞を読み、取り上げる記事を選ぶ。（２時間）

③取り上げた記事をワークシートにまとめる。（２時間）

④ワークシートを用いて班内で発表。（２時間）

⑤この取組のふりかえり（1 時間）

〈取組の様子①〉

３．本校生徒について

本校の今年度の生徒数は１学年 80 名（男 42・女 38)、２学年 84 名（男 25、女 59)、３学年 89 名（男 37・女 52）で、全校では 253 名（男 104、女 149）である。伝統的に女子の多い高校である。近年の進路先は、就職が３～４割程度、進学が６～７割程度である。

４．実践の内容

今回の実践のポイントを以下に示す。

⑴ 自己の希望進路を明確にする。

この取組を行う上で、重要なポイントである。生徒がこの時点で、希望進路が明確になっていれば、自分がその分野について精通していなければならないことになり、自ずと新聞記事の選定が容易になり、スムーズに学習できる。しかしながら、実際に

はそうでない生徒も一定数おり、新聞記事の選定に二の足を踏む場合もあった。また、希望進路が明確である生徒もその分野について、周辺知識がないことを痛感し、思いを新たにした生徒もいた。

⑵ 新聞の提示

生徒に提示した新聞は、NIE から提供されている「北海道新聞」「釧路新聞」「朝日新聞」「毎日新聞」「読売新聞」「日本経済新聞」であった。自分の希望進路が地元や道内である場合は、「北海道」「釧路」を、また、そうでない場合には、それ以外の新聞にも目を向けるべきだとアナウンスした。本校生徒は、前者の場合が大勢を占めた。

⑶ 新聞記事の選定、要約

生徒は、ワークシートにもとづき、自分の取り組む記事を選定し、記事の絞り込み等を行った。授業者は、生徒に対し希望進路に沿った記事を選ぶ場合、そのイメージを膨らませることの大切さについて念押しした。例えば、幼稚園の先生や保育士志望の場合、「少子化」や「育児」「教育」等、子どもにかかわる記事に目を向けさせた。このことは、至極、当たり前のようではあるが、自分の希望進路先が他の領域とかかわりがあるにもかかわらず、矮小化している生徒も数多くいると感じたためである。

その後要約作業を行い、自分の中で知識を身につけ、目前に迫った「面接」の武器にすることを志向させた。希望進路が明確な生徒は、こうした作業がスムーズに行え、記事の要約の数も複数に及んだ。

一方でそうでない生徒は、新聞の選定におぼつかず、不本意ではあるが、授業者の方で、その生徒が好みそうな記事を選定、提供し、これに取り組ませた。

⑷ 本取組の効果等

本取組は、6 月下旬～7 月上旬に行い、生徒は夏休みを経て、それぞれで対策を講じ、希望進路に向け、挑戦した。その結果について、この取組がどれ程の効果をもたらしたかについて、確かなものは分かりかねるが、この後、それについて、生徒の事後アンケートに基づき考察してみたい。

〈取組の様子②〉

５. 生徒の実践

今回の取組について、生徒のワークシートを一部紹介する。

【生徒Ａ】

①新聞記事の要約等

〇〇バスは、運転手不足や働き方改革における「2024 年問題」などに対応するため、一部路線の廃止や減便を行う。約 140 人の運転手がいるが平均年齢は 53 歳９ヵ月。（以下略）

②感想・意見等

車が運転できないお年寄りの方や通勤通学で利用する人が多いバスが減便してしまうのは生活が大変になる人が増えてしまう。運転手が減ってしまったり、利用者が減ってしまったりしているのは事実ですが、絶対になくなってはいけない乗り物です。

より若い人たちがバスの運転手になってもらえるよう、給与面の改善等、見直しをすすめてほしい。

【生徒Ｂ】

①新聞記事の要約等

性犯罪歴がある人が、子どもと関わる職業に就かないようにするため、日本版ＤＢＳの義務化の対象を子どもに関わる全ての仕事とする声が高まっている。認定制度が浸透していくかどうかが注目される。

②感想・意見等

性犯罪歴がある人が子どもに近づけないようにするために、採用時の確認が大切だと思う。国や政府がこの制度にもっと協力すべきだ。

【生徒C】

①新聞記事の要約等

道内の社協の訪問介護数が前年比13%減。
働く人の高齢化、人手不足が深刻化。

②感想・意見等

介護する人も40、50代が多くなっていて、逆に若い人が少ない。確かに、大変な仕事ではあるが絶対になくせない仕事。給与面を見直し、介護職に就く人を増やさなければならないと思う。

３名の生徒のワークシートを紹介した。生徒Aは将来、小学校教員を希望している。今回の取組で新聞の有用性に気づいた生徒である。

B、Cはそれぞれ将来、保育士、介護士を志望しており、いずれもそれらに関連した記事を扱った。このような生徒は、取組状況もよく、授業への満足度も高い。進路指導と絡めて授業を行うことが有効なものであると再認識できた。

〈取組の様子③〉

６．成果と課題（おわりに）

（１）成果（アンケートを元に）

本取組の成果について、生徒からのアンケート（別紙参照）を元に考察したい。

アンケートの「1」「2」から、生徒の本取組の満足度はまずまずであったといえる。新聞を扱った授業が、良くも悪くも「新鮮」であったことと、目前に迫った「面接対策」がモチベーションになったと考える。

「3」「4」からは、生徒の新聞離れ、活字離れの実態がうかがえる。こうした現象は、若年層に限ったことではないと思うが、国語の指導者としては、「逆風」に立たされた思いがする。

しかしながら、今回の取組において、新聞の有用性やおもしろさにふれた生徒も少なからずいることが分かった。ニュースを手に入れるツールとして新聞を再評価していかなければならない。

「5」では、今回の授業によって生徒の変容の様子を調査したものであるが、簡単には生徒は変えられないと再認識した。新聞の「堅苦しい」というイメージを軽減させ、情報入手の有効な手段であることを今後も生徒に伝えていきたい。

（２）課題

本取組をとおして、生徒が予想以上に新聞から疎遠になっていることを感じた。昨今は情報過多の時代であり、さまざまなツールから手軽に情報を入れることができる。そうした環境の中で、生活してきた生徒は、新聞を「骨董品」のように見ているかもしれない。

しかし、今回の取組において、新聞に対する見方を変えた生徒も少なからずいた。新聞の良さは、紙面に記事が併記され、読者それぞれの主体的な情報が入手できることにあるのではないか。また。複数の新聞を比べ読みすることで、ある特定の考えに傾斜することなく、バランスのとれた見方が培われる可能性がある。

本取組は、２年次の新聞を活用した「地域探究学習」を継承するものであったが、依然として、生徒の「新聞」「活字」への抵抗感は少なからずある。先に述べた「新聞の良さ」を念頭におき、生徒のモチベーションを高めることを忘れず、今後も実践を重ねていきたい。

2023年度「新聞を活用した授業」アンケート集約

1. 今回の授業はいかかでしたか。

	とてもためになる		ふつう		ぜんぜんためにならない	
評価	5	4	3	2	1	平均4.4
人数	17	4	6	0	0	

（コメント等）

・ふだん知らないようなことを知れた。・ネットで十分。新聞を読むいい機会だった。 ・普段の授業よりたのしかった。・最近の日本の政治について知れたから。・新聞をみる機会がつくれたのはうれしい。・ふだん新聞を読まないから新鮮だった。・新聞の見方がわからなかった。・地域の問題に関心が持てた。・小論文試験に役立った。・語彙力が上がった。

2. 今回の授業は面接等の進路指導で役に立ちましたか。

	とても役に立った		ふつう		ぜんぜん役に立たなかった	
評価	5	4	3	2	1	平均4.4
人数	17	4	6	0	0	

（コメント等）

・面接のネタにはできた。・就職先の情報が手に入った。・新聞を読むことでニュースに関心を持ち、自分の気になるニュースを見つけることができた。・気になるニュースについて面接で訊かれた。・面接で参考になった。

3. ふだん新聞をよく読みますか。

	とてもよく読む		ふつう		ぜんぜん読まない	
評価	5	4	3	2	1	平均1.9
人数	3	1	4	1	18	

（コメント等）

・ふだん知らないようなことを知れた。・ネットで十分。・スマホの記事の方が読む。 ・電子版で読む方が好き。・家でとっていない。・テレビ等でニュースを見る。

4. 新聞を読むのは好きですか。

	とても好き		ふつう		ぜんぜん好きではない	
評価	5	4	3	2	1	平均2.9
人数	5	2	12	1	7	

（コメント等）

・そもそも読まない。・字が多いので好きではない。・つまらない。・文字が多くて嫌。・自分の好きな記事しか読まないが好き。

5. 今回の授業で新聞に対する見方は変わりましたか。

変わった	5
変わらない	22

（コメント等）

・新聞を読むことが増えた。・これからは少し新聞を読んでみようと思った。・知識が増えた。・これからも新聞の授業をやってほしい。・難しいと思い敬遠していたが、読んでみたらたのしいものだった。

２０２３年度　NIE 実践報告

新聞を読む、活かす（３年目の取組）

北海道富良野高等学校　教諭　北村　智裕（地理歴史・公民科）
教諭　小森　　猛（国語科）
教諭　渡辺　勇嗣（英語科）

１．はじめに

本校は、全校生徒数が３６２名（１年次３学級、２・３年次各４学級）の創立９８年目を迎える全日制普通科単位制高校である。令和７年度に、富良野緑峰高校と統合することになっており、普通科３学級、園芸観光デザイン科１学級、電気情報システム科１学級の合計５学級となる。

今年度、NIE 実践３年目となり、１年目からのテーマ「新聞を読む、活かす」を継続、発展させ、新たな取組を実践した。

以下、今年度の主な取組である。

〇各教科（国語、英語、地歴公民）
〇朝学習（小論文対策、時事問題対策）
〇進路実現に向けた取組（ＬＨＲ、総合的な探究の時間）

また、今年度も新聞を活用するコンクール等に応募した。

☆日本新聞協会主催「第１４回いっしょに読もう！新聞コンクール」応募（１～３年次）　※取組４年目
☆「北海道新聞　新聞切り抜き作品コンテスト」応募（３年次）　※取組５年目
☆北海道新聞富良野版連載「ふらの百景」応募（３年次）

今回は、この中から各教科の新たな取組を主に紹介する。

２．実践の内容

（１）国語科における NIE 実践

「新聞を読み比べて新聞社の特徴や考え方をまとめよう」

〇実践者：小森　猛
〇対象年次：３年次

①単元の目標

《高等学校学習指導要領国語科》
《思考力・判断力・表現力等　Ｂ（１）エ》

文章の構成や論理の展開、表現の仕方について、書き手の意図との関係において多面的・多角的な視点から評価することができる。

②活動内容

１時間目　単元の説明、新聞の概要説明、テーマの決定
２時間目　２紙の記事集め
３時間目　集めた記事を読み、気づいたことを付箋に書き出す
４時間目　ベン図を使って付箋を整理する
５時間目　２紙それぞれの考え方や特徴をまとめる
６時間目　発表準備
７時間目　発表、アンケート

③授業の実際

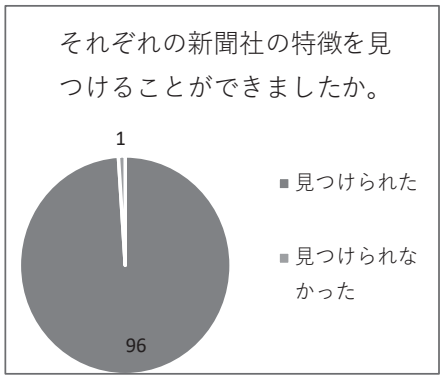
３年次「現代文Ｂ」の授業において、北海道新聞及び全国紙３紙（朝日、日経、毎日）を活用して、各紙を読み比べて記事の

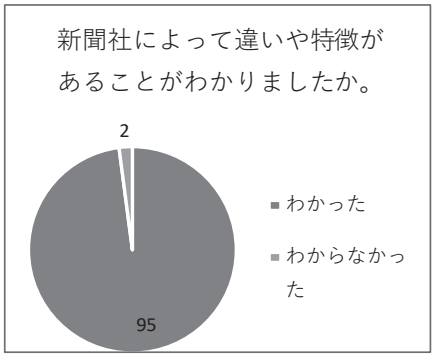
表現等の特徴や考え方をまとめ、自分の考えを深めるという実践を行った。

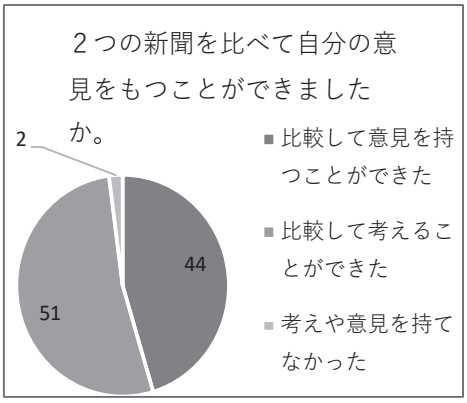
学習の形態は、生徒同士が協力しながら進められるということと新聞の冊数を考えて、グループ学習とした。およそ２か月分の新聞を取り置き、それを生徒に自由に読ませてテーマを決めてもらった。同一のテーマで比較する新聞は、北海道新聞とランダムに割り当てた全国紙とした。北海道新聞を固定した理由は、２部あり使い勝手が良かったからである。

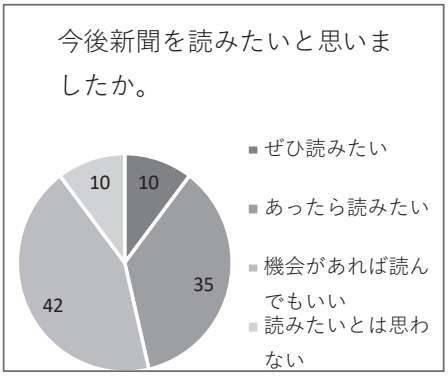
具体的な授業の進め方は、①新聞においてその出来事の取り扱いの軽重がわかる部分を全体で共有した。②記事を読み始め、気づいたことを付箋に書き出す。③テーマによっては記事がなかなか集まらない新聞社もあることが想像できたので、記事だけに囚われずに新聞全体を見ながら進めていく。④ベン図を用いて各新聞社における記事の表現等の特徴と考え方をまとめ、整理することを目標に発表させる活動を採り入れた。

④授業後アンケート　n=97









⑤授業後の生徒の感想

- 新聞を読もうと今まで思っていなかったので、この機会に新聞を読めたし、それぞれの会社の特徴や思いが何となくでも読み取れたので良かった。（意見多数）
- 新聞に対して興味が薄くなっている時代に、しっかりと様々な新聞を読むことができて良かったし、とてもいい機会だと思った。（意見多数）
- 各新聞社が差別化を図り、読者を増やす工夫があることが分った。また、同じ話題でも新聞社によって考え方が違うのがよくわかり、非常に面白かった。（意見多数）
- 普段読まない新聞を詳しく読んで気付けたところはあったが、それを新聞社ごとの考え方までもっていくのが難しかった。（意見多数）
- 新聞ごとに書き方の工夫やレイアウトとかが違うことを発見でき面白かった。（意見多数）

・普段新聞をしっかり読むことがないので、とても新鮮だった。このような機会で時事系の情報を知ることが出来て良かった。（意見多数）

⑥今後の課題

・取り扱いの軽重を考える際にレイアウトにばかり目がいくグループが多かったことから、記事を読み込ませる工夫をする必要があった。
・「考え方」というざっくりとした言い方になったことから、ターゲットとする読者層や、全国紙と地方紙の違いを考えたりする程度に止まってしまった。
・授業者として授業の目標としていた「新聞社がどのような思想をもっているのか」という視点で考察させるためには、もう少し段階を追って丁寧に指導していく必要がある。

（２）英語科における NIE 実践

〇実践者：渡辺　勇嗣

〇対象年次：３年次

①取組

日本語の新聞を読み、気になる社会問題を選び、それについて英語でプレゼンテーションを行うという活動を「コミュニケーション英語Ⅲ」において、年度末に実施した。

②活動内容

a　３～６名の班単位で、日本語の新聞を読み、気になる社会問題を選ぶ
b　英語でプレゼンテーション原稿を作成する
c　データ、写真、イラストなどの視覚教材を作成する
d　リハーサル
e　各班７分程度でプレゼンテーションを行い、ALT からの質問に答える

③まとめ

高校３年間の集大成として位置付けて行った。卒業後、すぐに社会人となる生徒も多く、社会問題に向き合い英語でプレゼンテーションを行うのは、難しいながらもやりがいのある活動となったと思われる。

（３）地歴公民科における NIE 実践

〇実践者：北村　智裕

〇対象年次：３年次

①取組

３年次の学校設定科目「北海道学」の今年度の新たな取組として、北海道新聞富良野版で連載されている「ふらの百景」を活用した授業を実践した。

「ふらの百景」において、富良野市博物館が、市内在住の「半農半画家」のイマイカツミさん（本校の美術時間講師）と展開する「ふらの百景」プロジェクトと連動し、歴史の跡や人々の営みを水彩画で紹介している。また、１９０３年（明治３６年）に富良野村から分離し、後の富良野町、富良野市となる下富良野村に初めて役場が設けられて昨年が１２０年になるのに合わせ、市民が考える名所「ふらの百景」を募集していた。（※下線部、２０２３年８月１３日北海道新聞富良野版から引用）

②活動内容

この科目の目標は、「北海道（富良野）に生活する者として、歴史や文化、自然や環境等の知識や技術を学び理解する。また、北海道（富良野）の抱える問題を理解しながら、その課題を探っていく」である。

以上のことから、次のように授業を展開した。

１時間目　新聞連載（３回分）を読み、歴史や文化、自然や環境等を理解する。

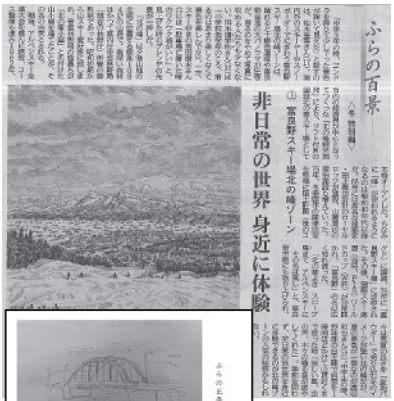
２時間目　各自の「ふらの百景」（思い出の場所）を選び、歴史や文化、自然や環境等を調べる。

この授業後に、富良野市博物館に応募した。

３時間目　新聞連載記事を参考に、新聞記事風にレポートを作成。

生徒が応募した「ふらの百景」の中からいくつかが採用され、「ふらの百景　冬特別編」として３回連載された。

↓北海道新聞２０２４年１月１０日


ふらの百景

非日常の世界 身近に体験

ドラマにも使用 愛される橋に

「富良野スキー場北の峰ゾーン」を取り上げた記事。４名の生徒が「推し」として応募し、採用された。

←生徒が作成した「ふらの百景」ふらの五条大橋

富良野高校の教室から見える、富良野市のシンボル的な橋。歴史や文化、自然や環境等も丁寧に調べ、まとめられている。

③まとめ

「北海道学」の履修者は、公務員や就職、専門学校進学などで多くの生徒が北海道（富良野）に残る生徒である。その生徒たちが北海道（富良野）を知ることで、将来その先にある地域の諸課題を解決していくきっかけになったと考える。

３．おわりに

今年度、全年次（１，２年次は全員、３年次は一部生徒）で取り組んだ日本新聞協会主催「第１４回いっしょに読もう！新聞コンクール」では、２年次生の１名「テーマ：十代女性に心の手当」が「北海道 NIE 推進協議会会長賞」を受賞した。また、本校は昨年度まで３年連続で学校奨励賞に選ばれていたが、今年度は優秀学校賞に選ばれた。

さらに、３年次の「北海道学」で取り組んだ「北海道新聞　新聞切り抜き作品コンテスト」では、優秀賞１名「テーマ：切り花の需要」、佳作１名「教師とＡＩ」が選出された。それぞれ「地域に関する時事問題」や「自分の進路」に関する新聞記事を集め、作品にした。

生徒には、高校在学中に「地域や社会に目を向け、そこから様々な課題を見つけ、それを解決するために行動をする力」を育んでもらいたい。そのためにも新聞は有効な一つのツールだと考える。

３年目となった NIE 実践は、国語科、英語科、地歴公民科を担当する４名の教員が継続して取り組み、今年度新たに国語科、英語科の２名の教員が新聞を用いた授業を行った。

次年度は、これまでの３教科のほか、多くの教科及び総合的な探究の時間等で NIE 実践を広げていきたい。

「新聞を読む、活かす」。次年度も継続、発展していきます。

２０２３年度　ＮＩＥ実践報告

新聞を活用した学びの実践

～朝のＳＨＲでの新聞記事の活用と高大連携探究活動における取組み～

北海道科学大学高等学校　教頭　山下　卓

１．はじめに

本校は系列に北海道科学大学（工学部・保健医療学部・薬学部・未来デザイン学部）を有する私立高校である。2023 年 4 月から大学所在地である手稲前田キャンパスへ移転し、大学と同じキャンパスの強みを活かし、日常的に大学教育や大学生に出会うことができる「高大一体教育」がスタートした。

今年度はNIE 実践校 4 年目となり、昨年度に引き続き 2・3 年生の朝のＳＨＲにおける新聞活用を実践した。また、2 年生の高大連携探究活動において「新聞から社会問題を発見し、解決策を考える」について、新聞記事を活用したグループによる探究活動を実践した。今回の報告では2年生の朝のＳＨＲにおける新聞活用の実践と高大連携探究活動での実践を紹介する。

２．2年生における朝のＳＨＲ実践

※生徒は全員、学校指定 iPad 保有

（1）内　容

朝の授業前の時間（8：30～8：45）に教員が選んだ新聞記事を生徒に配信している。朝のスタートに際し、落ち着いた雰囲気で 1 時間目に臨むことが主目的であるが、本校では 2 年次に 1 年間を通した探究活動を行っており、その探究テーマのヒントや手助けになる記事もセレクトしている。

（2）目　的

主な目的は①読む力の向上 ②新聞を通し世の中の動きについて知り、様々な立場からの物の見方について考える。③1 年間を通して行っている探究活動のヒントを見つける。この 3 点を主に考えている。また、生徒によっては、何気ない記事をきっかけに、更にその記事を掘り下げて、探究活動に還元したり、進路選択のきっかけになった記事に出会ったりという様々な有形無形の影響が見られている。

（3）生徒の様子・効果など

入学後から継続的にこの取り組みを始めているが「新聞を読む」ことに多くの生徒が慣れ、学校で新聞記事を読むことがあたり前となっている生徒が増えている。また、（2）でも触れているが、記事をきっかけに単純に「知らないことを知ることができた」から一歩踏み込み、「このニュースの背景を知りたい」「この出来事の将来への影響を考えたい」というレベルで新聞記事を読むことができる生徒も出てきている。学校が読むことを押し付けるのではなく、新聞記事に触れる「時間」や「場」を提供することにより、自然と読むことがあたり前になり、この場だけの機会に限らず、自宅等でも興味を持って新聞記事に注目してほしいと考えている。今後も、情報を入手する媒体として、真偽不明なインターネットやSNS からの情報だけに頼るのではなく、新聞を含めた様々な媒体から情報を入手し、正しく知り、正しい判断につなげていくことが重要だと考える。

朝新聞一例）
以下のような新聞切り抜きを担当者が毎日 4～5 枚程度配信している。

生徒の iPad に毎朝配信

北海道新聞 2023 年 8 月 24 日
（配信切り抜き一部抜粋）

３．２年生の高大連携探究活動における実践
「新聞から社会問題を発見し解決策を提案する」～SDG s との関連性を考える

2 年生は系列大学である北海道科学大学と協力した取り組みとして、全員対象の探究活動を前期に行っている。また、本校では 2 年次から年間を通し、外部の様々な分野で活躍している方（大学教員・企業経営者・芸術家など）のサポートを受け、「探究活動」を行っており、問いの立て方や探究活動の進め方については理解している前提で活動を行った。今年度は 7 月に大学教職員、大学生、高校教員、高校生が協力して行う探究活動を企画した。しかし、インフルエンザの流行による学校閉鎖のため延期となり、9 月 13 日に 7 時間の時間を設定し、1・2 時間目で新聞記事から社会問題を個人・グループで見つけ出し共有した。3 時間目は体育館で「より良い発表にするには」と題し、大学院生による資料作成やプレゼンテーションについての講義を行った。4・5 時間目で新聞を活用した探究活動とプレゼン資料の作成を行い、6・7 時間目を発表・振り返りの時間に設定した。グループ活動においては Google スライドを活用し、個人活動においてはワークシートを準備し、一目で俯瞰できる紙媒体の良さも活用した。発表の場面ではルーブリック評価表を用いて自己・他者評価を行い、振り返りを行った。

【目　的】及び【目　標】
・大学生活及び社会生活において不可欠な「課題発見能力」「プレゼン能力」「協働能力」などを育成する。
・SDGs の視点で新聞記事から社会問題を取り上げ、高校生なりの自由な発想で解決方法を模索する。
・社会の諸問題について興味関心を持ち、主体的に関わり、行動しようとする意識の向上を図る。

【9/13 の実施内容】

1～2 時間目　ガイダンス（各HR）

（1）趣旨・実施方法説明

（2）Google スライドの設定等

（3）新聞から社会問題を発見する。

（個人→グループ）※グループ 3・4 人

3 時間目　講義（体育館）

（1）資料作成について

（2）プレゼンテーションについて

4～5 時間目　発表資料づくり（各HR）

（1）個人の視点をグループで共有し、社会問題解決のアイデアを出し合う。

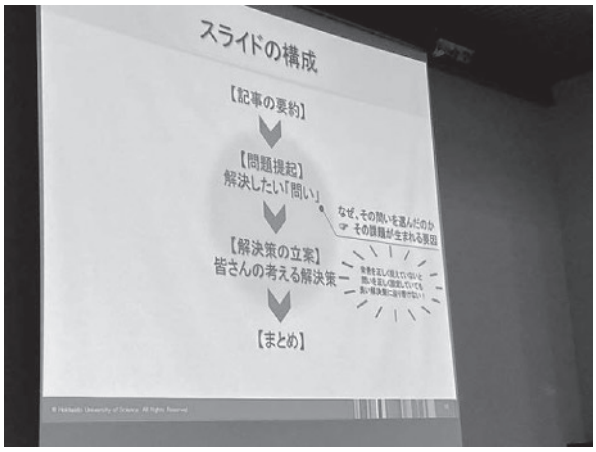
（2）iPad を用いて Google スライドの共同編集機能を活用し、発表の準備を行う。

6・7 時間目　発表及び相互評価

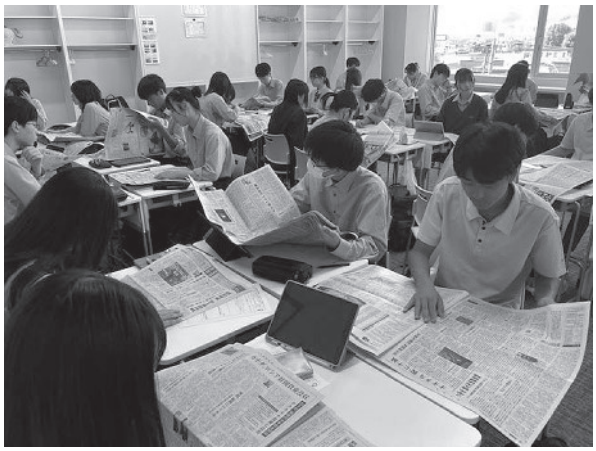
（1）発表は 1 グループ 5 分

（2）ロイロノートを使用し、評価を行い、個人としてワークシートにまとめて提出する。

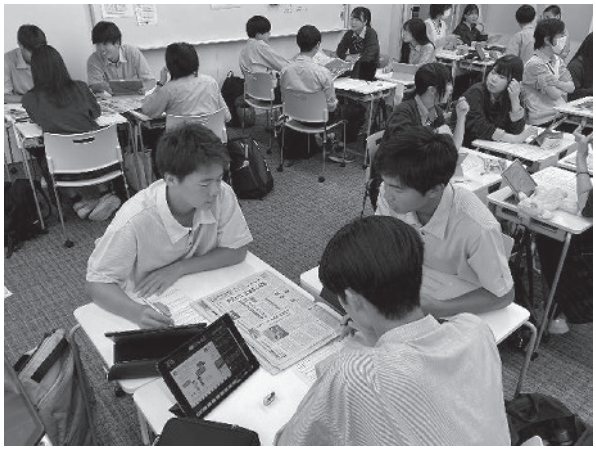
3 時間目　プレゼンに向けての講義



1～2 時間目　新聞から課題を発見



4～5 時間目 発表資料づくり



6・7時間目
発表・相互評価
ルーブリック評価表・ロイロノートを活用

参観者からの意見より

【良かった点】　　※複数意見を抜粋

・ワークシートが工夫されており、生徒がやるべきことが明確であった。そのため、生徒の話し合いや資料作り等の準備がスムーズに進んでいた。

・大学生の講義を活かし、図表や写真を効果的に活用していたグループが多かった。

・仲間の意見を聴く姿勢、グループワークに皆で取り組む姿勢が素晴らしかった。

・iPadやアプリの使用に慣れており、日常の授業から使いこなしているという印象を受けた。

【改善を要する点】※複数意見のみ抜粋。

・発表時の時間配分や質問対応に課題のあるグループが見受けられた。

・声の大きさや iPad に頼りきりのため、相手に伝わるプレゼンを心がける必要がある。

探究活動実施後の生徒の声より

※複数意見を抜粋

・スマホから情報を得ていたが、新聞の記事はわかりやすかった。これからも読んでみようと思った。

・意外と時間が経つのがあっという間だった。話し合いが盛り上がり、様々な仲間の意見を聴くことができ、満足できる発表を行うことができた。

4　終わりに

本校では主体的な学びに積極的に取り組んでおり、ICT や新聞など様々なツールを活用することにより、様々な学びの可能性があることを感じることができた。今後も学校として、生徒の主体的な学びを促す探究活動の場づくりを行い、互いの多様な考えを認めあう学びを継続的・計画的に行っていきたい。また、真偽不明な様々な情報が溢れる現代において、社会人として巣立つ高校生においては、正しい情報から正しい行動につなげる入り口として「新聞」は欠かせないものであることを実感した。今後も生徒の成長を促す大切なツールとして、新聞を活用した教育活動を模索していきたい。

２０２３年度　ＮＩＥ実践報告

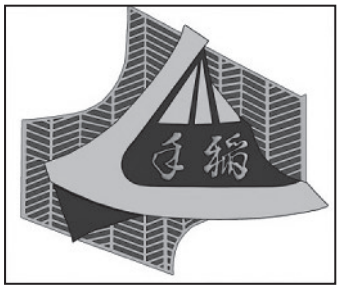
「日常的・継続的」な新聞活用の取組の実践

北海道札幌手稲高等学校　教諭　嶋崎俊樹（櫻井智行、倉部英利子）

１　はじめに

本校は１・２年次８学級、３年次７学級（計２３学級）、全校生徒９０５名の全日制普通科単位制高校である。本校のほとんどの生徒は大学進学を目指す。そのため、進路実現のための講習が充実しているだけではなく、１年次のインターンシップや２年次では大学から講師を招く「学び探究ゼミ」などキャリア教育の実践にも力を入れている。部活動加入率も高く、これまでに全国大会への出場の経験のある部活動も数多くある。

来年度、節目となる創立５０年目を迎え、生徒たちは校訓の「継続は力なり」の伝統を受け継ぎ、「文武両道」の学校生活を送っている。



２　実践の経緯

本校は９年前からＮＩＥの実践指定を受け、当初は「情報」担当の教諭が単独で新聞を活用した授業実践を行っていた。実践指定２年目からは公民科（本校では地理歴史科と公民科は社会科として協力して教科を運営）も加わり、公民科（社会科）では８年目の取組となる。

新聞を活用するねらいとしては、①新聞に触れる機会を提供して社会の出来事への関心を高め、漠然とでも世の中のイメージを持たせること、②新聞記事を題材とした言語活動を通して、資料活用の技能や思考力・判断力・表現力を身につけさせることである。これらを教科の共通認識としてこれまで新聞を使った教育活動を長期にわたり実践してきたのは、世の中の出来事を知ることは、授業での理解をスムーズにさせ、社会に対する興味関心を広げるだけではなく、生徒が過去と現在をつなぐ自らの存在を認識し、社会に参画し未来を構築しようとする意識を高めることになることを、担当教員も感じているからである。

このねらいを実現する上で最も心がけていることは、今回の実践報告の表題にもなっている「日常的・継続的」な新聞活用という視点である。本校ではこれを可能とするために、日ごろからできるだけ時間や労力をかけずに、無理せず実施できる形式で実践を行っている。従って、報告する実践の内容は例年とほぼ同じ内容であり、取組としては不十分な点もあろうかと思うが、小さな変化もあるため、その点を中心に記載したい。

３　実践の概要

（１）「３分間スピーチ」

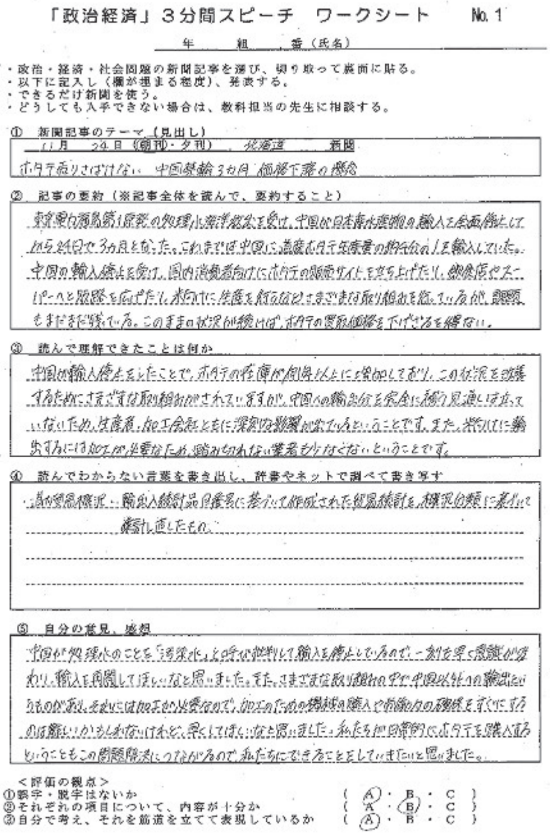
本校の新聞活用のメインは「３分間スピーチ」であると言える。生徒は各自、自分が気になった新聞記事を一つ選び、クラスメートの前で発表する。あらかじめ生徒全員にワークシートを配布しておき、各項目に記入する形でまとめさせ、ワークシートのウラ面には選んだ新聞記事を切り抜いて貼らせている。記入する内容は①「新聞記事のテーマ（見出し）」②「記事の要約」③「読んで理解できたこと」④「読んでわからない言葉」（調べた結果を書き込む）⑤「自分の意見、感想」であり、生徒は①～⑤の順番で、読み上げる形で発表する。

取り上げる記事は政治、経済、社会問題から

選ぶように伝え、芸能やスポーツの記事は避けることとしている。最近は新聞を購読していない家庭が多く、そのような場合にはコンビニエンスストアなどで買うか、担当教師の下、学校で購読している新聞を利用する、あるいはインターネットで配信される記事などを利用することとしているが、インターネットの記事を利用する場合は新聞社や通信社で信用度の高いものを利用するよう指導している。

授業の最初の数分を使い発表する。発表が終わると、授業者が簡単な解説やコメントを加える。授業者のコメントを合わせて７～８分程度を使い、その後、教科書の内容に入っていく。

これまで、本校の教育課程では、１年次に「現代社会」の授業が設定されており、その授業の時間内で実践してきたが、新教育課程では１年次において公民科の授業が無くなった。そのため、当初は１年次の地理歴史科科目での実施を検討したが、今年度は２年次で新たに設けられた公民科の必履修科目「公共」において実践することになった。



「政治経済」３分間スピーチ　ワークシート　No.１

年　組　番（氏名）

・政治・経済・社会問題の新聞記事を選び、切り取って裏面に貼る。
・以下に記入し（欄が埋まる程度）、発表する。
・できるだけ新聞を使う。
・どうしても入手できない場合は、教科担当の先生に相談する。

① 新聞記事のテーマ（見出し）

11月 24日（朝刊・夕刊） 北海道 新聞

ホタテ売りさばけない 中国禁輸3カ月 価格下落の懸念

② 記事の要約（※記事全体を読んで、要約すること）

東京電力福島第1原発の処理水海洋放出を受け、中国が日本産水産物の輸入を全面停止してから24日で3カ月となった。これまでは中国に道産ホタテ生産量の約5分の1を輸入していた。中国の輸入停止を受け、国内消費者向けにホタテの販売サイトを立ち上げたり、欧米やスーパーへと販路を広げたり、米向けに生産を始めるなどさまざまな取り組みを進めているが、課題もまだまだ残っている。このままの状況が続けば、ホタテの買取価格を下げざるを得ない。

③ 読んで理解できたことは何か

中国が輸入停止をしたことで、ホタテの在庫が例年以上に増加しており、この状況を改善するためにさまざまな取り組みがされていますが、中国への輸出分を完全に補う見通しは立っていないため、生産者、加工会社ともに深刻な影響が出ているということです。また、米向けに輸出するには加工が必要なため、踏み切れない業者も少なくないということです。

④ 読んでわからない言葉を書き出し、辞書やネットで調べて書き写す

貿易概況：輸出入統計品目番号に基づいて作成された貿易統計を、概況品分類に集計し直したもの。

⑤ 自分の意見、感想

中国が処理水のことを「汚染水」と呼び批判して輸入を停止しているので、一刻も早く認識が変わり、輸入を再開してほしいなと思いました。また、さまざまな取り組みの中で中国以外への輸出というものがあり、それには加工が必要なので、加工のための機械の購入や労働力の確保をすぐにするのは難しいかもしれないけれど、早くしてほしいなと思いました。私たちが日常的にホタテを購入するということもこの問題解決につながるので、私たちにできることをしていきたいと思いました。

＜評価の観点＞
①誤字・脱字はないか　（Ⓐ・B・C）
②それぞれの項目について、内容が十分か　（A・Ⓑ・C）
③自分で考え、それを筋道を立てて表現しているか　（Ⓐ・B・C）

教育に新聞を NIE 実践校紹介

札幌手稲高

意見付けて要約発表

2014年度から実践指定校を続けている札幌手稲高（札幌市手稲区）。学校のある同校の代表的な取り組みが「3分間スピーチ」だ。

生徒が自分で選んだ記事について、①記事の要約②読んで理解できた事③分からなかった言葉とその意味④自分の意見・感想―をクラス全員の前で発表する。

本年度は2年生の必修科目「公共」の中で、毎授業ごとに1人が行う。授業は毎週あり、本年度中に2年生全員約320人が1～2回発表する予定だ。

6月中旬には三つのクラスで発表があった。選んだ記事は藤田心暖さんが北海道新聞「風力発電 小樽市が反対」、石川美優さんが毎日新聞「社説 75歳以上の医療保険料 持続可能な仕組み構築を」、村岡優菜さんが読売新聞「五輪招致 根強い住民投票論」。

村岡さんは発表で「住民投票をやった方が良いと思うが、説明が十分に行われず決めるのなら、議会や選挙の意義が薄れてしまう」と意見を述べた。[illegible]教諭(53)は[illegible]「なかなか良い記事を選んでくれた」とねぎらった。

取り組みの狙いについて嶋崎教諭は「社会を知ることは重要だが、今の高校生は、きちんとしたニュースに触れる機会が意外に少ない。信頼できる情報を自分で選ぶ体験は、情報リテラシーを身に付けることにつながる」と話す。また、人前で話すことは表現力を高める訓練としても効果的という。「生徒は予想以上に良い記事を選び、興味を持って取り組んでいる」と手応えも感じている。

同校がこの取り組みを長年続けているのは、[illegible]できるからでもある。（小田[illegible]）

選んだ記事について発表する手稲高の２年生

北海道新聞　2023 年 9 月 13 日

（２）「新聞コンクール」への応募

１年次に失われた新聞活用機会を補うのが、日本新聞協会主催の「いっしょに読もう！新聞コンクール」への応募である。地理歴史科の授業の中で、今年度も第 14 回の新聞コンクールに１年次の夏休みの宿題として参加させた。１年次生徒全員による応募が３年目となり、結果、今年は日本新聞協会から１名の生徒が奨励賞、北海道ＮＩＥ推進協議会から札幌市教育委員会教育長賞と北海道地区奨励賞を受賞し、本校も昨年度に引き続き学校奨励賞をいただいた。

「いっしょに読もう！新聞コンクール」の特徴は、家族や友達に記事の意見を聞いて記入する欄があることである。それは、家族や友人と対話する場面や、新聞に触れる機会を増やすことができるだけでなく、自分の感想だけではなく他者の感想を聞くことで多様な意見を知り、自分の考えが妥当であるのか、客観的であるのか、あるいは持っている知識が正しいものなのかなど、思考を多面的に広げる機会をもたらしている。家族や友達という話しをしやすい相手が議論をする相手であり、記載する文章量もさほど多くないことから、生徒にとって取り組みやすい企画として、これからも長く参加させたいと思う。

教育に新聞を NIE

札手稲高・石川さん奨励賞

読もう！新聞コン 飯塚さん、長尾さんも表彰

家族や友人と新聞記事を読んで話し合った感想や意見を募る第14回「いっしょに読もう！新聞コンクール」（日本新聞協会主催）で、奨励賞に札幌手稲高1年の石川馨さん（16）が選ばれた。札手稲高は学校奨励賞を受賞。同校からは北海道NIE推進協議会が表彰する札幌市教育委員会教育長賞に飯塚結生さん（16）、北海道地区奨励賞に長尾空美さん（16）が選ばれるなど、1年生が躍進した。

新聞コンクールは小中学生と高校生、高等専門学校生が対象で、国内外から5万9248点（うち道内から1万3393点）の応募があった。最優秀賞に3人、優秀賞に30人、奨励賞に120人を選んだ。団体応募は503校あり、優秀学校賞15校、学校奨励賞177校を選定。新聞協会とは別に北海道NIE推進協も6人を表彰した。

石川さんは、第2次大戦中にユダヤ人を大虐殺したナチス・ドイツが経済の立て直しや手厚い福祉の実現など「良いこともした」という主張を専門家が検証した書籍を紹介する朝日新聞の記事（昨年8月6日朝刊）を選んだ。ナチスの経済政策や福祉制度が占領地からの収奪など人々の犠牲の上に成り立っていたとの検証に触れ、「情報過多の時代、私たちは大切な情報を自分たちで見極め、取捨選択する能力がより一層求められる」と結んだ。

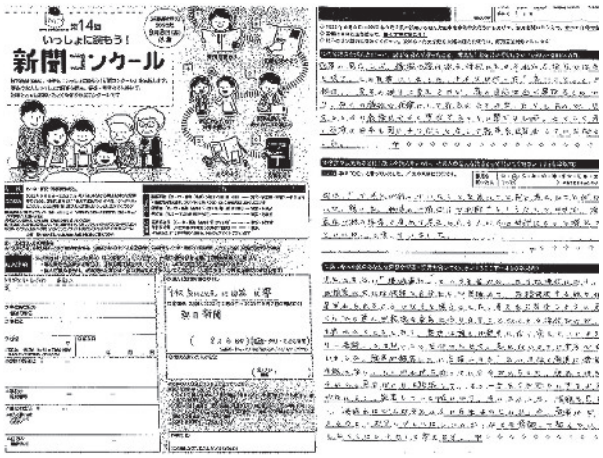
飯塚さんは、女性議員へのハラスメントの現状を伝える北海道新聞の記事（昨年7月17日朝刊）を読んで「『これは男女差別ではないのか』と、いま一度問いを見てみる意識を一人一人が持つことで世の中が変化する」と訴えた。

長尾さんは、札幌丘珠空港の滑走路延伸で住民の騒音問題などを指摘した北海道新聞の記事（昨年8月1日朝刊）に関心を持ち、「大きな利益のために、近隣住民の声をないがしろにするのは良くない」と記した。

3人はそれぞれ母親らの考えも参考にしたという。「新聞記事について家族で意見を交わす習慣がついた」と話している。

石狩管内からは、学校奨励賞に北広島西部中、札幌もみじ台中、札幌創成高が選ばれた。（芳賀なの香）

北海道新聞　2024年1月16日

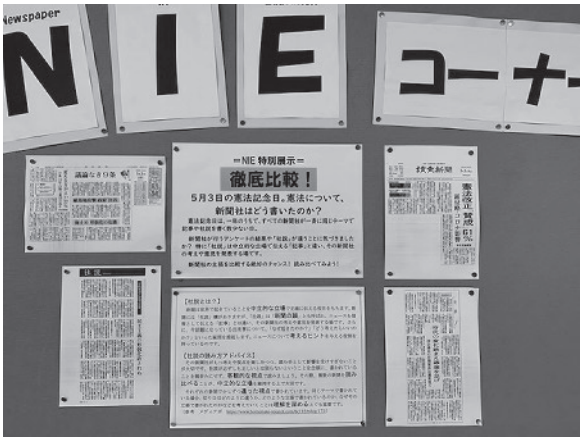


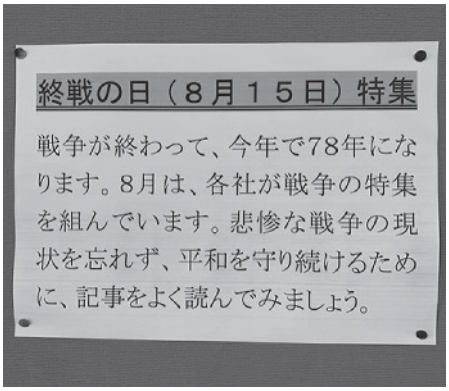
（3）「ＮＩＥコーナー」

新聞そのものに触れる機会を日常的に提供するため、例年どおり１年次の階の水飲み場に「ＮＩＥコーナー」と題して配達された新聞の閲覧スペースを設けた。毎日、複数紙の記事を比較できるように、必ず月２紙購読し、掲示にも「○○新聞と□□新聞　二紙読み比べ」という言葉を入れて情報を比較検討するリテラシーを意識させている。

今年度も昨年度に引き続き、入学式当日の新聞を特別に展示した。高校生活を始めた人生の節目の日の新聞を置くことで、まもなく成人となる高校生として、新聞を通して社会に関心を持ってもらいたいという願いからである。

また、昨年度に引き続き憲法記念日の社説を比較する特別展示も実施した。今年は「朝日」「読売」の社説を比較できるよう掲示したが、加えて当日の新聞１面も掲示した。憲法記念日はそれぞれの新聞社が世論調査を実施し掲載している。１面の大見出しとともに、社説だけではなく世論調査の結果も各社違うことに気がつくように工夫した。さらに今年は、終戦の日の特集も行った。この日に向けて各社様々な角度から特集を連載しており、出来ればその特集を読み切ってもらいたいと願うのだが、まずは、記事の存在を知ってもらうように心がけて掲示した。





４　その他の新聞の活用

各年次の国語科が朝学習の一環として行っている取組として、社説やコラムをＡ４用紙両面に印刷したプリントを作成し、生徒に配布している。新たな学習指導要領によれば読解力が一層重視されている。それに伴い、大学受験においてもその力が試されることが多くなった。これらの観点からも、教科の指導の一部に新聞を利用する場面が見られている。

５　成果と課題

（１）日常的・継続的な活動

本校公民科でのＮＩＥの実践は、年間を通して無理なく取り組める内容のものを意識して実施してきた。結果的には、これまでと大差ない取り組みであったが、今年度は昨年度実施できなかった「３分間スピーチ」を２年次で実施することが出来た。担当者の感想としては、学年が進み成長が伴うにつれ、社会的な関心事もより高度になるのか、これまで１年次で実施した時よりもよい記事を選び、質の高い発表をしているように思えた。また、対面で発表をすることに慣れていなく、緊張を強いられた生徒も多く見られたが、むしろ真面目な取り組みと発表をもたらし、全体に緊張感のあるよい雰囲気の時間となった。

「新聞コンクール」は１年次全員を対象とするものとして、今年で３年目になった。前述の通り、比較的生徒が取り組みやすい企画であり、無理なく参加できるため継続して実施することができた。幸いにも賞をいただき、校内でも表彰の機会を設けることができた。夏休みの宿題といえども授業の一環の取り組みが名誉な機会となることが生徒の励みになり、学習に意欲的に臨むきっかけとなっている。

（２）課題

①授業展開への組み入れ

生徒の受験等を意識した場合、どうしても教科書に即した授業進度を意識せざるを得ない。そのため「３分間スピーチ」のみに多くの時間を割くことができない。生徒間の議論や、探究的な授業展開と連動させることができれば、より深い授業となるのだが、授業者が発表に対してコメントをするだけに留まっているのが現状である。

②新聞を読ませる一層の工夫

「３分間スピーチ」や「新聞コンクール」など、新聞を使い、新聞に触れ読ませる機会を設定しているが、実際には自分の順番や、宿題であるため新聞を手にしたのであって、それは一時的な機会に過ぎない。「ＮＩＥコーナー」に毎日その日の新聞を並べているが、開かれた形跡のない日も多い。新聞を読む生徒が増えるように閲覧の方法に工夫の余地はあるかもしれない。今年度は残念ながら「プリント二週間の出来事」を配布することができなかった。新聞にとらわれずとも、ニュースを手にして日常的に習慣として社会情勢を知ろうとする姿勢を身につけさせることが必要であろう。

６　おわりに

本校におけるＮＩＥの実践は、日常的・継続的な取組として定式化している。「３分間スピーチ」を中心として、課題を改善して現状を固定化せず工夫を続けていきたい。ただし、その際にも本校教員や生徒の現状をよく理解して、どの教員や生徒にとっても無理なく継続できる実践であることが重要だと考える。今年度は主となる担当者が交代したが、今のところ、業務を引き継いで実施することができている。現状では継続という点で丁度良い実践であると考える。

新聞活用のねらいや目的を振り返り、持続可能で生徒にも有効な活用方法を今後も探っていきたい。

２０２３年度　ＮＩＥ実践報告

新聞記事を利用した授業づくり

星槎国際高等学校帯広学習センター　教諭　高橋知行

１．はじめに

本校は、広域通信制、単位制の普通科高等学校であり、帯広学習センターは全国３０か所の学習拠点の１つとして２０１０年に帯広経済センタービル内に開設、２０１６年に現在地に移転した。

今年度、選択授業の科学（１、２、３年生混成）の時間で「新聞記事を利用した学習」に取り組んだ。

２.生徒の様子

生徒は、帯広市内はもとより十勝管内町村や釧路、根室地域、埼玉県、長野県からも入学し、約３００名が在籍している。

登校型の通信制として「街全体が学びの場」を掲げて、生徒たちは帯広神社祭や重要文化財施設の活用、街おこし活動、各種イベントなど、地域のさまざまな場面にそれぞれの関心や特技を活かして参加している。

朝日新聞　2023 年 8 月 3 日

北海道新聞　2023 年 10 月 2 日

３．実践の内容

（１）学習のテーマ　大麻、大麻草を知ろう。

（２）学習のねらい　新聞記事を手がかりに、大麻について理解し、薬物乱用の防止を図る。

（３）学習時間　５０分、２コマ

１時限目　①新聞記事を読んで若者と大麻、大麻取締法改正について考える。

２時限目　①大麻に関するまとめ、②大麻成分の化学。

（４）学習展開　①大学運動部員や芸能人の大麻所持事件が報道されているが、若者の大麻取締法違反は増加している。これは北海道も例外ではない。これだけ話題になりながら、なぜ若者は大麻を所持、使用するのか、考える。

［社説］大麻まん延を食い止めよう

社説

2023年8月22日 19:00

若者を中心に大麻のまん延が深刻化している（22日、日大アメフト部の寮に捜索に入る捜査員ら）=共同

若者を中心に大麻が大きな問題となっている。違法薬物の怖さを改めて社会で共有し、広がりを食い止めなければならない。

日本大学アメリカンフットボール部員が逮捕された事件では、警察への通報遅れなど大学の深刻なガバナンス不全が問題視されたが、そもそもキャンパスでのまん延自体が見過ごせない。22日には別の部員にも大麻所持の疑いがあるとして再捜索が行われた。日大以外の大学でも検挙が相次ぐ。

広がりは学生にとどまらない。兵庫県警では20代の警官2人が摘発され、懲戒免職処分となった。取り締まる側までが大麻に手を染める異常事態である。

厚生労働省によると、2022年の大麻事犯の検挙人員は5546人で、過去最多だった前年に次ぐ高水準だった。5千人台は3年連続だ。13年には1600人ほどだったことを考えれば、近年の急増ぶりは際立っている。

とりわけ深刻なのが若年層である。13年と比べて30歳未満は5.4倍、20歳未満は15.0倍だ。極めて憂慮すべき事態であろう。

大麻には学習能力の低下や精神障害などの恐れがあり、依存性もある。覚醒剤などより危険な物質への入り口となる「ゲートウエードラッグ」と呼ばれ、深刻な薬物乱用につながる懸念が大きい。

ところがネットでは「合法の国もあるから安全」などと誤情報が流れている。嗜好目的で認める国があるのは、流通を管理し密売を防ぐ狙いがあるからで、安全だからではない。合法化にかじを切るドイツも「危険であることに変わりはない」としている。

興味本位での使用を防ぐため、教育現場での指導・啓発を改めて徹底する必要がある。大麻は暴力団や外国人による密売に加え、知人間のやりとりも多い。捜査当局はサイバー捜査を含め、取り締まりを一層徹底したい。

依存症者への治療や支援といった地道な取り組みも欠かせない。関係機関は横の連携を深め、総合的な対策を進めるべきだ。

日本経済新聞電子版　2023 年 8 月 22 日

②大麻取締法の改正が検討されている。「大麻解禁」とも称されているが、どのような内容なのか、記事を手がかりに調べてみる。
③大麻の危険性についてどのように報道されているか、記事を読み、既習の「脳のはたらき」と結びつけて考える。
④北海道では各地で大麻草が自生している。野生大麻を減らすために身近な市町村はどのような取り組みをしているか、小さな記事ではあるが毎年のように掲載されていることを考える。
⑤大麻の成分を化学的に知る。乱用薬物に関する規制や大麻取締法の改正と麻薬取締法との関係を知る。

朝日新聞デジタル記事

医療サイト 朝日新聞アピタル　トップ　記事一覧　連載

医療用大麻の解禁、「使用罪」創設の改正案　臨時国会へ提出を検討

有料記事

2023年9月8日 7時00分

大麻取締法の改正について議論した自民党の厚生労働部会=2023年9月7日、東京・永田町、藤谷和広撮影

大麻由来の医薬品の解禁などを盛り込んだ大麻取締法の改正案について、政府は今秋の臨時国会への提出を検討している。てんかんの治療薬など大麻由来の成分を使った「医療用大麻」を使えるようにする一方、乱用を防ぐため、罰則付きの使用罪を新たに設ける。

自民党の部会で7日、改正の内容について厚生労働省が説明した。今後、使用罪の罰則などを詰める。

現行法は、大麻の栽培や所持、大麻を原料とする医薬品の使用を禁じている。大麻の主成分には、幻覚などの精神作用を引き起こす成分「テトラヒドロカンナビノール（THC）」のほか、害が少なく、抗てんかん作用や抗不安作用などがある成分「カンナビジオール（CBD）」も含まれている。米国などでは難治性てんかんの治療薬が使われている。

厚労省は2019年に、臨床試験（治験）に限って大麻由来の成分を使えるとの見解を示し、国内でもてんかん薬の治験が始まっている。法改正により、医薬品に使える大麻の成分を規制の対象から外し、有効性と安全性が確認され、薬事承認を得れば使えるようにする。

医療用大麻をめぐっては、その有用性が認められ、国連の麻薬委員会が20年、薬物を規制する「麻薬単一条約」で、大麻を「特に危険」とする分類から外す勧告を可決している。

また、現行法は大麻の所持は禁じているが、使用は禁じていない。大麻草は衣類や神事などに使われることがあり、栽培農家が刈り取る際に大麻の成分を吸い込んでしまうことなどが1948年の法制定時に考慮されたとされる。

大麻は「ゲートウェー・ドラッグ（入門薬物）」と呼ばれ、若者の間での広がりが近年問題となっていた。厚労省によると、大麻による検挙者数は、21年に過去最多の5783人となり、22年も5546人で、20代以下が約7割を占めている。

改正方針をまとめた22年9月の厚労省の専門家委員会の報告書は、使用罪が存在しないことで「大麻使用へのハードルを下げている状況がある」と指摘した。覚醒剤など他の薬物に使用罪があるのに「大麻の使用に対し罰則を科さない合理的な理由は見いだしがたい」と結論づけた。

一方、使用した若者が孤立を深める懸念から、「厳罰化」ではなく、治療や社会復帰に向けた支援の必要性を指摘する意見もある。（藤谷和広）

朝日新聞電子版　2023 年 9 月 8 日

朝日新聞デジタル記事

医療サイト 朝日新聞アピタル　トップ　記事一覧　連載

医療用大麻の解禁、改正法案提出へ　大麻使用罪は7年以下の懲役

有料記事

2023年10月11日 20時40分

厚生労働省=東京・霞が関

大麻草由来の成分を使った医薬品の解禁や大麻の使用罪を創設する改正法案の概要について、厚生労働省は11日、自民党厚生労働部会に示した。依存性のある大麻成分を「麻薬」と位置づけて麻薬取締法の対象とし、不正な使用・所持への罰則を「7年以下の懲役」とした。法案は20日からの臨時国会に提出される。

大麻は「ゲートウェー・ドラッグ（入門薬物）」と呼ばれ、若者の間での広がりが近年問題となっていた。大麻取締法は大麻所持には5年以下の懲役という罰則があったが、使用罪はなかった。

近年、大麻草由来で依存性のない成分「カンナビジオール（CBD）」を使った抗てんかん薬が欧米で承認されるなど医薬品としての価値が高まっていた。

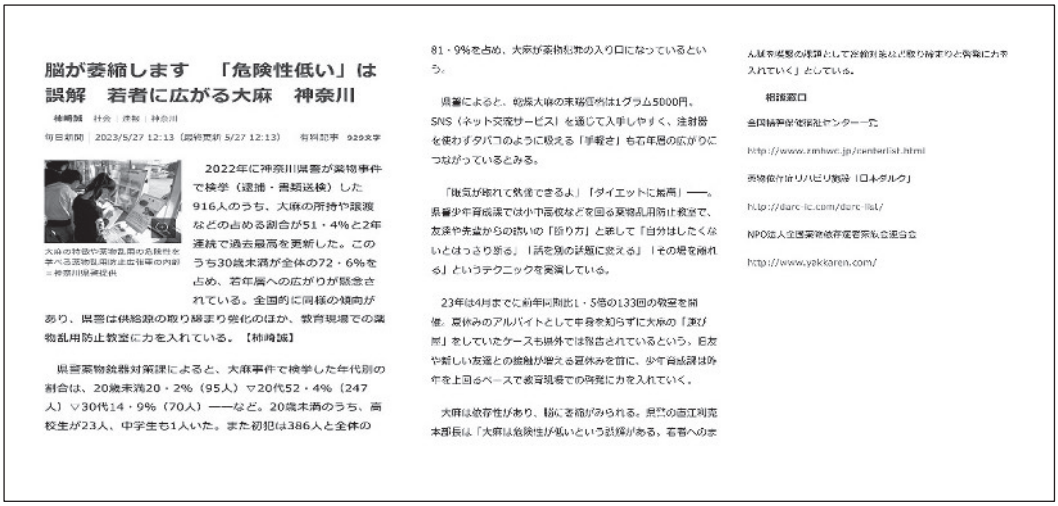
麻薬取締法は、医療分野で痛み止めに使われる「麻薬」の適切な使い方を定め、不正な所持や使用（施用）に対し、7年以下の懲役としている。

今回の法改正は、大麻やその有害成分で依存性のある「テトラヒドロカンナビノール（THC）」を麻薬と位置づけ、同法の対象とした。

一方、大麻取締法で禁止していた大麻草由来の薬の使用を解禁する。同法を「大麻草の栽培の規制に関する法律」と改称し、大麻草の栽培に特化した法律とする。大麻草の栽培者免許は、医薬品の原料のためか、それ以外の目的によって2種類設ける。

ただ、大麻草由来の成分CBDを使い「ストレス解消」「リラックス」などを目的とする製品が売られているが、それらは規制の対象外となる。一部の製品では、有害成分THCを含むとの報告があり、厚労省はCBD製品に微量に残るTHCの残留限度値を設け、監視を徹底する方向だ。

朝日新聞電子版　2023 年 10 月 11 日



脳が萎縮します　「危険性低い」は誤解　若者に広がる大麻　神奈川

神崎誠　社会｜津報｜神奈川

毎日新聞｜2023/5/27 12:13（最終更新 5/27 12:13）　有料記事　929文字

大麻の特徴や薬物乱用の危険性を学べる薬物乱用防止出張車の内部＝神奈川県警提供

2022年に神奈川県警が薬物事件で検挙（逮捕・書類送検）した916人のうち、大麻の所持や譲渡などの占める割合が51・4%と2年連続で過去最高を更新した。このうち30歳未満が全体の72・6%を占め、若年層への広がりが懸念されている。全国的に同様の傾向があり、県警は供給源の取り締まり強化のほか、教育現場での薬物乱用防止教室に力を入れている。【柿崎誠】

県警薬物銃器対策課によると、大麻事件で検挙した年代別の割合は、20歳未満20・2%（95人）▽20代52・4%（247人）▽30代14・9%（70人）――など。20歳未満のうち、高校生が23人、中学生も1人いた。また初犯は386人と全体の81・9%を占め、大麻が薬物乱用の入り口になっているという。

県警によると、乾燥大麻の末端価格は1グラム5000円、SNS（ネット交流サービス）を通じて入手しやすく、注射器を使わずタバコのように吸える「手軽さ」も若年層の広がりにつながっているとみる。

「嗅気が抜けて就職できるよ」「ダイエットに最高」――。県警少年育成課では小中高校などを回る薬物乱用防止教室で、友達や先輩からの誘いの「断り方」と称して「自分はしたくないとはっきり断る」「話を別の話題に変える」「その場を離れる」というテクニックを実演している。

23年は4月までに前年同期比1・5倍の133回の教室を開催。夏休みのアルバイトとして中身を知らずに大麻の「運び屋」をしていたケースも県外では報告されているという。旧友や新しい友達との接触が増える夏休みを前に、少年育成課は昨年を上回るペースで教育現場での啓発に力を入れていく。

大麻は依存性があり、脳に萎縮がみられる。県警の直江利克本部長は「大麻は危険性が低いという誤解がある。若者への未

人類を感覚の誤解として定義対策など取り締まりと啓発に力を入れていく」としている。

相談窓口

全国精神保健福祉センター一覧

http://www.rmhwc.jp/centerlist.html

薬物依存症リハビリ施設（ロードダルク）

http://darc-ic.com/darc-list/

NPO法人全国薬物依存症者家族会連合会

http://www.yakkaren.com/

毎日新聞電子版　2023 年 5 月 27 日

薬物犯罪撲滅へ　野生大麻を駆除

【十勝・鹿追】十勝町生活安全推進協議会（加納利春会長）と帯広署、帯広保健所などは8日、町内で大麻の除去作業を行った＝写真。

各機関から合わせて27人が参加。加納会長は「野生

十勝毎日新聞

2023 年 7 月 30 日

十勝毎日新聞　2022 年 7 月 22 日

４．成果と課題

（１）成果　大麻、大麻草、その他の規制薬物に対する理解を深められた。とくに北海道は野生大麻が手に入りやすい環境にあること、未規制で流通している大麻成分関連物質を含む製品による事故などにも触れることができた。

生徒の感想：

・同世代の人たちがたくさん大麻などを使っていることはショックだった。

・ネットで簡単に手に入れているようなのでネット対策が必要ではないか。

・医療用は必要だと思うが大麻に対する緊張感が緩むか心配だ。

・身近なところに野生大麻があるのは知らなかった、気をつける。

（２）課題　大麻取締法改正が具体的になった機会に新聞記事をベースにして薬物乱用防止に向けた学習を試みた。１年生から３年生が混在するため薬物と脳の関係についてはあまり深く扱わず、記事の範囲で平易に説明したので、生物基礎、化学基礎、保健を履修済みの３年生には少し物足りなかったかもしれない。

新聞を購読していない家庭もあることから、紙面版の記事に加え電子版記事も利用した。電子版は閲覧制限もあるが、署名記事や調査記事など情報源として信頼度の高いものを通じて新聞の活用を図りたい。

今後はスポーツコースの生徒を対象にしたドーピング防止に関する学習も必要になると考えられるので対応できるようにしていきたい。

５．まとめ

必修授業時間の少ない通信制高校で幅広い学びを進めるため、新聞記事を元に理科、保健、公民など教科を横断する授業展開を試みた。

【授業進行スライド】

大麻取締法

大麻解禁？

合法大麻？

所持は違法・使用は合法？

etc.,

大麻取締法の改正（臨時国会）

医療ニーズ	医薬品医療機器等法に基づく承認を得た医薬品の輸入、製造、施用を可能とする（医療用大麻）
乱用対策	医薬品の施用・受施用等を除く使用禁止（使用罪） 部位規制から成分規制を導入（麻薬及び向精神薬取締法）
適切な利用	大麻由来製品の安全・適切な流通確保 ＴＨＣの残留限度設定
適切な栽培、管理	新たな産業利用（産業用大麻、低ＴＨＣ大麻草） 免許制度（国による管理）

記事：十勝毎日新聞　2022.1～2023.9

2023.07.21	大樹高校	道警本部少年サポートセンター
2023.03.07	士幌中央中学校	帯広警察署
2023.03.02	上士幌小学校	十勝ダルク
2023.03.02	上士幌中学校	十勝ダルク
2022.12.21	大樹高校	薬剤師
2022.10.24	鹿追中学校	新得警察署
2022.10.21	柏葉高校	函館税関
2022.07.13	栄小学校	帯広警察署
2022.01.21	糠内中学校	会社役員

乱用薬物

覚せい剤	覚せい剤取締法（覚取法）
大麻	大麻取締法（大麻法）
シンナー等有機溶剤	毒物及び劇物取締法（毒劇法）
あへん	あへん法
指定薬物（危険ドラッグ）	医薬品医療機器等法

乱用薬物

MDMA、ヘロイン、モルヒネ、コカイン、ＬＳＤ、サイロシン　など

麻薬及び向精神薬取締法（麻向法）

亜硝酸イソブチル、亜硝酸ブチル、サルビノリン　など　危険ドラッグ

～　指定薬物　　医薬品医療機器等法

麻薬及び向精神薬取締法

Δ6ａ（7）－テトラヒドロカンナビノール　〔Δ6a(7)－THC〕
Δ6ａ（10ａ）－THC
Δ7－THC
Δ8－THC（化学合成）
Δ9－THC（化学合成）
Δ9（11）－THC
Δ10－THC

医薬品及び医療機器等法

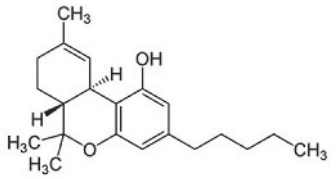
カンナビノール類（THCH、THCP、HHC　など）

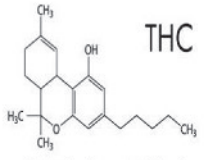
使用の立証　～　代謝物の鑑定

ＴＨＣ　⇒　ＴＨＣ－ＣＯＯＨ－glu

スクリーニング法
確認試験（ＧＣ／ＭＳ等）

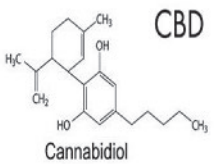
THC





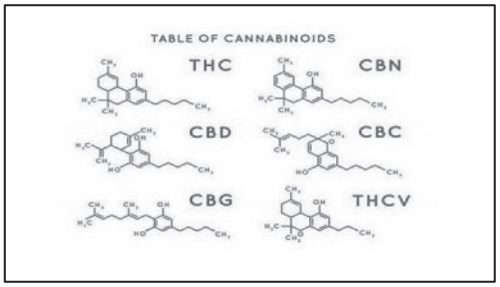
THC

Tetrahydrocannabinol



CBD

Cannabidiol



2023年度　札幌新陽高等学校① NIE実践報告

時事問題と漢字を結びつける

札幌新陽高等学校　教諭　櫻庭　彩寧

１．はじめに

本校は札幌市南区にある私立学校。現在、全校生徒は720名で、３年生は「進学」「総合」「探究」のコース別学年制となっている。また、昨年度からは学年の区分がない単位制に移行し、これまでのコースの良さを生かした「コンパス制度」を導入した。それぞれの教育課程で、学習内容・生徒の雰囲気は異なっており、コースやコンパスごとの「色」が出て多様な学習の場となっている。

2030ビジョン「人物多様性」を掲げ、多様な生徒一人ひとりに合った「学び方」を選択できるようになった。

２．コンパスについて

2022年4月から単位制は始まり、自身の学び方を示す「コンパス制度」を導入した。「アカデミア（アドバンス/ジェネリック）：大学の授業や研究などで高度な専門性の高い学習に必要な能力が身に付く学び方 ※アドバンスがより高度」「クエスト：探究的な活動を通して新しい価値を創造する力が身に付く学び方」「パイオニア：基礎学力の定着を目指すとともに自分の得意分野が見つかる学び方」の３つのコンパスを設定。

本校入学時に決めたコンパスで1年間学び、2年次以降は自身で自由に時間割を設計することが可能となっている。

今回の授業実践は。「パイオニア」コンパスで行った。

３．実践の背景

生徒の多くはネットの情報に依存している現状がある。正確な情報を「選択する力」が求められている今、情報を読み取る力や判断する力を身につける必要がある。今回の実践を通して、「漢字」や日常の話題を手がかりに、身の回りで起きていることに目を向けて、情報を得る手段として新聞を提示した。また、グループワークを通じて他者と意見を交わすことで読み取った情報を自分の「知識」へと昇華させることをねらいとした。

４．実践について

今回の実践は1年次「言語文化」の授業の中で行う。

日本漢字技能能力検定協会が主催する「今年の漢字®」に応募することを動機づけとし、今年1年間でどのような出来事があったのかをWEBニュースや新聞を用いて振り返る。その際に、自身の思う「今年の漢字」を選び、応募した。

「今年の漢字」が発表された12月中旬以降に続きの授業を展開。ノミネートされた漢字をヒントに記事を探し、その出来事に関する紹介ポスターを制作した。

作成した記事ポスターを班員で回しながら互いに共有し、自身で言語化をすることで知識とさせ、また他者との協働を通して「学び合い」を起こしたい。

【対象生徒】
単位制　1年次（パイオニア）37名

【 全3回(6時間) 】
第1回目　11月21日（2時間）今年の漢字を自身で設定～新聞やニュースサイトから１年を振り返る～
第2回目　12月19日（2時間）　今年の漢字記事紹介ポスターの作成
第3回目　1月17日（2時間）　記事ポスター完成。発表・情報交換会

５．最後に

普段はインターネット（授業時はChromebookを使用）を用いて、情報の収集やレポートの作成を行っている生徒たちだが、今回の学習で異なる学習スタイルを経験することができた。実際に手に触れて「経験」「表現」をすることで、ネットに依存しない選択肢も広げられたと感じる。また、協働学習の一環として新聞を活用したことで、新聞の読み方すら知らない生徒が、他の生徒に読み方を教えてもらう、また見つけた記事を共有して、既知の情報と結びつける力も同時に養わせることができた。

今回、漢字をヒントにニュース記事を探すことで、生徒たちには新聞を読みながら、内容を把握するだけでなく、関連させられるものがないか、考えを「広げる」ことができたと考える。集めた情報を「魅せる」ためのポイント等をレクチャーすることで、表現の仕方もより向上すると感じた。

産経新聞 2023.12.12

日経新聞 2023.12.13

日経新聞 2023.12.15

毎日新聞2023.12.14

朝日新聞 2023.10.27

朝日新聞 2023.11.2

▲生徒が作成した記事紹介ポスターの一例

2023年度　札幌新陽高等学校② NIE実践報告

新聞記事を要約の文章として活用

札幌新陽高等学校　教諭　櫻庭　彩寧、間島　誠司、大野　壮啓

１．はじめに

本校は札幌市南区にある私立学校。現在、全校生徒は720名で、３年生は「進学」「総合」「探究」のコース別学年制となっている。また、昨年度からは学年の区分がない単位制に移行し、これまでのコースの良さを生かした「コンパス制度」を導入した。それぞれの教育課程で、学習内容・生徒の雰囲気は異なっており、コースやコンパスごとの「色」が出て多様な学習の場となっている。

2030ビジョン「人物多様性」を掲げ、多様な生徒一人ひとりに合った「学び方」を選択できるようになった。

２．コンパスについて

2022年4月から単位制は始まり、自身の学び方を示す「コンパス制度」を導入した。「アカデミア（アドバンス/ジェネリック）：大学の授業や研究などで高度な専門性の高い学習に必要な能力が身に付く学び方 ※アドバンスがより高度」「クエスト：探究的な活動を通して新しい価値を創造する力が身に付く学び方」「パイオニア：基礎学力の定着を目指すとともに自分の得意分野が見つかる学び方」の３つのコンパスを設定。

生徒たちは、本校入学時に決めたコンパスで1年間学び、2年次以降は自身で自由に時間割を設計することが可能となっている。

３．実践の背景

論理国語の授業内で、文章読解を行う際に「具体」と「抽象」を取り扱った。例題として教科書の問題を実施するも、演習量はどうしても不足してしまう。そこでNIEを活用し、複数の新聞社の記事から文量が適量の記事を抽出し、要約問題を作成。授業の中での活用はもちろん、継続して指導を行うために授業の冒頭で解くミニドリルとして展開させていきたいと考えた。

「書く」ための語彙の定着率を向上させたいのはもちろんであるが、世の中への関心の低さへ課題を感じる。また、生徒たちの捉える「世界」が限定的であり、身近な事象に大きく左右される。そんな彼らも数年後には社会を担う大人として立ち居振るまう必要に迫られる。今からでも「世界」を拡張し、視野を広げ、見聞を深めさせるきっかけとしたいと考えた。

４．実践について

今回の実践は、2年次「論理国語」選択者を対象に行われた。単元「構成を吟味し説得力を高めるために」のなかで文章や論理の構成を捉えるために、「具体」と「抽象」、要約を取り扱う。意見文の作成に向けて、「書く」ことへの抵抗感を減らすため、要約の際にプリント本文の不要部分に線を入れながら取り組ませる。この際「具体」を削り、要所となる「抽象」を意識させる。

何度も演習するために、複数の500文字程度の記事を抜粋し、プリント化。初めは文字を読むことへの抵抗も幾分かあったが、「文章を読める」感覚を身につけ始めてからは、手が動くようになる。削られた文章をもとに、要約文の完成を何度か経験することで、「書くこと」への抵抗感は薄まった。

今後、冬休み明け（※）からは受験生として気持ちを切り替える彼らに対し、適切な難易度の課題を与えながら、社会を担う大人として立ち居振えるような素養を身につけられるよう、今後も指導を進めていく。

（※原稿執筆時12月末）

【対象生徒】

単位制　2年次「論理国語」選択者

※本校は2年次で科目選択を行う。全生徒が「文学国語」「論理国語」のどちらか一方を選択している。

５．最後に

世の中で起きている事象に関心の低い生徒たちに対して、世の中へ半強制的に踏み込ませることができる課題であることを認識した。

文字や紙面を通して、世の中の動きを認識する（情報を得る）ことも、情報収集の一つであることが、わずかでも生徒らに伝わったと考えている。

今後進路活動等で志望動機の作成や、面接練習、小論文対策を生徒たちは取り組んでいく。３年生になってからの対策ではなく、３カ年で計画的に指導をしていくことが必要であるが、効率が良いとされてきた一斉に指導する中では一部溢れてしまう生徒はどうしても生まれてしまう。「個別最適化」と呼ばれる中で一人ひとりの「書く力」を育成し、適切に対応するためにも早くから、「小さな」指導の積み重ねを行うことが効果的であると改めて感じた。

コラム要約の練習問題

② 2023/11/18 読売新聞コラム

歌とダンスで世界を魅了したマイケル・ジャクソンの著書に、自らの仕事観に触れた部分がある。

僕は、大人たちが自分の中に潜む子どもの心を取り戻せるような仕事がしたい

（「ダンシング・ザ・ドリーム」 湯川れい子訳）

重力が支配する地上を歩くようには見えないムーン・ウォーク、まっすぐに伸ばした体を45度ほど傾けるなんの立ち…。観ている者をびっくりさせ、歓喜させ、子供のようにわくわくさせる。誰かに似てないだろうか。

米大リーグの大谷翔平選手が自身2度目となる最優秀選手に選出された。投票した記者の評がまるで往年し日のスーパースターを語るようである。

「壮大なショーのようだった」「彼は決して自分ができることに制限を設けない」。重力が何でもないかのように大きな弧を描くホームラン、打者が目を丸くするほどの速球に変化球。ただでさえ驚く二刀流が進化し、びっくりさせる域に入ってきた。子供たちをわくわくさせたのはもちろん、大人たちの中に潜む子供の心まで野球という夢に駆りだした今季の活躍だろう。

「オータニサン」は球場のマイケルである。

問　右の文章を百字以内で要約してみよう。（百字以内＝九十～百字）

コラム要約の練習問題（解説編）

② 2023/11/18 読売新聞コラム

ア 歌とダンスで世界を魅了したマイケル・ジャクソンの著書に、自らの仕事観に触れた部分がある。

僕は、大人たちが自分の中に潜む子どもの心を取り戻せるような仕事がしたい

（「ダンシング・ザ・ドリーム」 湯川れい子訳）

イ 重力が支配する地上を歩くようには見えないムーン・ウォーク、まっすぐに伸ばした体を45度ほど傾けるなんの立ち…。**A観ている者をびっくりさせ、歓喜させ、子供のようにわくわくさせる。誰かに似てないだろうか。**

ウ 米大リーグの大谷翔平選手が自身2度目となる最優秀選手に選出された。**B投票した記者の評がまるで往年し日のスーパースターを語るようである。**

エ 「壮大なショーのようだった」「彼は決して自分ができることに制限を設けない」。重力が何でもないかのように大きな弧を描くホームラン、打者が目を丸くするほどの速球に変化球。**Cただでさえ驚く二刀流が進化し、びっくりさせる域に入ってきた。D子供たちをわくわくさせたのはもちろん、大人たちの中に潜む子供の心まで野球という夢に駆りだした今季の活躍だろう。**

オ 「オータニサン」は球場のマイケルである。

ア マイケル・ジャクソンは自伝した「大人たちが子どもの心を取り戻せる仕事」

イ マイケル・ジャクソンの印象的なムーン・ウォークやなんかな。

ウ 大谷翔平選手が2度目の最優秀選手（MVP）に選出された。

B 投票記者の評がマイケル・ジャクソンに似ている。（一昔のスーパースターを語るようだ）

エ 「壮大なショー」という評や、米国のホームラン打球で変化球。

C 大谷の二刀流は進化し、びっくりさせる域になってきた。

D 大人たちの中に潜む子どもの心まで影響を与えている。

オ 大谷選手はマイケル・ジャクソンに似ている。

◎まとめる（百字＝九十～百字で）

大谷翔平選手が2度目の最優秀選手に選ばれた。大谷選手の活躍は、以前の二刀流からさらに進化し、観ている大人たちの中に潜む子どもの心にまで影響を与えている。それはマイケル・ジャクソンに似た影響力と言える。（百字）

新聞コラム要約の練習問題

① 2023/11/14 読売新聞コラム

柔らかくて肌触りのよい針葉樹、木目が変化に富み硬い板となる広葉樹、「適材適所」という言葉はもともと、伝統的な日本建築の木材の使い分けを意味したという。

岸田首相には耳の痛い四字熟語だろう。適材適所が当然のはずの人事に疑念が高まっている。経営する会社の固定資産税を滞納し、再三にわたり差し押さえを受けていた神田憲次財務副大臣が辞表を提出した。国民に納税を求める立場の副大臣として、不適任と言わざるをえない。政務三役が辞任するのは、ひと月の内に3人目になる。支持率に大きくかかわるに違いない。教育を受け持つ文部科学省の山田太郎・前政務官が女性問題で辞任し、柿沢未途・前法務副大臣は地元の区長選に絡む選挙違反事件に関与した疑いが持たれ、辞任に追い込まれた。この不適材不適所の命中率はどういうわけだろう。いずれも職務にふさわしくない問題を抱えた者を、当の職務に付けていた。

建築現場で木材選びを誤ったとわかれば、親方は慌てるだろう。神田氏が国会で滞納を認めても、岸田さんはすぐに更迭へと動かなかった。決断の遅さがじれったい。

問　右の文章を百字以内で要約してみよう。（百字以内＝九十～百字）

▲ワークの一例

2023年度　札幌新陽高等学校③ NIE実践報告

身近な科学の事象に関する

札幌新陽高等学校　教諭　宮田　華奈

１．はじめに

本校は札幌市南区にある私立学校。現在、全校生徒は720名で、３年生は「進学」「総合」「探究」のコース別学年制となっている。また、昨年度からは学年の区分がない単位制に移行し、これまでのコースの良さを生かした「コンパス制度」を導入した。それぞれの教育課程で、学習内容・生徒の雰囲気は異なっており、コースやコンパスごとの「色」が出て多様な学習の場となっている。

2030ビジョン「人物多様性」を掲げ、多様な生徒一人ひとりに合った「学び方」を選択できるようになった。

２．コンパスについて

2022年4月から単位制は始まり、自身の学び方を示す「コンパス制度」を導入した。「アカデミア（アドバンス/ジェネリック）：大学の授業や研究などで高度な専門性の高い学習に必要な能力が身に付く学び方 ※アドバンスがより高度」「クエスト：探究的な活動を通して新しい価値を創造する力が身に付く学び方」「パイオニア：基礎学力の定着を目指すとともに自分の得意分野が見つかる学び方」の３つのコンパスを設定。

本校入学時に決めたコンパスで1年間学び、2年次以降は自身で自由に時間割を設計することが可能となっている。

今回の授業実践は、理科「科学と人間生活」のアカデミアコンパスで行った。

３．実践の背景

近年、生活の中でニュースに触れる機会が少なくなっている。テレビ離れが進んだことも一因である。また、SNS等で閲覧できるニュースは、ユーザーが興味をもつニュースをAIが分析して提示しており、多様な出来事に幅広く接する機会が減ってきている。

授業の目標は以下の通りである。

自然の事物･現象に関わり、理科の見方･考え方を働かせ、見通しをもって観察,実験を行うことなどを通して、自然の事物･現象を科学的に探究するために必要な資質･能力を次のとおり育成することを目指す。(1)自然と人間生活との関わり及び科学技術と人間生活との関わりについての理解を深め、科学的に探究するために必要な観察、実験などに関する技能を身に付けるようにする。(2)観察・実験などを行い、人間生活と関連付けて科学的に探究する力を養う。(3)自然の事物･現象に進んで関わり、科学的に探究しようとする態度を養うとともに、科学に対する興味･関心を高める。

身近な科学について考える上で、授業内でニュースに触れるとともに、他者と議論する機会を設けた。

４．実践について

【対象生徒】

単位制　1年次（アカデミア）27名

【 毎時　冒頭30分程度 】

新聞を含めた多様なメディアから１つのニュースを選択し、自分の考えをまとめる。4人グループで、選択したニュースについてディスカッションを行った。内容の要約・関連した事項をGoogle Classroomに配信したドキュメントに記載させた。ルーブリックをもとに、教員が口頭またはコメントで記載内容についてフィードバックした。

新聞を読まない生徒は多い。授業によっては全員新聞からニュースを選択したり、

個人に新聞から選択するように促したりした。ディスカッションにおいて、グループで多様なニュースについて考えられるように、また、同じニュースにおいても媒体による違いがあるか比較できるように、教員が巡回して指導を行った。

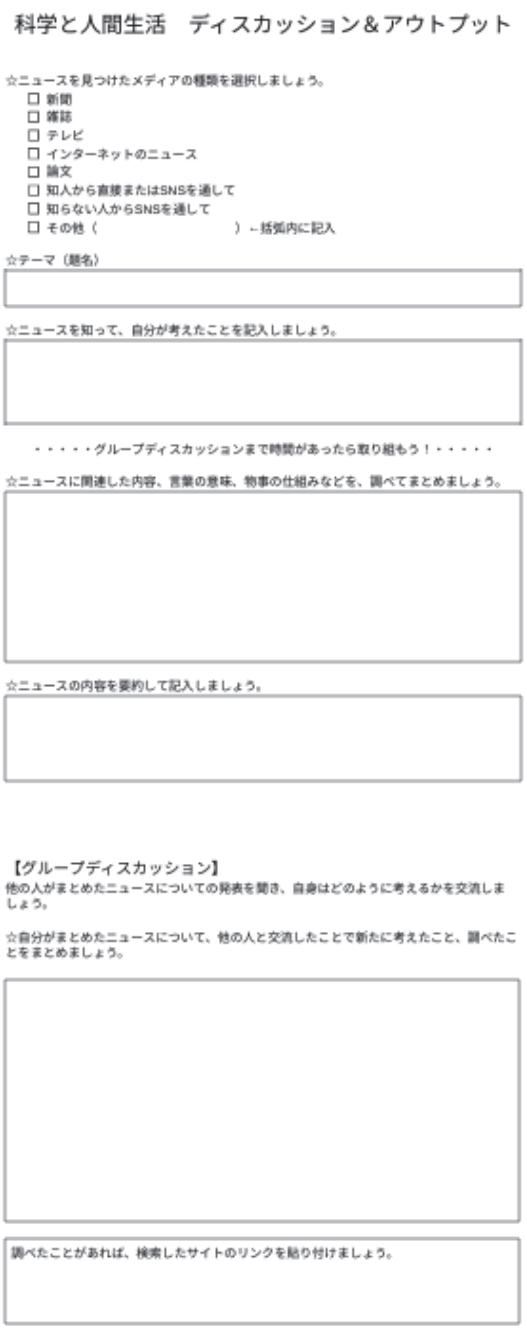
５．最後に

本授業実践において、生徒が興味がある情報を収集し、自身の考えを言語化することで、「再現性」「実証性」「客観性」の観点のもとで科学的に思考する習慣が身についてきたと考える。また見つけた記事を共有してディスカッションすることで、多様な分野の情報をインプットすることができた。

SNSの利用法については、発信する・される情報が信用できるものであるか、判断する能力が必須である。誤情報を故意に発信したり、善意で拡散したりすることが生じるため、判断するための知識の修得を同時に行うことが求められる。生徒自身が情報の信憑性の判断を常に行って情報の取捨選択を行えるよう、引き続きインプットやディスカッションの時間に教員が机間指導・支援を重ねていく

↑個人ワーク「自分の考えをまとめる」

↑ディスカッションの様子



科学と人間生活　ディスカッション＆アウトプット

☆ニュースを見つけたメディアの種類を選択しましょう。

- ☐ 新聞
- ☐ 雑誌
- ☐ テレビ
- ☐ インターネットのニュース
- ☐ 論文
- ☐ 知人から直接またはSNSを通して
- ☐ 知らない人からSNSを通して
- ☐ その他（　　）←括弧内に記入

☆テーマ（題名）

☆ニュースを知って、自分が考えたことを記入しましょう。

・・・・・グループディスカッションまで時間があったら取り組もう！・・・・・

☆ニュースに関連した内容、言葉の意味、物事の仕組みなどを、調べてまとめましょう。

☆ニュースの内容を要約して記入しましょう。

【グループディスカッション】

他の人がまとめたニュースについての発表を聞き、自身はどのように考えるかを交流しましょう。

☆自分がまとめたニュースについて、他の人と交流したことで新たに考えたこと、調べたことをまとめましょう。

調べたことがあれば、検索したサイトのリンクを貼り付けましょう。

↑実践内容をまとめるドキュメント
（生徒にコピーを配布）

２０２３年度　ＮＩＥ実践報告

聴覚特別支援学校における新聞を活用した授業実践

北海道旭川聾学校　教諭　脇　渕　昭　平
教諭　大田原　義　幸

１　本校について

本校は幼稚部、小学部、中学部が併設された聴覚特別支援学校であり、昨年度に創立100 周年を迎えた。校区は道北のほぼ全域と道東の一部であり、遠方出身の幼児児童生徒は併設している寄宿舎から通学している。

現在､幼児児童生徒は 18 名在籍しており、聴覚に配慮しつつ、多様なコミュニケーション方法を用いた指導をとおして、聴覚に障がいのある子どもの自立と社会参加に必要な資質と能力を育むよう努めている。

また、北海道聴覚障害乳幼児療育事業として、乳幼児療育機関の役割を担っており、０歳～３歳の乳幼児も親子で通室し、健やかな心身の発達を支えるための支援を行っている他、パートナーティーチャー派遣制度で、地域のろう・難聴児への継続的な支援や就学・進路についての相談、補聴機器や福祉制度などに関わる情報提供、研修会への講師の派遣などを行っている。

２　難聴児に対する新聞活用の意義

本校は重複障がい学級を除き、小・中学校に準じた教育を行っている。毎年、日本語理解力や読字力、語彙力、文法力、読解力に関する検査を実施しており、それらの結果から学年相応の日本語力が不足しているという課題が明らかとなっている。それゆえ､「文は読めるが正確な意味を読み取ることが難しい」､「自分の考えや感想を構文したり、表現したりすることが苦手である」といった児童生徒が多くいる。これらは教科学習を進めていく上で、学習目標に迫る前段階でのつまずきが多く、学習進度の遅れや学習内容の未定着等といった課題につながっている。

これらの課題を受け、新聞は精査された情報が簡潔かつ整った日本語で掲載されているため読み取りやすく、文章力・構文力・表現力等の望ましい日本語力の獲得や語彙の拡充にとって有効な教材であると考え、教材として活用することとした。

また、聴覚障がいをもつ児童生徒が優位とするのは視覚情報であり、テレビやインターネットの動画ニュースは次々と情報が流れていき耳に残りにくく、情報を漏らしてしまったり聞き間違ってしまったりすることが想定される。

一方、新聞の情報は視覚的に残り、内容が文字化されていることで情報を漏らすことなく得ることができる。また、記事の内容を読み取ることが難しい実態であっても、記事に関連する写真が載っていることから興味をもちやすく、内容を推測しながら主体的に学習に取り組むことができると考えた。

３　実践内容について

（１）新聞閲覧コーナーの移設

これまで図書室内に新聞を掲示していたが、図書室を活用する児童生徒が少なかったため、新聞を目にする機会がほぼない状態であった。　そこで、休み時間や登下校の際に通る図書室前廊下に新聞閲覧コーナーを移

設し、提供いただいた「北海道新聞」「毎日新聞」「朝日小学生新聞」「読売中高生新聞」の４社の新聞を配置した。

新聞を目にする機会は増えたが、手に取る様子は見られなかったため、教師が新聞を読んでいる姿を見せたり、一緒に読む機会を作ったりすることで、徐々に新聞を読む児童生徒が増えていった。

【北海道新聞地方版の掲示】

（２）NIE コーナーの設置

図書室前の掲示板を NIE コーナーとして活用し、以下の２つの掲示を行った。

ア　児童生徒の出身地に関する記事の掲示

本校は旭川市外出身の児童生徒も在籍しているため自身の出身地に関する記事を掲示することにより、さらに新聞に対する興味・関心につながり、読む意欲の向上につながると考え、北海道新聞デジタル版より該当地域を選択し、記事を選定・掲示した。

これまで掲示していた新聞には興味を示さなかった児童生徒も、NIE コーナー前に足を止める児童生徒が増え、居住地に関する記事に対しては関心を向ける様子が見られた。また、記事の内容が難しかったり、漢字が読めなかったりした場合には周囲の教師に質問し、自ら記事の内容を知ろうする姿が見られた。そして、これらの記事を共通の話題とし、対教師や友達との間で会話が生まれ、自分の出身地だけでなく、友達の出身地の出来事にも目を向ける姿も見られた。

本校のように、複数の地域から幼児児童生徒が集まる学校にとり、地方版を検索及び閲覧できるサービスは教材として有効かつ活用しやすいものであった。

イ　新聞クイズの作成

新聞記事の内容を読み取る第一歩として、「朝日小学生新聞」と「読売中高生新聞」を活用して記事に関するクイズを出題・掲示した。NIE 推進担当者が記事を読んだ上で内容に関わるクイズを作成し、月に１度出題した。回答方法は、児童生徒の中には生活経験が少なく、実際に書く機会も少ないことからはがきをポストに投函して応募する方法と、タブレット端末の活用に慣れることを兼ねて Google Forms を活用した Web 上での応募の２通り用意した。小学生は主に言葉の抜き出し、中学生は簡単な要約など、生活年齢によって難易度を変えて出題した。

自立活動の時間等の学習や休み時間を使い取り組む様子が見られた。情報量が多く、どの記事を見たらよいか分からない場合は、手掛かりとして質問に対応する部分を色分けして表示することで、自力で回答する様子が見られるようになった。

【クイズに回答する児童】

（３）授業での活用（小学部）　「相手に分かりやすく伝えよう」

学習活動	学　習　内　容　（△教師の発問　▲期待する児童の発言　◎配慮事項） 児童の活動	教師のはたらきかけ	◇評価場面 ○使用教材
導入	・指名された児童は挨拶をする。 ▲新聞記事の特徴 ▲５W１Hが書かれている ▲読む人にとって分かりやすい記事にするため ・本時の課題を知る	・挨拶をする児童を指名する。 △前の学習では何を調べましたか △どのような特徴がありましたか △なぜ、そのような特徴があるのですか ○本時の課題の提示	○TV ○AppleTV ○教師用iPad ○児童用iPad
	課題　記事の内容を、相手に分かりやすく伝えよう		
	・課題を読み、確認する。 ▲新聞にも５W1H があるから、紹介するときも５W1H があると分かりやすい ▲記事をそのまま伝えると長くなるから、短く伝えると良い	▲課題を読みましょう △分かりやすく紹介するための工夫として、どのようなことが考えられますか	
展開	○記事を読もう ・記事を選択し、音読する。 ・意味を知らない単語は iPad で調べてワークシートに書き留める。	・紹介する記事を選び、音読するよう指示する。 ◎文章量や記事の内容が異なる記事をあらかじめ用意し、興味に合わせて選択できるようにする。 ・意味調べは重要語句のみとする。 ◎漢字の読みが分からない場合は指文字で伝え、ルビを振るよう促す。 ◎単語の意味が分からない場合は、前後の文脈より意味を推測させる。それでも分からない場合は iPad で調べるよう指示する。	○記事(A3) ○ワークシート ◇１（教師や友達に自ら質問する姿を見取る）
	○記事から５W１Hを探そう ・５W１H を記事から探し、ワークシートに記入する。	・５W１Hの全てが必ず入っているわけではないことを伝える。 ・見つけられない場合は文の範囲を指定したり、前後の助詞に注目したりするよう促す。	
	○記事を短くまとめよう ・５W１Hを使い、適切な助詞を用いて構文し、ワークシートに記入する。 ・発表の練習をする。	◎手話表現が分からない箇所がある場合は伝える。	
	○発表活動 ・ワークシートに沿い、手話と音声を併せて発表する。	▲短くまとめた文を発表しましょう ▲話を聞いて分かったこと、発表の良かったところを伝えましょう	◇２
まとめ	・ワークシートに自己評価を記入する。 ・要約した文章を音読する ・指名された児童は挨拶をする。	○本時のまとめ ▲ワークシートに自己評価を記入しましょう ○本時の振り返りと次時の確認 ▲要約した文章を音読しましょう。 ・挨拶する児童を指名する。	

（４）授業での活用（中学部）　「聴覚障がいについての知識を広げる」

学習活動	学　習　内　容　（△教師の発問　▲期待する生徒の発言　◎配慮事項） 生徒の活動	教師のはたらきかけ	◇評価場面 ○使用教材
導入	▲耳の仕組み ▲難聴の種類 ・題材の目標と活動内容を知る。	△聴覚障がいの理解について、自立活動の中で今まで行なってきたことはなんだろう。(T1) ○題材の目標の提示（T1） 聴覚障がいについての知識を広げる ・新聞記事から、聴覚障がいに関する記事を調べ、自分の考えをまとめることを伝える。	○TV ○AppleTV ○教師用 iPad ○生徒用 iPad
展開	課題　「まな bell」を使って記事を検索しよう		「まな bell」
	・「まな bell」のアクセス方法、記事の検索の仕方について知る。	○課題の提示（T1） ・「まな bell」のアクセス方法、記事の検索の仕方を説明する。(Google クラスルームでリンクを共有) ◎「障害」「障がい」の用語の扱いについて	○Google クラスルーム
	▲調べたい言葉を複数入力する ▲期間を絞る ▲地域を絞る ・「まな bell」にアクセスし、聴覚障がいをキーワードに記事を検索する。 ・Google ドライブで共有されているワークシート（Google ドキュメント）を複製し、自分の名前を付ける。 ・選択した記事の切り抜きを iPad を使用しワークシート(Google ドキュメント）に貼り付ける。	△記事を絞り込むためにどのような方法があるでしょうか。(T1) ・キーワード、and or による記事の絞り込みについても触れる。 ・ワークシートの使用について説明する。 ◎操作につまずきがある生徒に助言する。(T1・T2) ○課題の提示（T1）	◇（主） ○ワークシート（Google ドキュメント） ○ドキュメント作成アプリ(Google ドキュメント) ○ Google ドライブ
	課題　選択した記事を要約しよう		
	・記事の中でわからない言葉について意味を調べ、ワークシート（google ドキュメント）に記載する。 ▲誰が、何を、どうした ▲５Ｗ１Ｈ ・重要な文を抜き出し、ワークシート(Google ドキュメント)に記載する。 ・抜き出した文を元に文を要約する。(200 字程度)	・わからない言葉を調べるように指示する。文脈から意味を予測できない語句についてはテキストデータをもとに検索することを伝える。 △要約するために、どんな文を抜き出せばよいだろう（T1） ・重要な文（５Ｗ１Ｈ ）を抜き出すように指示する。(T1) ・抜き出した文を元に文章を再構成するように伝える（２００字程度)。 ・文の抜き出しと要約について支援する。(T1・T2) ◎ローマ字入力が苦手な生徒はテキストデータからの引用をサポートする。	◇（知・技）
まとめ	・ Google ドライブに保存されている他の人のワークシートを参照する。 ・次時に記事に対する自分の考えをまとめることを知る。	・それぞれが選択した記事の概要と要約を Google ドライブに保存されているワークシートを参照し交流するように伝える。(T1) ○次時の確認（T1） ・次時に記事に対する自分の考えをまとめることを確認する。	

２０２３年度　NIE 実践報告

新聞を生かし様々な学力に結びつける実践

北海道函館高等支援学校　教諭　山本　正彦

１．はじめに

本校は、平成 31 年４月、道南地区では初めて普通科と職業学科を併置する高等支援学校として開校しました。 令和５年度は、「普通科」「生産技術科」「食品デザイン科」「福祉デザイン科」の４学科に計 73 名（定員 96 名）の生徒が在籍しています。本校は教育理念に「自己と社会をつなぎ、共生社会を創造する教育の追求」、教育目標に「共生社会の一員として、自ら社会に貢献する人間の育成」を掲げ、「探究」「協働」「健全」の校訓の下、知徳体の調和のとれた人間形成を目指しています。

教育活動の特色の一つである「教科横断的な学習の充実」では、「新聞教育」「主権者教育」「防災・安全教育」「ICT 教育」「消費者教育」「社会貢献・ボランティア活動」などを、主体的・対話的で深い学びの実現を通して、豊かな生きる力を育んでいます。

ＮＩＥの実践指定校の指定をいただいてから今年で２年目になり、昨年に引き続き提供された新聞を授業の中で使用したり、記事をピックアップして掲示したりするなど、少しでも新聞と触れられるようにしています。

２．実践の内容

⑴ 道新出前講座

毎年１学年を対象に「道新出前講座」を実施しています。

今年度は、「新聞の読み方を知る」「新聞を通じて、興味・関心を高めていく」ことをテーマに北海道新聞社の方に来校していただき「回し読み新聞」を行いました。

新聞記事を選んでいる様子⤴

流れ

①　切り抜きタイム

⑴ 各自新聞を読む。

⑵ 「気になる」「面白い！」「これ何だ？」と思った記事を切り抜く

⑶ 広告や写真、挿絵など新聞に載っていれば何でも切り抜いても良い。

⑷ 時間内に５枚以上切り抜く。

②　プレゼンタイム

⑴ 発表する人は切り抜いた記事、写真の中から１枚だけをグループの真ん中に置く。

⑵ 「どのような記事か（＝概要説明）」、「選んだ理由（＝興味・ポイント）」を発表する。

⑶ 発表者の右隣２人が共感や補足などコメントをする。※ルール：相手の意見を否定しない。

⑷ 時計回りで順に発表し２周する。紹介した記事は真ん中に積み上げていく。（早く終わった場合は３周目）

③　新聞作りタイム

⑴ トップ記事を決める。

⑵ 全体のレイアウトを決める。

⑶ 線や絵などを入れ、読みやすい新聞にする。

⑷ 貼り付けた記事・写真にコメントを入れる。

家庭で新聞を購読していない生徒も多く、新聞にはどのようなことが書かれているのかと興味深げに見入る姿も見られました。

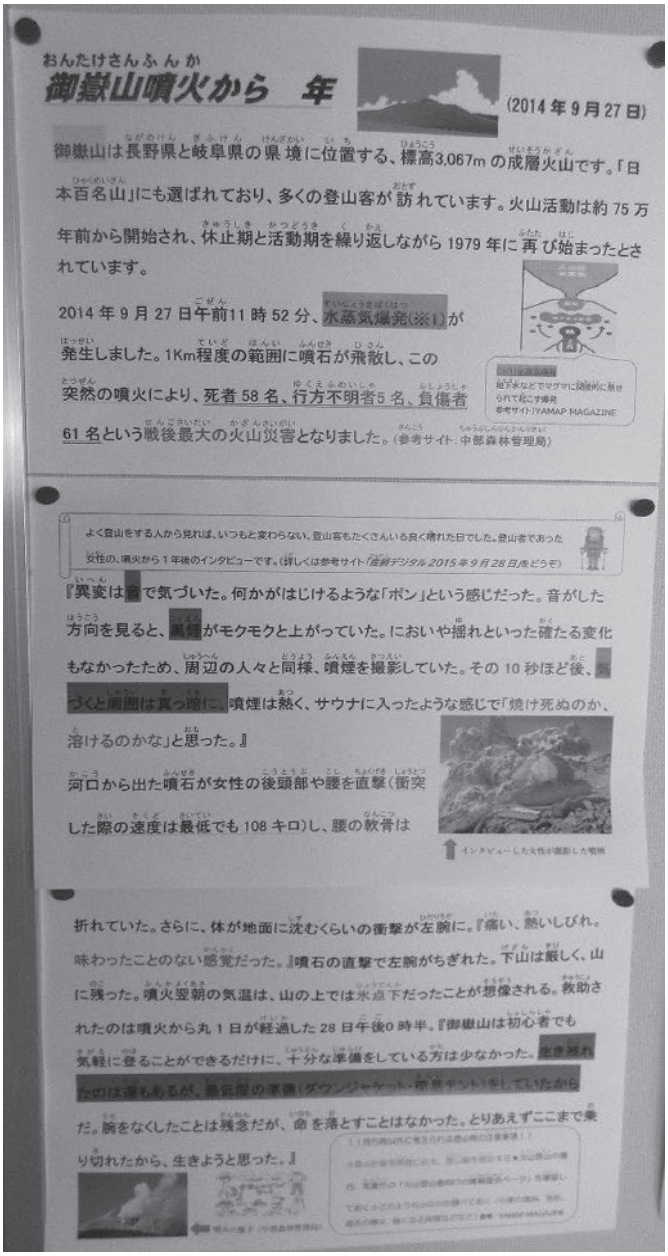
気になる記事にマーカーしている様子↗

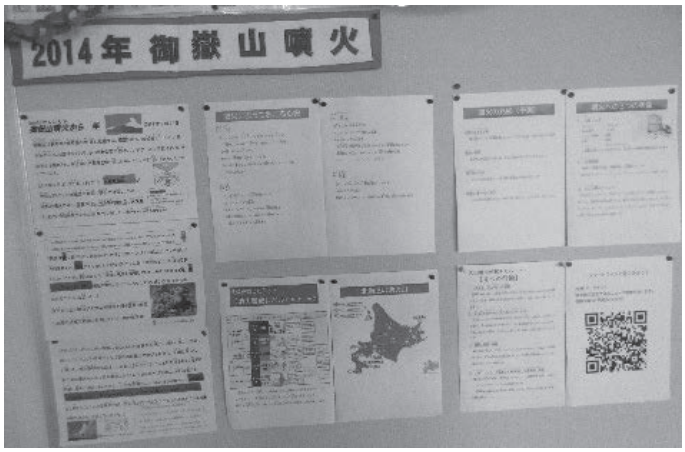
⑵　防災掲示板

生徒玄関前に、北海道に関する震災や函館近辺で起こった震災の情報をピックアップして掲示しています。興味をもってもらえるように絵や図など視覚的に分かりやすいようにしたり、漢字にルビを振ったり、目につきやすいように文字の大きさを大きめにしたりするなど工夫を施しています。本校では、防災教育にも力を入れており、1日防災訓練を行い、防災に必要な知識をクイズやかるたを通じて学んだり、防災マップの見方を学び、自分の家から近い避難所を調べたり、段ボールベット作りを実際に体験したりするなど行っています。

また、生徒会活動の中で、防災サミットに参加し、他校の人たちと意見を交わし、防災について考えを深めることができました。

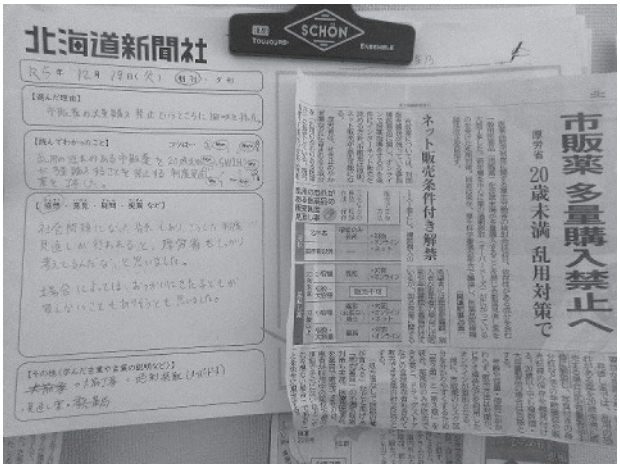
新聞教育を通じて、防災教育の一環として防災にも触れる機会を設けています。



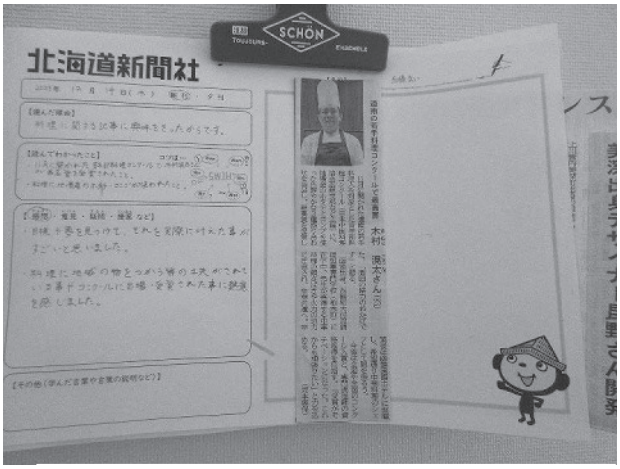


⑶３学年のあるクラスの取り組み

気になる記事を見付け、5W1H を意識して、説明文を書くという取り組みをしているクラスもあります。書いた文章を朝の会などで発表をし、説明力の強化につながっています。



北海道新聞　2023.12.19



北海道新聞　2023.12.14

３．評価について

この講座は、新聞の読み方を知る学習であり、その活動の中で、生徒自らがもっている感受性を働かせ、新聞への興味を高めていくことは、今後の生活の潤いになると考えられます。

自分が興味のある記事だけでなく、他の人が選んだものにも関心を寄せることができたか、積極的に掲示物を作っているかを重点的に評価しました。

さらに、記事の選択に主体的に取り組むことができているか、これまでの経験と関連付けて考えようとしているか、授業内の発言や感想を書くことも評価の観点に加えました。

防災掲示板については、北海道や道南にまつわる災害についてまとめた掲示板があります。掲示している新聞記事や資料には工夫を施しており、振り仮名を振ることや文字の大きさを大きくにすることで、目を通しやすくしたり、カラー印刷で視覚的に分かるようにしたりして、説明の部分は平易な言葉に置き換えて、理解しやすい工夫を施しています。掲示板の狙いとして「生徒に分かりやすく、興味をもってもらう」ことを目指しており、記事や資料に興味をもって読む生徒が増えるようになりました。

４．成果と課題

⑴ 成果

新聞をあまり見ない生徒が多いため、実際に新聞に触れることにより、「どんなことが書かれているのか」「どのような事件が起きているのか」「スポーツの記事は〇〇ページ」という基礎的な知識を習得することができたと感じました。

文字を読むことが苦手な生徒が多いため、文量を少なめにし、絵や図などを示し、視覚的に興味をもってもらえるように工夫を施したことで、自分たちが住んでいる地域のことや事件のことについて興味をもつことが増えたように感じることができました。

新聞に触れる機会が増えたため、興味をもって新聞に触れようとする生徒が増えました。

⑵ 課題

「新聞が身近にない」「形式ばった文章を読んで理解することが難しい」「読むということに苦手意識をもっている」生徒が多いため、身近な新聞を利用て主体的に文字に親しむ力を付けていければと考えています。そのために、普段から新聞に触れる機会を作っていき、親しみをもたせられるようにしていきたいと感じています。

５．おわりに

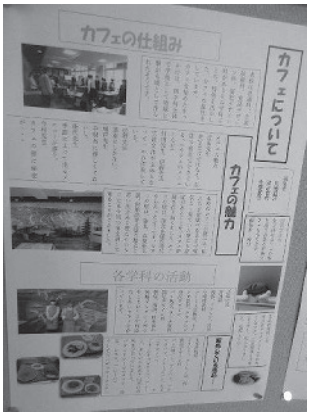
NIE 実践指定校をさせていただいてから今年度で 2 年目になりますが、改めて新聞教育の大切さを感じることができました。

新聞の正しい読み方に加え、社会科等と連携して社会人として最小限必要だと思われる政治や経済、国際情勢などの情報収集の仕方なども取り入れていく必要があると思いました。

また、自分の住んでいる町の情報を知ることも重要であると感じています。

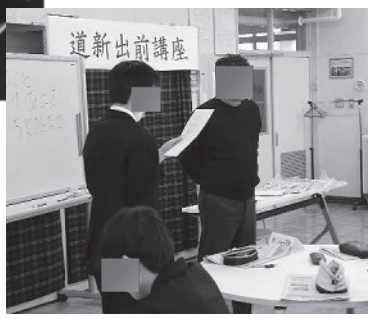
地方紙を活用し、地元のニュースに目を向けることで、自分の町でどのようなことが起きているのか、今どのようなものが注目されているのかなどを知るきっかけになれば良いと考えています。

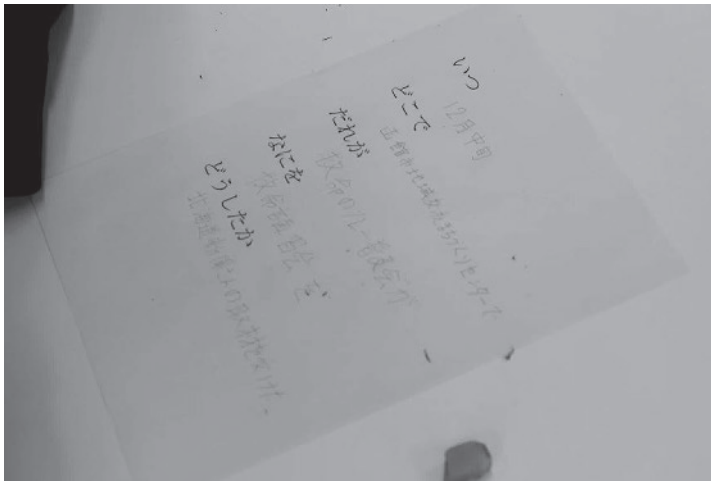
今年度より子ども新聞も購読しています。優しい文体で絵や図が多いため興味をもって読む生徒が多くいました。一般の新聞と子ども新聞も併用し、新聞の楽しさや面白さを味わえるような授業づくりを今後も展開していきたいと思います。今後も様々な方法を取り入れながら、自発的に　新聞やニュースに関わっていけるような基礎作りをサポートしていきたいと思います。



～本校最初の出前講座の様子～

５年前の出前講座では、タブレットを使用しました。北海道新聞のネットから記事を探す作業がありました。気になった記事を選び、「いつ・どこで・だれが・なにを・どうした」を意識しながらまとめ、発表をしました。





編集を終えて

英語による元気な始業の挨拶。生徒は、社会的な課題について、AI、新聞、ネット、友だち、教師などの多様なツールから自分の必要な情報を取捨選択し、考え感じたことを英語や日本語で表現していきます。2023 年 7 月、小樽市立菁園中学校で NIE としては、初めての英語科の公開授業が行われました。英語科では、臨場感をもった会話練習や文章作成のために、具体的な場面設定をした活動を行いますが、本時では、新聞記事を場面設定や問題提起、概念、トピック等として用いることで、英語科の中での新聞活用を可能にしていました。特定の教科や分野に偏りがちな新聞活用の場面を広げる素晴らしい授業提案でありました。

2023 年度は、コロナ５類移行に伴い、各学校では、多様な教育活動が戻ってきました。子どもたちの思考力、判断力、表現力を育てるために、各校種の探究的な活動等の中で、発達段階に合わせた、地域課題に向き合う活動事例が教育課程に取り入れられるようになりました。新聞から地域課題を調べる。さらに、課題調べで終わるのではなく、自分なりの考えをもち、自分の考えを友だちや地域にプレゼンテーションすることで、子どもたちが意欲的に課題解決に向かおうとする姿が多く見られます。この学習過程では、信頼ある新聞の情報が大切であり、新聞の紙やデジタルの情報を、子どもたちがどのように獲得していくのかが重要になると考えます。

さて、2023 年度ＮＩＥ実践報告書では、紙の新聞の活用だけではなく、ICT 活用による記事データベースの活用事例が多く紹介されています。また、聴覚特別支援学校である、聾学校における実践や最近各地に設立されている、義務教育学校における実践等も掲載されています。いずれも小中連携における実践であり、校種間連携の意味からも大変参考になる実践記録となっています。

本編が有効活用され、皆様方の学校でねらう子どもの姿の育成に、この実践が活かされることを願っております。

北海道 NIE 推進協議会
NIE コーディネーター　上村　尚生

2023 年度　NIE 実践報告書

2024 年 5 月発行
北海道 NIE 推進協議会　編

事務局　北海道新聞社みらい教育推進室
〒060-8711　札幌市中央区大通西 3 丁目 6
TEL 011-210-5802　FAX 011-210-5826
e-mail　nie@hokkaido-np.co.jp